

指宿駅西部土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 Vol.2

橋牟礼川遺跡

(VI区・VII区)



平成30年3月

鹿児島県指宿市教育委員会



SB4 出土遺物

序 文

大正 5 (1916) 年に発見された橋牟礼川遺跡は、平成 28 (2016) 年に発見から 100 年を迎えました。その発見には、指宿出身で旧制志布志中学校で学んだ西牟田盛健氏が大きな役割を果たしました。遺跡の発見後、瀬之口傳九郎、山崎五十麿、喜田貞吉、濱田耕作、長谷部言人、鳥居龍蔵など当時の日本の考古学、人類学をリードしていた学者たちによって調査が行われてきました。その調査の中でも、京都帝国大学の濱田耕作による発掘調査において、縄文土器と弥生土器に時期差を見出したのは、日本考古学史に残る重大な成果として知られています。そして、大正 13 年に「国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡」として国指定史跡に指定されました。

昭和 50 年代に入ると、指宿駅西部土地区画整理事業の計画が立ち上がり、国指定史跡の隣接地に幹線道路が敷かれることとなりました。そこで、事業に伴う発掘調査を実施したところ、874 年 3 月 25 日の開聞岳噴火で埋没した平安時代の倒壊建物跡や畠跡が検出され、さらに下層からは古墳時代の大規模な集落跡がみつかりました。これらの発掘調査成果から、国指定史跡の追加指定が決定し、隣接する形で指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれが平成 8 年 4 月に開館しました。開館から現在まで、指宿市内の発掘調査成果や文化財情報を広く市民の方々へ公開・活用しているところです。

本報告書は昭和 61 年から 62 年に実施された発掘調査の成果を再構成し、報告書にまとめたものです。本成果が、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の更なる理解につながり、指宿市の文化財が市民の方々に保護・活用されることを祈念いたします。

平成 30 年 3 月

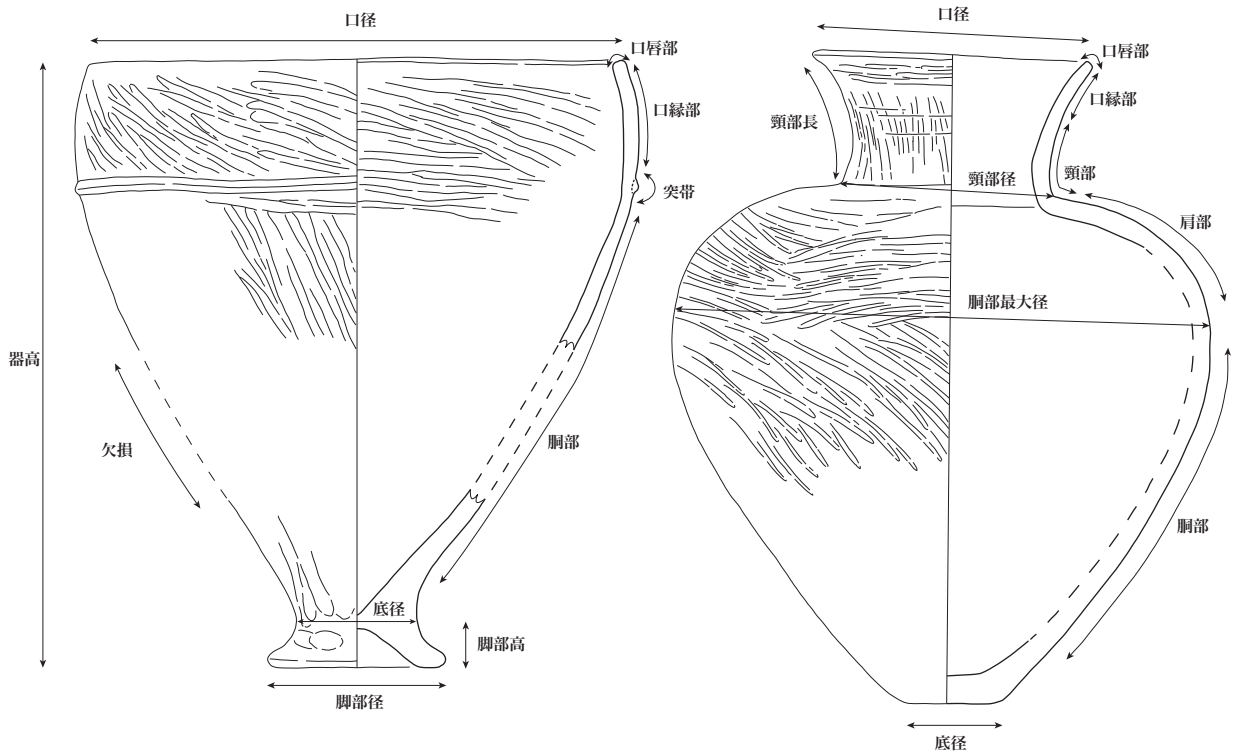
指宿市教育委員会
教育長 西森 廣幸

例 言

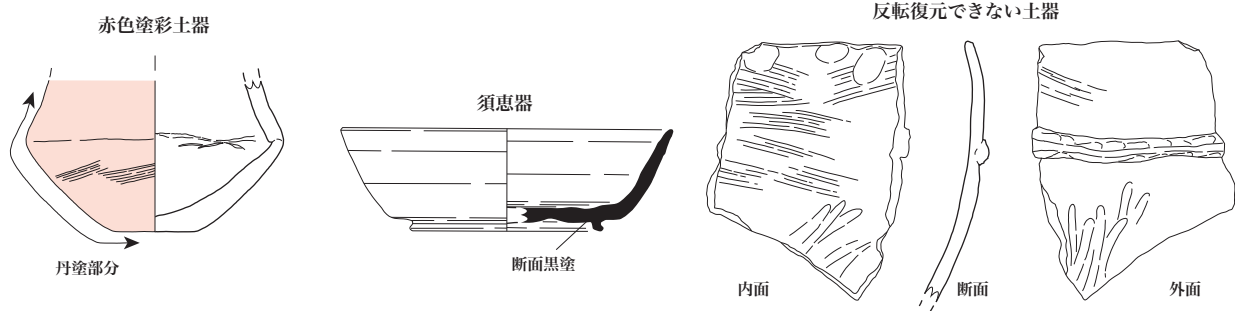
1. 本書は鹿児島県指宿市十二町に所在する橋牟礼川遺跡の発掘調査報告書である。起因事業は指宿駅西部土地区画整理事業である。
2. 発掘調査はⅦ区を昭和61年7月10日から昭和62年3月20日まで、Ⅵ区を昭和62年6月1日から昭和63年1月30日まで実施した。
3. 発掘調査は指宿市教育委員会と鹿児島県教育委員会文化財課で実施した。
4. 報告書作成主体は指宿市教育委員会で、報告書作成は松崎大嗣が担当した。
5. 本書の編集、図面整理、遺物実測は松崎大嗣、中摩浩太郎、鎌田洋昭、西牟田瑛子が行い、遺物実測の一部を九州文化財研究所へ委託した。遺物写真撮影は株式会社淵上印刷に委託し、巻頭写真の集合写真は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得た。
6. Ⅶ区出土遺物図・遺構図・層位断面図については、調査時に作成されたトレース図を再トレース・再構成したものである。
7. 出土動物骨については西中川駿氏(鹿児島大学名誉教授)、松元光春氏(鹿児島大学共同獣医学部)に玉稿を賜った。出土鉄器については大西智和氏(鹿児島国際大学国際文化学部)に所見をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。
8. 報告書作成に要した経費のうち、50%は国、3.3%は県からの補助を得た。
9. 本報告書におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
10. 出土遺物については観察表を作成した。寸法の表記のなかで復元によるサイズは()をつけた。
11. 遺構は遺構の略号を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記する。
SB(住居)、SK(土坑)
12. 層・遺物の色調は『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
13. 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。
14. 発掘調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれで保管し、活用する。橋牟礼川遺跡の遺物注記の略号は「HS」である。

凡 例

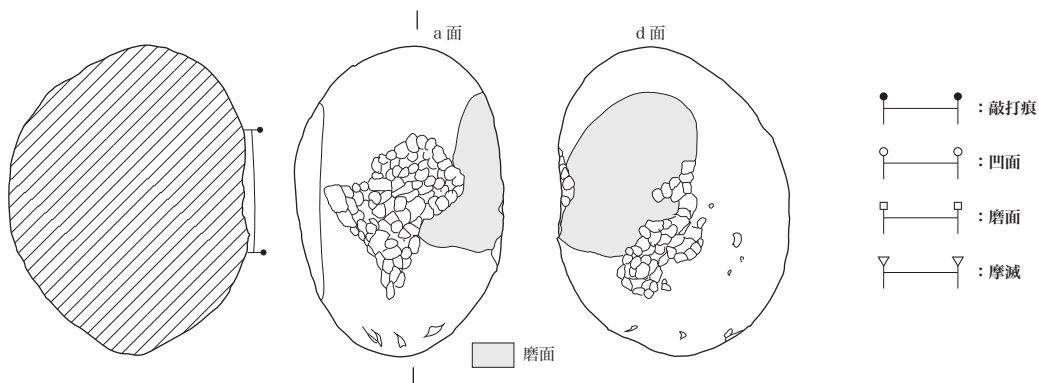
1. 本書で用いる土器の部位名称は以下のとおりである。



2. 本書で用いる土器の表現は以下のとおりである。



3. 本書で用いる石器の表現は以下のとおりである。



目 次

第1章	発掘調査の経過	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	発掘調査の組織	4
第3節	整理・報告書作成の組織	4
第2章	遺跡の立地と環境	
第1節	地理的環境	5
第2節	基本層序	6
第3章	VI区の調査成果	
第1節	調査の概要	12
第2節	第10層出土遺物	12
第3節	古墳時代の遺構と遺物	13
第4節	古代の遺構と遺物	126
第4章	VII区の調査成果	
第1節	調査の概要	148
第2節	遺構	148
第3節	縄文時代の遺物	152
第4節	弥生時代の遺物	161
第5節	古墳時代の遺物	162
第5章	分析	
	橋牟礼川遺跡出土の動物骨	174
	松元 光春・西中川 駿	
第6章	総括	
第1節	竪穴住居の新旧関係	177
第2節	竪穴住居についての考察	177
第3節	第6層中出土遺物からみたVI区の評価	179
第4節	SB7の評価	180
第5節	出土石器について	182

挿 図 目 次

第 1 図	橋牟礼川遺跡の調査範囲……………3	第 39 図	SB6 平面図・断面図……………49
第 2 図	指宿市の位置……………5	第 40 図	SB6 遺物出土状況……………50
第 3 図	指宿市の火山地形……………6	第 41 図	SB6 床面直上遺物出土状況……………51
第 4 図	指宿市南東部の遺跡……………7	第 42 図	SB6 出土遺物 1 ……………52
第 5 図	橋牟礼川遺跡の範囲と周辺遺跡…9	第 43 図	SB6 出土遺物 2 ……………53
第 6 図	橋牟礼川遺跡の基本層序……………10	第 44 図	SB6 出土遺物 3 ……………54
第 7 図	調査区配置図……………12	第 45 図	SB6 出土遺物 4 ……………55
第 8 図	VI区東壁土層断面図……………13	第 46 図	SB7 平面図・断面図……………57
第 9 図	VI区西壁土層断面図……………14	第 47 図	SB7 遺物出土状況……………58
第 10 図	VI区北壁土層断面図 1・2……………15	第 48 図	SB7 完掘平面図・断面図……………59
第 11 図	VI区北壁土層断面図 3・4……………16	第 49 図	SB7 出土遺物 1 ……………60
第 12 図	VI区南壁土層断面図 1・2……………17	第 50 図	SB7 出土遺物 2 ……………61
第 13 図	VI区南壁土層断面図 3・4……………18	第 51 図	SB7 出土遺物 3 ……………62
第 14 図	第 10 層出土遺物 ……………19	第 52 図	SB9 検出面遺物出土状況……………63
第 15 図	VI区遺構配置図……………21	第 53 図	SB9 検出面出土遺物……………63
第 16 図	SB3 平面図・断面図……………22	第 54 図	SB9 平面図・断面図……………64
第 17 図	SB3 出土遺物……………23	第 55 図	SB9 出土遺物……………65
第 18 図	SB4 平面図・断面図……………25	第 56 図	SB10 平面図・断面図 ……………66
第 19 図	SB4 遺物出土状況 1……………26	第 57 図	SB10 出土遺物 ……………67
第 20 図	SB4 遺物出土状況 2……………27	第 58 図	SB11・12・13 平面図・断面図…68
第 21 図	SB4 出土遺物 1 ……………28	第 59 図	SB12 出土遺物 ……………69
第 22 図	SB4 出土遺物 2 ……………29	第 60 図	SB13 出土遺物 1 ……………70
第 23 図	SB4 出土遺物 3……………30	第 61 図	SB13 出土遺物 2……………71
第 24 図	SB4 出土遺物 4……………31	第 62 図	SB14・15・16・18 平面図…72
第 25 図	SB4 出土遺物 5 ……………32	第 63 図	SB14 出土遺物 ……………73
第 26 図	SB4 出土遺物 6 ……………34	第 64 図	SB17 平面図・断面図……………74
第 27 図	SB4 出土遺物 7 ……………35	第 65 図	SB17 出土遺物 ……………75
第 28 図	SB4 出土遺物 8 ……………36	第 66 図	SB18 出土遺物 ……………76
第 29 図	SB4 出土遺物 9 ……………37	第 67 図	SB19・20・21・22・23 平面図…77
第 30 図	SB4 出土遺物 10……………38	第 68 図	SB21 出土遺物 ……………78
第 31 図	SB4 出土遺物 11……………39	第 69 図	SB22 出土遺物 ……………79
第 32 図	SB4 出土遺物 12……………40	第 70 図	SB24・25・26 平面図・断面図…80
第 33 図	SB4 出土遺物 13……………41	第 71 図	SB25 出土遺物 ……………81
第 34 図	SB5 平面図・断面図……………44	第 72 図	SB27・28・29 平面図……………82
第 35 図	SB5 遺物出土状況……………45	第 73 図	SB27・28・29 遺物出土状況…83
第 36 図	SB5 出土遺物 1 ……………46	第 74 図	SB27 出土遺物 ……………84
第 37 図	SB5 出土遺物 2 ……………47	第 75 図	SB28 出土遺物 ……………85
第 38 図	SB5 出土遺物 3 ……………48	第 76 図	SB29 出土遺物 1 ……………88

挿 図 目 次

第 77 図	SB29 出土遺物 2	89	第 115 図	第 6 層出土遺物 2	136
第 78 図	SB30 平面図・断面図	90	第 116 図	第 6 層出土遺物 3	137
第 79 図	SB30 出土遺物	91	第 117 図	VII区の位置	148
第 80 図	溝状遺構 1 平面図	93	第 118 図	VII区西壁土層断面図・平面図 1	149
第 81 図	溝状遺構 1 出土遺物	94	第 119 図	VII区西壁土層断面図・平面図 2	150
第 82 図	溝状遺構 2 平面図・断面図	95	第 120 図	VII区西壁土層断面図・平面図 3	151
第 83 図	第 9 層出土遺物 1	97	第 121 図	溝 1 出土遺物	152
第 84 図	第 9 層出土遺物 2	98	第 122 図	縄文時代出土遺物	153
第 85 図	第 9 層出土遺物 3	99	第 123 図	弥生時代出土遺物	154
第 86 図	第 9 層出土遺物 4	100	第 124 図	古墳時代出土遺物 1	155
第 87 図	第 9 層出土遺物 5	101	第 125 図	古墳時代出土遺物 2	156
第 88 図	第 9 層出土遺物 6	102	第 126 図	古墳時代出土遺物 3	157
第 89 図	第 9 層出土遺物 7	103	第 127 図	古墳時代出土遺物 4	158
第 90 図	第 9 層出土遺物 8	104	第 128 図	古墳時代出土遺物 5	159
第 91 図	第 9 層出土遺物 9	107	第 129 図	古墳時代出土遺物 6	160
第 92 図	第 9 層出土遺物 10	108	第 130 図	古墳時代出土遺物 7	161
第 93 図	第 9 層出土遺物 11	109	第 131 図	古墳時代出土遺物 8	164
第 94 図	第 9 層出土遺物 12	110	第 132 図	古墳時代出土遺物 9	165
第 95 図	第 9 層出土遺物 13	111	第 133 図	古墳時代出土遺物 10	166
第 96 図	第 9 層出土遺物 14	115	第 134 図	古墳時代出土遺物 11	167
第 97 図	第 9 層出土遺物 15	116	第 135 図	古墳時代出土遺物 12	168
第 98 図	第 9 層出土遺物 16	117	第 136 図	VII区 874 年面検出遺構および 周辺調査区	169
第 99 図	第 9 層出土遺物 17	118			
第 100 図	第 9 層出土遺物 18	119			
第 101 図	第 9 層出土遺物 19	120			
第 102 図	第 9 層出土遺物 20	121			
第 103 図	第 9 層出土遺物 21	122			
第 104 図	第 8 層出土遺物	123			
第 105 図	古代遺構配置図	127			
第 106 図	SB1 平面図・断面図	128			
第 107 図	SB1 完掘平面図	129			
第 108 図	SB1 出土遺物	129			
第 109 図	SB2 平面図	130			
第 110 図	SB8 平面図・柱穴断面図	131			
第 111 図	SB8 出土遺物	132			
第 112 図	第 6 層上面検出遺構・遺物分布状況	133			
第 113 図	Pit1 出土遺物	134			
第 114 図	第 6 層出土遺物 1	135			

図 版 目 次

図版 1-1 VI区遠景……………184	図版 11-2 VII区南から……………194
図版 1-2 VI区竪穴住居群……………184	図版 12-1 溝 2……………195
図版 1-3 VI区南壁……………184	図版 12-2 溝 1……………195
図版 1-4 VI区調査風景……………184	図版 13-1 第 10 層出土遺物……………195
図版 2-1 SB3 遺物出土状況……………185	図版 13-2 SB3 出土遺物 1……………196
図版 2-2 SB3 遺物出土状況……………185	図版 13-3 SB3 出土遺物 2……………196
図版 2-3 SB3 西側遺物出土状況……………185	図版 13-4 SB4 出土遺物 1……………196
図版 2-4 SB3 西側遺物出土状況……………185	図版 13-5 SB4 出土遺物 2……………196
図版 2-5 SB4 出土イノシシ骨……………185	図版 13-6 SB4 出土遺物 3……………196
図版 3-1 SB4 遺物出土状況（東から）…186	図版 13-7 SB4 出土遺物 4……………196
図版 3-2 SB4 遺物出土状況（西から）…186	図版 13-7 SB4 出土遺物 5……………196
図版 4-1 SB4 大型壺出土状況 ……187	図版 14-1 SB4 出土遺物 6……………197
図版 4-2 SB4 床層……………187	図版 14-2 SB4 出土遺物 7……………197
図版 4-3 SB4 遺物出土状況……………187	図版 14-3 SB4 出土遺物 8……………197
図版 4-4 SB4 遺物出土状況……………187	図版 14-4 SB4 出土遺物 9……………197
図版 4-5 SB4 完掘……………187	図版 14-5 SB4 出土遺物 10 ……197
図版 5-1 SB5 遺物出土状況……………188	図版 15-1 SB4 出土遺物 11 ……198
図版 5-2 SB5 遺物出土状況……………188	図版 15-2 SB4 出土遺物 12 ……198
図版 6-1 SB5 完掘……………189	図版 16-1 SB4 出土遺物 13 ……199
図版 6-2 SB6 遺物出土状況……………189	図版 16-2 SB4 出土遺物 14 ……199
図版 7-1 SB6 遺物出土状況……………190	図版 16-3 SB4 出土遺物 15 ……199
図版 7-2 SB7 遺物出土状況……………190	図版 16-4 SB4 出土遺物 16 ……199
図版 7-3 SB7 遺物出土状況……………190	図版 16-5 SB4 出土遺物 17 ……199
図版 7-4 SB7 土器埋設炉検出……………190	図版 17-1 SB5 出土遺物 1……………200
図版 7-5 SB7 土器埋設炉……………190	図版 17-2 SB5 出土遺物 2……………200
図版 8-1 SB7 ……191	図版 17-3 SB6 出土遺物 1……………200
図版 8-2 SB7 完掘……………191	図版 17-4 SB6 出土遺物 2……………200
図版 8-3 SB7 埋設土器撤去後……………191	図版 17-5 SB6 出土遺物 3……………200
図版 8-4 SB10 断面 ……191	図版 18-1 SB7 出土遺物 1……………201
図版 8-5 SB13 検出面 ……191	図版 18-2 SB7 出土遺物 2……………201
図版 9-1 SB13 遺物出土状況 ……192	図版 19-1 SB7 出土遺物 3……………202
図版 9-2 SB13 完掘 ……192	図版 19-2 SB7 出土遺物 4……………202
図版 9-3 SB14 遺物出土状況 ……192	図版 20-1 SB7 出土遺物 5……………203
図版 9-4 SB15・16 検出面……………192	図版 20-2 SB9・10・12・13 出土遺物 ……203
図版 9-5 SB14・15・16 完掘……………192	図版 20-3 SB13 出土遺物 ……203
図版 10-1 SB17 遺物出土状況 ……193	図版 20-4 SB13・14・18・21・22 出土遺物…203
図版 10-2 SB18 検出面 ……193	図版 20-5 SB25 出土遺物 ……203
図版 11-1 VII区西から……………194	図版 21-1 SB17 出土遺物 ……204

圖 版 目 次

圖版 21-2	SB27·29·30 出土遺物	204	圖版 32-3	Ⅶ區出土遺物 3	215
圖版 21-3	SB27 出土遺物	204	圖版 32-4	Ⅶ區出土遺物 4	215
圖版 21-4	SB30 出土遺物	204	圖版 33-1	Ⅶ區出土遺物 5	216
圖版 21-5	SB29 出土遺物	204	圖版 33-2	Ⅶ區出土遺物 6	216
圖版 22-1	住居跡出土石器 1	205	圖版 33-3	Ⅶ區出土遺物 7	216
圖版 22-2	住居跡出土石器 2	205			
圖版 23-1	第 9 層出土遺物 1	206			
圖版 23-2	第 9 層出土遺物 2	206			
圖版 24-1	第 9 層出土遺物 3	207			
圖版 24-2	第 9 層出土遺物 4	207			
圖版 25-1	第 9 層出土遺物 5	208			
圖版 25-2	第 9 層出土遺物 6	208			
圖版 26-1	第 9 層出土遺物 7	209			
圖版 26-2	第 9 層出土遺物 8	209			
圖版 26-3	第 9 層出土遺物 9	209			
圖版 26-4	第 9 層出土遺物 10	209			
圖版 26-5	第 9 層出土遺物 11	209			
圖版 27-1	第 9 層出土遺物 12	210			
圖版 27-2	第 9 層出土遺物 13	210			
圖版 28-1	第 9 層出土遺物 14	211			
圖版 28-2	第 9 層出土遺物 15	211			
圖版 28-3	第 9 層出土遺物 16	211			
圖版 28-4	第 9 層出土遺物 17	211			
圖版 28-5	第 9 層出土遺物 18	211			
圖版 29-1	第 9 層出土遺物 19	212			
圖版 29-2	第 9 層出土遺物 20	212			
圖版 30-1	第 8 層出土遺物 1	213			
圖版 30-2	第 8 層出土遺物 2	213			
圖版 30-3	Pit1·第 6 層出土遺物 1	213			
圖版 30-4	第 6 層出土遺物 2	213			
圖版 30-5	第 6 層出土遺物 3	213			
圖版 31-1	第 6 層出土遺物 4	214			
圖版 31-2	第 6 層出土遺物 5	214			
圖版 31-3	第 6 層出土遺物 6	214			
圖版 31-4	第 6 層出土遺物 7	214			
圖版 31-5	第 6 層出土遺物 8	214			
圖版 32-1	Ⅶ區出土遺物 1	215			
圖版 32-2	Ⅶ區出土遺物 2	215			

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

橋牟礼川遺跡は、大正7・8年に京都帝國大学の濱田耕作、長谷部言人らによる発掘調査がおこなわれ、縄文土器が弥生土器よりも古い時代のものであることが国内で初めて層位学的に実証された遺跡として知られる。大正13年には、国市指定史跡に指定され、昭和53年には、史跡保存のための2.36haの公有地化が完了した。

その後、国指定史跡に隣接する北西側の土地からJR指宿駅付近に至る範囲まで土地区画整理事業がおこなわれることとなった。この事業に伴い、昭和61年から平成3年度まで、深さ1.5m以上の掘削を伴う道路部分と下水道が敷設される部分において発掘調査がおこなわれることとなった。

橋牟礼川遺跡の調査履歴は第1表から第2表のとおりである。本報告書に掲載する橋牟礼川遺

第1表 橋牟礼川遺跡調査履歴1

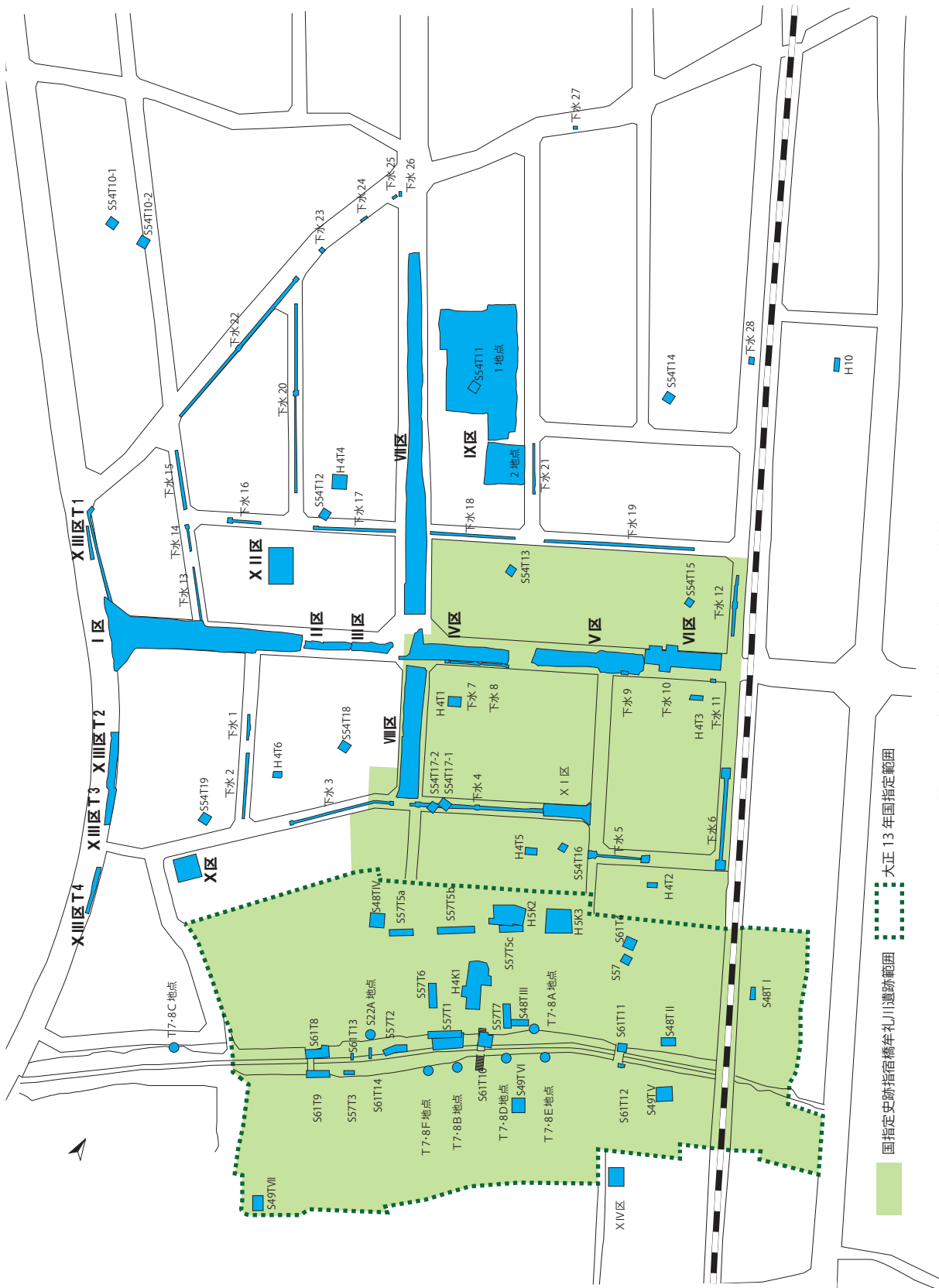
西暦	和暦	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	調査区
1917年	大正6年		山崎五十磨	喜田貞吉の依頼で、縄文土器と弥生土器が出土する地点を確認。	
1918年	大正7年	1月	京都帝國大学	京都帝國大学による学術調査が行われ、縄文土器が弥生土器よりも古い時代の時であることが日本で初めて実証された。	
1919年	大正8年	4月	京都帝國大学	京都帝國大学による学術調査によって、「日本のポンペイ或いはサントリン」と報告され、日本で最も早く火山災害遺跡であることが認識された。	T7・8A～F
1926年	大正15年		史跡名勝天然記念物調査委員（山崎五十磨）	濱田の調査を要約	
1930年	昭和5年	昭和5年3月13日	鳥居龍蔵	京都帝國大学調査地点の周辺で調査。弥生土器や叩石が出土し、その東100mの地点で新たな貝塚を発見した。	
1948年	昭和22年	昭和23年2月	鹿児島県	鹿児島県国立公園候補地学術調査が行われ、縄文土器、弥生土器の包含層に加え、古墳時代の貝塚が発見される。	
1974年	昭和48年	昭和49年2月25日～3月11日	指宿市教育委員会	史跡指定現状変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、平安時代の土壇墓から幼児骨など5体が発見される。	S48 I～IV
1975年	昭和49年	昭和50年2月3日～2月18日	指宿市教育委員会	史跡指定現状変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代に至る各時代の文化層、火山灰層が確認される。また、縄文～弥生期の竪穴住居跡、古墳時代の土器集中廃棄所などが発見される。	S49 V～VII
1979年	昭和54年	昭和54年10月22日～12月1日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う確認調査が行われ、遺跡の広がり10ha以上に及ぶことが確認される。	S54T1～T18
1983年	昭和57年	昭和58年2月21日～3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の竪穴住居や貝塚が発見される。	S57T1～T7
1986年	昭和61年	昭和61年5月6日～6月30日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の竪穴住居跡やV字溝、鍛冶に伴う遺物が出土する。また、平安時代の鉄器、須恵器、土師器などが出土する。	S61T8～T10
1986年	昭和61年	昭和61年7月10日～昭和62年3月20日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年（西暦874年）の開聞岳噴火に伴う土石流で埋め尽くされた旧河川が発見される。	VII区
1987年	昭和62年	昭和61年6月1日～平成1年1月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、国指定史跡内で発見されている古墳時代の竪穴住居跡と同時期の住居群が確認される。	VII区
1988年	昭和63年	昭和63年7月4日～平成1年1月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年（西暦874年）の開聞岳噴火で埋没した建物跡が発見される。また、古墳V区時代の子持勾玉が出土する。	V区
1988年	昭和63年	昭和63年4月25日～5月20日	指宿市教育委員会	温泉源移転に伴う確認調査が行われ、古墳時代の集落の広がり確認される。	X区

第2表 橋牟礼川遺跡調査履歴2

西暦	和暦	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	調査区
1989年	昭和63年	平成1年1月8日 ～1月28日	指宿市教育委員会	個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開聞岳噴火で倒壊・埋没した建物跡の一部が発見される。	XIV区
1989年	平成1年	平成1年4月20日 ～6月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業による温泉源移転に伴う確認調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開聞岳噴火で埋没した樹木痕が発見される。	X区
1989年	平成1年	平成1年4月20日 ～平成2年3月29日	指宿市教育委員会	都市計画事業による発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開聞岳噴火に伴う土石流跡を確認。日本三代実録の「河水砂和」を実証する。	II区・III区
1989年	平成1年	平成1年10月5日 ～12月10日	指宿市教育委員会	都市計画事業区内個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、平安時代の畠跡、建物跡、古墳時代の竪穴住居跡などが発見される。	XII区
1990年	平成2年～3年	平成2年5月1日 ～平成3年7月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の集落跡、土器集中廃棄所、道跡、平安時代の畠跡、建物跡などが発見される。	I区
1990年	平成2年～3年	平成2年7月4日 ～平成3年9月17日	指宿市教育委員会	下水道事業に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の集落、平安時代の畠地が広範囲にあることが確認される。	下水1～28
1991年	平成3年	平成3年6月7日 ～11月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開聞岳噴火で埋没した畠跡に隣接して、高床倉庫跡、道跡、柵列跡などの遺構が発見されている。	VIII区
1991年	平成3年	平成3年9月27日 ～11月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業による発掘調査が行われ、古墳時代の竪穴住居跡、馬骨が出土する。	XIII区
1992年	平成4年	平成5年2月20日 ～3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、道跡等が発見される。	IX区
1992年	平成4年	平成4年8月17日 ～平成5年1月26日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、古墳時代の土器集中廃棄所等が発見される。	H4T1～T5
1992年	平成4年	平成4年10月21日 ～平成5年3月20日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が実施され、平安時代の竪穴住居跡2基が発見される。	H4K1
1992年	平成4年	平成4年7月1日 ～平成5年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、旧河川の続きと平安時代の畠跡が発見される。	IX区
1993年	平成5年	平成5年4月1日 ～平成6年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、平安時代の畠跡、古墳時代の馬鋏状工具痕跡、弥生時代の土器集中廃棄所等が発見される。	IX区
1993年	平成5年	平成6年10月1日 ～平成7年3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡2基が発見される。	H5K2・K3
1994年	平成5年	平成6年1月17日 ～平成7年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(片野田地点)によって、中世の畠跡、平安時代の道跡が発見される。	H5
1994年	平成6年	平成6年4月1日 ～5月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、縄文時代後期の柱穴群が確認される。	IX区
1994年	平成6年	平成6年7月15日 ～平成7年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(片野田地点)によって、中世～近世の墓、古墳時代の柱穴が確認される。	H6
1995年	平成7年	平成7年9月17日 平成8年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(向吉地点)によって、弥生時代終末～古墳時代の祭祀遺構が発見される。	H7
1996年	平成8年	平成8年11月8日 ～平成9年3月31日	指宿市教育委員会	指導拡幅工事に伴い発掘調査が行われ、古墳時代の遺構・遺物が発見される。	
1996年	平成8年	平成8年12月1日 ～平成9年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、貞観16年(西暦874年)の開聞岳噴火で埋没した樹木跡が確認される。	H8
1997年	平成9年	平成9年7月1日 ～平成10年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(南丹波地点)によって、古墳時代の柱穴が確認される。	H9
1998年	平成10年	平成10年7月1日 ～平成11年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、古墳時代の柱穴が確認される。	H10
1999年	平成11年	平成11年7月26日 ～平成12年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、道跡が確認される。	H11

跡における発掘調査の内容及び検出した遺構遺物等に関しては、第1図に示した調査区名を用いた。
なお、本報告書で便宜上用いた調査区名については、下記のように付している。

- ・ I 区 ～ X III 区：昭和54年度～平成6年度の指宿駅西部土地地区画整理事業(以下「都市計



第1図 橋牟礼川遺跡の調査範囲

画事業」) 及び博物館建設に伴う調査

- ・下水 1 ～下水 28：平成 2 年度から平成 3 年度の下水道敷設に伴う発掘調査
- ・年度+トレンチ番号：大正年間以降に橋牟礼川遺跡及び隣接遺跡での確認調査及び緊急調査（T：大正，S：昭和，H：平成を示す）

第2節 発掘調査の組織（昭和 61 年度・62 年度）

調査主体者	指宿市教育委員会		
調査責任者	教育長	安田新駒	
調査事務担当者	社会教育課長	北方耕蔵	
	社会教育係長	堀口健一郎	
	派遣指導主事	田中和成	
	主事	尾辻隆	
	主事補	肥後俊明	
	主事	板松エイ子	
調査担当者	指宿市教育委員会	文化財専門員	栞畑光博
	鹿児島県教育庁文化財課	主査	中村耕治

なお、調査企画において、県教育長文化財課長・桑原一廣、同課長補佐・川畑栄三、同主幹・中村文夫、同主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長・立園多賀生、同文化財研究員兼指定文化財係長・吉元正幸の各氏の他、同企画助成係の指導・助言を得た。また、発掘調査、遺物については、鹿児島県考古学会長・河口貞徳氏の指導を受けた。なお、調査期間中に鹿児島大学教授・上村俊雄氏、同助手・本田道輝氏、同埋蔵文化財調査室の松永幸男氏、獣骨については鹿児島大学農学部教授・西中川駿氏、地層については玉龍高校教諭・成尾英仁氏の指導、助言を受けた。※所属は当時。

第3節 整理・報告書作成の組織（平成 28 年度・29 年度）

作成主体	指宿市教育委員会		
作成責任者	指宿市教育委員会	教育長	西森廣幸
作成担当組織員	指宿市教育委員会	教育部長	長山君代
		社会教育課長	中摩浩太郎
		文化担当主幹	鎌田洋昭
		管理係主幹兼係長	迫田優子
		管理担当主幹	湯口亮一
		社会教育係主幹兼係長	鴨崎一郎
		文化係主幹兼係長	上蘭浩司
		文化係主事	廣田さおり
		文化係技師	西牟田瑛子
		文化係技師	松崎大嗣
整理作業員	清 秀子，竹下 珠代，鎌田 真由美，境 由希		

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

指宿市は、薩摩半島の南端に位置し、地形的には、山地、台地、平野、湖沼と大きく4つに分類できる。これらの地形は、約10万5千年前から約11万年前に噴火した阿多火山の噴火活動に伴う阿多カルデラ内にほぼ収まる。約5万3千年前には、池田湖の東側に位置する清見岳が大きな噴火を繰り返した。約2万8千年前から約3万年前には、始良カルデラの噴出物である入戸火砕流が現在の台地部に厚く堆積した。

指宿市開聞地区から南洋を臨むと、硫黄島・竹島を目視することができる。この二つの島は約7,300年前に噴火した鬼界カルデラの北縁であり、指宿市から約50kmの距離に位置する。鬼界カルデラから噴出した「幸屋火砕流」は、指宿市新西方の幸屋で発見したことからこの名がついている（宇井1967）。

その後、新期指宿火山群（池田火山）が活発な火山活動を始めた。中でも、約5,700年前の池田火山の活動により、九州最大のカルデラ湖である池田湖が形成された。その噴出物は、指宿市全域の直接的な地形形成の要因となっている。池田火山が噴火した直後に松ヶ窪、池底、鰻池、成川、山川湾が連続して噴火し、「爆裂火口」と呼ばれる一直線上に並ぶ火口を形成した。

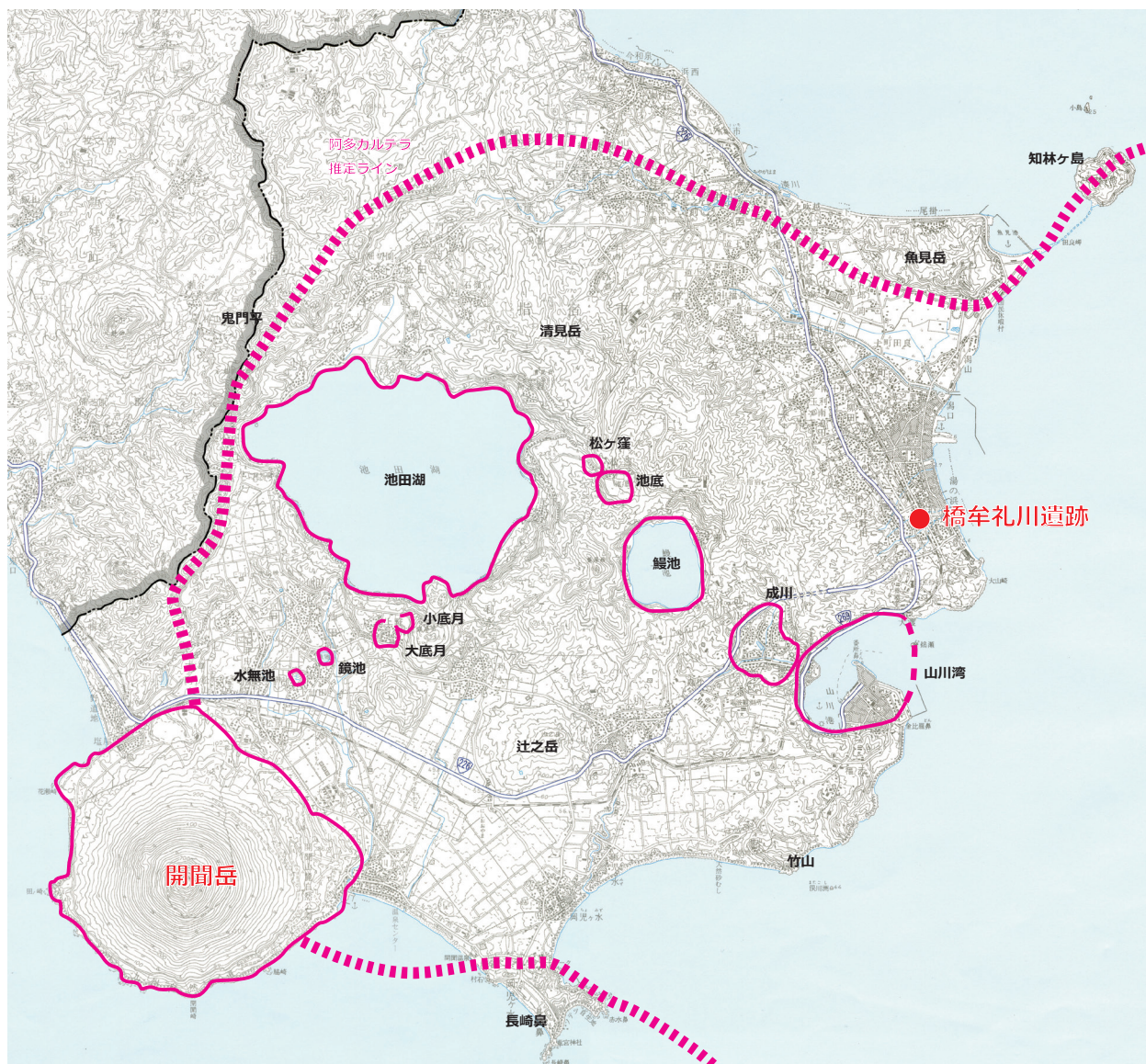
さらに、池田火山の南西に位置するトコロニーゲ型の開聞岳は、約4,700年前から約3,700年前に活動を開始した。開聞岳噴出物のうち、旧指宿市域では主に4回分の開聞岳噴火火山灰層を確認することができる。有史時代の噴火についてはいくつかの資料に記録されており、西暦874年（以下「874年」と表記）と885年の噴火とそれに伴う災害の状況等が『日本三代実録』に記録されている。特に、874年の開聞岳噴火に伴う固結火山灰層は広く市域を覆っている。

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は、指宿市街地に所在し、指宿市街地に並行し南北に走る山塊の山裾から海岸へ傾斜する海拔7m～20m程度の緩やかな火山性扇状地上に位置する。

扇状地上には、山裾を水源とする複数の河川が海岸に向かい東流するが、いずれも大地を深く削り、深さ数m～10数mに達するV字状の谷を形成している。大正13年に国史跡に指定された



第2図 指宿市の位置



第3図 指宿市の火山地形

範囲の中央にも、上記のようにして形成された橋牟礼川が流れるが、V字状谷の側面には遺物包含層が露出しており、古墳時代の成川式土器や弥生土器、まれに縄文土器が表採される。

〈文献〉

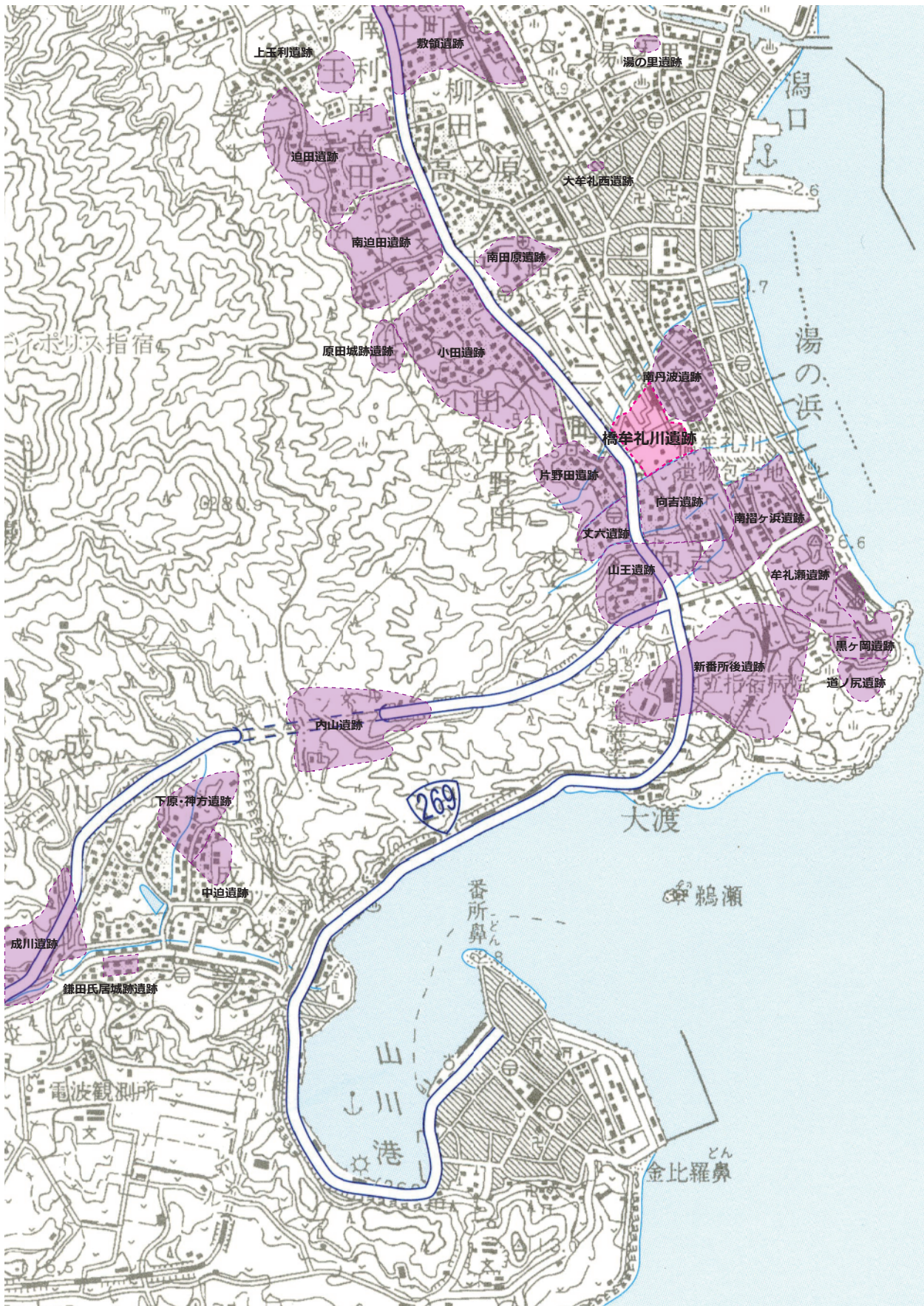
字井忠英 1967 「鹿児島県指宿地方の地質」『地質学雑誌』73巻10号 477-490頁

第2節 基本層序

橋牟礼川遺跡の地層は、基本的に池田カルデラ噴出物と開聞岳噴出物とそれらに挟まれる扇状地堆積物から形成される。ここでは、1991年に確認された橋牟礼川遺跡の標準層位をもとに述べる。

第1層 黒褐色土層（表土）

耕作土。都市計画事業によってシラスや砂利、礫層がある場合がある。また土地利用の履歴により第1層の厚さや性状に差異が認められる。重機による掘削痕跡が下層に及ぶ場合がある。



第4図 指宿市南東部の遺跡

第2層 暗灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

第3層 黒灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

第4層 黒色土層

中世（鎌倉～室町時代）の遺物包含層である。黒ボクのような腐食土が発達している。厚さは20cm～50cmと厚く、宋代の青磁・白磁や糸切り底の土師器が出土する。内黒土師器も出土していることから、上限は平安時代後期まで遡る可能性がある。紫コラ（貞観16年、仁和元年の開聞岳噴出物）の堆積後の生活が再開される時期を考える上で重要な層である。

第5層 a 紫灰色火山灰層（紫コラ）

平安時代に堆積した開聞岳噴出物層である。平安時代の旧地表面を覆う火山灰層の上位に存在することから、下位の火山灰層を貞観16年に、上位の第5a層を仁和元年の開聞岳噴出物に対比させる説もあるが、近年の地質学的調査の成果から、下位と上位の噴出物は一連の火山活動に伴うものであるとする考えがある。

第5層 b 紫灰色火山灰層二次堆積物

次に説明する紫灰色火山灰堆積物 第5層 c（874年開聞岳噴出物）の二次堆積層で、水流作用で形成された層と考えられ、砂が多く混在し、クロスラミナが発達する。

第5層 c 紫灰色火山灰層（紫コラ）

紫灰色火山灰層（紫コラ）。874年の開聞岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて強く固結し、フォール・ユニットが認められる。第5層 c の最下部には、2cm以下の礫が2～5cmの厚さで堆積するが、これは貞観16年の火山活動に伴う最初の降下物とみられる。第5層 c の厚さは、約30～80cmであり、場所によっては一時堆積物を侵蝕して、クロスラミナを形成する堆積層が観察されることがある。

第6層 暗オリーブ褐色土層

奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は874年開聞岳噴出物層に直接被覆され、旧地表面の地形をそのままに留めている。第6層は標準層位では、a、b、cの3分層が可能である。a層は腐食が進行しており、特に畠跡周辺では黒色が強くなる。b層はオリーブ褐色を呈するが、河川跡付近では砂層となる場合がある。c層は7層青コラの二次堆積層である。

第7層 青灰色固結火山灰層（青コラ）

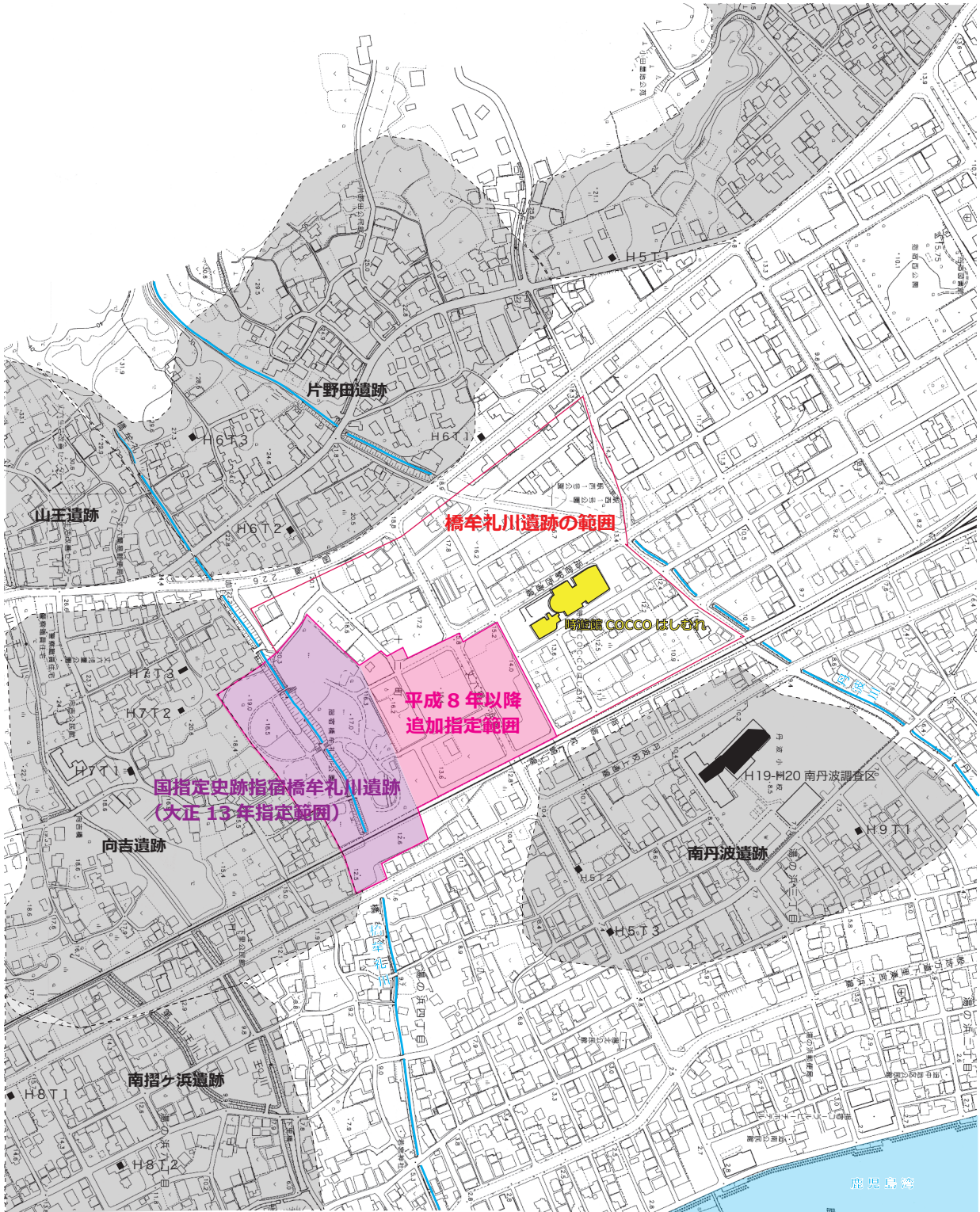
7世紀後半に比定される開聞岳噴出物層（下山1992）で、下部には火山活動の初期に降下したと考えられるスコリアが2～5cm程度堆積する。さらに、暗橙色土層を5～10cm程度挟み、1～2cm程度のスコリア堆積が部分的に見られる場合があることから、火山活動の小休止期があったと考えられている。

第8層 橙色土層

古墳時代に相当する扇状地堆積物層であり、5～30cmほど堆積する。層中には、スコリアのブロック（開聞岳の7世紀第4四半期の噴出物堆積層と休止期を挟んで下位に存在する初期の噴出物）や、砂層、池田湖起源の噴出物のブロック、池田湖降下軽石等を含む。古墳時代時などのローリングを受けたものが検出される。

第9層 暗褐色土層

古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田カルデラ降下軽石を若干含む。やや粘質であり、厚さ



第5図 橋牟礼川遺跡の範囲と周辺遺跡

は 50cm ～ 1m 程度である。第9層中から遺構が掘りこまれた場合は土色などからの判別が困難であり、下位層の第10層に達している場合は、第10層上面で検出できる。第9層の形成は、出土須恵器から5世紀から6世紀代の集落形成による地層の攪乱と、複数回にわたる河川の氾濫などによる堆積などの要因が複合しているとみなされる。

第10層 赤橙褐色粘質土層

弥生時代中期～後期の遺物包含層で、いわゆる山ノ口式土器などが出土する。基本的には扇状地堆積層で、池田湖降下火山灰のブロックを含む。第10層の中位から砂層ブロックが検出されることがある。第9層から掘り込まれた遺構は、通常、第10層に到達するため、第9層中に混在する弥生土器は第10層に包含されていたものがあると考えられる。

第11層 暗紫色火山灰層（暗紫コラ）

弥生時代（山ノ口式土器段階）に降下した開聞岳噴出物堆積層である。強く固結せず、ブロック状に堆積していることが多い。層厚は0～5cm程度である。山ノ口遺跡、成川遺跡など、この火山灰が山ノ口式土器を被覆していた事例がある。

第12層 明褐色土層

弥生時代前～中期にかけての遺物包含層で、第13層と色調は類似するが、粘性が強く粘度は小さい。

第13層 暗褐色小石混シルト質土層

主に、刻目突帯文土器を包含する層で、小石が混じる。

第14層 赤褐色小石混シルト質土層

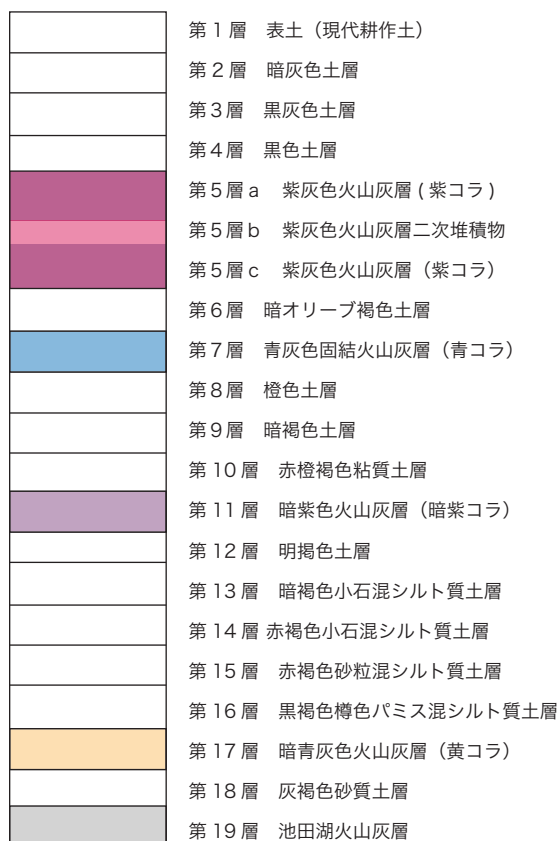
主に、縄文時代晩期の遺物を含む。黒川式土器が主体となる。

第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含むが、縄文時代後期の遺物が出土することがある。

第16層 黒褐色橙色パミス混シルト質土層

主に、縄文時代後・晩期の遺物を含む。縄文時代後期の上加世田式土器、市来式土器などが確認



第6図 橋牟礼川遺跡の基本層序

されている。第14層から第16層までは、場所により欠落する場合があるが、第16層はコンスタントに確認することができる。

第17層 暗青灰色火山灰層（黄コラ）

縄文時代後期の開聞岳噴出物で、上半は黄色細粒火山灰、下半は黒灰色スコリア及び粗粒火山灰の二層から構成される。ブロック状に残存し当時低い部分には10～15cm程度の層厚を確認することができる。成川遺跡などでは、「指宿式土器」を被覆していた事例がある。

第18層 灰褐色砂質土層

縄文時代後期遺物包含層で「指宿式土器」を主に包含するが、同層より「阿高式土器」が出土している。下部は、池田湖降下軽石を含む砂層に変化し、池田湖火山灰層の二次的な堆積層となる。

第19層 池田湖火山灰層

灰色～黄灰色を呈する層で、約5700年前の池田カルデラ形成期の火山活動に伴い堆積したものである。軽石を多く含み、軽石には角閃石が多く含まれる。同層が、この地域の地形基盤を成すものと考えられ、発掘調査では、現在のところ同層を除去した事例はない。指宿市北部の横瀬遺跡では2m以上の層厚を呈する。橋牟礼川遺跡付近では、池田火砕流堆積物は30m以上に達すると考えられている。

〈文献〉

下山覚 1992 「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第8号 65-79

第3章 VI区の調査成果

第1節 調査の概要

VI区の調査は昭和62年6月1日から平成元年1月30日まで実施された。調査区は、指宿駅西部土地区画整備事業に伴い設置が計画された都市計画道路のうち、国道226号線から海に向けて東西方向に新設される幹線道路予定地の最も東側に、JR指宿枕崎線に面して設けられた(第7図)。

第2節 第10層出土遺物(第14図)

第10層は弥生時代中期～後期の遺物包含層で、いわゆる山ノ口式土器などが出土する。基本的には扇状地堆積層で、池田湖降下火山灰のブロックを含む。第10層の中位から砂層ブロックが検出されることがある。第9層から掘り込まれた遺構は、通常、第10層に到達するため、第9層中



第7図 調査区配置図

に混在する弥生土器は第10層に包含されていたものがあると考えられる。

〈第10層出土遺物〉

1は中溝式の甕である。口径は復元で30.0cmを測る。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、口唇部はコの字に仕上げられる。頸部には外面に突出する貼り付け突帯がめぐり、細かい刻み目が施される。外面はナデ調整、内面はナデ調整、指頭圧痕がみられる。

2は甕の口縁部で、くの字に強く屈曲する。口唇部は断面M字状。調整は内外面とも細かいミガキ調整がみられる。

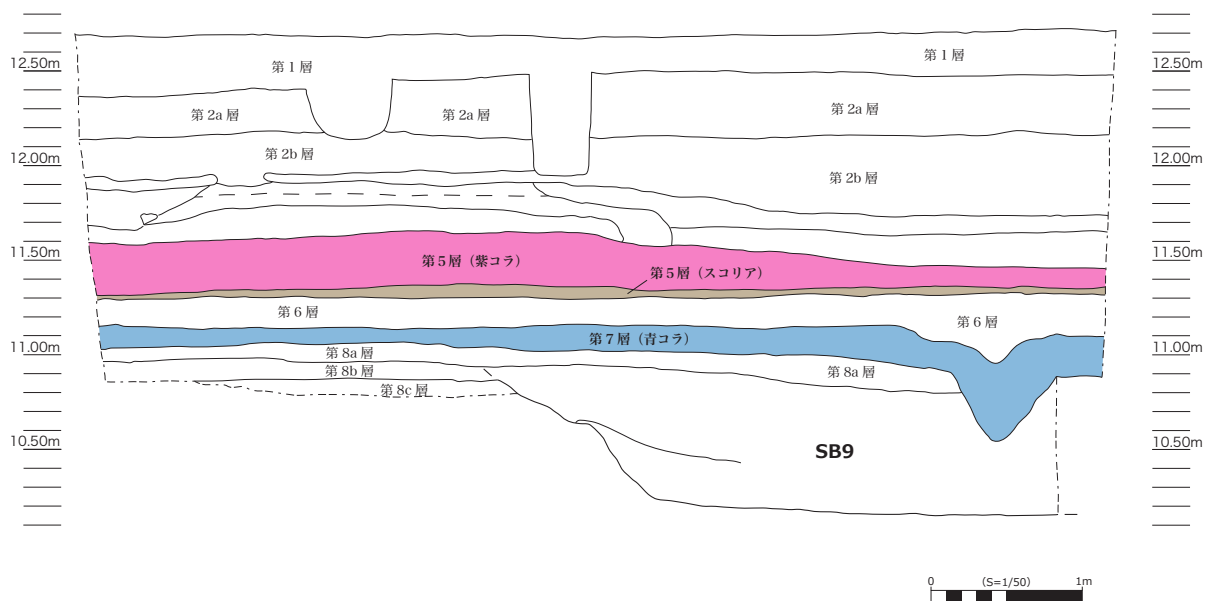
3は甕の脚部である。脚部径7.0cm、脚部高1.3cm、底径6.0cmを測る。脚部形態は、ハの字に開く形態を呈し、胴下部にかけて大きく開く。内底面の器厚は0.5cmと薄い。外面はナデ調整、内面は工具ナデ調整がみられる。脚接合部から胴下部にかけてススが付着し、内面にはコゲがみられる。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

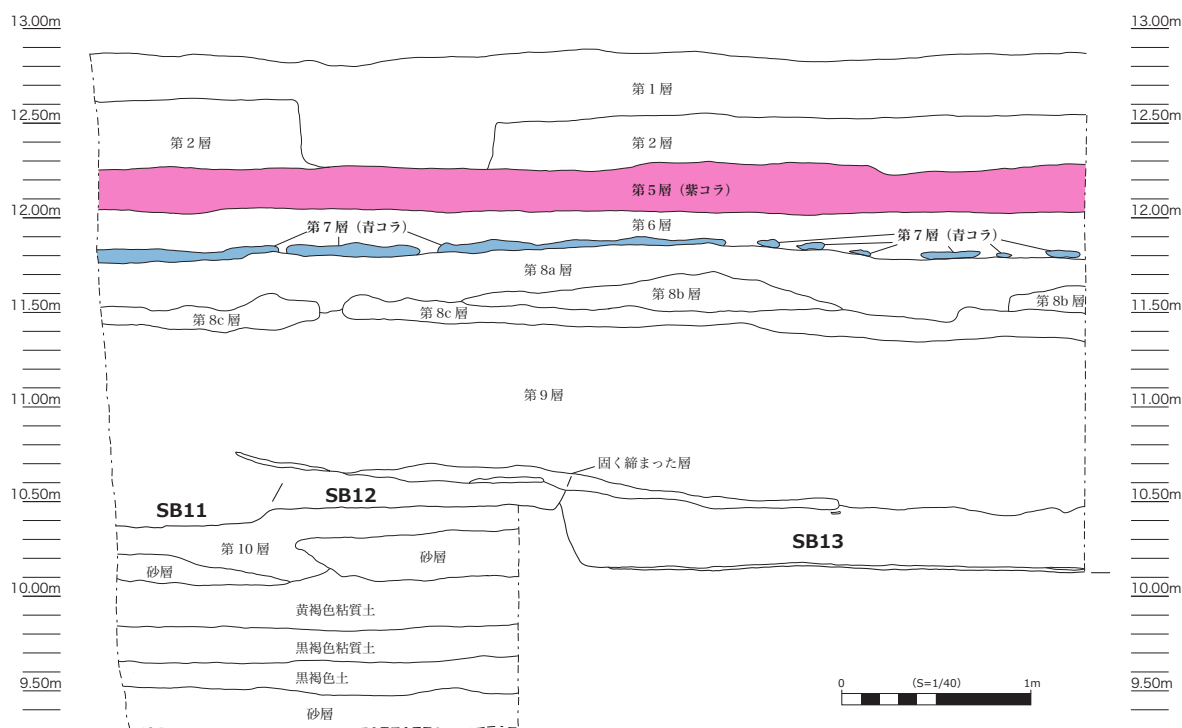
(1) 遺構

VI区においては、古墳時代に帰属するとみられる竪穴住居等の遺構が検出された。主体となるのは、第8層・第9層中から掘削された竪穴住居等の遺構群である。これらの中には、7世紀後半に位置づけられる第7層青コラ火山灰が降下する時点で埋没過程にあるものが複数含まれていた。加えて、出土遺物が少量であるとともに、弥生土器が主となる竪穴住居もある。検出時の層位が十分に確認できない状況であるが、これらの住居遺構は、切り合い関係では第9層下位から掘削された竪穴住居によって切られている状況であるが、帰属時期の確定が困難であり、本節で記載した。

なおSB7, SB31は第7層青コラ火山灰上位の第6層から掘削された竪穴建物であり、古代に帰



第8図 VI区東壁土層断面図



第9図 VI区西壁土層断面図

属する遺構であるが、本節で記載している。

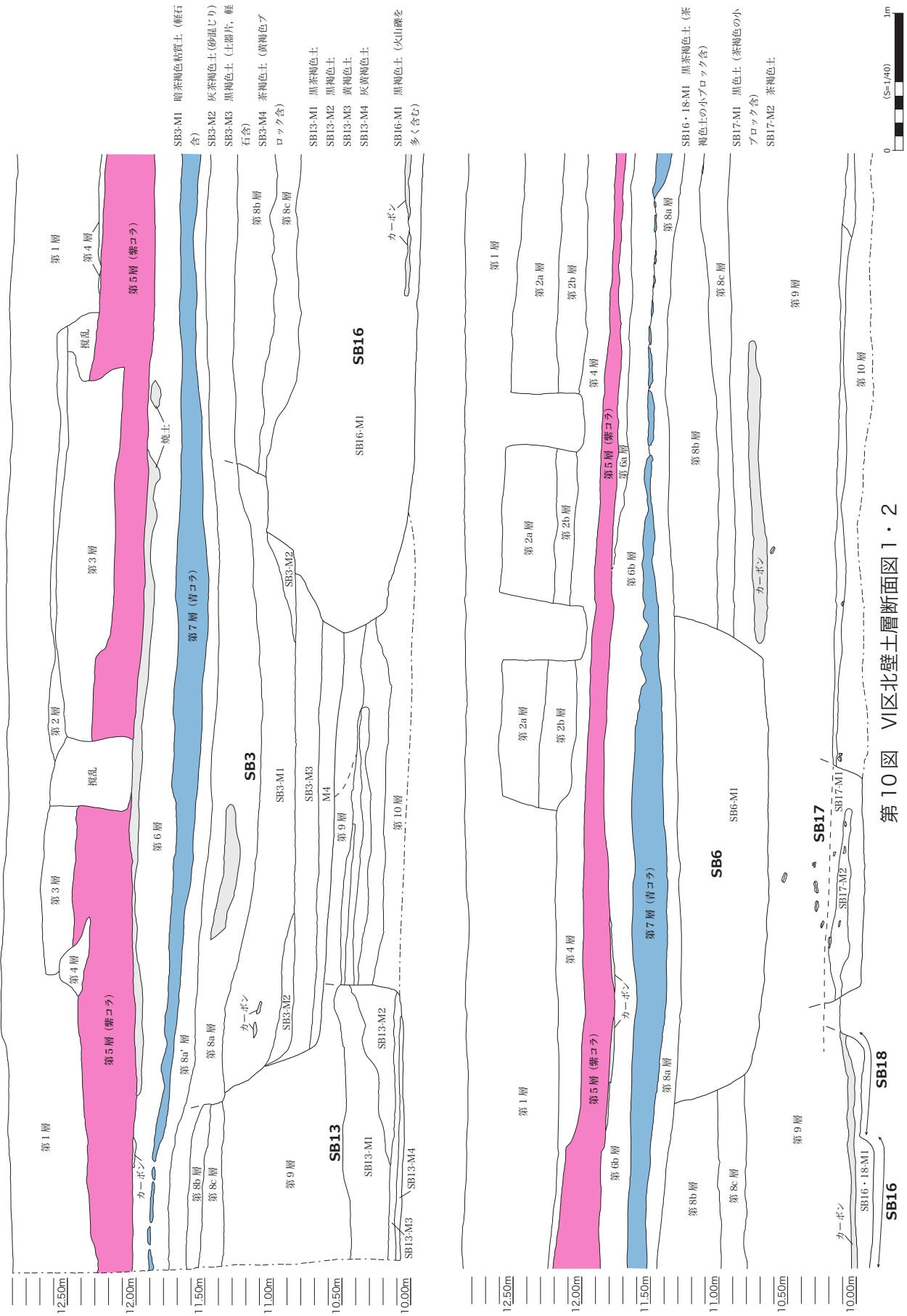
古墳時代に帰属する遺構の構成は、竪穴住居跡とみられる遺構 26 基 (SB と表記、うち SB9 と SB28 の 2 基は疑問)、溝状遺構 2 基、土坑 1 基、土坑状遺構 1 基である。

本稿の記載は、昭和 62 年度において作成された遺構平面図や層位断面図等の現場で作成された図面を基に行った。したがって、遺構の帰属層位や新旧関係等に関しては図面をもとに再構成したものである。

【SB3】 (第 16,17 図, 図版 2-1 ~ 2-4)

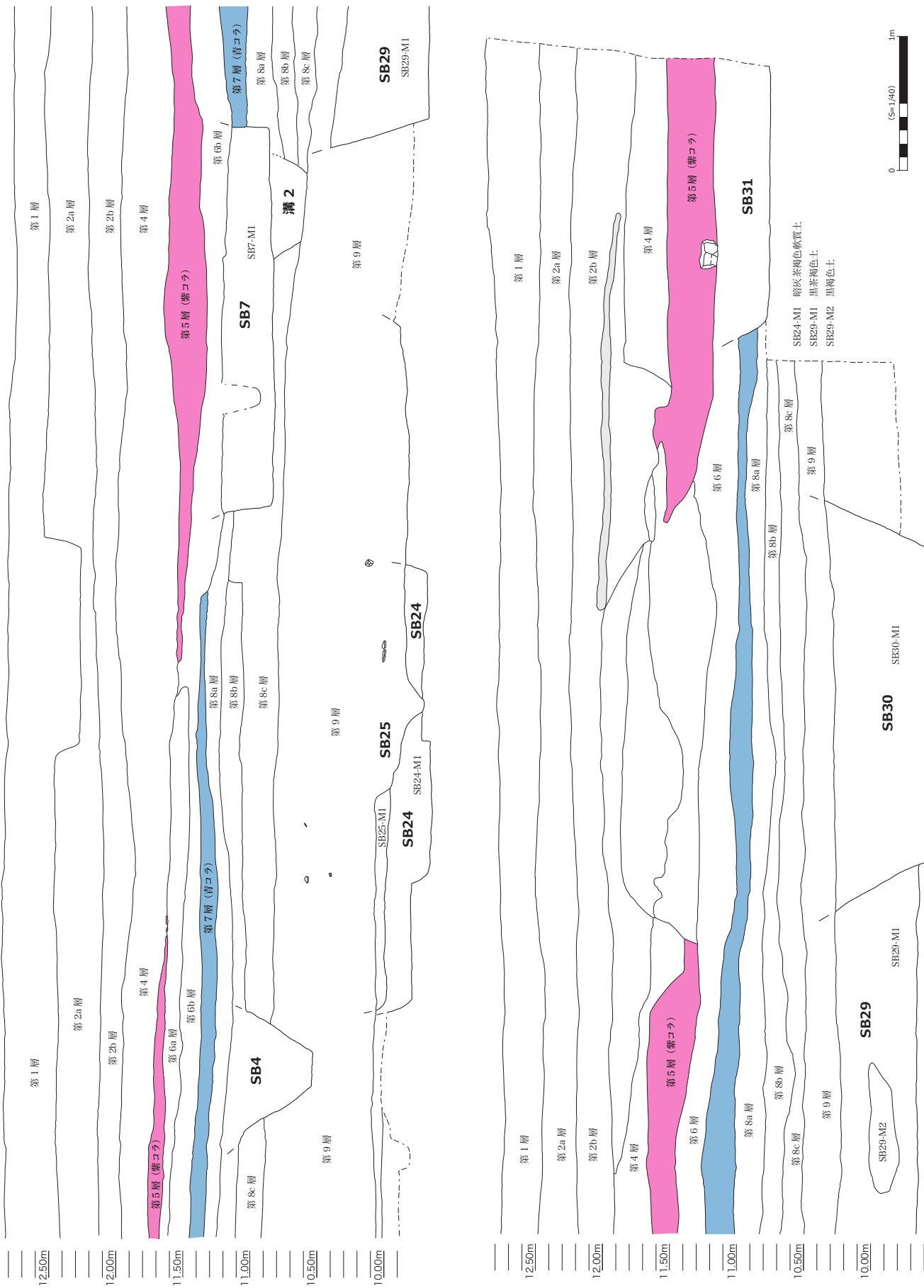
SB3 は、主軸を北西-南東にとり、方形プランを呈する。全体の半分以上の検出であるが、検出された竪穴の一辺は 3.5 m を測る。検出面からの竪穴の深さは約 53cm を測る。第 7 層青コラ火山灰層の下面がわずかに竪穴中央に向かって窪んでおり、竪穴埋没途中で青コラ火山灰が降下したものと考えられる。

付帯遺構として、ピット 5 基、床面中央部分に設けられた土坑 1 基、竪穴コーナー下端部に溝状の土坑 1 基が検出された。ピットは便宜上 3 a から 3 e とした。ピット 3 a は長軸 20cm, 短軸 18cm の略円形であり、深さ 36cm ある。ピット 3 b は直径 12cm の略円形で、深さ 21cm である。ピット 3 c は直径 16cm の略円形であり、深さ 23cm である。ピット 3 d は直径 18cm, 短軸 16cm の楕円形であり、深さ 27cm である。ピット 3 e は長軸 16cm, 短軸 14cm の楕円形であり、深さ 22cm である。床面全体が検出されていないため柱配置については不明な点が多い。検出されたピットはいずれも直径 20cm 程度と小型であること、土坑の東西では、西側に 4 基、東側に 1 基と、偏りがみられることから、どのピットが柱穴となるか不明である。ただ、片野田遺跡で主

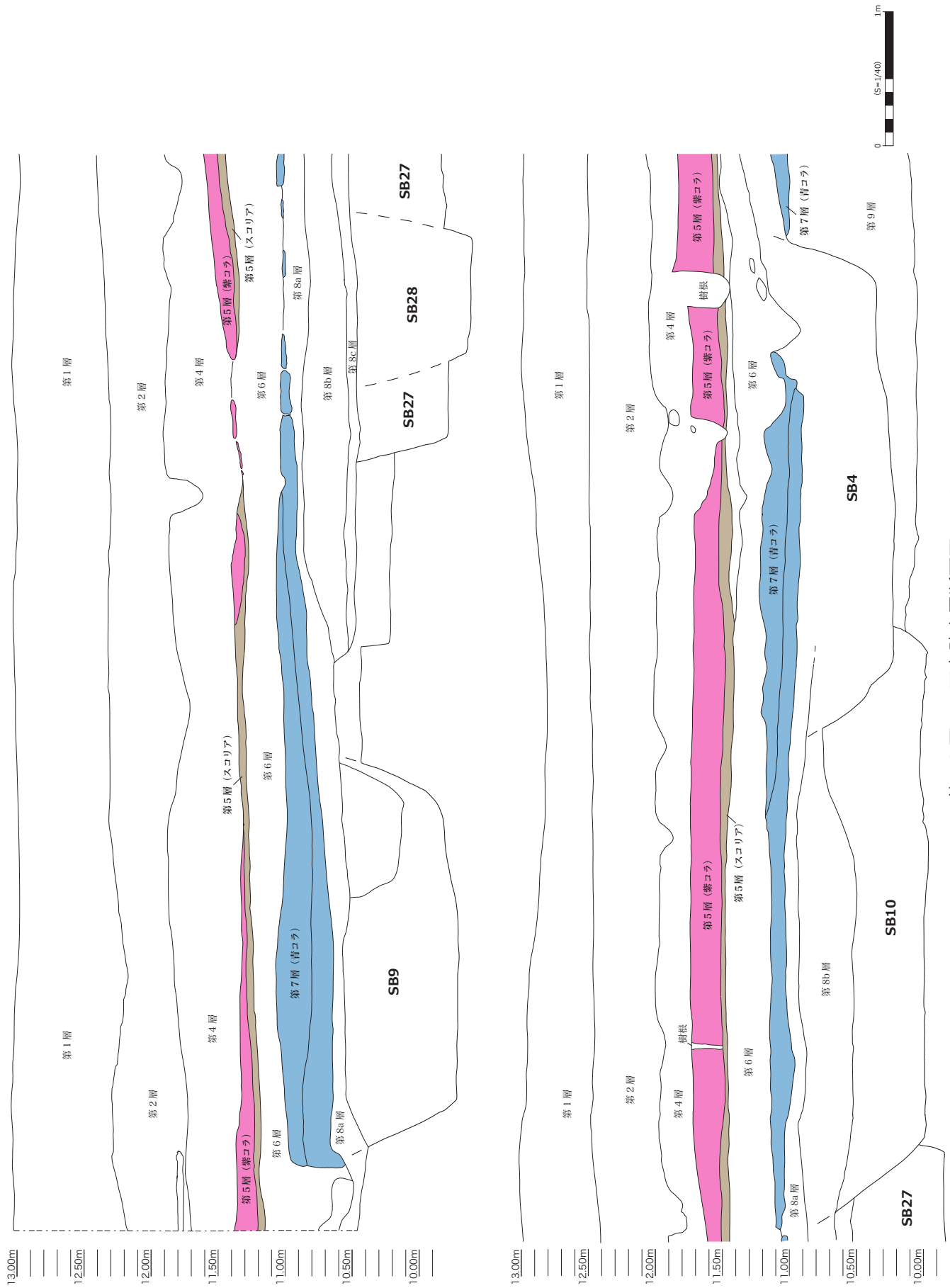


第10図 VI区北壁土層断面図1・2

第3節 古墳時代の遺構と遺物

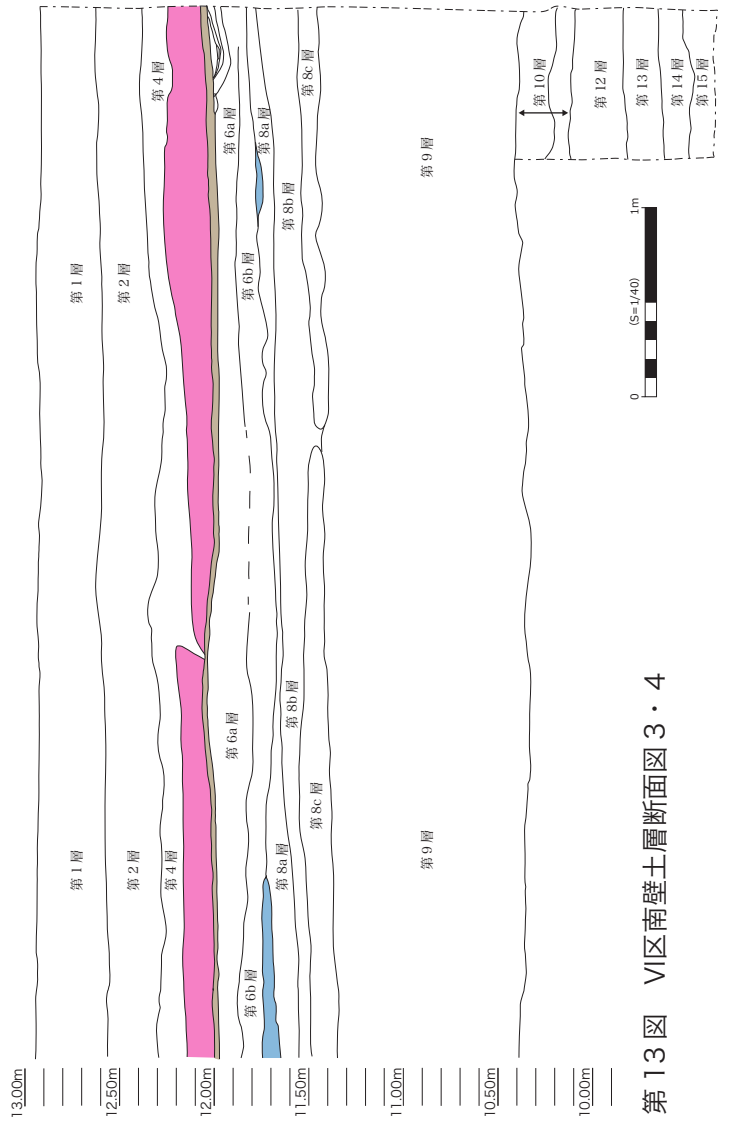
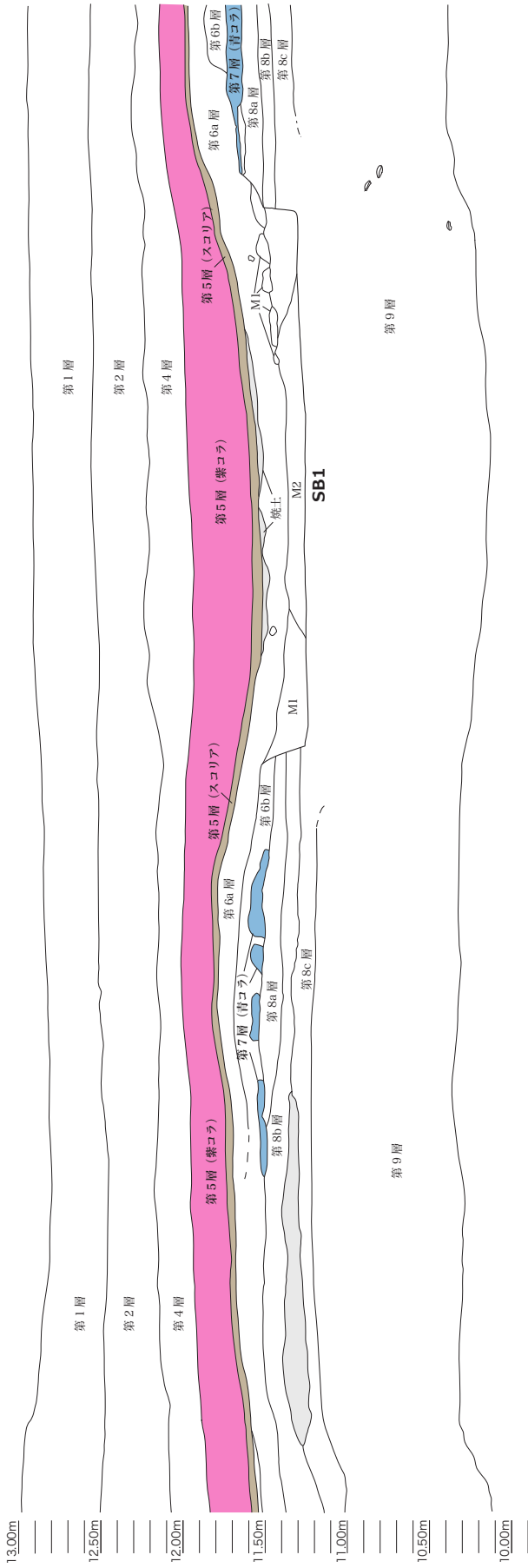


第11図 VI区北壁土層断面図3・4



第12図 VI区南壁土層断面図1・2

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第13図 VI区南壁土層断面図3・4

柱穴を設けず、床面に柱受けと考えられる凹みを設けた事例があることから、土坑の東側の床面で検出された直径20cmの凹みが柱受けである可能性もある。この場合は、凹みとピットaは対をなすと考えられる。さらに、凹みとピットaを中心軸と仮定すると、ピットd・eに対応する2柱穴が調査区外にあった可能性も考えられるかもしれない。

床面中央の土坑は長軸88cm、短軸70cmの不整楕円形であり、深さ12cmの断面逆台形を呈する。床面にはカーボン集中箇所が検出され、土坑はこれに隣接して確認された。竪穴コーナー下端の溝状土坑は、竪穴コーナーに沿っており、長さ1.4m程度を測る。幅30cm～46cm、深さ12cm程度である。

〈SB3 出土遺物〉

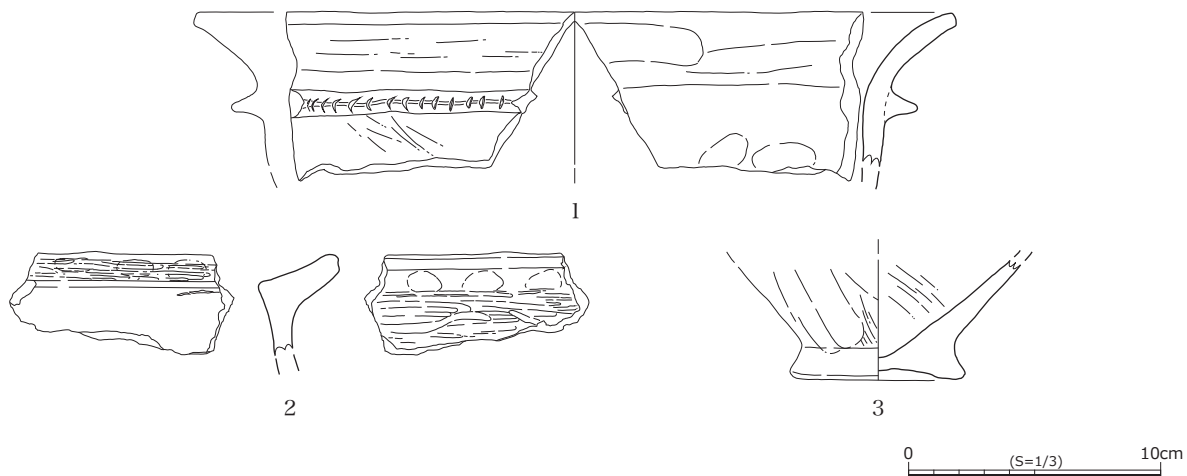
出土遺物総点数は828点である。

4は甕の口縁部から胴部である。口径30.5cmを測る。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部はゆるやかな丸みを持つ。一条の貼付け突帯がめぐり、刻目が施される。この刻目の原体は指頭で、刻みの間隔は広い。突帯が貼り付けられた部分の器壁はやや薄い。内外面ともミガキ調整が施される。そのうち外面は、突帯より上部は横方向のミガキ調整、突帯下部はタテ方向のミガキ調整である。内面はタテ方向のミガキ調整で仕上げられる。外面にはススの付着が見られる。

5は甕の脚部である。脚部径9.7cm、脚部高5.0cm、底径5.7cmを測る。脚部は直線的に開く形態で、脚内面形状はドーム状を呈する。脚端部は丸みをおびる。外面はナデ調整、内面は工具ナデである。

6は甕の脚部である。脚部径は復元径10.0cmである。脚部の内面形状はドーム状で脚端部はコの字である。内外面ともナデ調整で、脚端部には指頭圧痕がみられる。

7は二重口縁壺の口縁部～頸部である。口径は復元径16.2cmを測る。頸部からゆるやかに外反する形態である。口縁屈曲部は外面に強い稜をもち、内面の屈曲はゆるやかである。口縁端部は丸くおさまられる。内面は剥落しているため調整不明だが、外面は頸部から屈曲部にかけてタテ方向のナデがほどこされる。やや白っぽい色調を呈し、軟質である。



第14図 第10層出土遺物

8, 9は壺底部である。8は底径が復元径9.0cmを測る。底部は平底だが、座りは悪い。底部から胴下部にかけての立ち上がりは、一度直線的に立ち上がり、ゆるやかに内湾しながら広がる。立ち上がり部分には連続的な指頭圧痕がみられる。外面はナデ調整で仕上げられるが、内面は剥落しており調整不明である。

9は底径が復元径6.3cmを測る。外底面の中央がくぼんでおり、底端部は丸みをおびる。立ち上がりは、直線的に開く形態で、内外面ともナデ調整で仕上げる。内面にはスリップ状の付着物がみられ、土器製作時に内面に塗布されたものと考えられる。

10はミニチュア土器である。わずかに脚部を持つことから、甕もしくは鉢をモデルとしたものと考えられる。脚部径2.2cm、脚部高0.8cm、底径2.6cmである。脚部は指頭圧痕が明瞭に残る。内外面とも粗いナデ調整である。

11から14は高杯の脚部である。11は脚接合部分である。脚接合部の径は復元径で3.6cmを測る。脚部と杯部の接合は粘土円錐塊を充填する方法で接合している。外面には赤色顔料が塗布される。

12は、直線的な高杯の筒部で、脚端部に向かって強く屈曲する。筒部径は復元径5.0cm、屈曲部径は復元径5.4cmを測る。脚部と杯部の接合は粘土円錐塊を充填する方法で接合される。円錐塊は内面で押しつぶされている。脚部外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。

13はくびれを有する高杯筒部である。脚部と杯部の接合は粘土円錐塊を充填する方法で接合している。外面はミガキ調整、内面は工具ナデで仕上げられる。外面全体的に黒斑がみられる。

14はドーム状に膨らむ脚部である。筒部との接合部で欠損している。脚部径は復元径で15.1cmを測る。脚部はやや踏ん張る形で丸みをもちながら開き、脚端部は断面コの字である。外面はナデ調整、外面は工具ナデ調整がみられる。

【SB4】(第18～33図, 図版2-5～4-5)

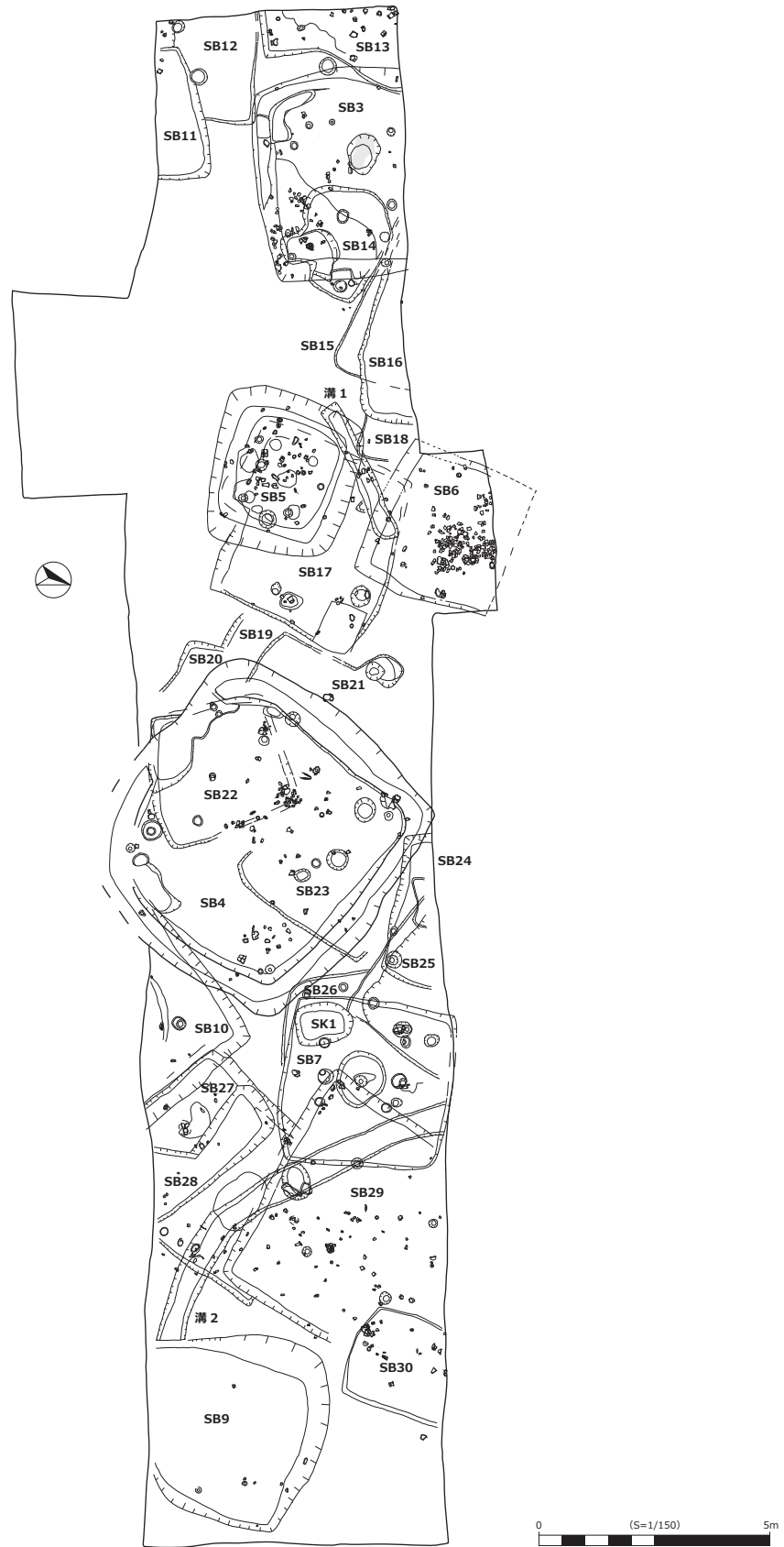
SB4は、主軸を東西にとり、長軸6.7m、短軸6.3mの方形プランを呈する。検出面からの竪穴深さは約51cmを測る。第7層青コラ火山灰層下面は竪穴中央部に向って窪んでおり、竪穴埋没途中の窪地の段階で、青コラ火山灰が降下したものとみられる。

竪穴は二段掘りであり、中段に造り出された平坦面は幅20cm～30cm程度であり、これがほぼ一周造り出されている。ただ、南面の一部でこの平坦面がなく、一段掘りとなる。一段掘りの部分では、竪穴下端の床面に溝状の落ち込みが設けられている。

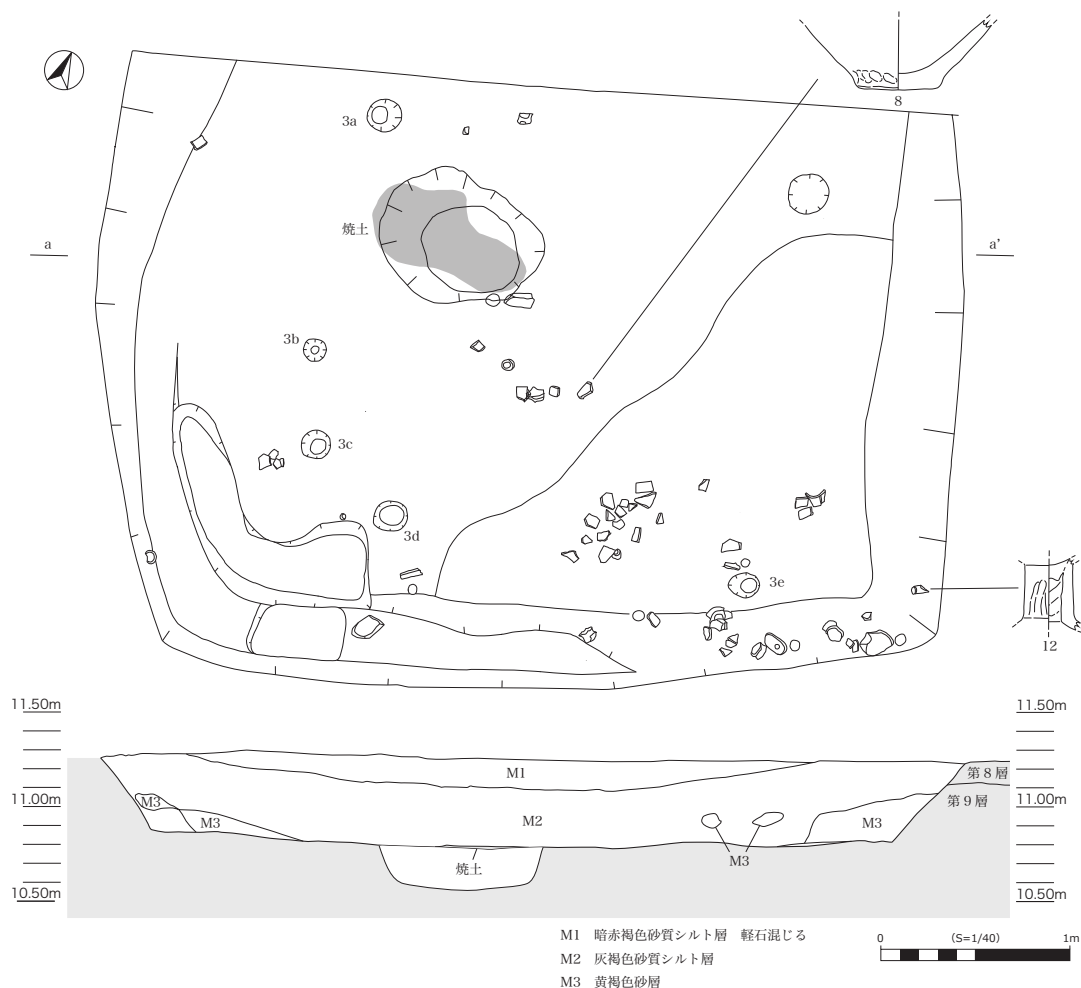
付帯遺構として、床面にピット9基、カーボンが広がる範囲1基、東面の竪穴下端に接する土坑と南面の竪穴下端に接する土坑の2基が検出された。ピットは便宜上4aから4iとした。ピット4aは長軸19cm、短軸18cmの円形であり、深さ63cmある。ピット4bは直径20cmの略円形で、深さ21cmである。ピット4cは直径22cm、短軸の略円形であり、深さ40cmである。ピット4dは直径20cmの略円形である。ピット4eは長軸44cm、短軸42cmの略円形であり、深さ19cmの二段掘りである。底部中央に長軸、短軸、深さ4cmの円形ピットを設ける。ピット4fは直径22cmの略円形で、深さ29cmである。ピット4gは直径22cm、深さ41cmの略円形である。ピット4hとピット4iは南面土坑内に隣接して設けられている。ピット4hは長軸14cm、短軸13cm、深さ12cmである。ピット4iは長軸16cm、短軸14cm、深さ52cmである。

カーボンが広がる範囲は床面中央で検出された。長軸82cm、短軸70cmである。

南面の一段掘り部分の竪穴下端で検出された溝状の遺構は、長さ2.6m、最大幅68cm、最小幅



第15図 VI区遺構配置図



第16図 SB3平面図・断面図

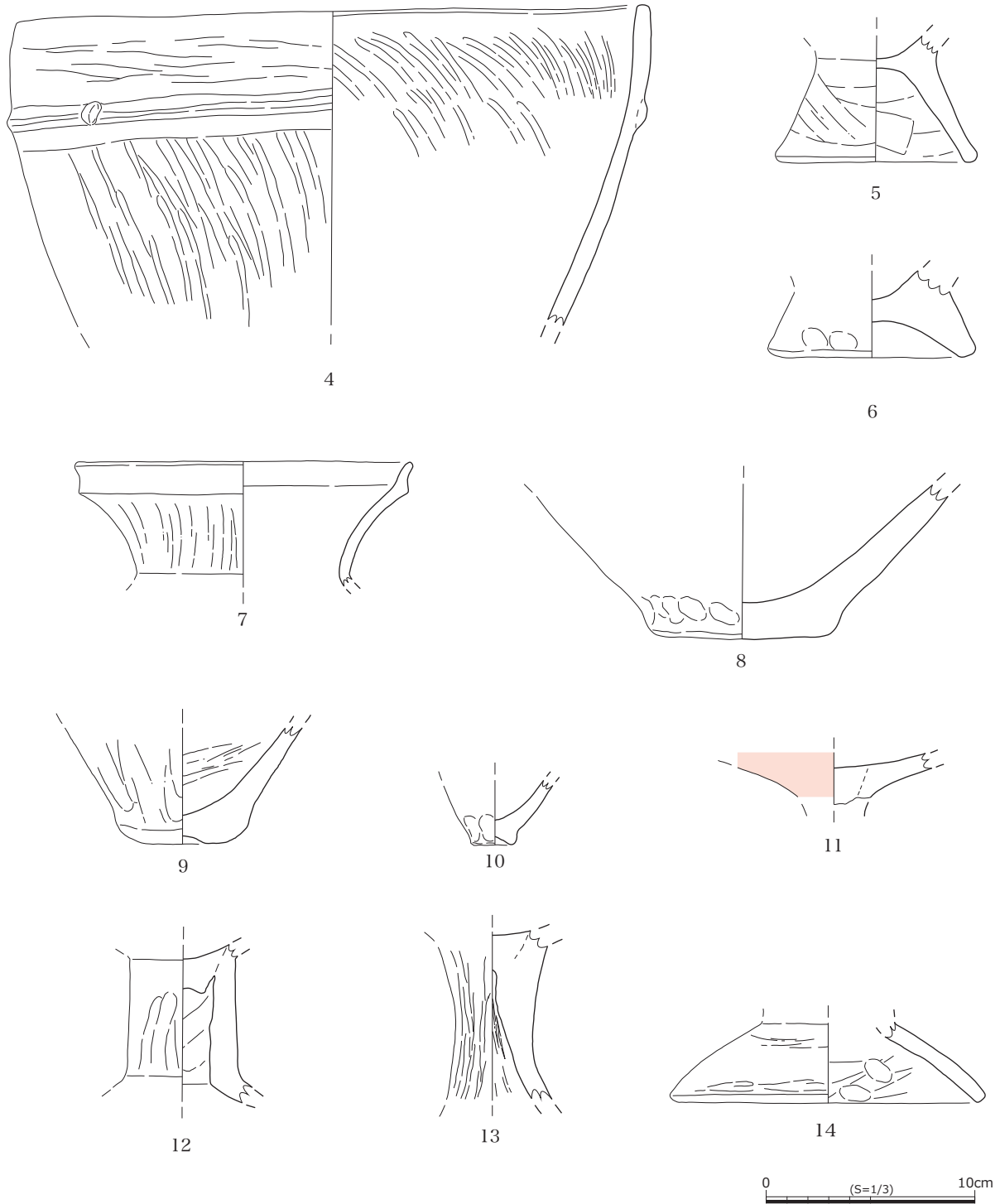
が26cm、深さ4cm～13cmとなる。底面はほぼ平坦である。平面形状は凹凸を成しており、土坑3基の切り合いにもみえる。東面の竪穴下端の土坑は、長軸1.3m、短軸0.6m、深さ9cm程度で長楕円形を呈する。ピット4eと切り合う。

〈SB4出土遺物〉

出土遺物総点数は4,895点である。

15から42は甕である。15は胴部から口縁部にかけてバケツ状に大きく開く形態を呈し、口唇部は上方に面をもつ。口径が復元径26.6cm、器部高が20.5cm、底径が4.9cmを測る。口縁下部には断面台形状の突帯が貼り付けられる。突帯が接合する部分は接合せず、突帯接合部分を正面にした場合、左側が上方へのびる形態である。脚部は直線的に開く形で、脚部内面はドーム状である。外面はミガキ調整で、突帯より上方が横方向のミガキ調整、胴部から脚部が縦方向のミガキ調整である。突帯より上方のミガキについては突帯部分を切る形でミガキがみられるため、突帯貼付け後の調整であったと判断できる。内面は摩滅しているため判然としないが、工具ナデによる調整である。

16は内湾する口縁部をもつ甕である。胴部欠損している。口径が復元径21.4cm、器高24.1cm、最大径は突帯上部にあり、復元径22.2cm、底径は4.8cm、脚部径7.0cm、脚部高2.0cm



第17図 SB3 出土遺物

である。口唇部は少し丸みをおびる。脚部はハの字に開き、接地する部分に平坦面をもつ。内外面ともミガキ調整が主体で、突帯より上部が斜め方向のミガキ調整、同部が縦方向、内面は横方向のミガキである。胴下部から脚部にかけてはナデ、指頭圧痕がみられる。

17は口縁部が内湾する甕で、口唇部はコの字である。口径が復元径で30.8cm、最大径は突帯上部にあり、復元径で32.2cmを測る。口縁部は指頭圧痕によって歪んでいる。突帯は断面台形を呈する。内外面ともミガキ調整が主体で、突帯より上部は横方向の粗いミガキ調整、胴部は斜め方

向のミガキ調整。内面は横方向のミガキ調整で、ミガキの単位が外面よりもやや細い。

18 は口縁部が内湾する形態の甕で、口唇部はコの字である。口径 35.7cm, 最大径は突帯部分で 38.0cm を測る。口縁部は歪みがみられ、口唇部はコの字に仕上げられる。口縁部には一条の絡縄突帯が貼り付けられるが、接合しない。この突帯は、不接合部分を正面にした場合、左側が上方へのびる形態で、端部には明瞭な指頭圧痕がみられる。器面調整は内外面ともミガキ調整である。外面は突帯の上部、下部が横方向のミガキ調整、胴部が縦方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整である。外面にはススの付着がみられる。

19 は口縁部がバケツ形に広がる甕である。口径は復元径で 31.6cm を測る。口縁部は先細る形で口唇部は丸く収められる。突帯は断面三角形を呈し、貼付け後はヨコナデで仕上げられる。器面調整は主にミガキ調整である。外面は突帯上部が横方向のミガキ、胴部は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキ調整で胴下部は横方向のナデ調整がみられる。外面はススの付着がみられる。

20 は胴部から口縁部まで直線的にのびる形態の甕である。口唇部はやや丸みをおびる。口径は 24.1cm を測る。口縁部下には断面三角形の突帯が貼り付けられる。外面の器面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴部は工具ナデである。内面は口縁部周辺がナデ調整、胴下部はミガキ調整である。外面には帯状のススが付着する。

21 は口縁部が内湾する甕である。口唇部はコの字状で、やや歪む。口径は復元径で 26.2cm を測る。口縁部下には一条の絡縄突帯が貼り付けられ、貼り付け時の成形によって、突帯貼り付け部の器面は歪む。器面調整はミガキ調整で、外面は突帯上部が横方向のミガキ、胴部が縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキのち、斜め方向のミガキである。外面にはススの付着がみられる。

22 は口縁部が内湾する甕である。口唇部は丸みをおびる。口径は復元径で 27.0cm, 最大径は口縁部下にあり、復元径で 27.6cm を測る。口縁部下には一条の絡縄突帯がめぐり、歪みが大きい。器面調整は外面はナデ調整、内面は斜め方向のミガキ調整である。外面にはススが付着する。

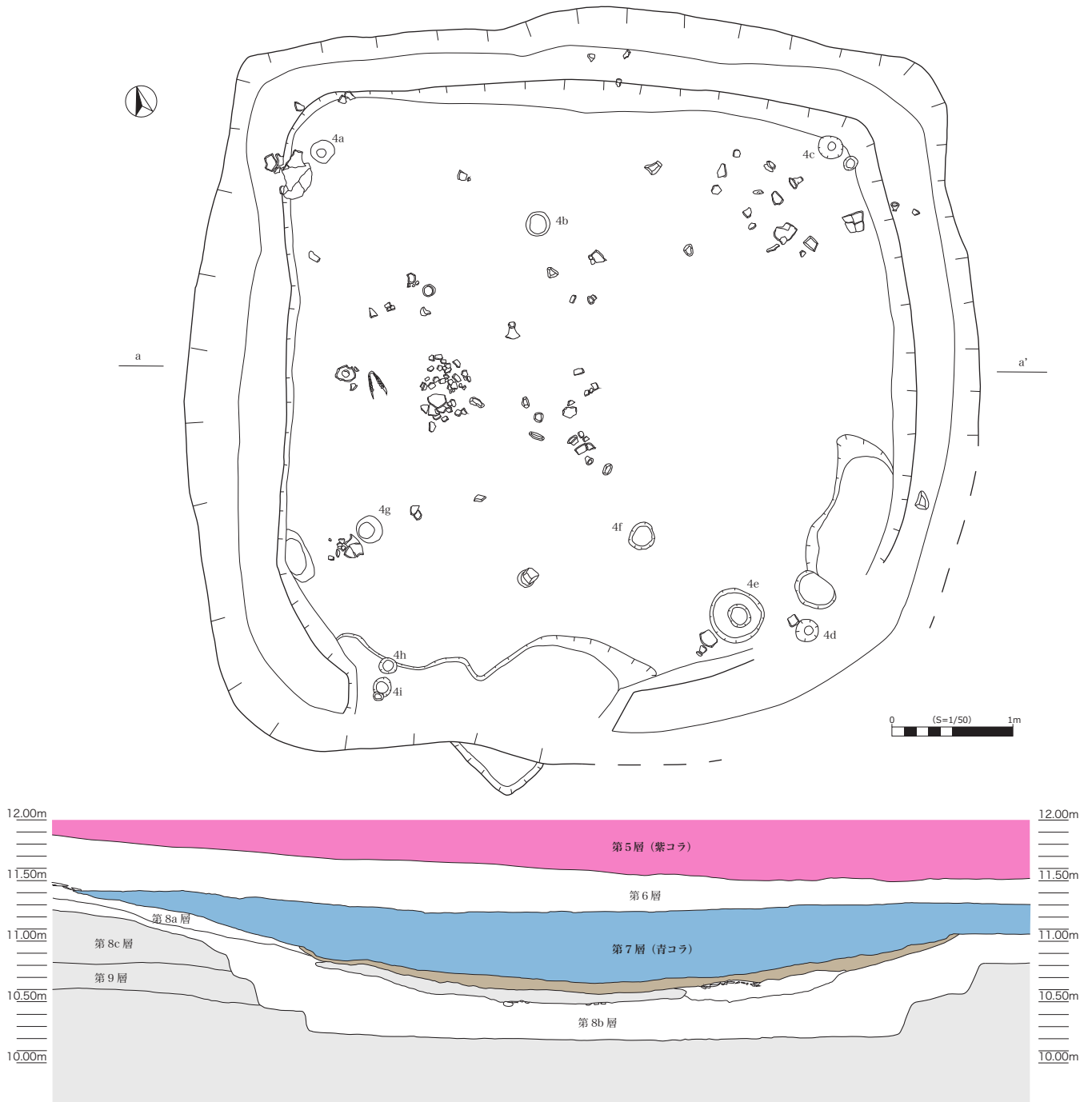
23 は胴部から口縁部にかけて直線的に開く形態の甕である。口唇部は丸く、口縁部周辺は指押えによる成形で歪んでいる。口径は復元径 29cm を測る。口縁部下には一条の断面台形の突帯が貼り付けられる。外面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴部が縦方向のミガキ調整である。内面はナデ調整である。外面にはススが付着する。

24 は口縁部が直線的に開く形態の甕で、口唇部は丸い。口径は復元径で 25.0cm を測る。口縁部には一条の断面台形突帯が貼り付けられる。器面調整は外面が斜め方向のミガキ調整、内面はナデ調整である。

25 は口縁部が内湾する甕である。口縁部はやや肥厚し、口唇部は丸くおさめる。口径は復元径 25.9cm を測る。口縁部下には一条の断面台形突帯が施され、歪みが大きい。外面は突帯上部が横方向のミガキ調整、突帯下部が縦方向のミガキ調整である。内面は、外面より幅の広い単位の横方向のミガキ調整がみられる。外面にはススの付着がみられる。

26 は口縁部が内湾する甕で、口唇部。口径は復元径 30.2cm を測る。口縁部下には一条の突帯が貼り付けられるが、突出は少ない。外面は斜め方向のミガキ調整で、突帯貼付け後の調整のため、突帯にもミガキ調整がみられる。内面は横方向のミガキ調整である。外面にはススの付着がみられる。

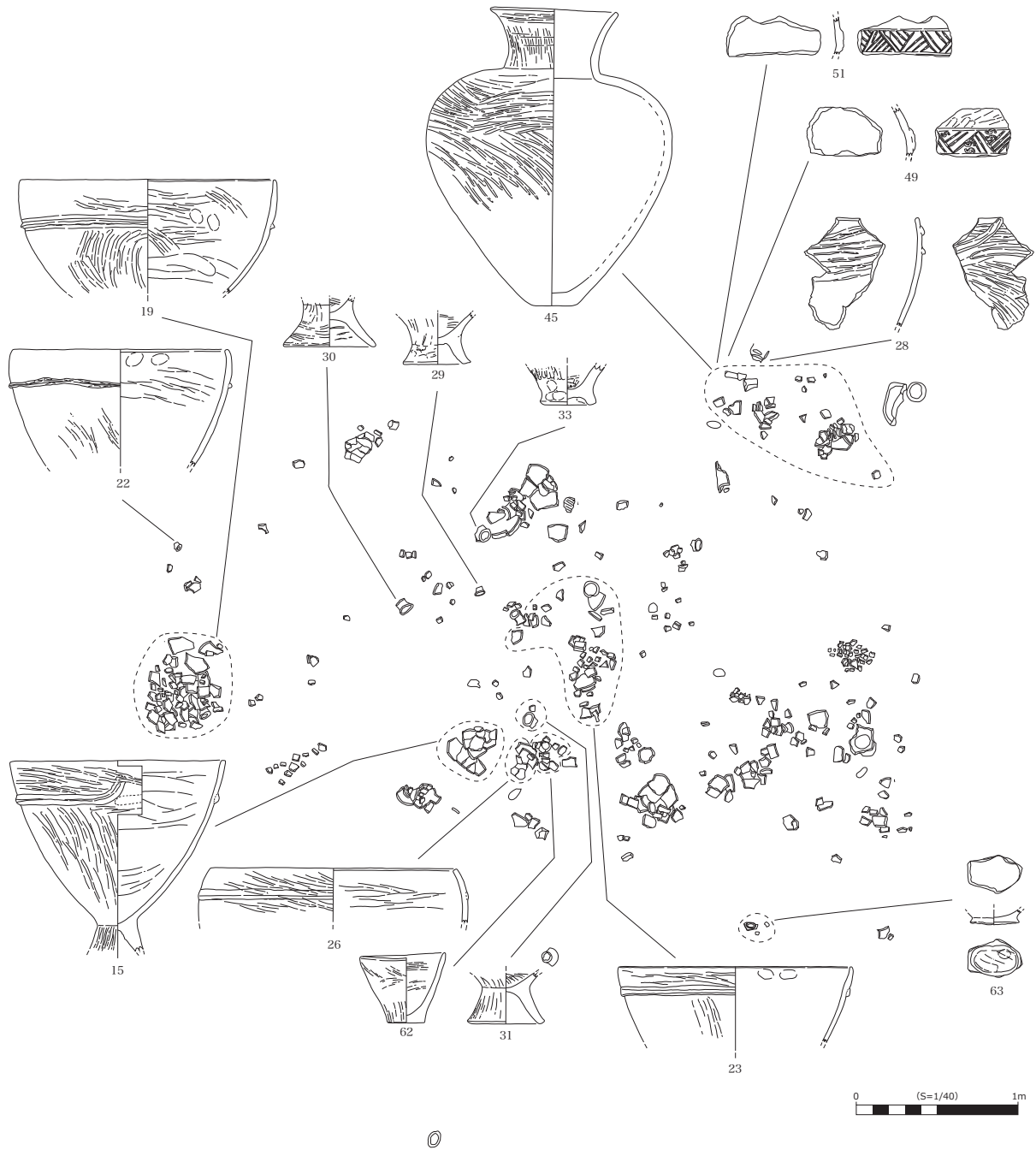
27 は口縁部が内湾する甕で、口唇部は上方に面をもつ。口縁部下には一条の絡縄突帯が貼り付けられ、口縁部はやや肥厚する。器面調整は突帯上部で横方向のミガキ調整、胴部は縦方向のミガキ調整で、内面は工具ナデが施される。



第18図 SB4 平面図・断面図

28は口縁部が内湾する甕で、口唇部は丸い。外面には一条の断面台形突帯が貼り付けられるが、接合しない。不接合部分を正面にすると、左側の突帯が口唇部までのび、突帯貼付け後はヨコナデで仕上げられる。外面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴部が斜め方向のミガキ調整である。内面は斜め方向のミガキ調整である。

29は、甕の脚部から胴下部で、脚部径が復元径8.1cm、底部径6.1cm、脚部高2.5cmを測る。脚部はハの字に開き、脚部内上部は平坦である。外面は、脚接合部から上部にかけて工具ナデ、脚



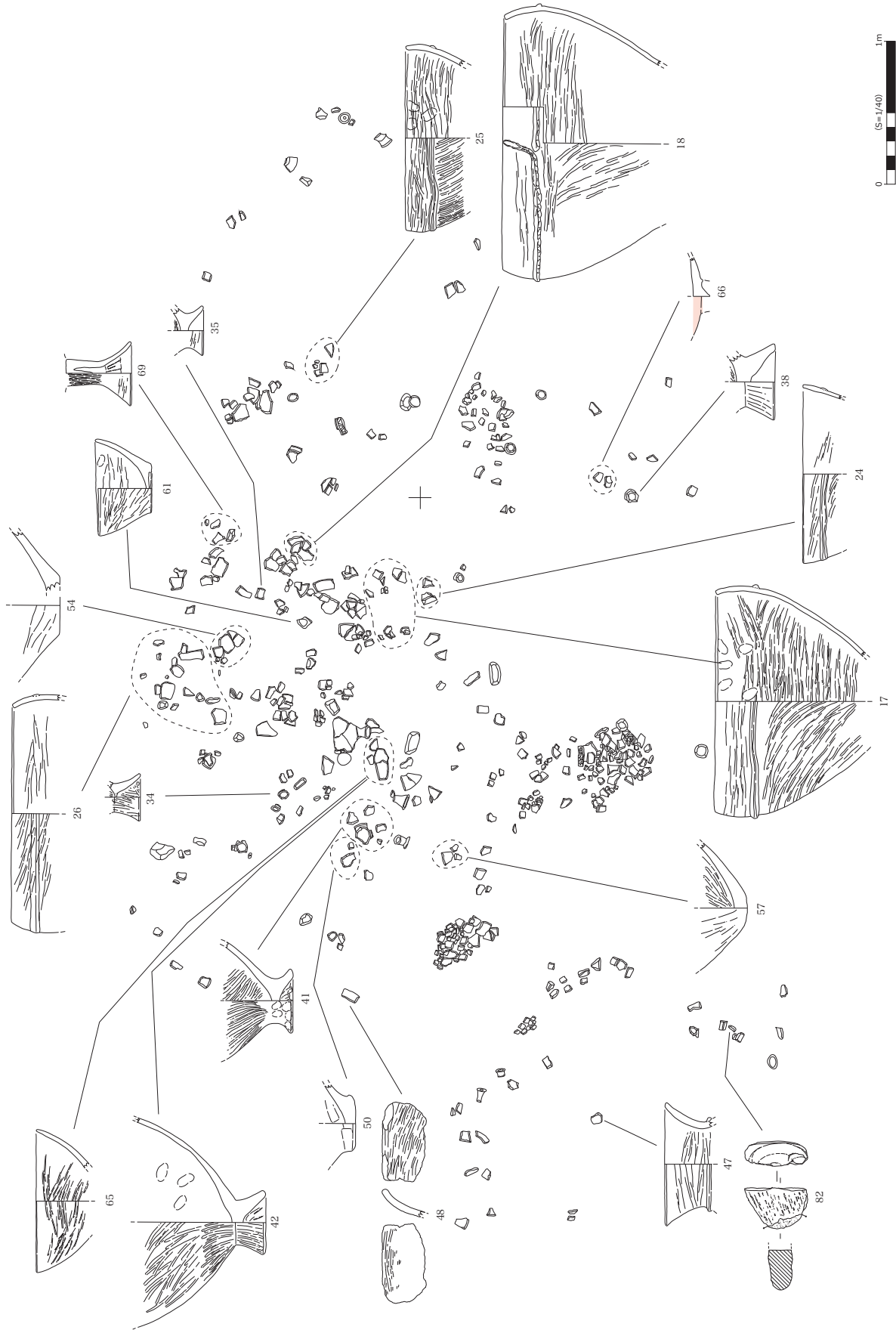
第19図 SB4 遺物出土状況1

部は指頭圧痕が残る。内面は主にナデ調整である。

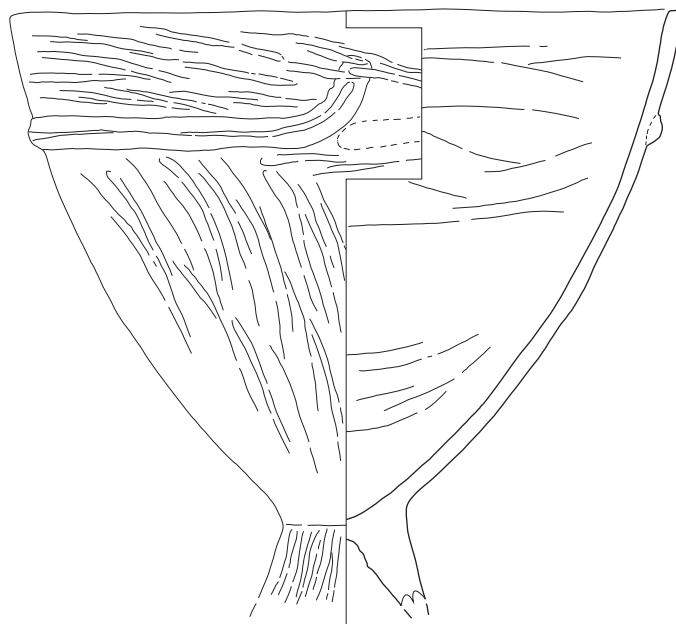
30は甕の脚部から胴下部である。脚部径は復元径10.9cm、底径6.1cmを測る。脚部は直線的に開き、脚端部は丸い。脚天井部は丸みをおびるドーム形を呈する。脚接合部は縦方向の工具ナデ、脚部は横方向のミガキ、内面は工具ナデで仕上げられる。

31は甕の脚部である。脚部径は8.5cm、底径5.5cm、脚部高3.8cmを測る。脚部は直線的に開き、脚端部は丸みをおびる。脚天井部は平坦面をもつ。脚部の調整は工具ナデである。

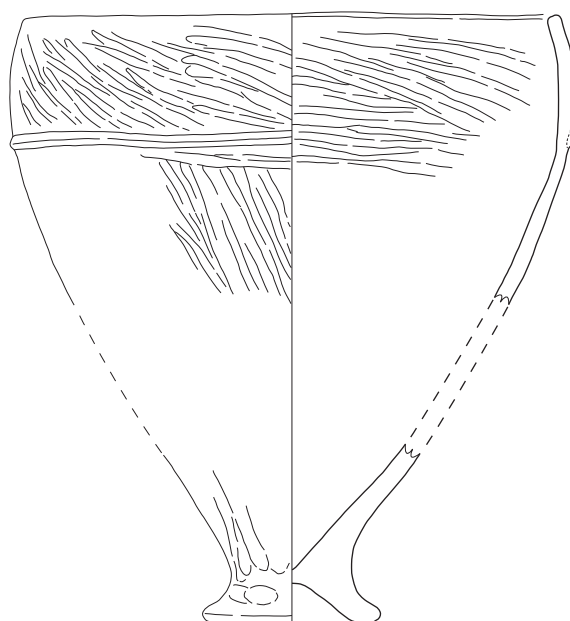
32は甕の脚部である。脚部径6.8cm、底径4.7cm、脚部高2.5cmを測る。脚部はハの字に開く。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。



第20図 SB4 遺物出土状況2



15



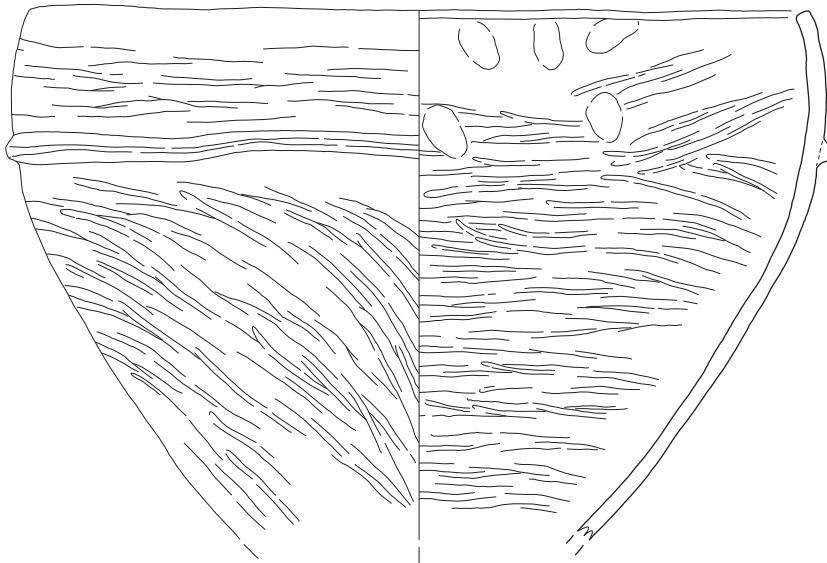
16

第21図 SB4 出土遺物 1

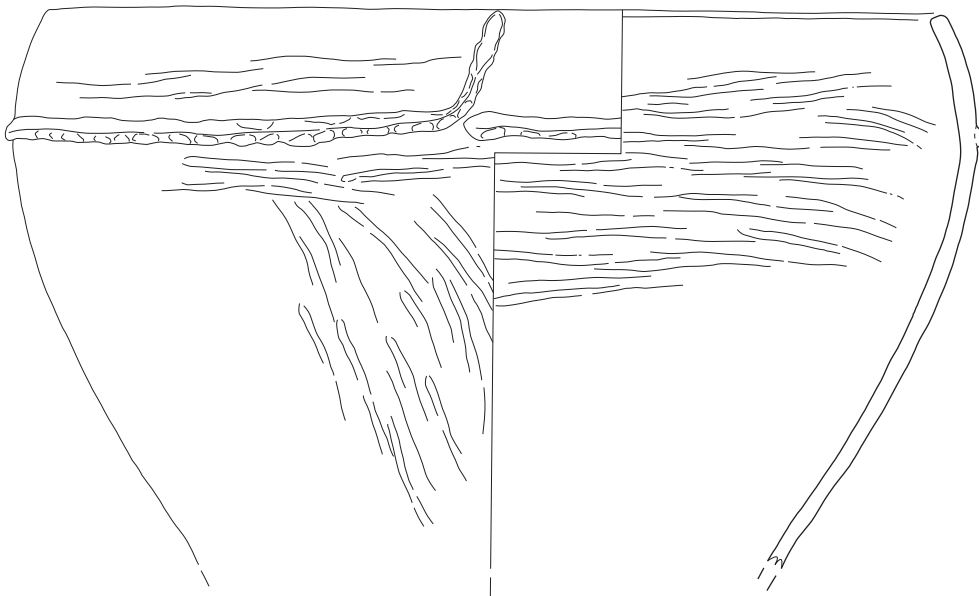
33 は甕の脚部と胴下部である。脚部径 6.9cm, 底径 6.1cm, 脚部高 1.3cm を測る。脚部はやや低く、踏ん張る形を呈する。外面は胴下部ミガキ調整, 脚部は指頭圧痕が残り, 内底面はミガキ調整である。

34 は甕の脚部である。脚部径 6.3cm, 底径 4.0cm, 脚部高 3.6cm を測る。脚部はハの字に開き, 脚端部は丸い。内外面ともミガキ調整である。外面にはススが付着する。

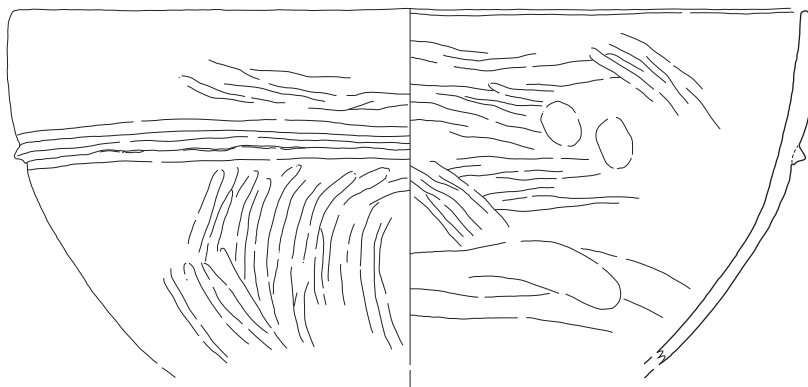
35 は甕の脚部である。脚部径は復元径 6.9cm, 底径は復元径 4.8cm, 脚部高は 2.4cm を測る。



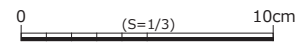
17



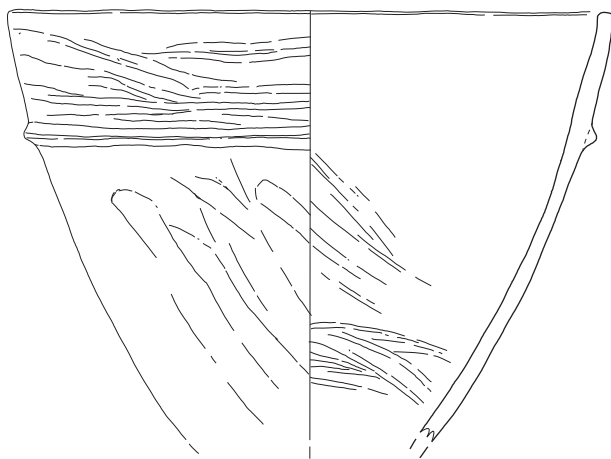
18



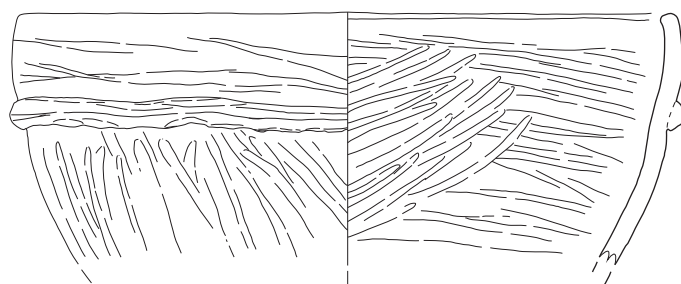
19



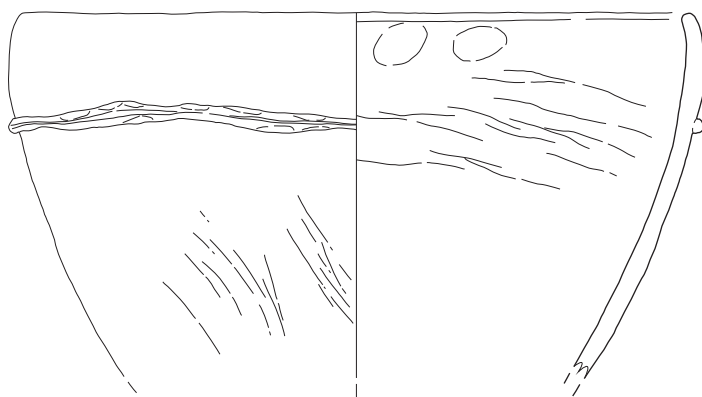
第22図 SB4 出土遺物 2



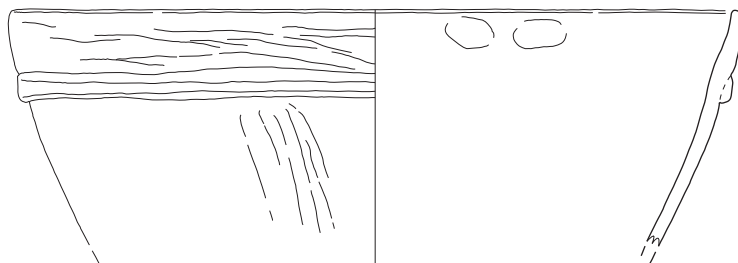
20



21



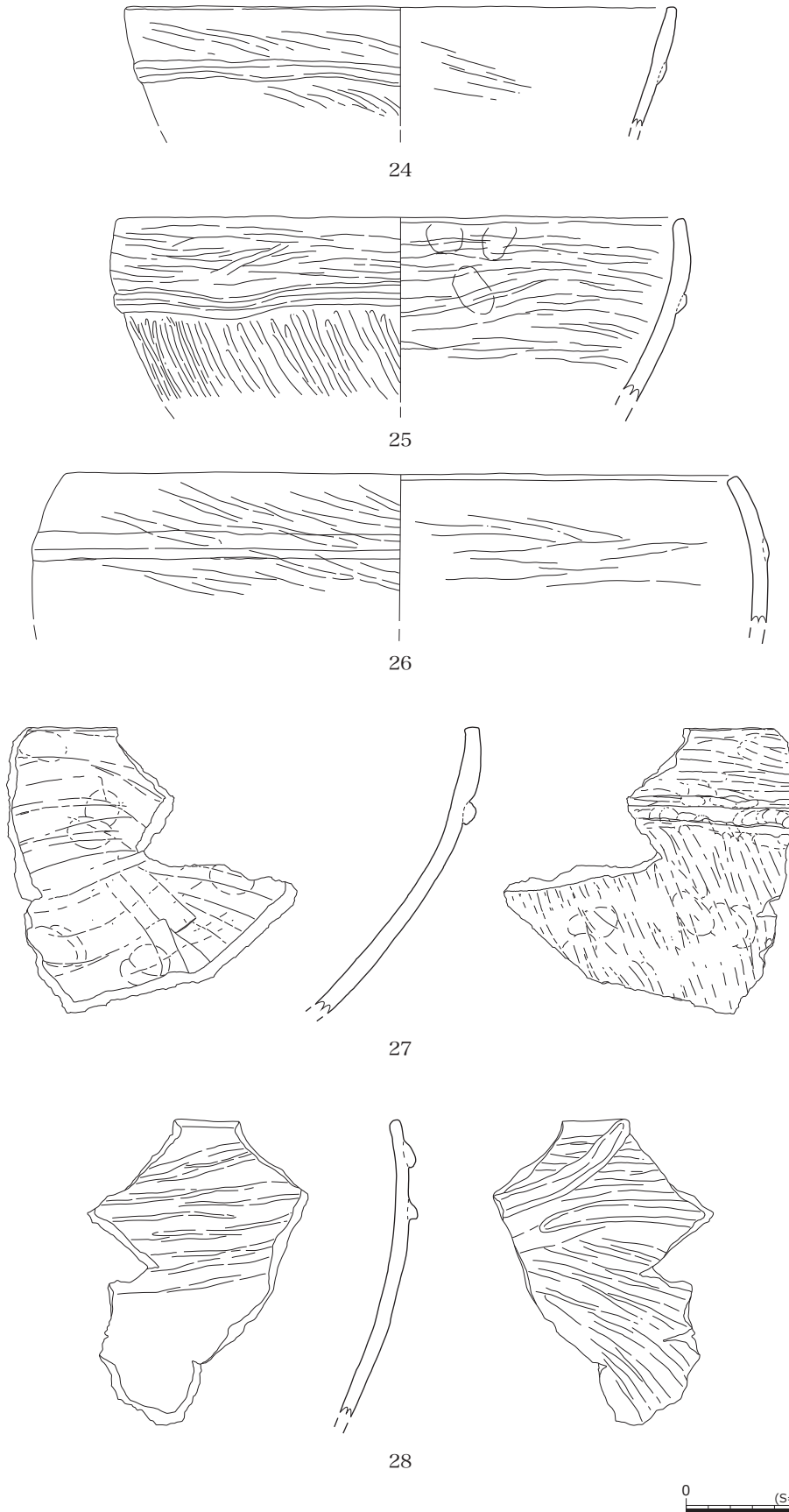
22



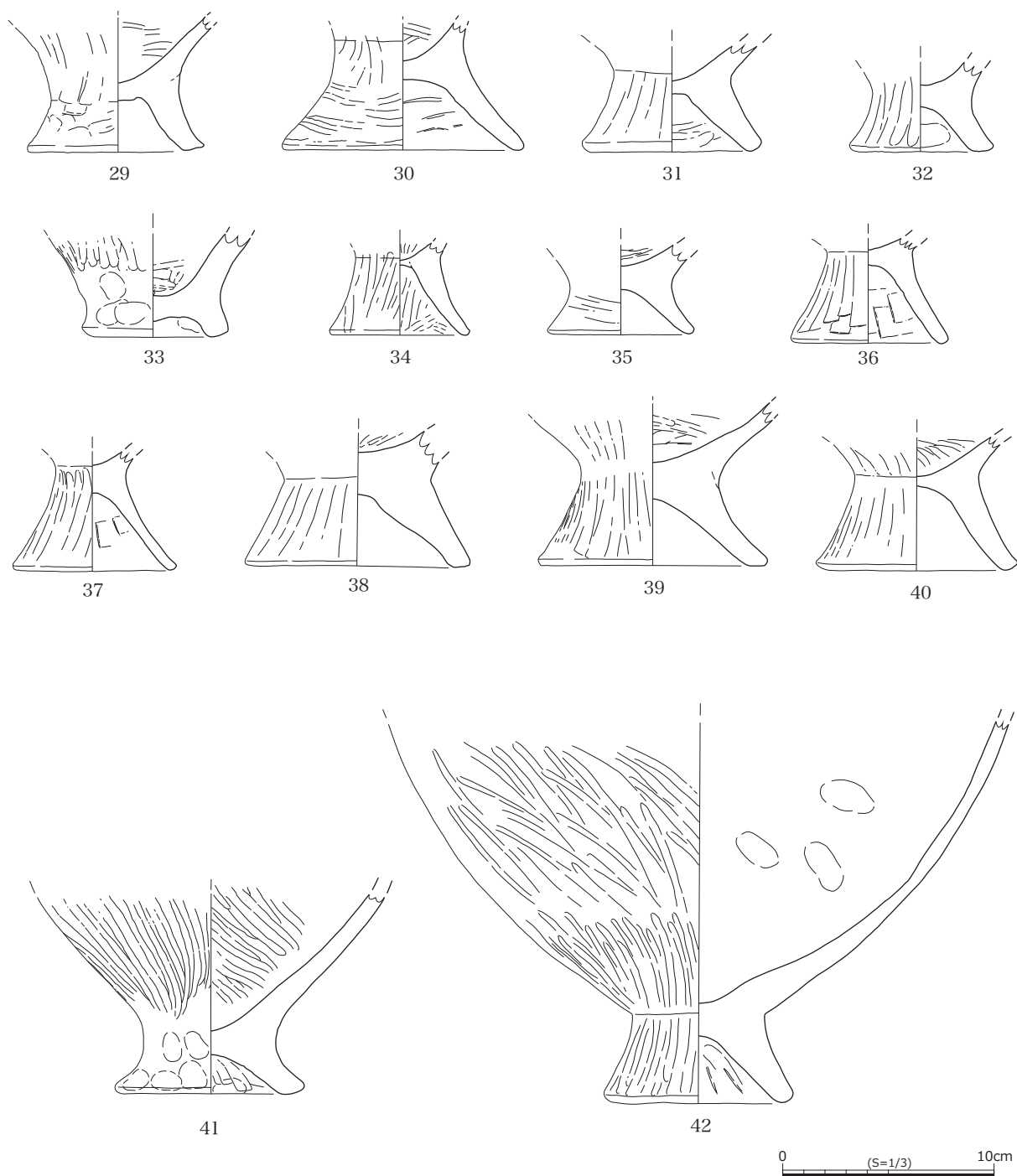
23

0 (S=1/3) 10cm

第23図 SB4 出土遺物 3



第24図 SB4 出土遺物 4



第25図 SB4 出土遺物 5

脚部はハの字に開き、脚端部は丸い。内外面ともナデ調整が主である。

36は甕の脚部である。脚部径7.4cm、底径4.0cm、脚部高4.3cmを測る。脚部は直線的に開き、脚天井部はドーム形である。内外面とも工具ナデが残る。

37は甕の脚部である。脚部径7.7cm、底径3.3cm、脚部高5.0cmを測る。脚部は直線的に開き、脚端部は丸く、器壁はやや薄い。外面はミガキ調整、内面は工具ナデがみられる。脚天井部はドーム形を呈する。

38は甕の脚部である。脚部径は復元径10.7cm、底径は復元径6.9cm、脚部高4.2cmを測る。

脚部は直線的に開く形態である。脚端部は接地部分に面をもつ。脚天井部はドーム状だが、歪みがみられる。外面は工具ナデ、内面はミガキ調整がみられる。

39は甕の脚部から胴下部である。脚部径は復元径10.5cm、底径6.8cm、脚部高3.9cmを測る。脚部はハの字に開き、脚端部の接地部分には面をもつ。脚天井部はドーム形を呈する。脚部外面は工具ナデ、内底面はミガキ調整である。

40は甕の脚部から胴下部である。脚部径は復元径9.5cm、底径は復元径9.5cm、脚部高4.6cmを測る。脚部はハの字に開き、脚天井部はドーム形を呈する。脚部外面は工具ナデ、脚部内面はナデ、内底面はミガキ調整である。

41は甕の脚部から胴下部である。脚部はハの字に開く形態を呈する。脚部径は復元径8.3cm、脚部高2.5cm、底径は復元径6.0cmを測る。脚天井部はドーム状である。内外面ともミガキ調整が施され、外面には胴下部にススの付着がみられる。

42は甕の脚部から胴下部である。脚部径は復元径8.9cm、底径は復元径6.2cm、脚部高は4.3cmを測る。脚部は直線的に開き、脚端部は丸みをおびる。胴下部は丸みを持ちながら立ち上がり、外面にはタテ方向のミガキ調整がみられる。脚部の外面調整はタテ方向のミガキ調整で、内面調整は工具ナデである。

43は大型壺の胴部から底部である。胴部には幅3.5cmの幅広突帯がめぐり、突帯には4条の鋸歯状の刻目がみられる。施文具の原体は確認できない。胴部最大径は復元径で42.4cmを測る。肩部外面は横方向のミガキ調整、胴部外面はナデ調整で仕上げられる。内面は剥落が著しく、調整不明である。

44は大型壺の肩部である。胴部最大径は復元径42.4cmを測り、肩部下には幅3.5cm、厚さ0.9cmの幅広突帯が貼り付けられる。突帯内部には四条ずつの刻目が鋸歯状に刻まれる。刻目原体は木製工具によるものである。外面は横方向のミガキ調整、内面は剥落しているため調整不明である。

45は中型の壺で、一部欠損しているがほぼ完形である。口径15.8cm、頸部径12.0cm、頸部高7.5cmを測る。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口唇部はコの字状である。胴部最大径は肩部にあり、30.5cmを測る。底径は5.5cmで平底である。口縁部外面は横方向のミガキ調整とタテ方向のナデ調整がみられ、肩部は横方向のミガキ調整、胴部は斜め方向のミガキである。内面は剥落しているため調整不明である。

46は短頸壺である。口径12.3cm、頸部径12.7cm、肩部径35.1cmを測る。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がり、口唇部は丸い。肩部が大きく張る形態を呈し、胴部形は欠損しているため不明だが、球胴形を呈すると考えられる。内外面ともミガキ調整が見られる。

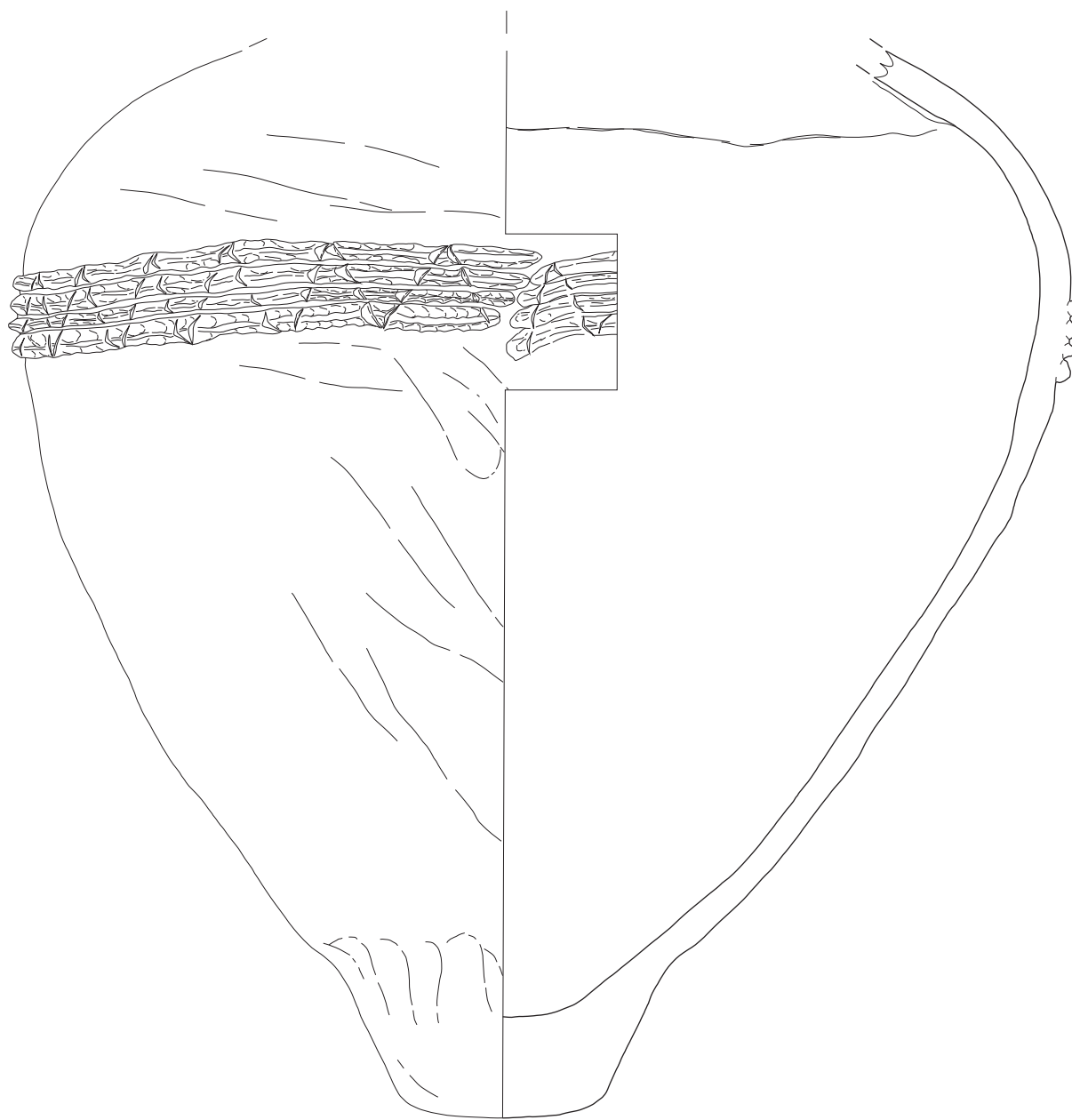
47は壺の頸部から口縁部である。口縁部は外反し、口唇部は上方に面をもつ。口径は復元径17.2cm、頸部径は13.1cmを測る。頸部には一条の貼付け突帯をもつ。内外面ともミガキ調整がみられる。

48は壺の口縁部である。外反しながら開き、口唇部は丸い。内外面ともミガキ調整である。

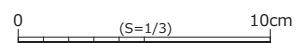
49は壺の幅広突帯部分である。幅広突帯の幅は3.5cmで、突帯内には3～4条の鋸歯状の刻目が施されたのち、その間を入れ子状の半裁竹簡文を充填するタイプの施文がみられる。突帯上部外面は工具ナデ調整、内面は剥落しているため不明である。

50は壺の底部で、底面はやや歪む。底径7.9cmを測り、端部からわずかに括れながら立ち上がる。内外面とも工具ナデ調整である。

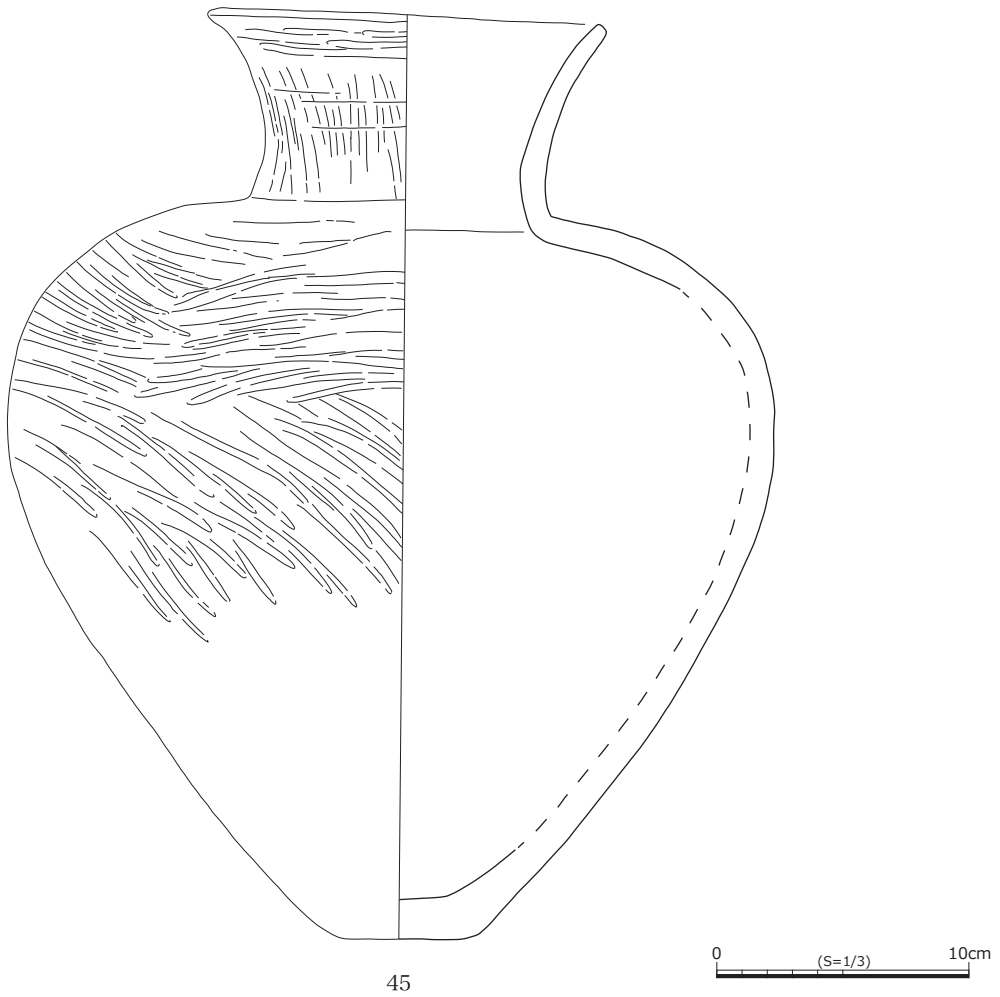
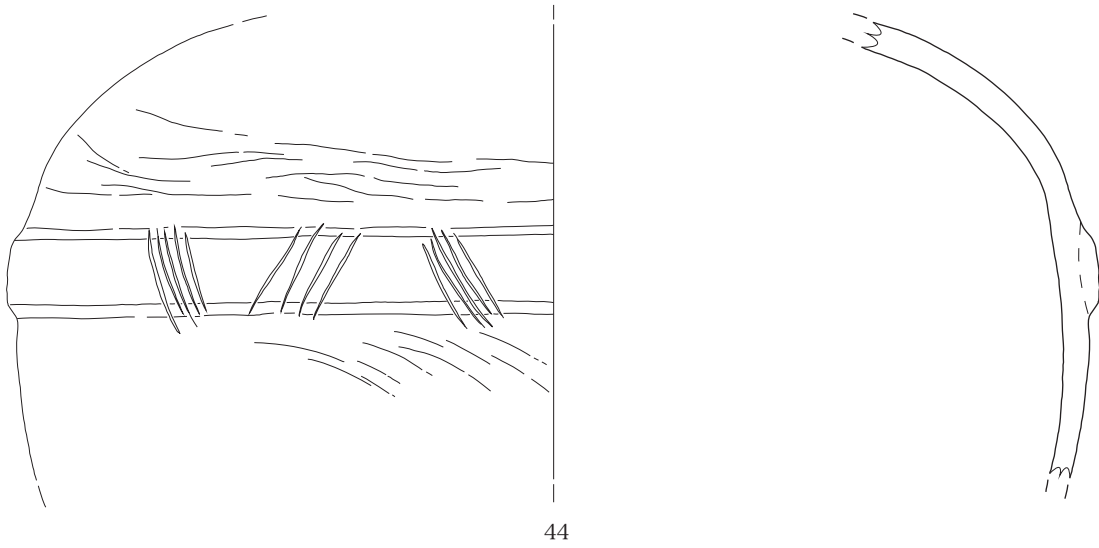
51は幅広突帯の突帯部分である。天地については不明瞭である。突帯の幅は3.1cmで突帯内部



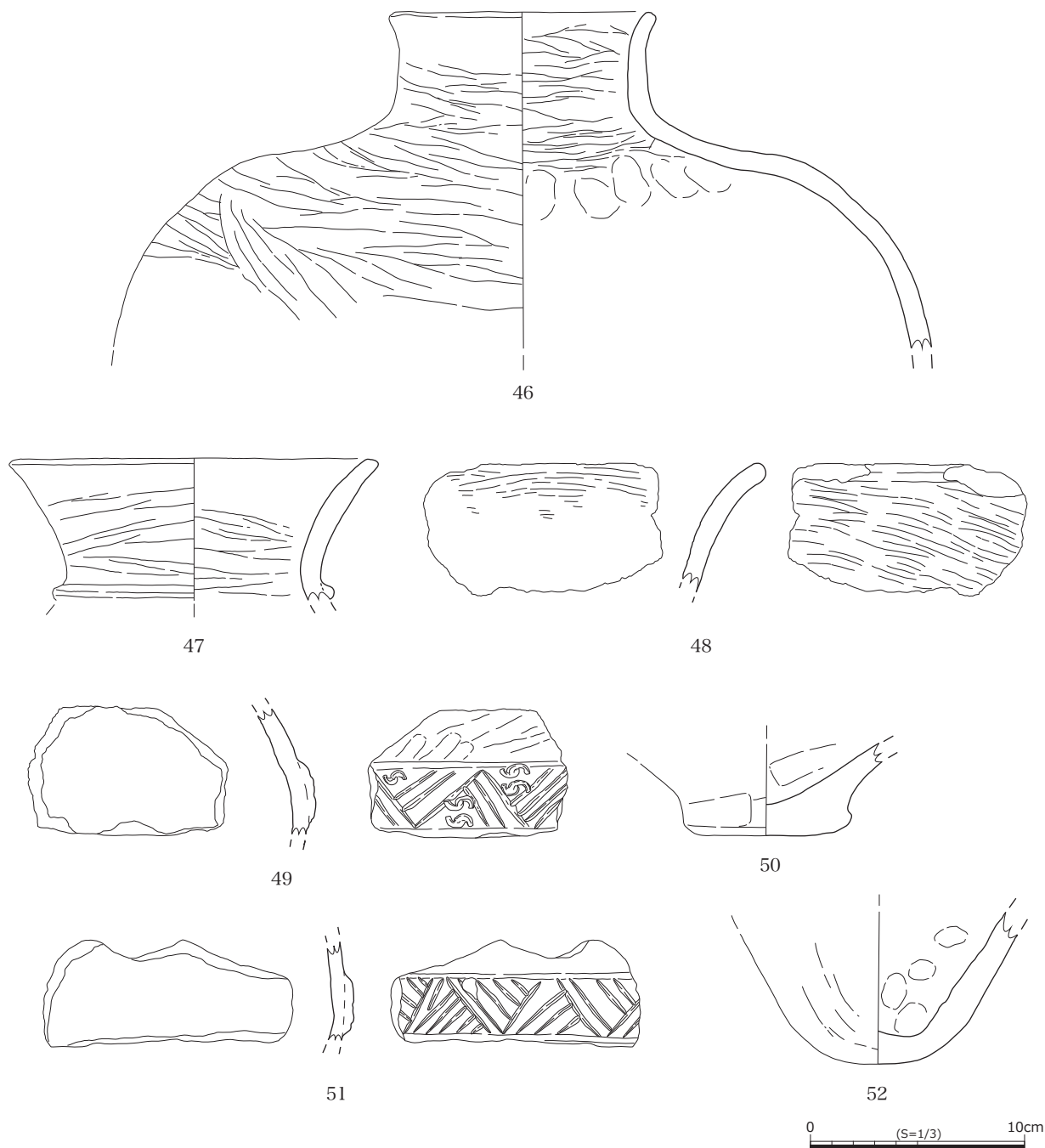
43



第26図 SB4 出土遺物 6



第27図 SB4 出土遺物7



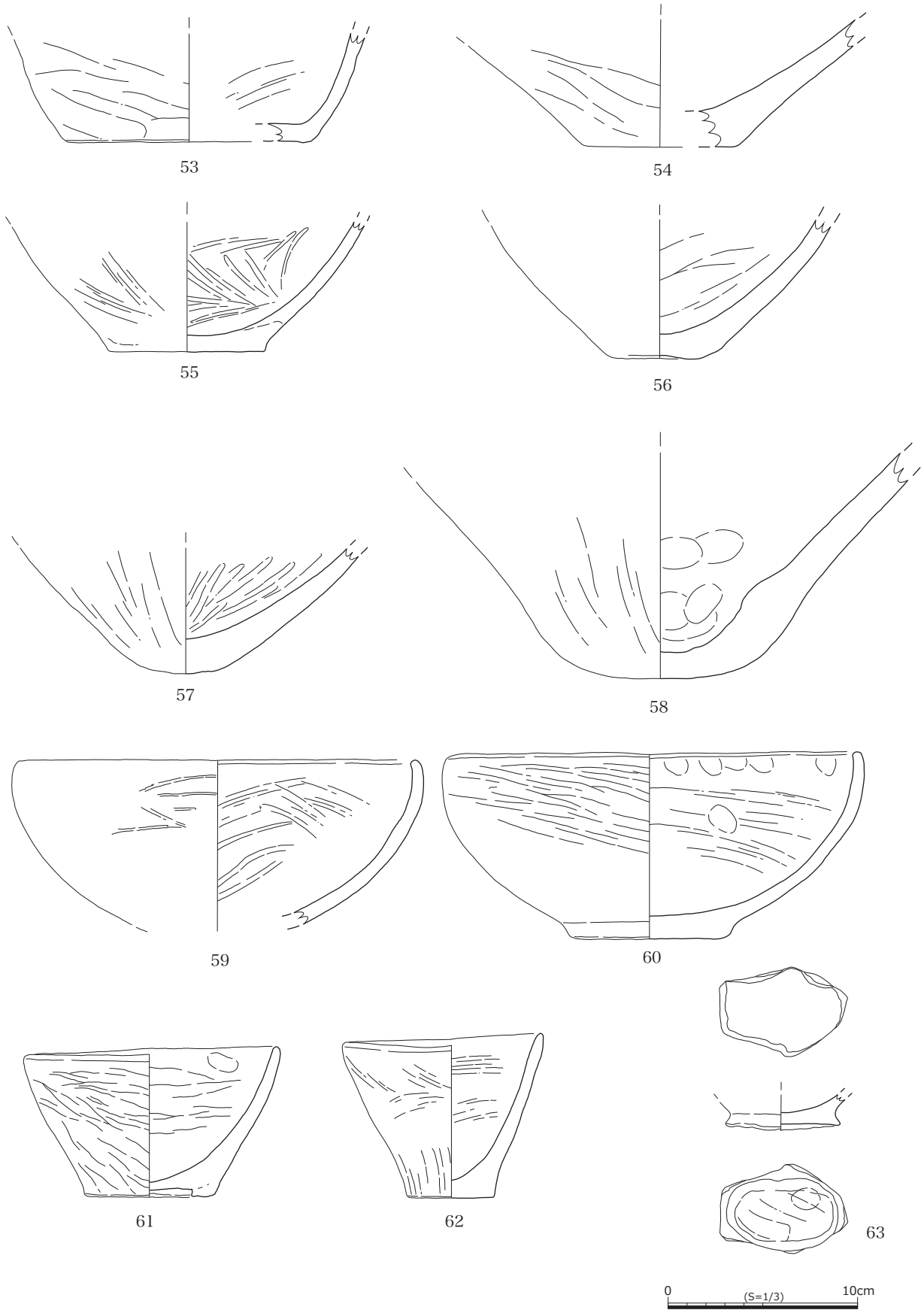
第28図 SB4 出土遺物 8

には鋸歯状の施文が隙間なく充填される。施文の単位は4～6条である。外面はナデ調整，内面は剥落しているため不明である。

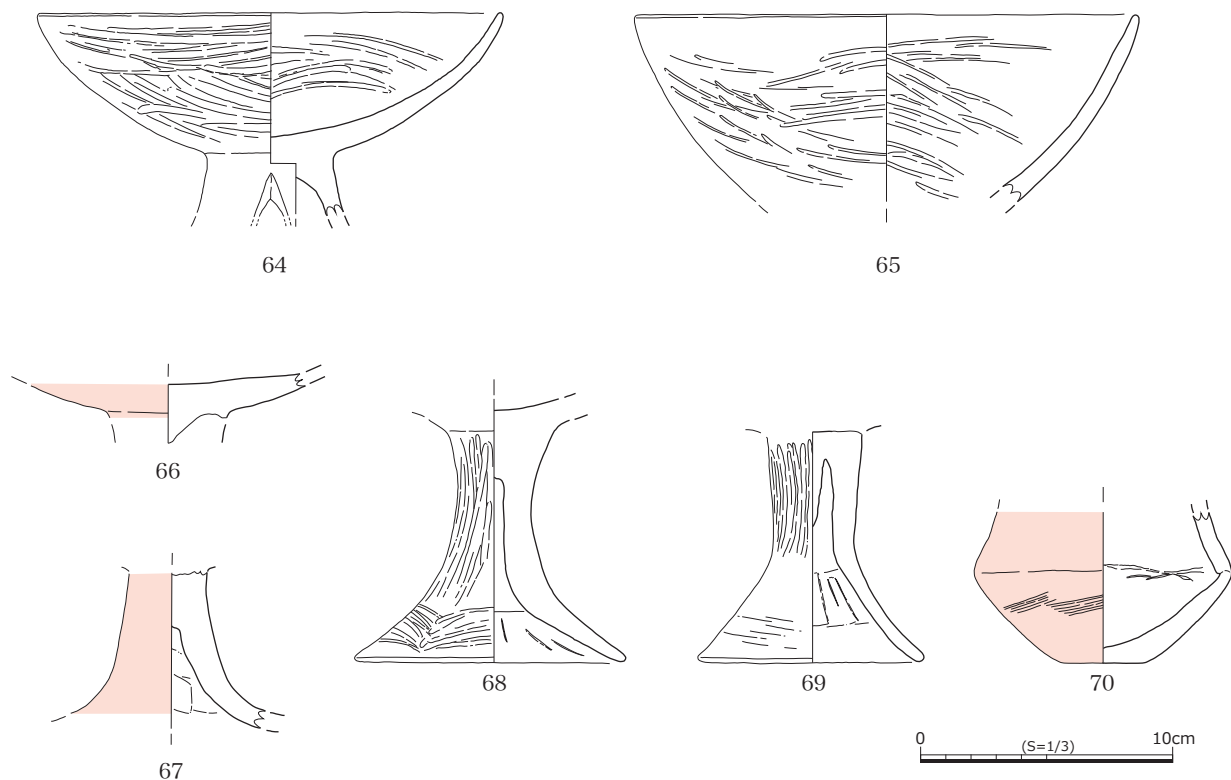
52は壺の底部である。底部形態は丸底である。内底面中央部はやや膨らみ，内面には指頭圧痕が残る。外面はナデ調整である。

53は壺の底部である。底部形態は平底で，底径は復元径13.0cmを測る。胴部は底部から直線的に立ち上がる。器面調整は内外面ともナデ調整である。

54は壺の底部である。底部形態は平底で，底径は復元径8.2cmを測る。底部から大きく開く形



第29図 SB4 出土遺物9



第30図 SB4 出土遺物 10

態で、端部はやや鋭い。内外面ともナデ調整である。

55は壺の底部で、底部形態は平底である。底径は復元径8.3cmを測る。底部から胴部にかけて膨らみをもちながら立ち上がる。器面調整は外面がナデ調整、内面はミガキ調整である。

56は壺の底部である。底部形態は内底面がわずかに立ち上がる形態で、底径5.0cmを測る。端部は丸みをおびる。内外面ともナデ調整である。

57は壺の底部である。底部形態は丸底を呈する。器面調整は外面がナデ調整、内面はミガキ調整である。

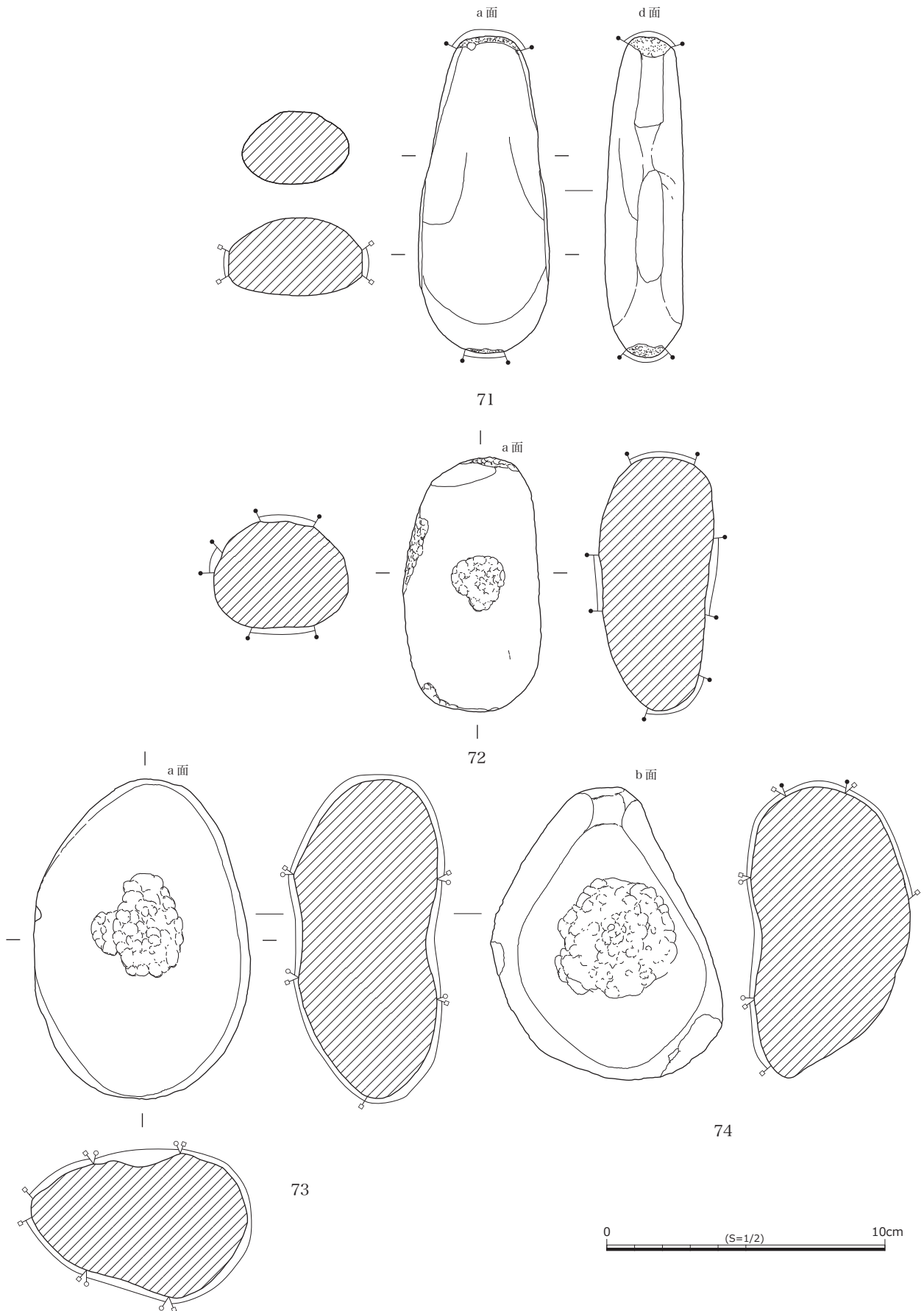
58は壺の底部である。器壁の厚さから大型壺の底部であると考えられる。底部形態は突出する丸底を呈する。内底面は整形による指頭圧痕が明瞭に残る。外面調整はナデ調整である。

59から63は鉢である。59は椀状の鉢で、口縁部が内湾する。口径は復元径21.7cmを測る。底部形態は丸底になると想定される。器面調整は内外面ともミガキ調整である。

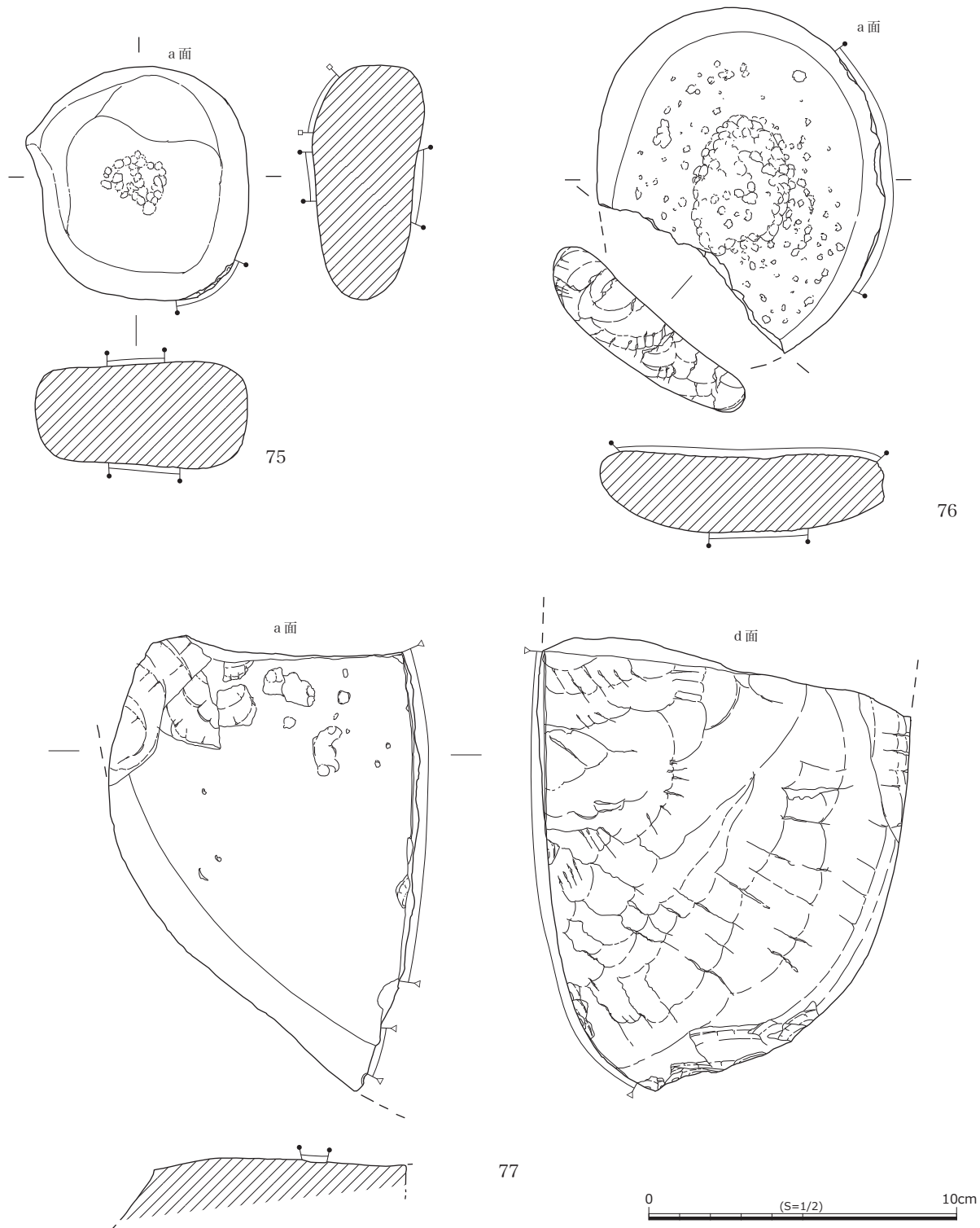
60は平底の鉢である。口縁部は内湾し、胴部は歪みがみられる。口径は22.0cm、器高9.7cm、底径は復元径で8.5cmを測る。底部形態はやや厚みのある底部で、台状を呈する。器面調整は外面ミガキ調整、内面ナデ調整である。口唇部には指頭圧痕が残る。

61は高台が貼り付けられる完形品の鉢である。口径13.5cm、底径6.9cm、高台径6.9cm、高台高0.4cmを測る。椀状の器形を呈し、口唇部は丸い。高台の接地面には歪みがあり、内部にわずかに突出部をもつ。外面調整は斜め方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整がみられる。

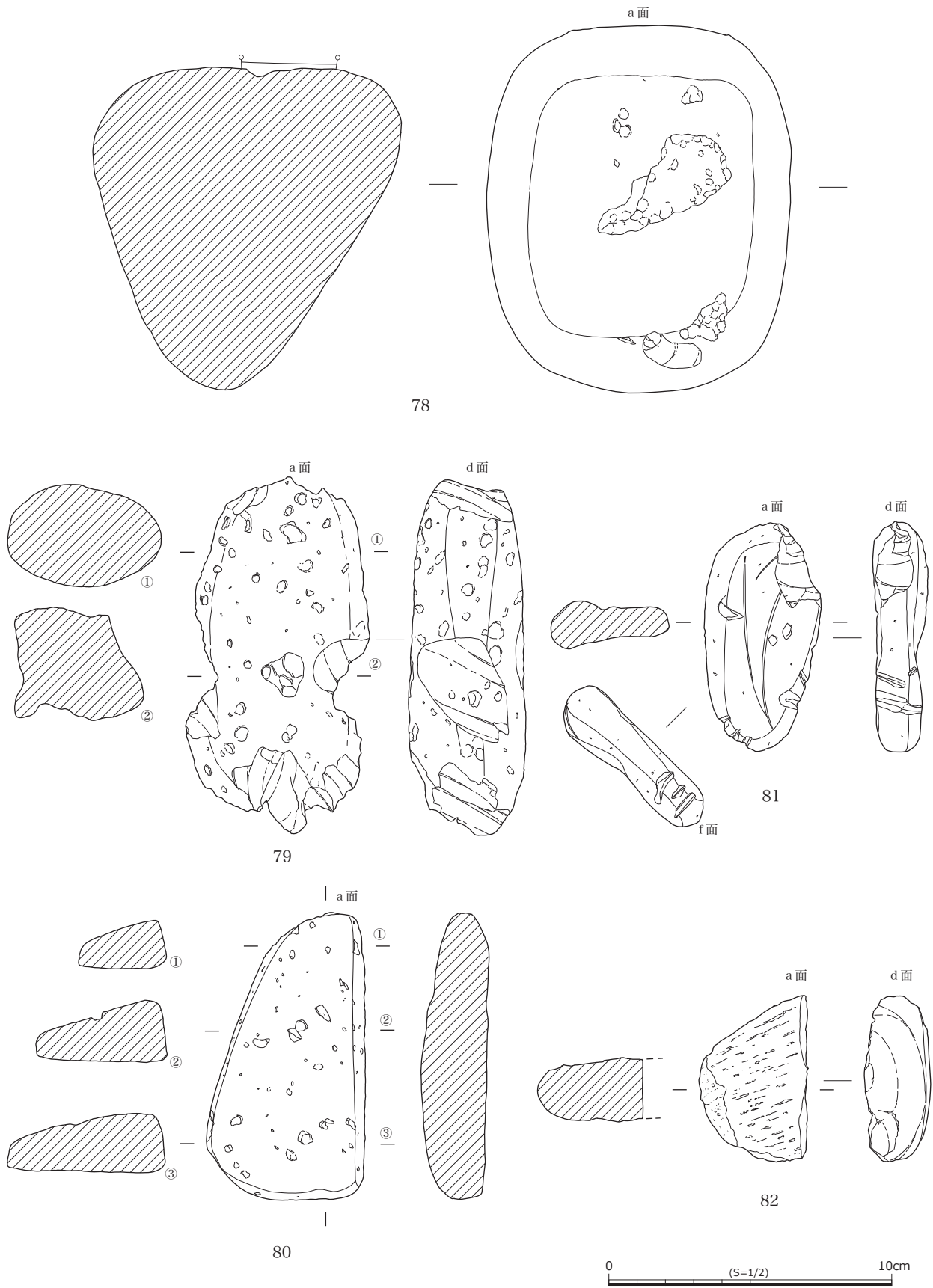
62は平底の鉢である。口径10.6cm、器高8.7cm、底径4.5cmを測り、底部はやや厚みがある。底部から口縁部までは直線的に立ち上がり、コップ状の形態を呈する。外面調整はナデ調整、内面調整はハケ調整のちナデ調整である。



第31図 SB4出土遺物11



第32図 SB4 出土遺物 12



第33図 SB4出土遺物13

63 は小型鉢の脚部である。脚部平面形は楕円形を呈し、脚部径は最長 6.0cm、最短 3.2cm を測る。脚端部はゆがみが大きく、ハの字状に開く。内外面ともナデ調整がみられる。

64 から 69 は高杯である。64 は高杯の杯部から脚部で、椀状の杯部をもつ。口唇部は丸い。口径は 17.8cm、杯部高 5.6cm、杯部と脚部の接合部径は 5.2cm を測る。脚部はハの字に開く形態であると考えられる。脚部には矢羽根透かしと思われる透かし孔がみられる。器面調整は内外面ともミガキ調整である

65 は高杯の杯部である。口径は復元径 20.0cm を測り、口唇部は丸くおさめられる。内外面とも細かいミガキ調整がみられる。内面には灰褐色のスリップが塗布される。

66 は杯部と脚部の接合部分である。接合部径は復元径 4.8cm を測る。円錐塊充填の痕跡が残る。外面は赤色顔料の塗布がみられ、色調は 2.5Y4/8 赤褐である。

67 は高杯の脚部である。スカート状に開く形態で、杯部との接合部分で欠損している。外面は大きく摩滅しているため、器面調整は不明だが赤色顔料（10R 赤 4/8 赤）の塗布がみられる。

68 は高杯の脚部である。脚部形態は脚端部にかけて外反するもので、客端部は丸い。脚部径は 10.7cm、脚部高 9.2cm、筒部径 3.0cm、脚接合部径は 4.3cm を測る。脚部は筒部の途中まで中空である。器面調整は外面ミガキ調整、内面工具ナデ調整である。

69 は高杯の脚部で、脚接合部で欠損している。脚部径 8.9cm、筒部径 3.3cm、脚部高 9.3cm、脚接合部径 3.7cm を測る。脚部形態は筒部のくびれ部分から直線的に開き、口唇部は丸い。筒部内面には粘土円錐塊が舌状にのびる。器面調整は外面がミガキ調整、内面は工具ナデ調整である。

70 は埴の底部から胴部である。胴部形態は大きく屈曲する形態で、接合痕、接合時の爪痕が残る。底径は 3.5cm、屈曲部までの高さは 3.6cm を測る。外面はハケ調整がわずかに残る。外底面は摩滅しているため調整不明である。外面には赤色顔料の塗布がみられ、色調は 7.5R4/6 赤である。屈曲部より上方に黒斑の付着がみられる。

71 は砂岩製の楕円礫を素材とした敲石である。a 面下部と上部端に顕著な敲打痕が認められる。基部に移るにつれ細くなりソケットに装着したことを想定させるような基部と稜が認められ、側面には平坦な磨面が認められる。

72 は安山岩製の楕円礫を素材とした敲石である。a 面上下両端と左側面に敲打痕が認められる。また中央部には敲打による凹面がある。また a 面上端部の敲打痕に接する範囲には磨面がみられ、多用途であったことが伺える。

73 は安山岩製の楕円礫を素材とした凹石である。a 面とその裏面に凹面が認められる。

74 は安山岩製の不整形礫を素材とし、a 面中央部に凹面が認められる。また a 面上端部と左側端、右側下端部に敲打痕がみられる。さらに a 面全体的に磨面であることから、磨石として用いられている。

75 は扁平な安山礫を素材とし、a 面とその裏面に敲打痕による浅い凹面のある凹石である。また、a 面上部には他の面に比べなめらかな面があり、想像の域を出ないが磨石として使われた可能性がある。

76 は安山岩製の楕円礫で片面が凹んでいる面に顕著な敲打痕が認められる。受け皿状になっている面を作業面としていることから石皿と器種認定した。a 面右側面には敲打痕が認められる。a 面の裏面にも 3.3cm×2.9cm の楕円形の範囲に敲打痕がみられる。

77 は石皿である。破片形状から本来の形状は、平坦面を有する円形または楕円形を呈していたものと考えられる。石皿片の一端に剥離痕と摩滅が顕著に認められることから、比較的重量を有す

る作業で、打ち下ろす動きを繰り返していたことが考えられる。

78は断面三角形状を呈する安山岩礫を素材とした凹石である。平坦面の一面を作業面とし、中央部よりやや右側に顕著な凹面が認められる。

79は人形の軽石製加工品である。楕円形の軽石を素材とし工具により切り込みを入れることにより、いわゆる人形に形成している。a面中央部両側面には側面から抉るようにして抉入がみられる。またa面とその裏面には凹面が認められる。b面下部では上記の部分に抉りを入れ、脚また性器を作り出しているかのように判断できる。a面、b面上端部は二回の切り込みが認められる。

80は軽石製加工品である。素材の軽石を全面的に研磨し、形状を整えている。

81は素材である楕円形の軽石の両面を工具によって研磨している。そのため親指・人差し指で持ちやすい形状となっている。a面左側下部と右側面に工具により刻みをつけている。a面左側面、b面における刻みの観察によると両面からそれぞれ刻んでいることが分かる。

82は楕円形状の軽石の片面に打撃を加え、分割したものである。分割面には打痕も確認されることから意図的な分割と判断できる。磨面や削面等は確認できない。

【SB5】(第34～38図、図版5-1～6-1)

SB5は、主軸を東西にとり、長軸3.4m、短軸3.2mの方形プランを呈する。検出面からの竪穴深さは約48cmを測る。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット5基、床面中央にカーボンが広がる範囲1基が検出された。ピットは便宜上5aから5eとした。ピット5aは長軸21cm、短軸18cmの略円形で、深さ23cmである。ピット5bは直径24cmの略円形で、深さ37cmである。ピット5cは長軸18cm、短軸16cmの楕円形で、深さ33cmである。ピット5dは長軸20cm、短軸18cmの略円形で、深さ31cmである。ピット5eは直径14cmの円形であり、深さ15cmである。

〈SB5 出土遺物〉

出土遺物総点数は951点である。

83は口縁部が内傾する甕である。口唇部はわずかに外反し、丸くおさめる。口径は復元径23.0cmを測る。器面調整は外面がミガキ調整、内面はナデ調整である。

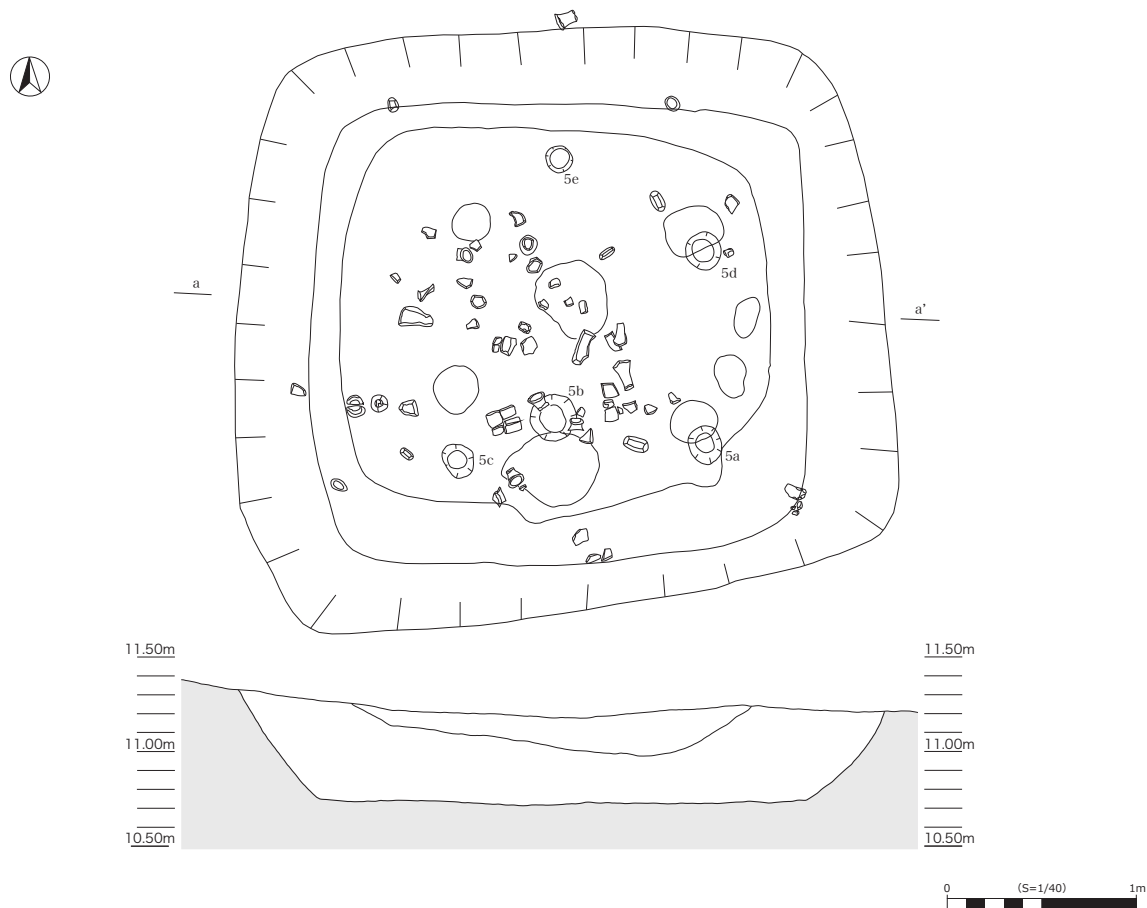
84は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、断面は台形状となる。外面調整は工具ナデ調整、内面調整はナデ調整である。

85から91は甕の脚部である。85は甕の脚部から胴下部で、脚部形態は踏ん張る形態である。脚部径は復元径4.4cm、脚部高1.1cm、底径は復元径4.1cmを測る。脚接合部には外面に指頭圧痕が明瞭に残る。

86は甕の脚部である。脚部径は復元径11.3cm、脚部高6.1cm、底径7.6cmを測る。脚接合部には断面三角形の突帯が貼り付けられる。脚天井部は丸みをおびる。内外面ともナデ調整である。

87は甕の脚部である。脚部径は復元径9.3cm、脚部高5.3cm、底径6.4cmを測る。脚部形態は直線的に開き、端部でわずかに外反する。脚天井部形態はドーム状で丸みをおびる。脚部外面はナデ調整である。

88は甕の脚部である。接合部から直線的にのび、脚端部は接地部に面をもつ。脚部径は8.9cm、脚部高は4.6cm、底径は復元径5.9cmを測る。脚天井部はドーム形である。器面調整は外面がヨ



第 34 図 SB5 平面図・断面図

コナデ調整，内面は工具ナデ調整がみられる。

89 は甕の脚部である。脚部径 7.8cm，脚部高 3.1cm，底径 5.3cm を測る。脚部形態は接合部からやや膨らみをもつてのびる形態で，脚端部は丸い。外面には成形時の指頭圧痕が明瞭に残り，歪みが大きい。

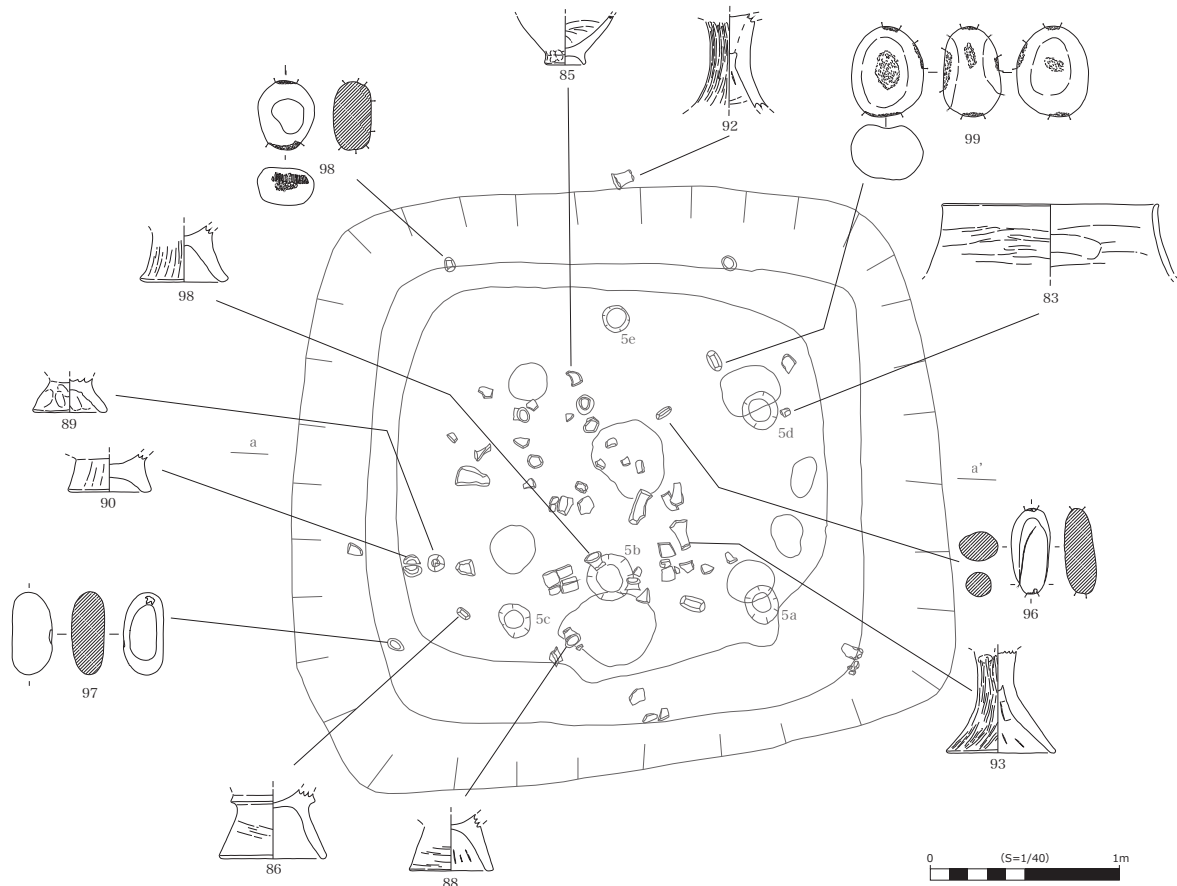
90 は甕の脚部である。脚部径 8.8cm，脚部高 3.3cm，底径 7.2cm を測る。脚接合部から直線的に短くのびる形態を呈し，接地部には面をもつ。内外面ともナデ調整である。

91 は直線的に開く甕の脚部で，口唇部は丸みをもつ。脚部径 8.7cm，脚部高 4.3cm，底径 5.6cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。脚部外面は縦方向の工具ナデ調整がみられ，脚接合部には接合時の指頭圧痕による器面の盛り上がりが見られる。内面調整はナデ調整である。

92 と 93 は高杯である。92 は高杯の脚部で，脚端部欠損である。断面では円錐塊充填の痕跡が確認できる。器面調整は，外面が縦方向のミガキ調整，内面は工具ナデである。

93 は高杯の脚部である。杯部との接合部分で欠損している。筒部から脚端部にかけて緩やかに外反し，端部は丸く仕上げられる。脚接合部は円錐塊を充填しており，円錐塊の先端は指頭圧痕がみられる。脚部径は復元径 11.5cm，脚部高 10.7cm を測る。外面は縦方向のミガキ調整，内面は工具ナデがみられる。

94 は壺の口縁部である。口縁部形態は外反する形態で二叉状に開く。口唇部は M 字状にくぼみ，丁寧なヨコナデ調整がみられる。口径は復元径 20.1cm を測る。



第35図 SB5遺物出土状況

95は壺の底部である。平底を呈するが、端部がくびれており、脚台状を呈する。底径は8.5cmを測る。底部から胴下部の立ち上がりは直線的に大きく開く形態である。外面は縦方向の工具ナデ調整、内面はハケ調整がみられる。

96は手のひらに収まるような安山岩の楕円礫を素材とした敲石である。a面上下両端に顕著な敲打痕が認められる。断面形状はa面下部付近ではほぼ約2.6cmの円形を呈している。

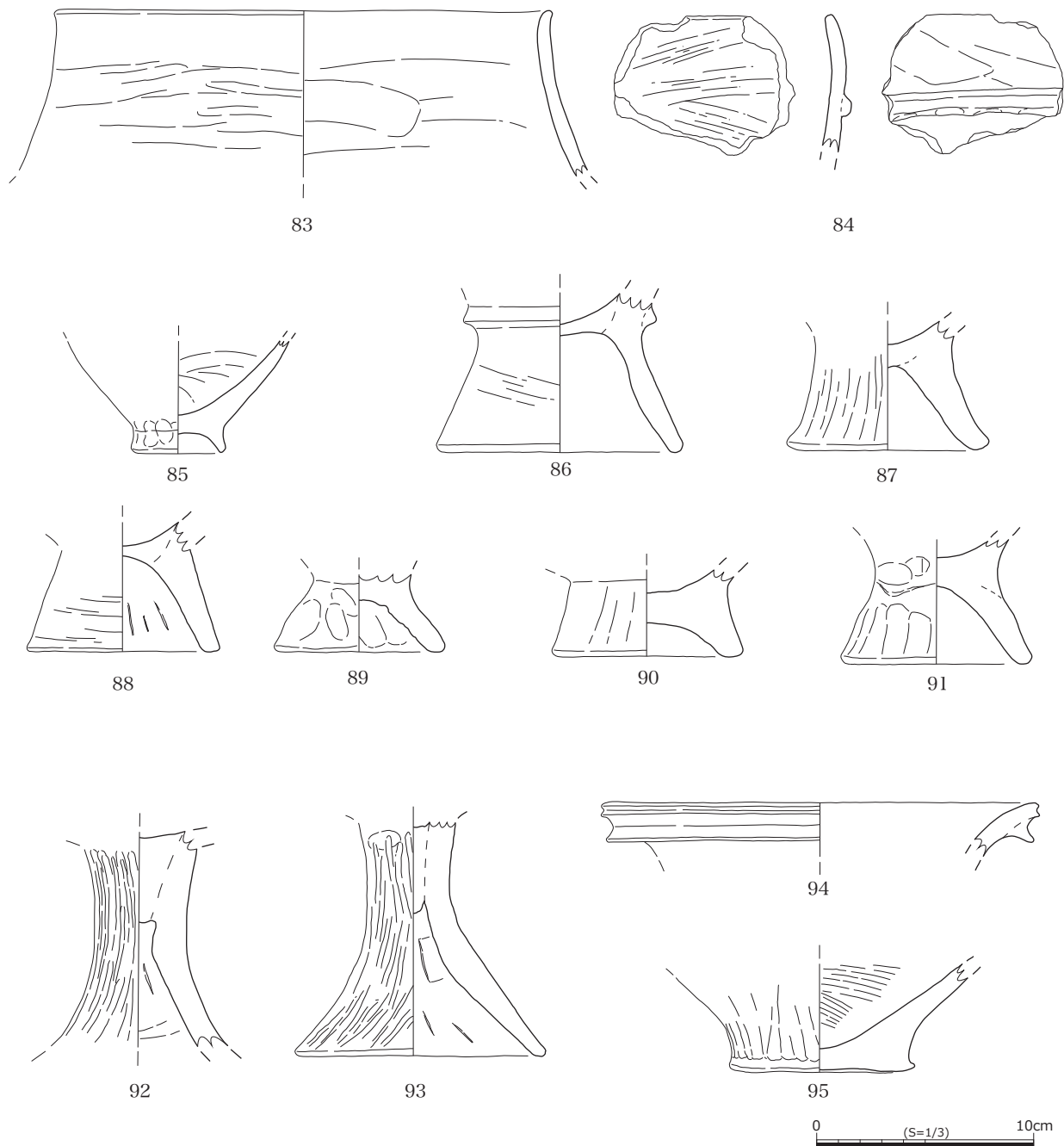
97は片面に平坦面を有する安山岩の楕円礫を用いた磨石である。b面上部に摩滅が認められる。上下両端には敲打痕が認められる。

98は砂岩の楕円礫を用いた敲石である。a面上下両端に敲打痕が認められる。またf面上部とa面の敲打痕の背後には線状痕が認められ対象物に対して削り取るような作業が行われていたことが窺える。a面の裏面中央部に敲打痕が認められる。

99は砂岩の楕円礫を用いた敲石である。a面上下両端および側面に敲打痕がみられる。

100はa面左側に砥面が認められる砥石である。砥面の線状痕の状況から砥石の一部(a面左側部、上部、下部)は欠損していると考えられる。

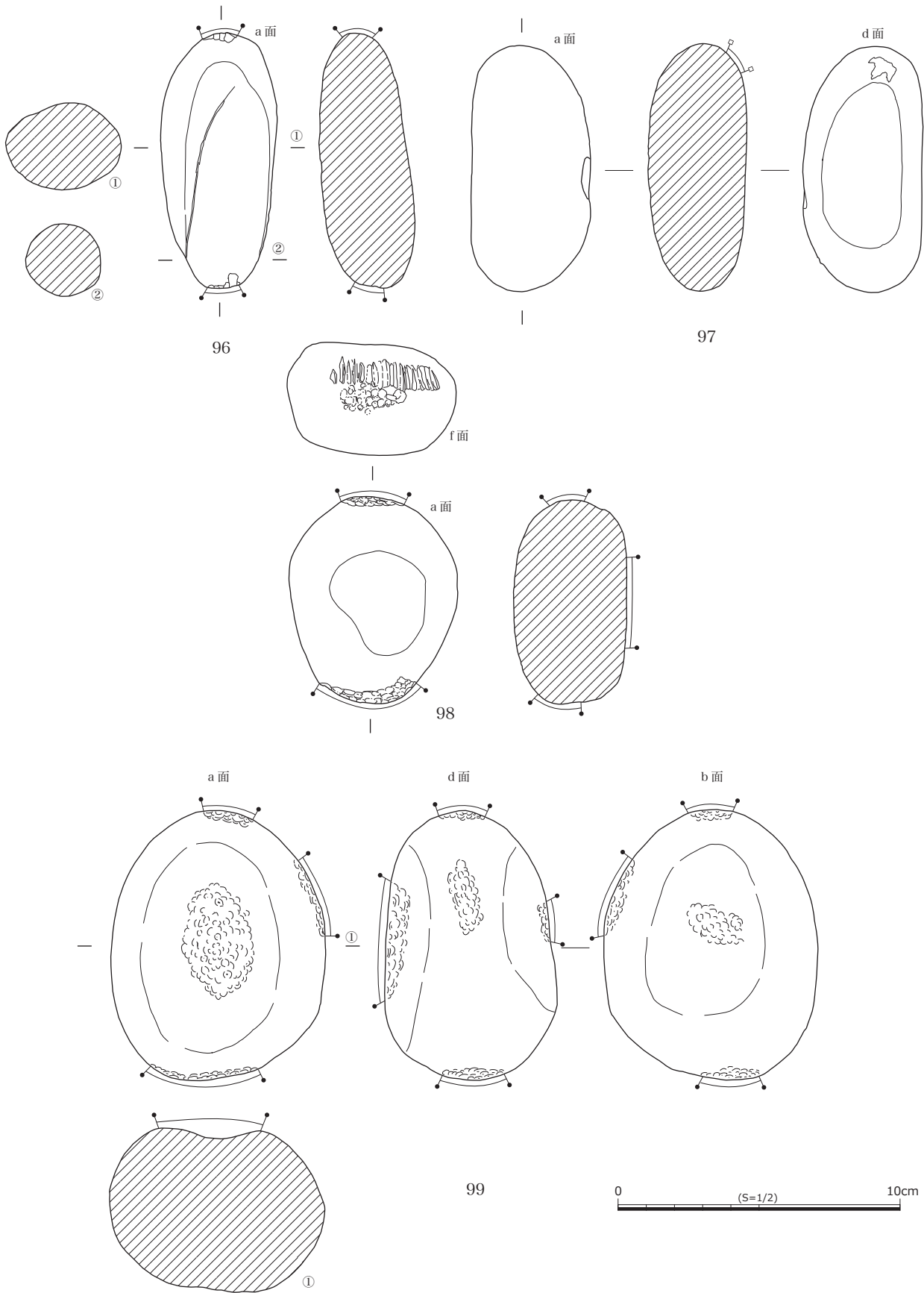
101は分割剥片である。厚さ約1.2cmの剥片の左右両端を切断した剥片である。



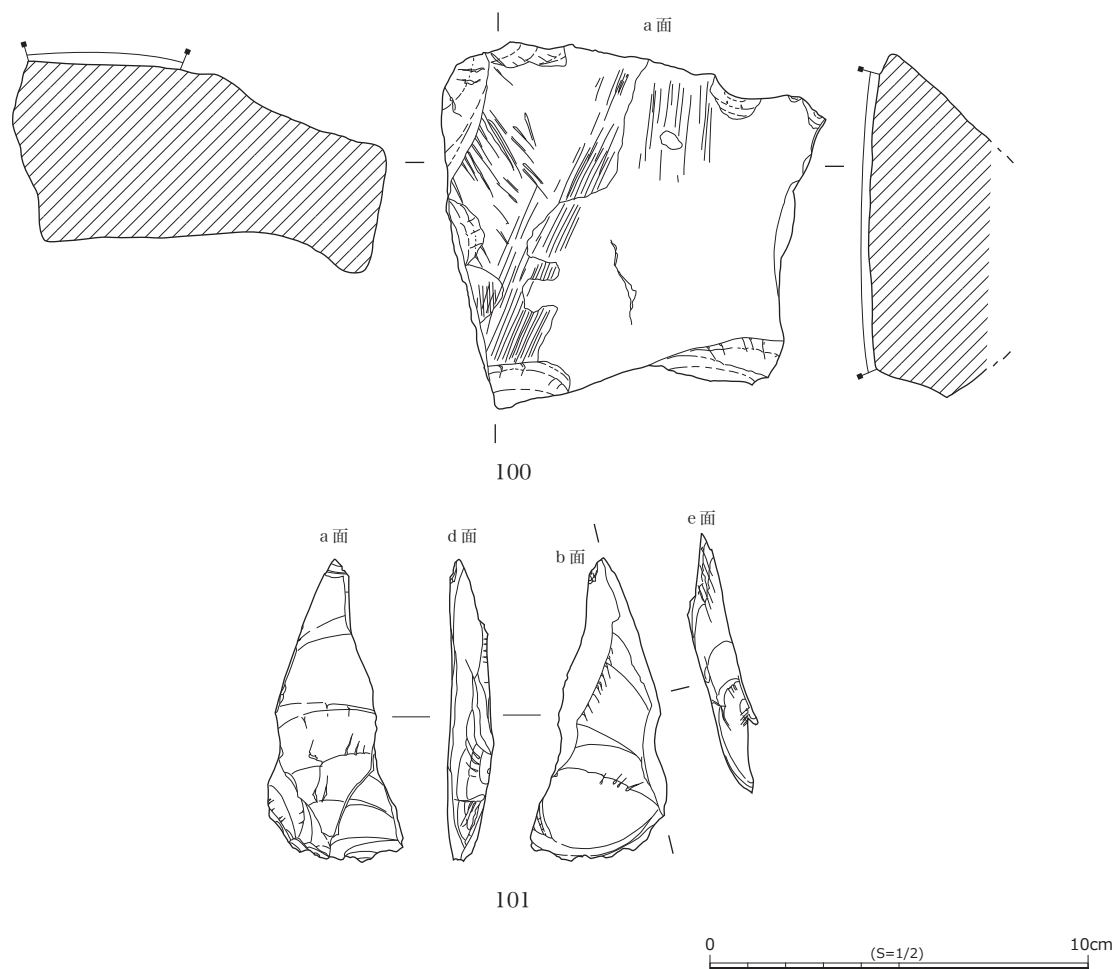
第36図 SB5出土遺物1

【SB6】(第39～45図, 図版6-1～7-1)

SB 6は、主軸を南北にとると考えられるが、北面が調査区外に出ているため、東西軸では一辺3.3mを測る方形プランを呈する。検出面からの竪穴深さは約44cmを測る。竪穴埋没途中の緩い窪地の段階で青コラ火山灰が降下したものとみられ、第7層青コラ火山灰層下面は竪穴中央部に向って緩やかに窪んでいる。SB 4と時期的に近似していることがいえるが、窪みが比較的浅いため、SB 4より時間的に経過した後に被災したものとみられる。



第37図 SB5 出土遺物 2



第38図 SB5 出土遺物 3

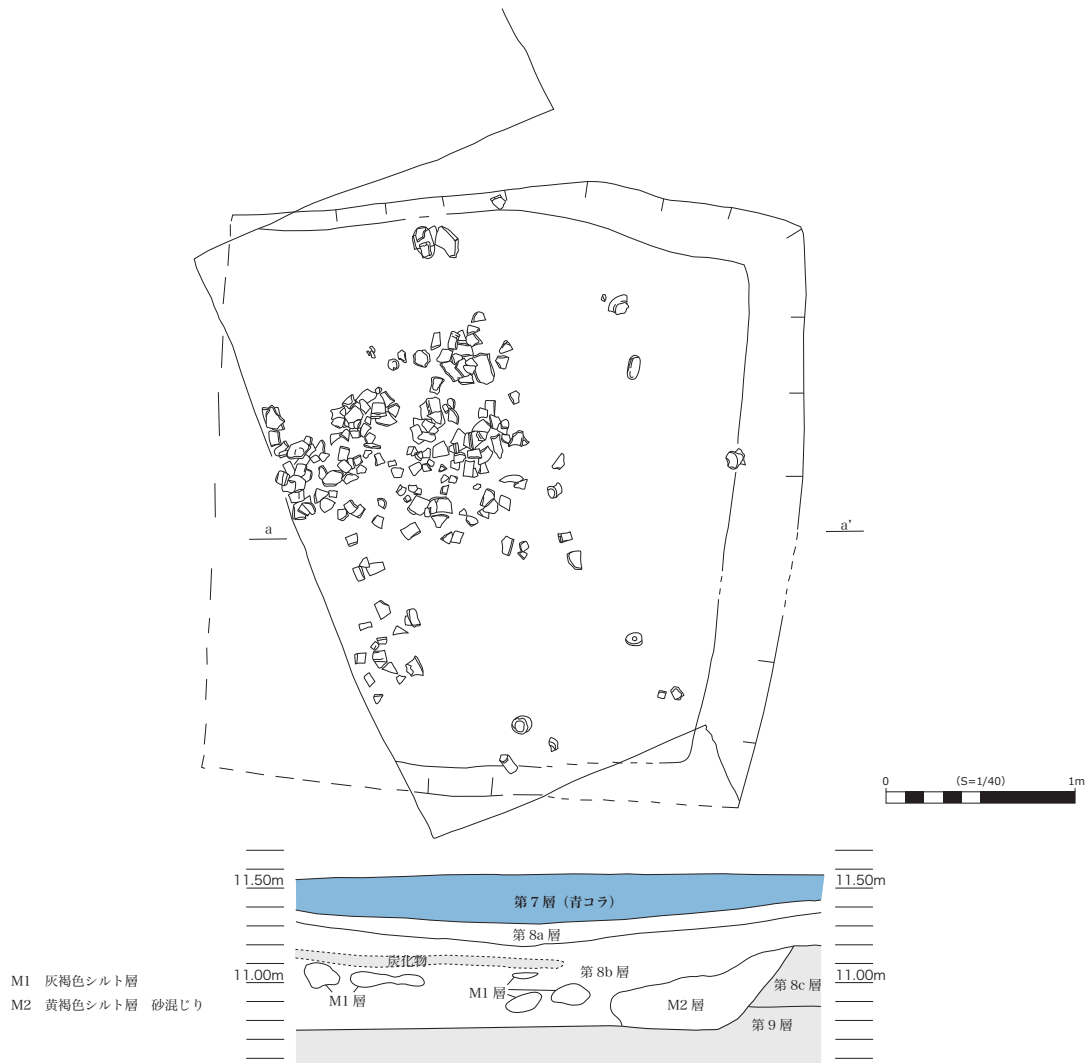
付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット1基、壁帯土坑1基、カーボンが広がる範囲1基が検出された。ピットは、長軸21cm、短軸18cmの略円形で、深さ26cmを測り、西側に段を持つ。配置位置は竪穴西面に近いもので、壁帯土坑にも接近している。壁帯土坑は西面の竪穴に接して位置し、竪穴に対して幅48cm、奥行40cmであり、深さ16cmと浅い。内部には遺物はないが、20cm程浮いて土器がまとまって出土している。床面のカーボン分布範囲は、壁帯土坑に東西軸を置いた場合、1.6m東側の床面に位置する平面形は不整形であり、長軸60cm、短軸50cmとなる。

〈SB6 出土遺物〉

出土遺物総点数は1,786点である。

102から114は甕である。102は甕の口縁部から胴部で、口縁部は内湾する。口唇部はコの字で、口径は復元径30.8cmを測る。口縁部下には一条の突帯が貼り付けられる。外面の器面調整は、突帯上部は横方向のミガキ、突帯下部が縦方向のミガキ調整である。内面は不定方向のナデが施される。外面にはススの付着がみられる。

103は甕の口縁部から胴部である。口径は復元径38.2cmを測る。口唇部はコの字で、内面には稜をもつ。口縁部下には一条の断面台形の貼り付け突帯をもち、部分的に貼り付け時の指頭圧痕が



第 39 図 SB6 平面図・断面図

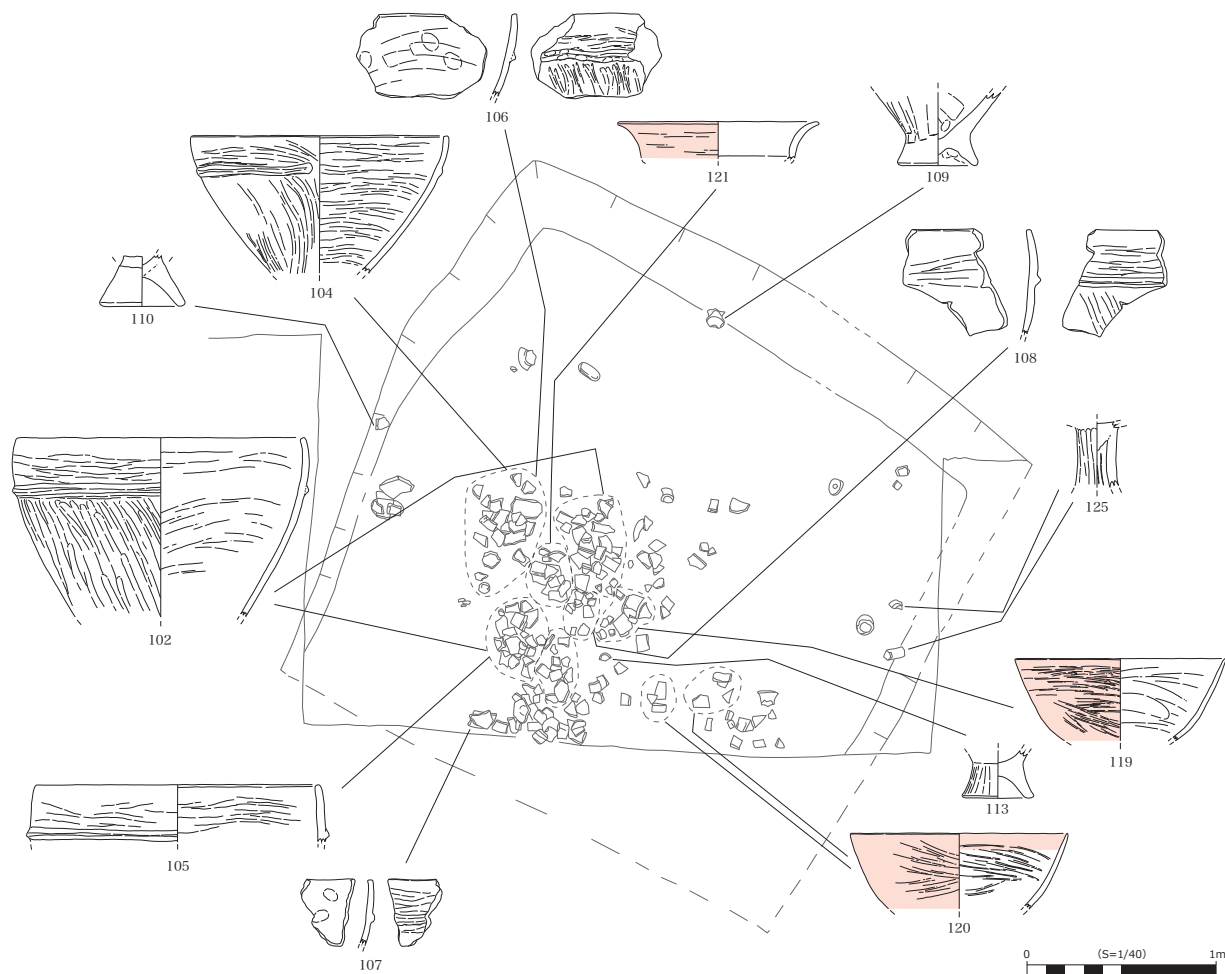
残る。器壁は歪みが大きい。外面の器面調整は、突帯上部が横方向のミガキ、突帯下部が斜め方向のミガキがみられる。内面もミガキ調整であるが、ミガキの単位が外面に比べて太い。

104 は甕の口縁部から胴部である。胴下部から直線的に立ち上がる形態で、口唇部は丸い。口径は復元径 27.3cm を測る。口縁部下には一条の断面台形突帯が貼り付けられ、突帯はやや歪む。この突帯は接合せず、一方の不接合部分が欠損しているため、詳細は不明である。外面の器面調整は、突帯上部が横方向のミガキ調整、突帯下部が縦方向のミガキ調整である。内面は横方向のミガキで全体を仕上げる。

105 は甕の口縁部である。口唇部は丸く、口径は復元径 30.0cm を測る。口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。内外面ともに横方向のミガキ調整が施される。

106 は甕の口縁部である。口唇部はコの字状である。口縁部下には一条の絡縄突帯が施され、指頭圧痕が明瞭に残る。外面の器面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、突帯下部が縦方向のミガキ調整である。内面は工具ナデで仕上げられる。

107 は甕の口縁部である。口唇部はコの字状である。口縁部下には一条の断面台形突帯が貼り付



第40図 SB6 遺物出土状況

けられる。外面はミガキ調整，内面はナデ調整である。

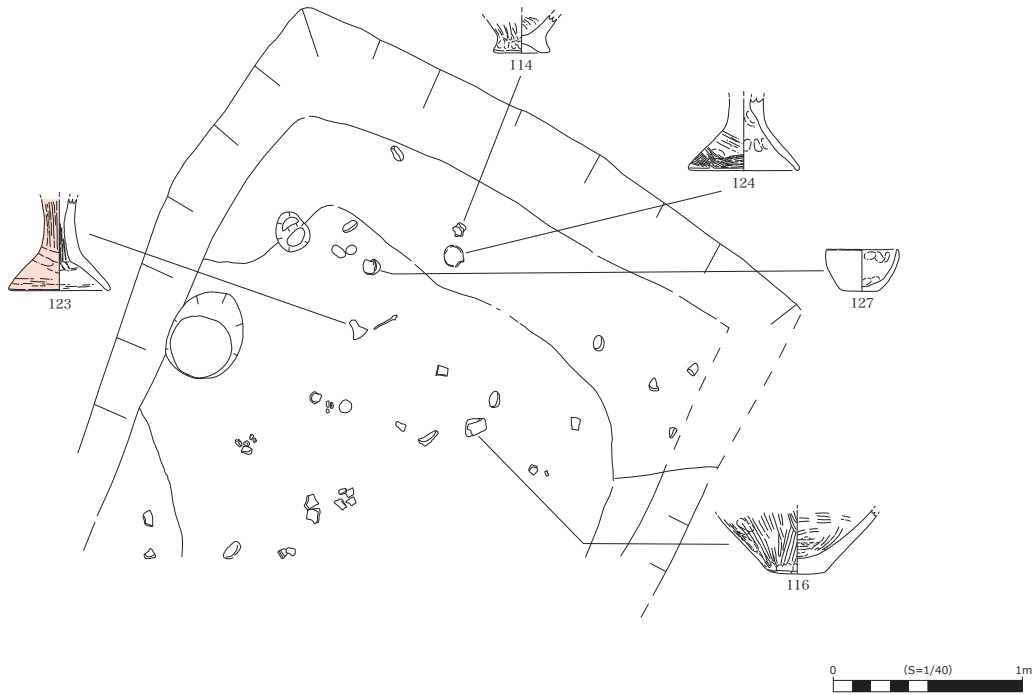
108は甕の口縁部である。口縁部は少し内湾する形態で，口唇部は上方に面をもつ。口縁部下には一条の貼付け突帯を持つ。外面調整は突帯上部が横方向のミガキ，突帯下部は縦方向のミガキである。内面調整はやや幅の広いミガキである。

109は甕の脚部から胴下部である。脚部径は復元径8.5cm，脚部高3.0cm，底径は復元径6.8cmを測る。脚部は直線的に短く開く形態で，口唇部は丸い。脚天井部形態は中央に突出部を持ち，指頭圧痕が残る。外面調整は胴下部が工具ナデ調整，脚部がナデ調整である。内底面には工具ナデ調整がみられる。

110は甕の脚部で，接合部で剥落している。脚部径は復元径9.0cm，脚部高4.3cm，底径は復元径4.9cmを測る。脚部は直線的に開き，口唇部はコの字を呈する。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整である。

111は甕の脚部である。直線的に短く開く形態で，脚部径8.8cm，脚部高2.9cm，底径7.1cmを測る。脚端部はコの字を呈する。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

112は甕の脚部である。直線的に開く形態で，脚端部は若干外反する。脚部径8.3cm，脚部高4.4cm，底部径5.8cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整である。



第41図 SB6床面直上遺物出土状況

113は甕の脚部でハの字に開く形態である。脚部径は復元径7.5cm、脚部高3.8cm、底径は復元径5.3cmを測る。脚天井部はドーム状で、端部は接地部に面をもつ。外面は工具ナデ調整、内面はナデ調整である。

114は甕の脚部から胴下部である。脚部形態はハの字に短く開く形態で、脚端部は接地部に面をもつ。脚部径は復元径6.0cm、脚部高1.6cm、底径は復元径5.1cmを測る。脚部外面には脚接合時の指頭圧痕が残る。外面胴下部はミガキ調整、内面はナデ調整である。

115から118は壺である。115は壺の肩部である。肩部には幅広突帯が貼り付けられ、突帯部径は復元径35.0cmを測る。突帯幅は3.4cmを測り、突帯内部は四条の鋸歯文で区画される。鋸歯文で区画されたのちに、鋸歯文の間に半裁竹管文が充填される。この半裁竹管文は、Cの字状の二列、Cの字状と逆Cの字を組み合わせた二列が交互に施文される。内外面とも横方向のミガキ調整がみられる。

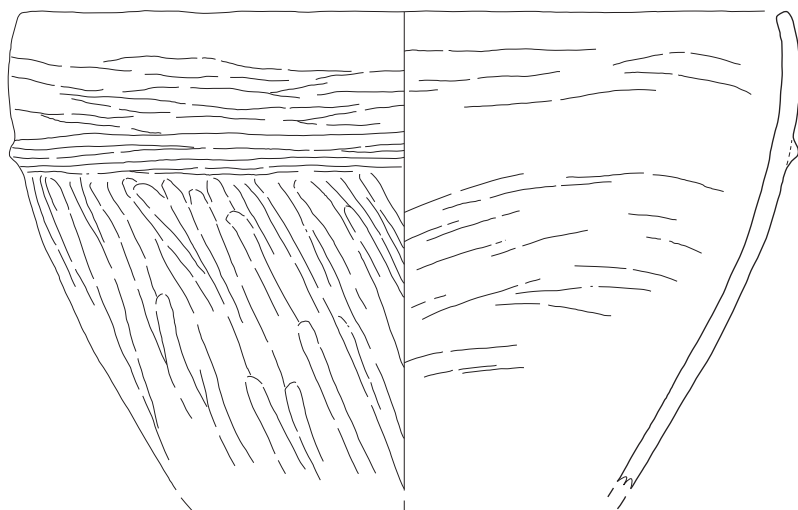
116は壺の底部から胴下部である。底部形態は座りの悪い平底で、底径5.8cmを測る。内外面ともミガキ調整がみられる。

117は壺の底部から胴下部である。底部形態は平底で、底径5.1cmを測る。外面にはススの付着がみられる。器面調整は内外面とも摩滅しているため不明である。

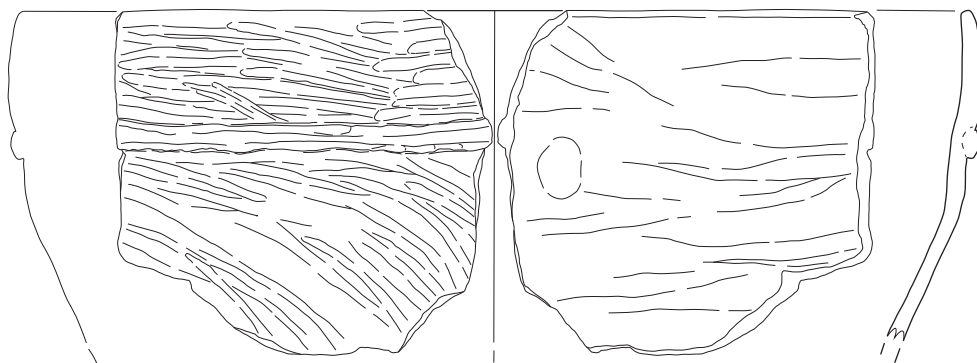
118は壺の底部から胴下部である。底部形態は平底で、端部は脚台状にくびれる。底径は6.9cmを測る。外面には指頭圧痕が残る。底部内面にはコゲがみられる。

119から125は高杯である。119は高杯の杯部である。形態は椀状を呈し、胴部でゆるやかに屈曲する。口唇部は丸く、口径は復元径22.2cmを測る。外面ミガキ調整、内面はナデ調整である。外面の全面と内面は口縁部下2cmの範囲に赤色顔料の塗布がみられる。外面には黒斑がある。

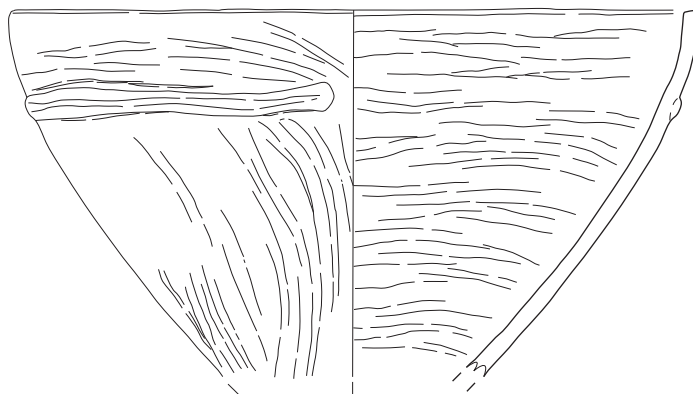
120は高杯の杯部で、椀状の形態を呈する。口唇部は先細り、丸みをおびる。口径は復元径で23.0cmを測る。内外面ともミガキ調整がみられる。外面の全面と内面は口縁部下1.7cmの範囲



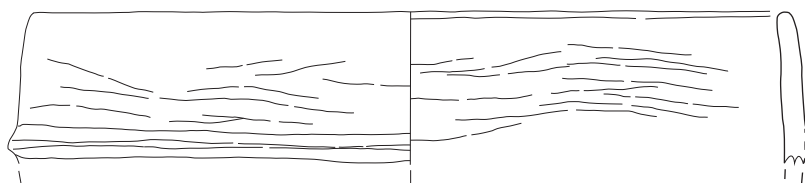
102



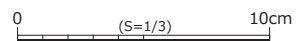
103



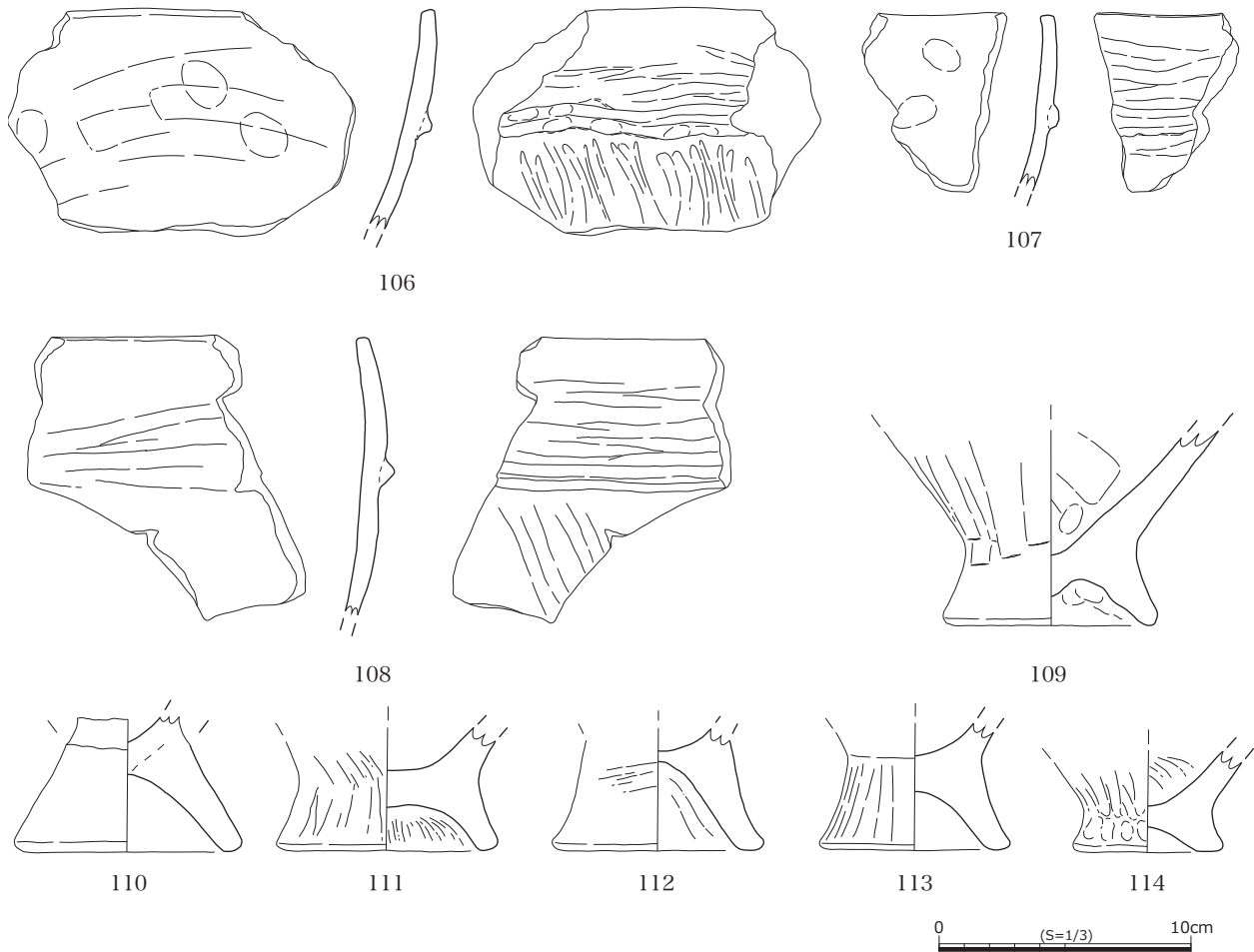
104



105



第42図 SB6 出土遺物 1



第43図 SB6出土遺物2

に赤色顔料の塗布がみられる。

121は体部が屈折する高杯の杯部である。屈折部から口唇部にかけて大きく外反する形態である。口径は復元径21.3cmを測り、口唇部は面をもつ。内外面ともナデ調整で、赤色顔料が塗布される。

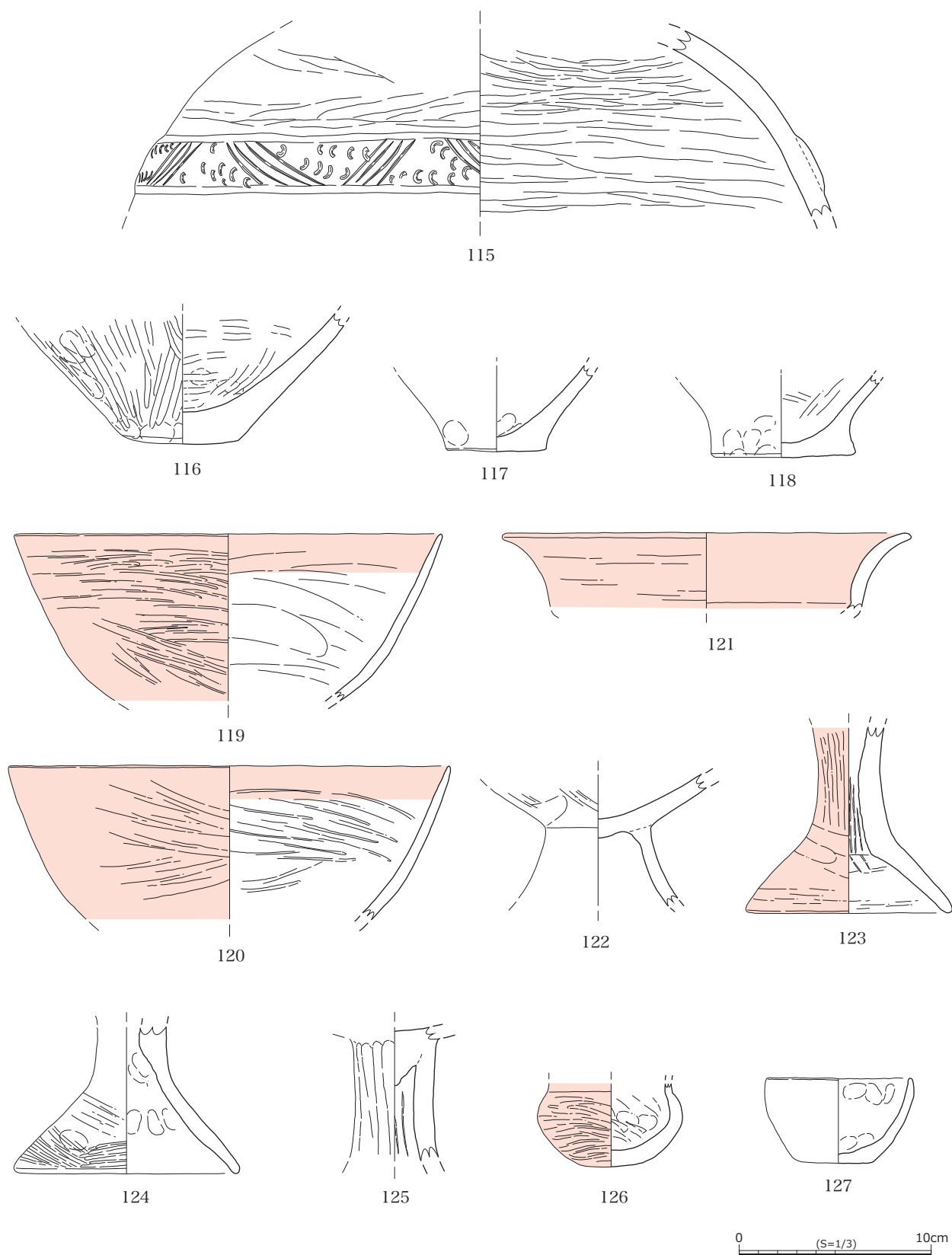
122は高杯の脚接合部から脚部である。脚部はスカート状に開く形態で、接合部には明瞭な稜がみられる。脚天井部形態は中央部分がやや突出する。脚接合部径は復元径5.5cmを測る。内外面ともナデ調整である。胎土がやや粗いため、脚部の長い鉢の可能性もある。

123は高杯の脚部である。筒部は直線的に伸び、途中から袋状に開く。この袋状に開く部分の内面は明瞭に屈曲し、強い稜をもつ。脚部径10.7cm、脚部高10.7cm、筒部径3.3cmを測る。筒部外面は縦方向のミガキ調整、端部外面はヨコナデ、内面は工具ナデがみられる。外面には赤色顔料が塗布される。

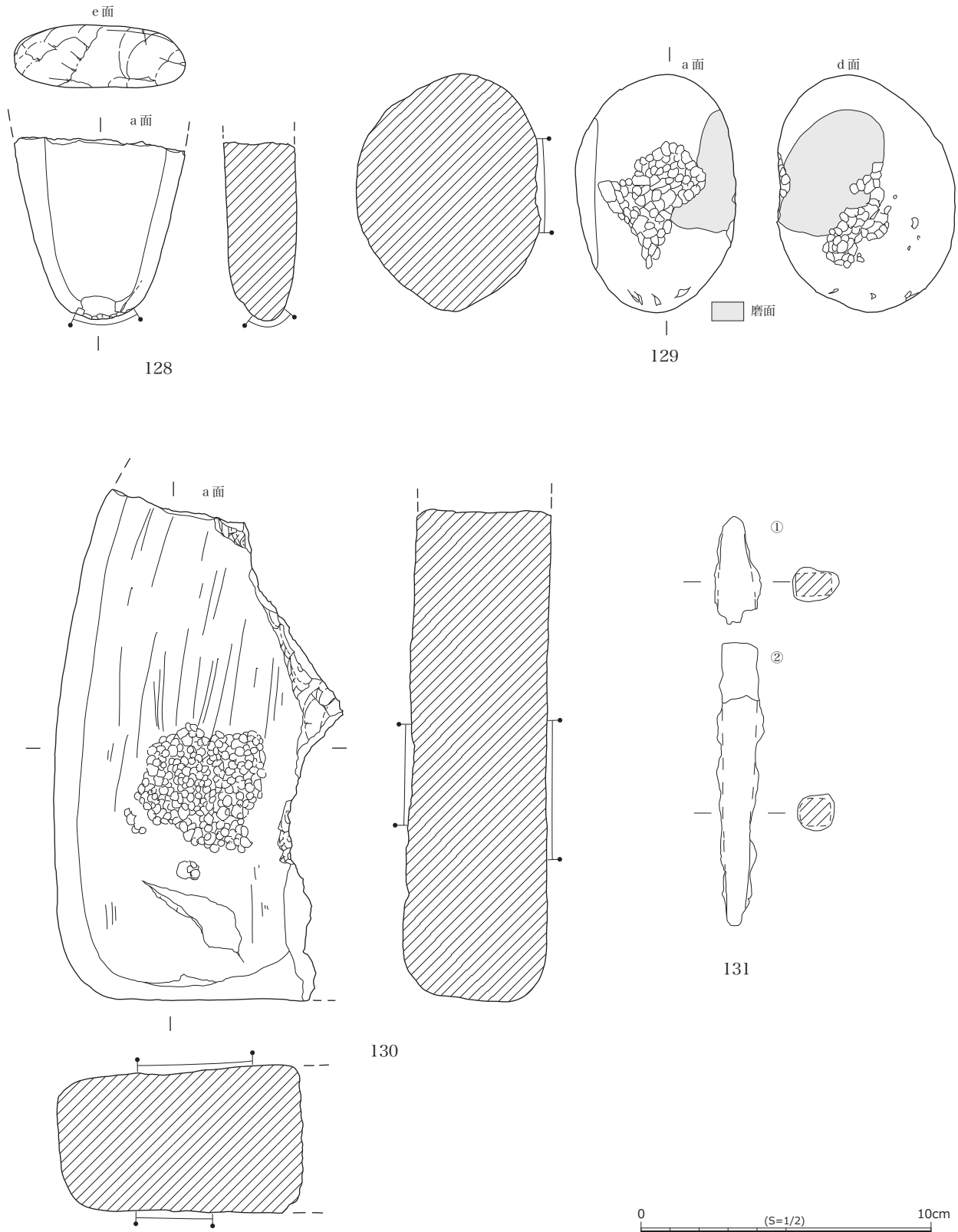
124は高杯の脚部で、筒部から端部にかけて直線的に開く。脚端部はやや内湾する。脚部径11.7cm、筒部径3.6cmを測る。外面はミガキ調整、ナデ調整、内面は成形時の指頭圧痕が残る。

125は高杯の脚部である。接合部から直線的にのびる形態を呈し、脚接合部径は復元径4.1cmを測る。接合方法は円錐塊充填法を用いる。外面は縦方向のミガキ調整、内面は工具ナデがみられる。

126は坩の底部から胴部である。底部はゆるやかな平底で胴部は丸みをおびる。頸部への立ち上がりが見え、確認できる。底径3.5cm、胴部最大径7.5cm、頸部径6.5cmを測る。胴部外面は



第44図 SB6 出土遺物 3



第45図 SB6 出土遺物 4

横方向のミガキ調整、内面はナデ調整で仕上げられる。底部外面から頸部外面にかけて赤色顔料が塗布される。

127は平底の鉢である。口径7.5cm、器高4.4cm、底径3.5cmを測る。内湾する口縁部形態で、内外面ともナデ調整である。

128は扁平な楕円形の安山岩礫を用いた敲石である。a面下端部に敲打痕が認められる。またa面中央部は磨面である。上部はa面右側部からの加撃により欠損している。

129は卵形の安山岩礫を用いた敲石である。上下両端ではなくa面に敲打痕が顕著に認められる。またb面中央部にもみられる。a面右側面には磨面が認められる。この石器は手のひらに収まる大きさであり、側面に敲打痕が認められることからその使用方法も推測できる。

130は台石として利用していたものか、意図的または非意図的に分割されたものを用いた再利用の石器と考えられる。a面とその裏面中央部に敲打痕が認められ、a面のものは凹面として意識できるほど利用されていることが伺える。a面右側面の分割面三面ともa面の裏面側からの加撃で分割されている。

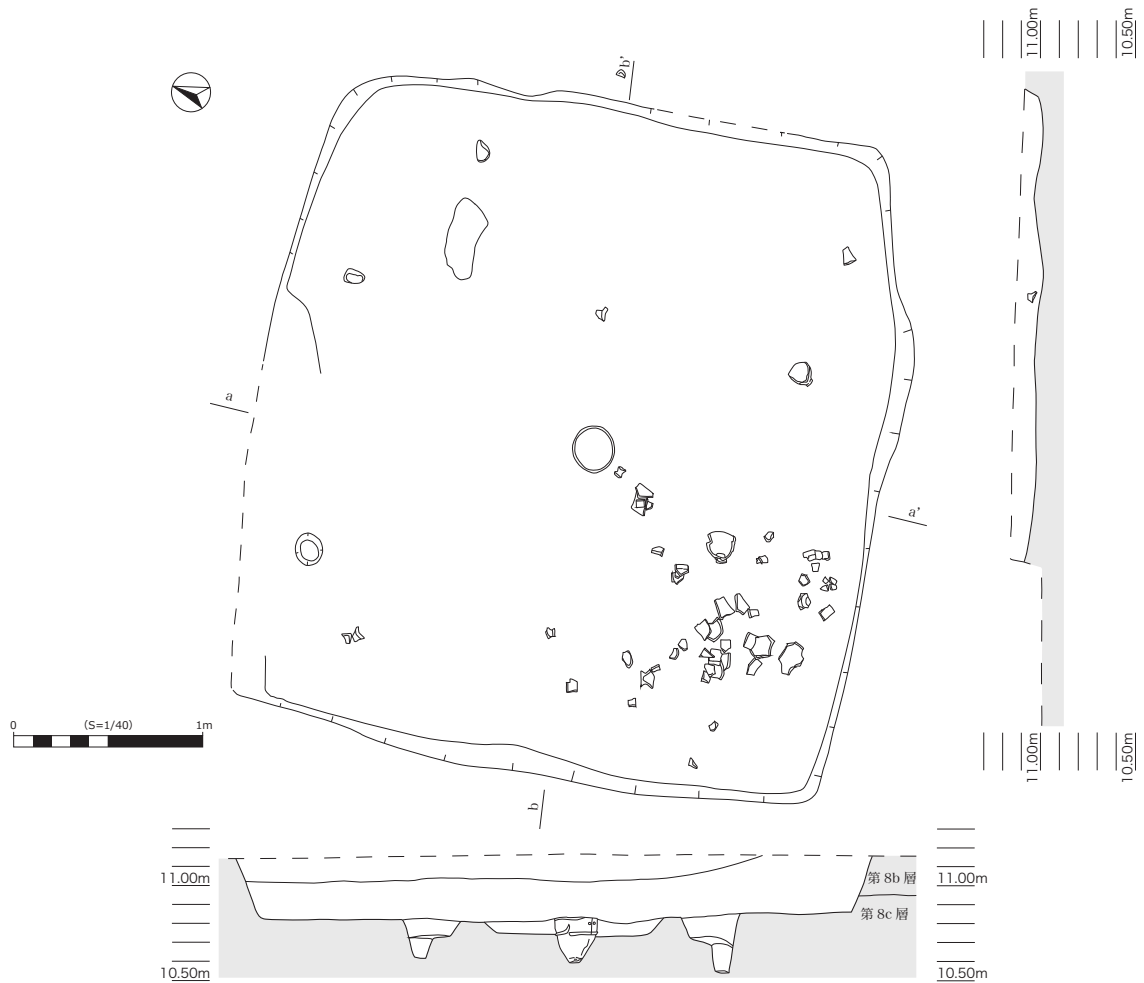
131は鉄器である。①と②は接合しないようだが、もともと同一個体であったことを否定するものではない。①は残存長3.7cmで断面は判然としないが長方形を呈すると判断した。②は残存長9.8cmで、断面は方形を呈するようである。現状では器種は不明であるが、刃部状の構造は見られないため、刀子のようなものではなく、また、鏃の頸部にしてはサイズが大きすぎるように思われる。しかし、②のように厚みを有する方形の頸部は、長島町の明神古墳群の出土品中の片刃箭式の鉄鏃にも見ることができる（大西智和・鐘ヶ江賢二2008「鹿児島県長島明神・指江古墳出土遺物の検討」『人類史研究』14）。

【SB7】（第46～51図，図版7-2～8-3）

SB7は、主軸を南北にとり、長軸3.7m、短軸3.6mの方形プランを呈する。検出面からの竪穴の深さ30cmを測る。床面には5cm程度の厚みで青みを帯びた暗褐色のシルト質土で貼床が施されている。付帯遺構として、柱穴とみられるピット7基、中央土坑1基と中央土坑中に甕形土器を据えた土器炉1基が検出された。

ピットは便宜上7aから7gとした。ピット7aは長軸22cm、短軸18cm、深さ10cmである。ピット7bは長軸34cm、短軸32cmの略円形で、深さ29cmである。底部南西側に直径18cmのピットを設ける二段掘りとなる。ピット7cは直径22cmの円形で、深さ8cmである。ピット7dは直径18cmの円形で、深さ11cmである。ピット7eはピット7dに隣接してあり、長軸24cm、短軸20cmの楕円形であり、深さ13cmである。ピット7fは直径34cmの略円形で、深さ18cmである。底部北側に長軸18cm、短軸14cmのピットを設ける二段掘りとなる。ピット7gは長軸26cm、短軸22cm、深さ10cmである。底部南側に直径10cmのピットを設ける二段掘りとなる。中央土坑を挟んで対照の位置にあるピットbとfは棟支え柱と考えられ、他と比較して直径・深さとも大きく二段掘りとなっている。他のピットは方形の桁を組むためのものと考えられる。

中央土坑は長軸1.2m、短軸1m、深さ5cmを測る。中央には断面逆台形の、一辺25cm、深さ13cmの略円形のピットがあり、脚部が欠損した甕形土器（笹貫式土器）が据えられていた。土器は口縁部10cm程度を床面上に露出していた。土器の北側の中央土坑内には焼けた砂と灰混



第 46 図 SB7 平面図・断面図

じりの土壌がみられること、土器を据えたピット内には白色の灰の堆積があったこと、そして、土器の内面中ほどに一周帯状にススが付着していたことから、土器炉と判断した。

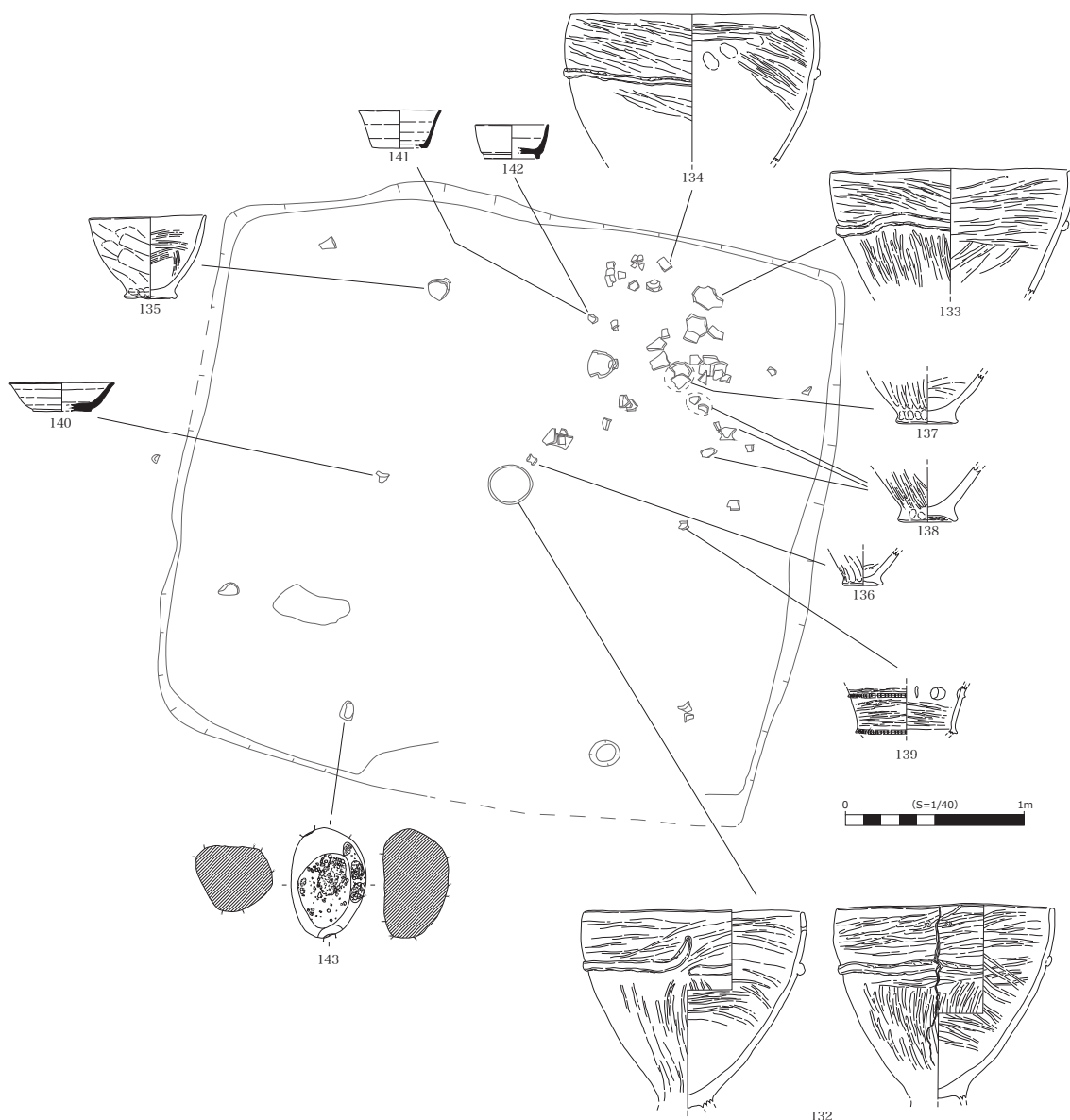
SB 7は層位断面図(第 11 図)からは、第 7 層青コラ火山灰層を掘り抜き造営されていることがわかる。青コラ火山灰層降下時期は 7 世紀後半とされており(下山 1992)、帰属時期に関しては古墳時代ではなく、古代となる。土器炉の資料は成川式の笹貫式段階の特徴を示している。

〈文献〉

下山覚 1992 「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第 8 号 65-79

〈SB7 出土遺物〉

132 から 134 は甕である。132 は住居中央に埋設された甕で、脚部が欠損している。口縁部は内湾する形態を呈し、口唇部は丸い。口径 25.1cm、器部高 21.0cm を測る。口縁部下には一条の断面台形突帯が貼り付けられるが、接合しない。不接合部分を正面にすると、左側が上方に伸びる形態である。また、口縁部には直径 2 ～ 3mm の焼成後穿孔が 2 箇所認められる。穿孔部の間には、口縁部から胴部にかけての割れ口が見られることから、この穿孔は、割れ口を補修する補修孔であっ

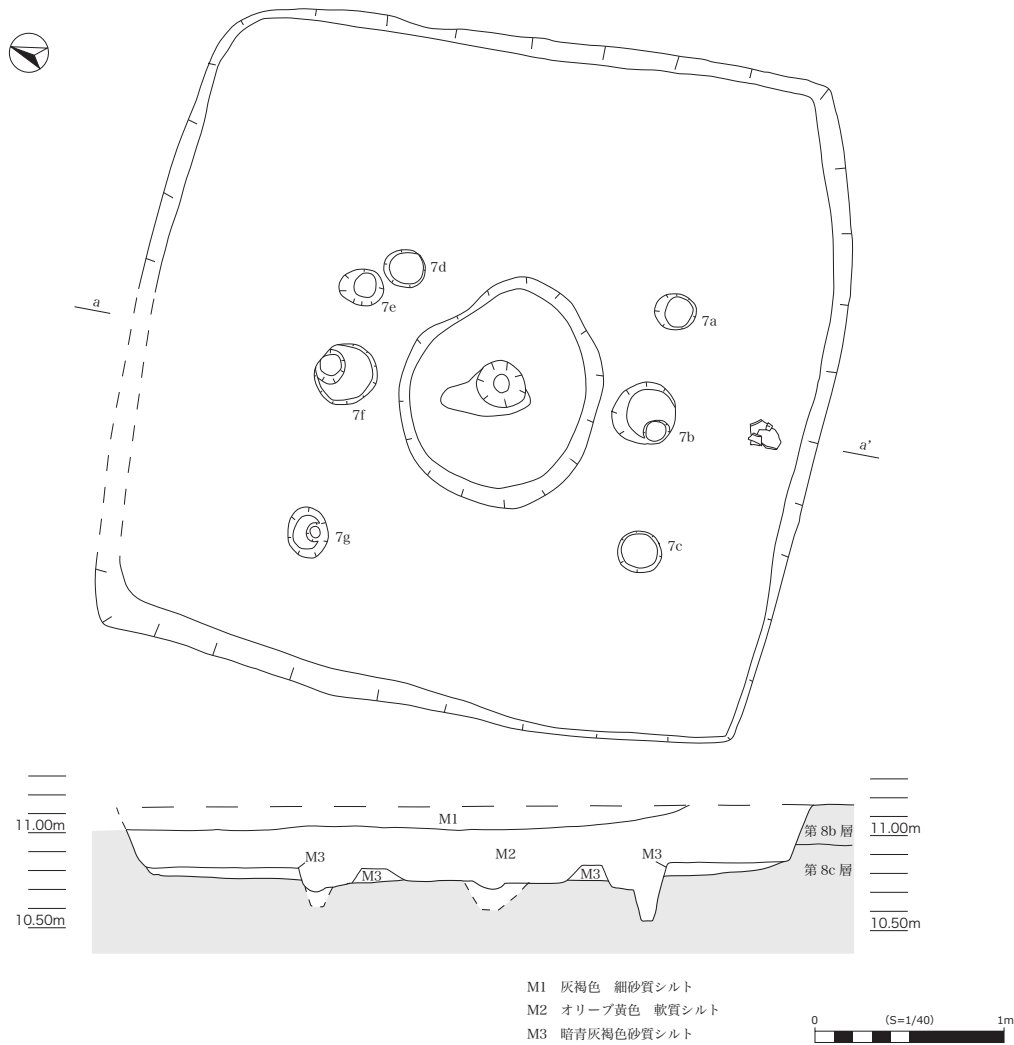


第 47 図 SB7 遺物出土状況

たと考えられる。実測図では不接合部分を正面にした a 面と、穿孔部分を正面にした b 面を掲載している。内外面ともミガキ調整である。外面は突帯上部が横方向のミガキ調整，胴部が縦方向のミガキ調整である。内面は主に横方向のミガキ調整が施される。胴下部内面には幅 3cm の帯状のススがほぼ水平に付着している。

133 は甕の口縁部から胴部である。内湾する形態を呈し，口唇部は丸い。口径 27.2cm を測り，口縁部はやや歪む。口縁部下には歪みの大きい一条の絡縄突帯が貼り付けられる。内外面ともミガキ調整である。外面は突帯上部が横方向のミガキ調整，胴下部が縦方向のミガキ調整である。内面は縦方向のミガキ調整のち横方向のミガキ調整がみられる。

134 は甕の口縁部から胴部である。内湾する形態を呈し，口径は復元径 27.3cm，最大径は口縁部下にあり復元径 28.4cm を測る。口唇部はコの字を呈する。口縁部下には一条の絡縄突帯が貼り付けられ，貼り付け部分内面はやや膨らみをもつ。内外面ともミガキ調整が見られ，外面は横方向



第48図 SB7 完掘平面図・断面図

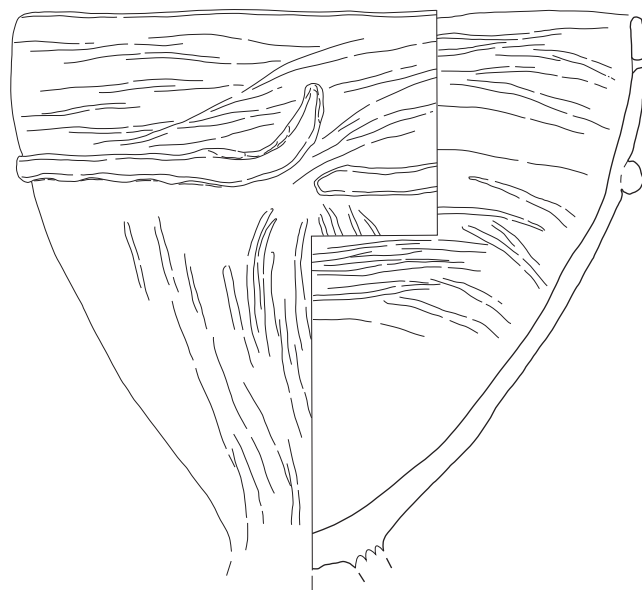
のミガキ調整, 内面は横方向ないし斜め方向のミガキ調整が見られる。

135 は口縁部が一部欠損しているが, 鉢の完形品である。椀状の形態を呈し, 底部は脚台状にくびれる。口縁部はやや外反し, 口唇部は先細りする。口径は復元径 13.1cm, 器高 9.2cm, 底径 5.4cm, 脚部径 5.9cm, 脚部高 0.8cm を測る。脚部は短く開き, 端部は丸い。脚接合部には接合時の指頭圧痕が明瞭に残るため, 歪みが大きい。内面はハケ調整, 外面は工具ナデ調整である。胴下半部には黒斑がみられる。

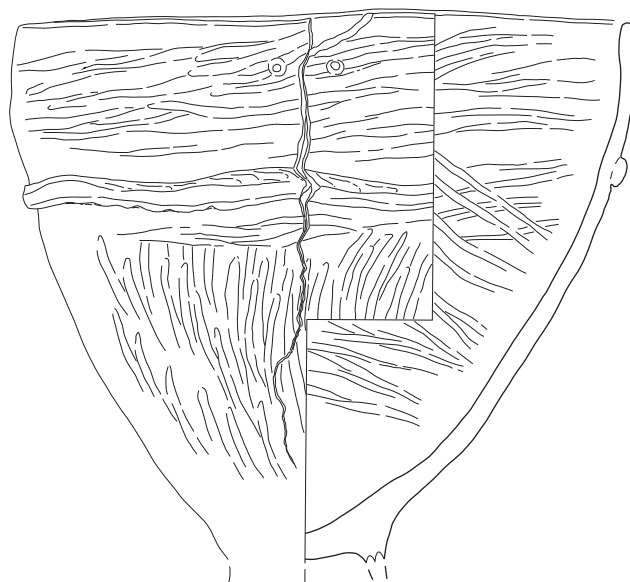
136 は鉢の脚部である。脚部は短くハの字に開き, 端部は丸みをおびる。脚部径 4.5cm, 脚部高 0.9cm, 底径 4.1cm を測る。内外面ともナデ調整である。

137 は甕の脚部から胴下部である。脚部は短く, 脚台状にくびれる。脚部径 6.9cm, 脚部高 1.0cm, 底径 6.5cm を測る。脚接合部は指頭圧痕が明瞭に残り, 端部はゆがむ。胴下半部は椀状に立ち上がる。外面は縦方向のミガキ調整, 内面はナデ調整である。

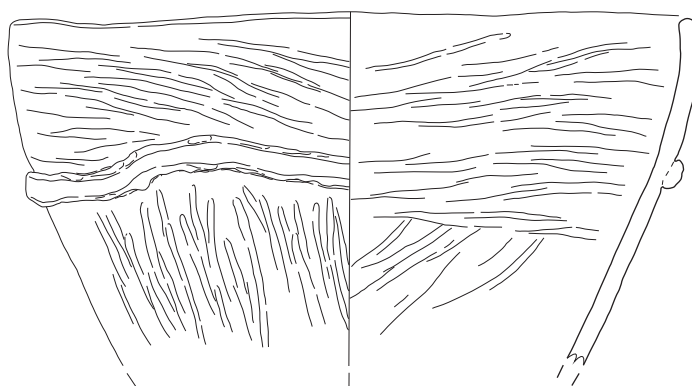
138 は甕の脚部から胴下部である。脚部は短く直線的に開き, 端部を丸くおさめる。脚部径は復元径 6.7cm, 脚部高 1.6cm, 底径は復元径 5.9cm を測る。脚接合部には指頭圧痕が残る。脚天井



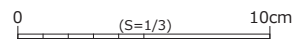
132a



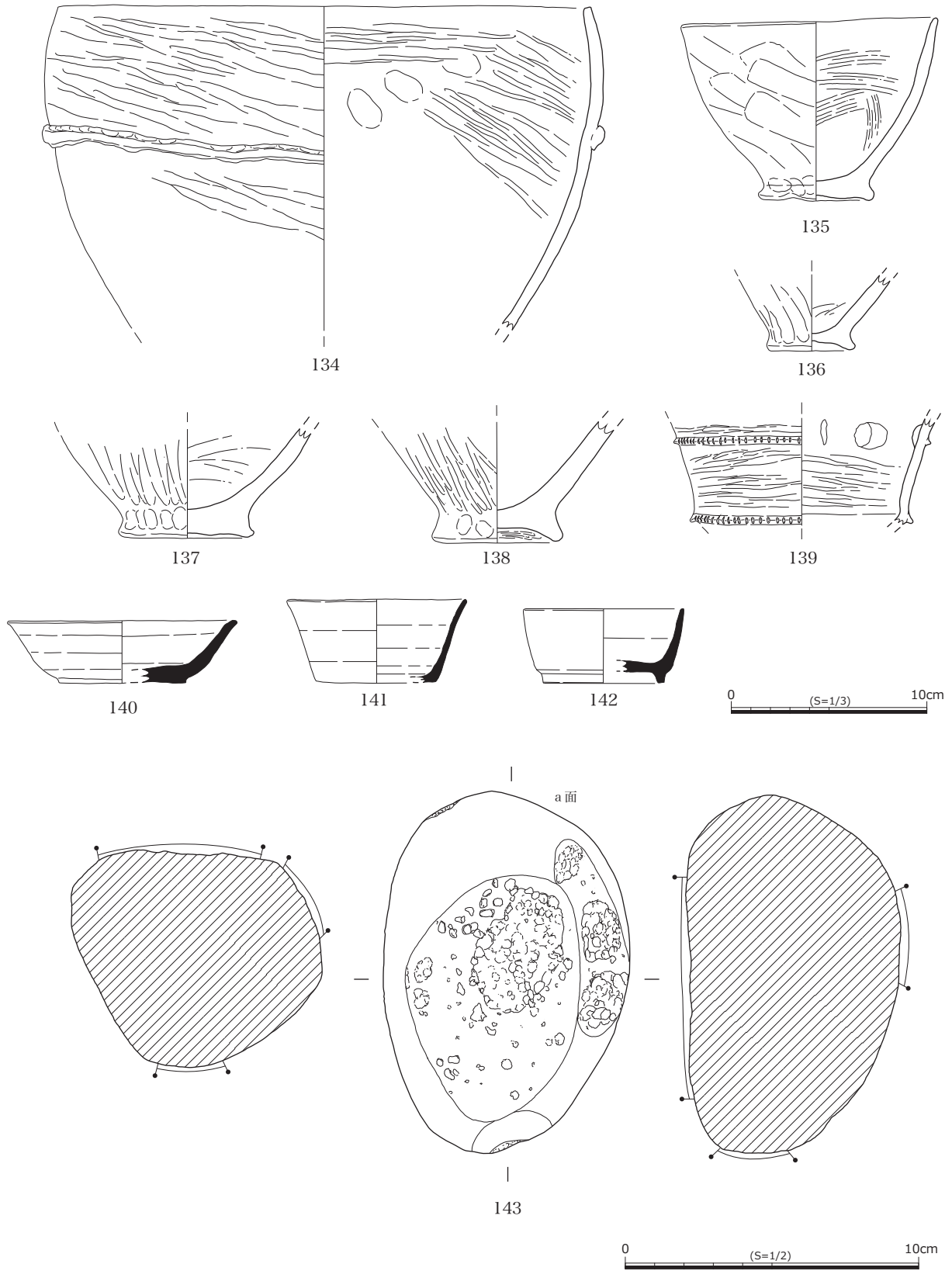
132b



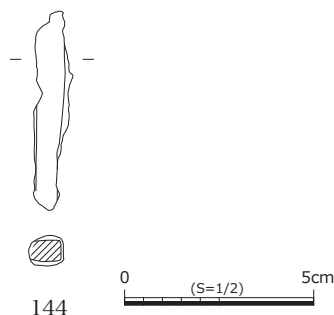
133



第49図 SB7 出土遺物 1



第50図 SB7 出土遺物2



第51図 SB7出土遺物3

部は平坦面がつくられる。外面はミガキ調整，内底面はナデ調整，脚内面はミガキ調整である。

139は高杯の杯部である。やや外反して開く形態で，同部には二条の刻目突帯が施される。刻目の間隔は平均2mmと狭く，単位は小さい。刻目の原体は不明である。内面には，一部欠損しているが，把手が貼り付けられた痕跡がみられる。内外面とも横方向のミガキ調整がみられる。胎土は非常に細かい。

140から142は須恵器の杯である。140は台状の底部がつく。胴部から口縁部にかけてゆるやかに外反して開く形態である。口唇部は外側にわずかに突出する。口径は復元径11.7cm，器高3.2cm，底径は復元径6.5cmを測る。内外面とも回転ナデ

調整で仕上げられる。

141は平底の須恵器杯である。形態は箱型で口縁部はゆるやかに外反する。口径は復元径9.2cm，器高4.3cm，底径は復元径6.1cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で仕上げられる。焼成は硬質だが，胎土はやや粗い。

142は形態が箱型で高台が付く。胴部から口縁部にかけて直線的に開く形態である。口径は復元径8.2cm，器高3.8cm，高台径は復元径6.2cm，高台高0.5cmを測る。高台は断面コの字形で，接地部分には面をもつ。

143は不整形な安山岩礫を用いた凹石である。a面中央部に敲打による凹面が認められる。またa面右側面，下端部，左側面上部とa面の裏面に敲打痕が認められ，端部を用いていたことが分かる。

144は残存長6.2cm，上方の幅は0.6cm，下方の幅は0.8cmで，断面は長方形を呈するようである。形態からは長頸鉢の頸部の可能性も考えられる。

【SB9】(第52～55図)

SB9は，主軸を南北にとり，長軸4.1m，短軸3.9m+ α の不整台形プランを呈する可能性がある。検出面からの竪穴深さは最大で73cmを測る。

埋土中にピット1基が検出された。ピットは最大径14cmの円形で，深さ11cmであった。底部から青銅製鈴145が出土した。このピットは，検出面がSB9の検出上端より低い位置であり，また，SB9検出面より上面で該当する遺構や関連する遺構の検出がないことから，SB9の埋没過程において単独で設けられたピットであることになる。ピットの埋土中からは青銅製鈴が出土しており，ピットの状況からは，埋納を目的として設置した可能性が出てくる。

SB9は，住居とした他の遺構と比較して，平面形状が異なっていること，竪穴が特段に深いこと，柱穴が検出されていないといった相違点があるため，ここでは，「住居」として分類し記載したが，それ以外の用途についても検討する必要があると認識している。ピットの設置とSB9との関連については，検出状況からは判断できない状況である。仮に，関連性があるとすれば，SB9の用途についても課題として捉える必要がある。

〈SB9出土遺物〉

145は完形の青銅製鈴である。外面は丁寧に研磨され，型合わせの稜線は消えている。鈴口はいびつな形状である。内部に石丸を有する。全体高3.0cm，体部幅2.2cm，体部高2.3cmを測る。



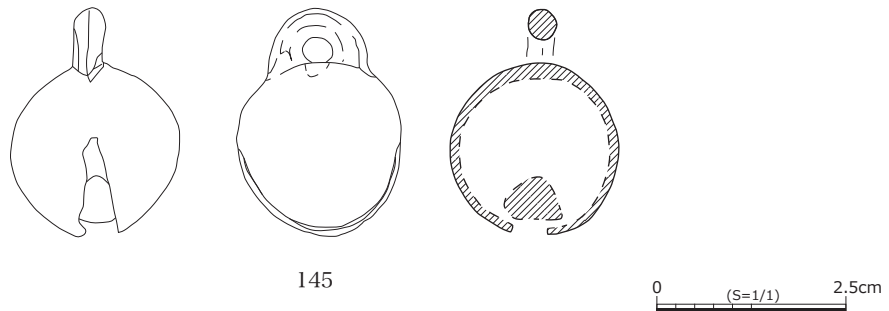
第52図 SB9 検出面遺物出土状況

146から150は甕である。146は甕の口縁部で、直口する形態を呈する。口唇部はコの字形である。口縁部下には一条の貼付け突帯を有し、刻目が施される。この刻目の間隔は大きく、原体は指頭によるものである。外面はナデ調整、内面はミガキ調整である。

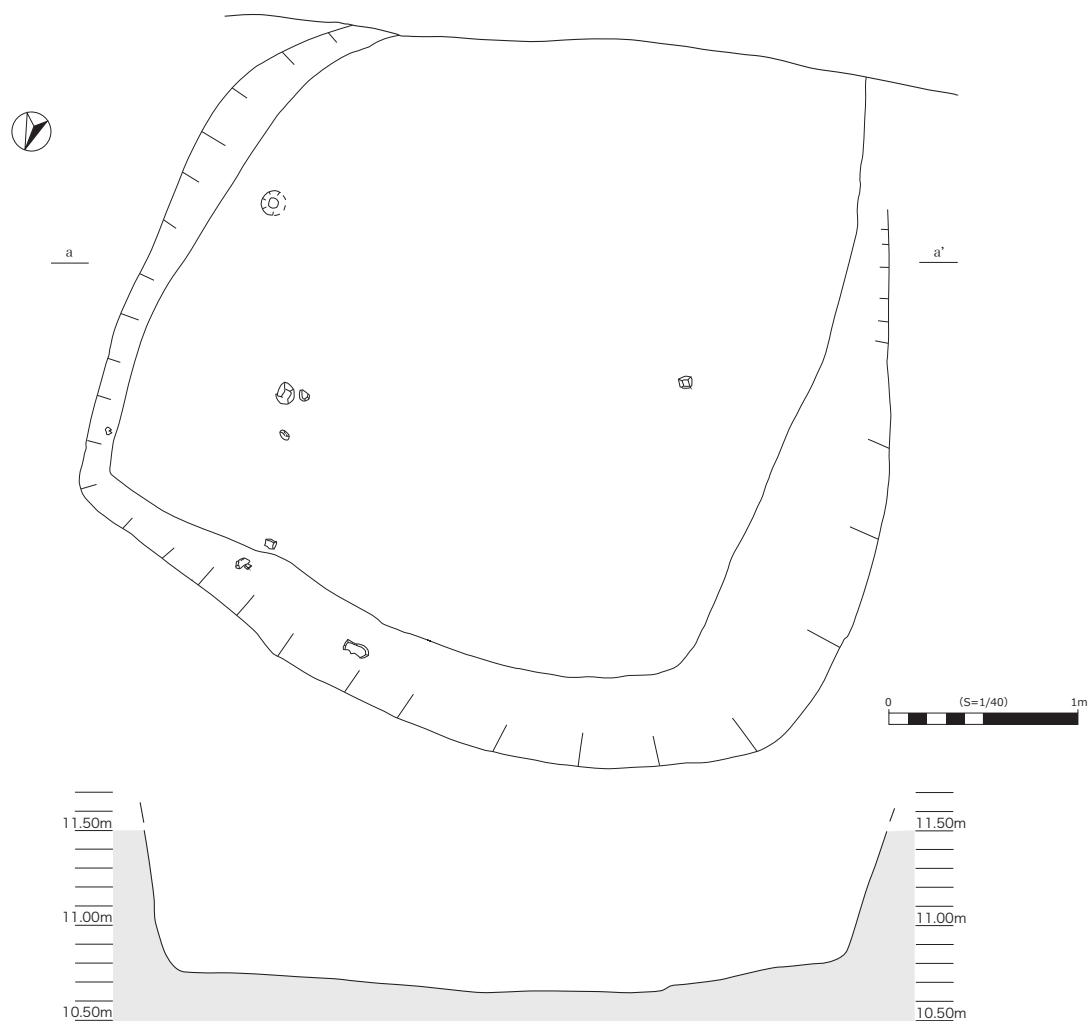
147は直口する甕の口縁部である。口唇部はコの字形である。口縁部下には一条の貼付け突帯を有し、貼付け時の強いナデにより、突出は少ない。外面の調整は、突帯上部が横方向のミガキ調整、突帯下部は縦方向のミガキ調整である。内面は斜め方向のミガキ調整がみられる。

148は甕の脚部から胴部である。脚部はハの字に短く開き、端部は丸く外反する。脚部径は復元径9.0cm、脚部高は1.5cm、底径は復元径7.8cmを測る。脚天井部形態はゆがんだ平坦部をもつ。脚接合部は指頭圧痕が明瞭に残り、脚部の歪みは大きい。胴部は直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

149は甕の脚部で、直線的に開く形態である。端部は丸みをおびる。脚部径7.0cm、脚部高3.0cm、底径5.9cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。脚接合線がわずかに確認でき、外面には指



第53図 SB9 検出面出土遺物



第54図 SB9 平面図・断面図

頭圧痕が残る。内外面ともナデ調整である。

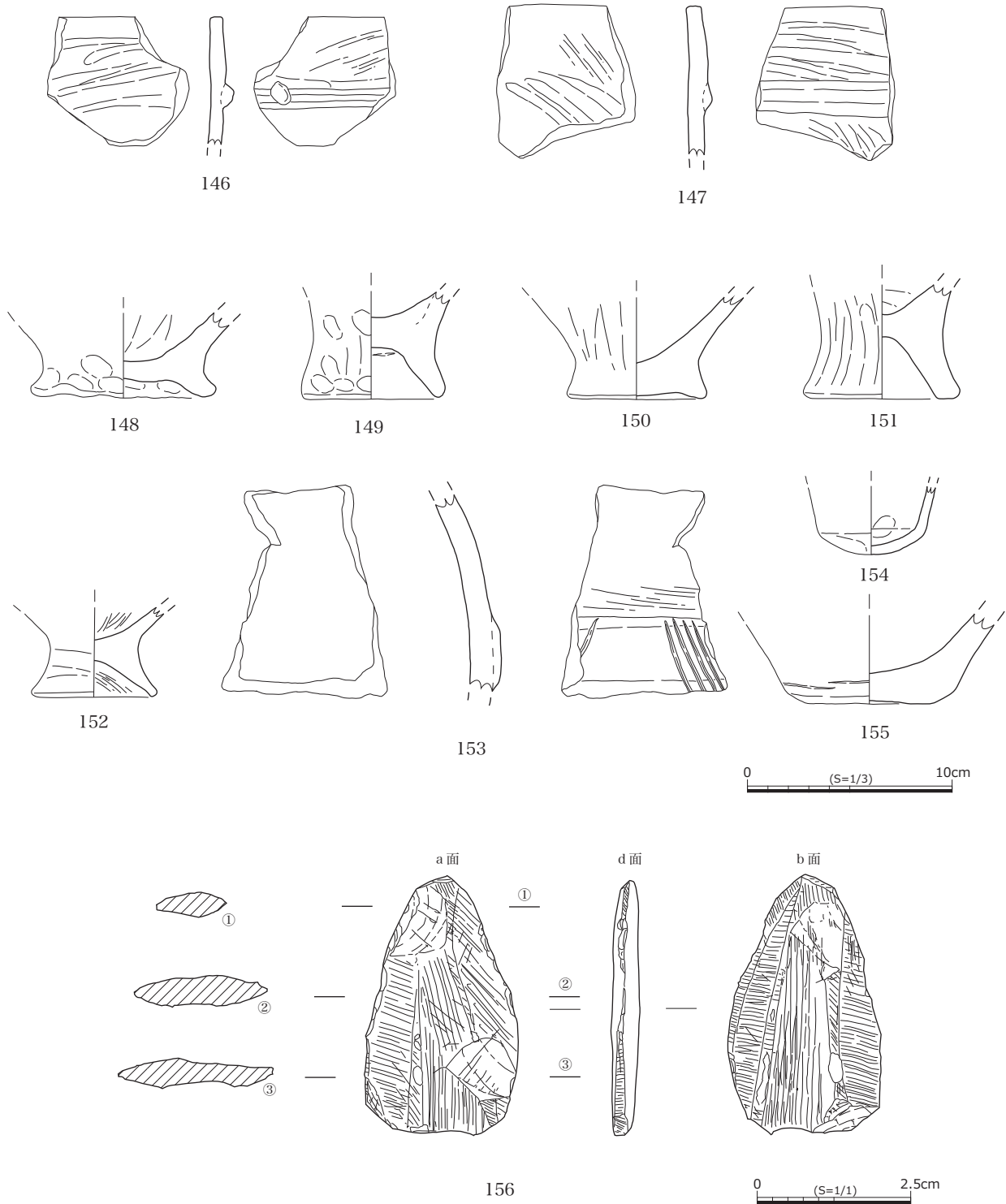
150 は甕の脚部から胴下部である。脚部はわずかに上げ底状になり、端部は丸みをおびる。胴部は直線状に開く。脚部径は復元径 6.8cm, 脚部高 1.9cm, 底径は復元径 6.0cm を測る。内外面ともナデ調整である。

151 は甕の脚部である。脚部はハの字に開き、接地部分には面をもつ。脚部径は復元径 7.7cm, 脚部高 3.3cm, 底径は復元径 6.0cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。全体的に白く発色している。

152 はハの字に開く脚部から胴下部である。脚部径は復元径 6.0cm, 脚部高 2.4cm, 底径は復元径 4.2cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内底面はミガキ調整, 外面はナデ調整である。外面脚接合部の上下周辺には赤色塗彩がみられる。

153 は壺の胴部である。幅広突帯が貼り付けられる。突帯幅は 3.7cm, 厚みは最大 5mm を測る。突帯内には四条の刻目が鋸歯状に施される。外面調整はナデ調整で内面は摩滅のため不明である。

154 は埴の底部から胴部である。底部は丸底で、胴部との境目には内外面ともゆるやかな稜をもち、復元径 5.1cm を測る。胴部は直線的に開く形態である。



第55図 SB9 出土遺物

155は壺の底部で、底面はわずかに上げ底状になる。底端部は丸く、底径は復元径8.2cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。

156は頁岩製の剥片を素材とした磨製石鏃である。両面と両側面に丁寧な研磨痕が認められる。特にb面左側縁よりは幅2mm程度であるものの他の面に比べさらに丁寧に研磨されている。先端

部は欠損後に研磨により再整形をしている。

【SB10】(第56・57図, 図版8-4)

SB10は、主軸を南西-北東にとる方形プランのコーナーと、竪穴の一部が検出された。竪穴の全体法量は不明であるが、検出された部分の竪穴最大長は3.7mを測る。検出面からの竪穴深さは最大で約62cmを測る。

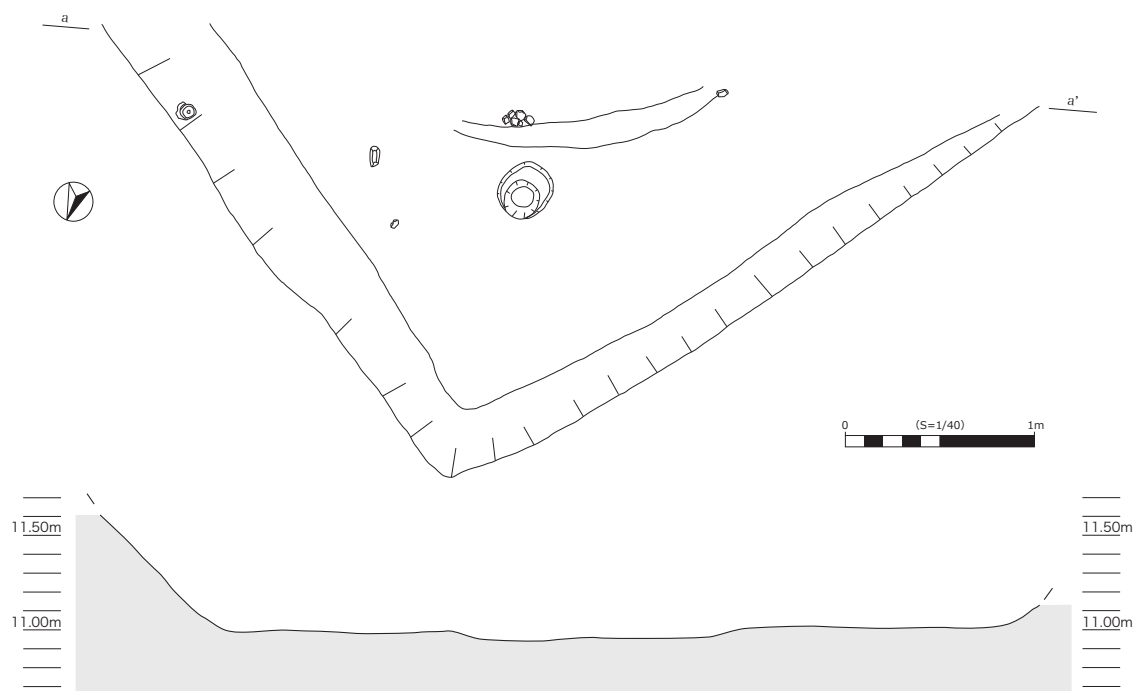
付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット1基が検出され、ピットに隣接して、床面の落ち込みが検出された。ピットは長軸29cm, 短軸25cmの楕円形であり、深さ60cmの二段掘りである。二段目は竪穴のコーナー側にずれており、長軸20cm, 短軸16cm, 深さ53cmの円形ピットとなる。

床面に一部がみられる落ち込みについては、上端が弧状を呈し、段差5cmを測る。古墳時代の鹿児島地域では、「方形+円形」竪穴といった特徴的な竪穴住居のプランがあるが、この落ち込みの位置からみて、二段目の竪穴の一部が検出された可能性も考えておきたい。

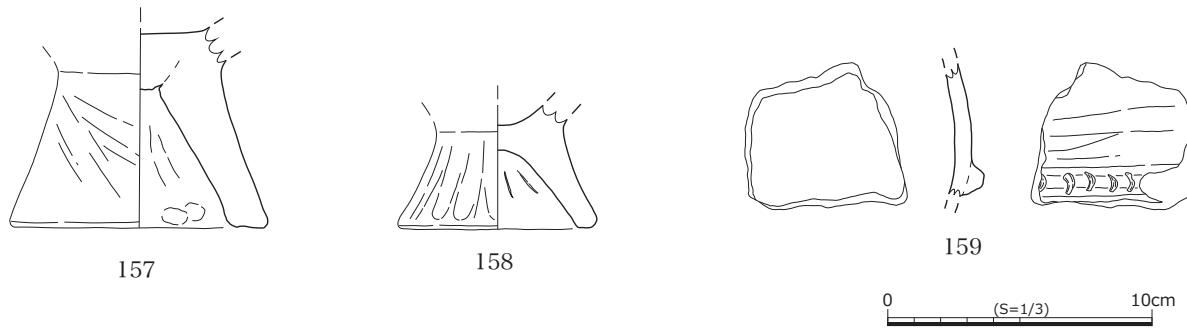
157は甕の脚部である。直線的に開く脚部形態で、接地面はわずかにくぼみをもつ。脚部径9.6cm, 底径6.0cm, 脚部高5.7cmを測る。脚接合部は粘土塊を充填する方法で接合される。

158は甕の脚部である。直線的に開く形態で、接地部分にはわずかに面をもつ。脚部径7.5cm, 脚部高4.8cm, 底径4.8cmを測る。脚部形態はドーム状である。外面調整は縦方向のナデ調整、内面は工具ナデ調整によるものである。

159は甕の口縁部である。口唇部は欠損しているが、内湾する形態であると考えられる。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯には逆Cの字の半裁竹管文が施される。内外面ともナデ調整である。



第56図 SB10平面図・断面図



第57図 SB10 出土遺物

【SB11】(第58図)

SB11は、主軸を北西－南東にとり、長軸2.8mの方形プランを呈するとみられる。検出面からの竪穴深さは約11cmを測る。調査区外に大部分が出ており、付帯遺構は検出されていない。

〈SB11 出土遺物〉

出土遺物総点数は21点だったが、いずれも細片であった。

【SB12】(第58図)

SB12は、主軸を北西－南東にとる方形プランとみられる。調査区外に大部分が出ており、法量は不明である。検出面からの深さは約14cmを測る。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット2基、土坑とみられる落ち込みの一部が検出された。便宜上12aと12bとした。ピット12aは直径34cmの略円形を呈し、深さ13cmを測る。ピット12bは、長軸28cm、短軸20cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。土坑とみられる落ち込みは深さ37cm程度である。ピット12bがピット上端と一部重なっている。

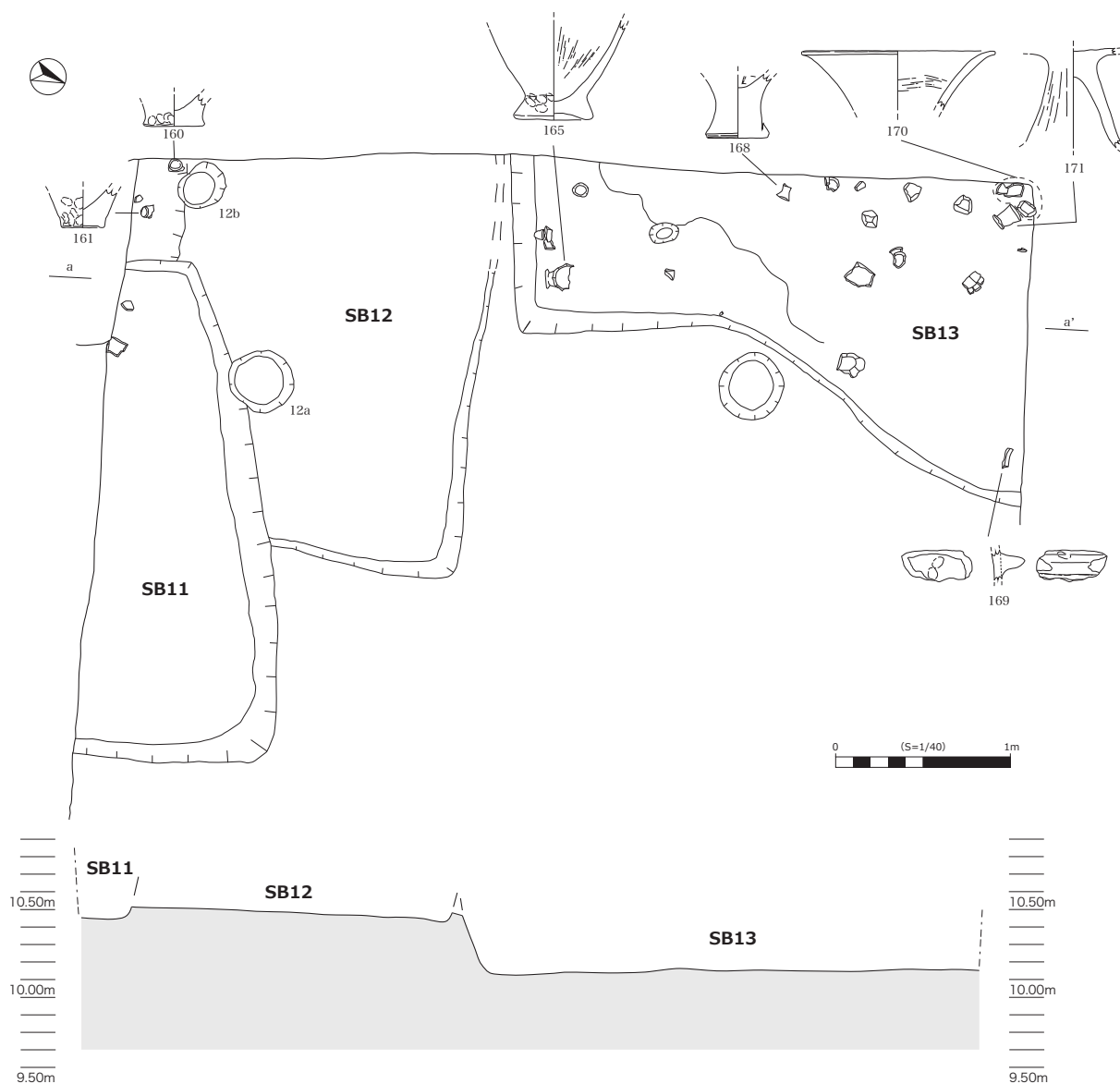
〈SB12 出土遺物〉

160と161は甕の脚部である。160は底部が脚台状に開く形態を呈し、底径は復元径で7.0cmを測る。脚部には指頭圧痕が残る。外底面はハケ調整、内面はナデ調整である。

161は底部が上げ底状を呈する。底径は復元径5.0cmを測る。底部付近は成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。底径がやや小さいことから鉢の可能性もある。内外面ともナデ調整がみられる。

【SB13】(第58図, 図版8-5～9-2)

SB13は、調査区外に半分以上が出ていると考えられるため、全体形は不明であるが、直角に近いコーナーから直線的に伸びた竪穴が、途中で曲線的に開き、方形と円形が組み合わさった柄鏡形に近い形状に見える。検出された長軸が3m、短軸が1.8mだが、全体の法量も不明である。検出面からの竪穴の深さ約26cmを測る。床面のレベルは、方形部分と円形部分で1～2cm程度の

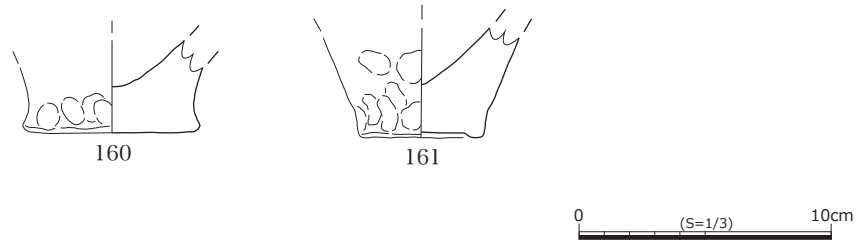


第58図 SB11・12・13 平面図・断面図

差しがなく、遺構の切り合いの可能性も低いと考える。竪穴の深さは最深で30cmを越えており、不整形の竪穴住居の可能性もある。付帯遺構として、床面にピット1基が検出されているが、長軸18cm、短軸10cmと小型である。竪穴の外にもピット1基が検出されており、直径38cmの略円形を呈し、深さ42cmを測る。竪穴外のピットと竪穴との関係は不明である。

〈SB13 出土遺物〉

162から168は甕である。162は甕の口縁部から胴部である。頸部で強く屈曲し、屈曲部内面には強い稜線が認められる。屈曲部には接合線がみられる。口唇部にかけて先細りになり、口唇部はM字状にくぼむ形態である。口径は復元径29.1cm、口縁部長3.8cm、頸部径は復元径25.0cmを測る。頸部下には三条の断面三角突帯が貼り付けられ、丁寧なヨコナデがみられる。外面調整は口縁部が丁寧なヨコナデ、胴部は縦方向のハケ調整のちヨコナデ調整である。内面調整は横方向のハケ調整がみられる。器面は褐色で、胎土には雲母を多く含んでいる。



第59図 SB12出土遺物

163は甕の口縁部から胴部である。頸部で強く屈曲し、内面には強い稜線がみられる。口縁部はわずかに受け口上を呈し、口唇部はM字状にくぼむ。口径は復元径28.5cm、口縁部長2.8cm、頸部径は復元径24.8cmを測る。頸部下は欠損のため不明だが、おそらく多条突帯が貼り付けられると考えられる。外面調整は縦方向のハケ調整、内面調整はナデ調整である。全体的に褐色に発色し、胎土には雲母を多く含む。

164は甕の口縁部から胴部である。口径は23.5cmを測り、口唇部は丸い。口縁部下には一条の突帯が貼り付けられる。この突帯には指頭による間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は平均で6.9cmを測る。外面調整は突帯上部が単位の太いミガキ調整、胴部はナデ調整である。内面調整はナデ調整である。

165は甕の脚部から胴下半部である。脚部は短く開く形態で、脚部径9.1cm、脚部高2.8cm、底径7.0cmを測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状で、端部は丸い。脚接合部には指頭圧痕が残る。胴部は緩やかに立ち上がる形態である。内外面ともナデ調整で仕上げられる。

166は甕の口縁部である。わずかに内湾する形態で、口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。この突帯は丁寧なヨコナデで貼り付けられる。内外面ともナデ調整である。

167は甕の脚部である。ハの字に長く開く形態で、先細りになり、端部は丸い。脚部径9.0cm、脚部高2.3cm、底径5.2cmを測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状を呈する。内外面ともナデ調整で、内底面には指頭圧痕が残る。

168は甕の脚部である。中空ではなく充実した脚台で、端部はM字状にくぼむ。脚部径7.2cm、脚部高3.5cm、底径7.1cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。器面は褐色を呈し、胎土には雲母が多く見られる。

169は大型甕の突帯部である。突帯は先細りする形態で、突帯幅は約2.3cmを測り、丁寧なヨコナデ調整で仕上げられる。器面は褐色を呈し、胎土には雲母が多く見られる。

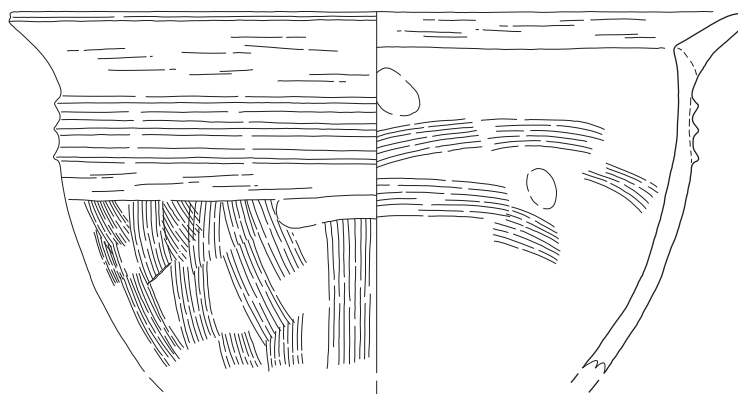
170は壺の口縁部である。ラッパ状に大きく開く形態で、口径は復元径22.0cmを測る。端部はわずかに面をもつ。内外面ともナデ調整で、外面にはスリップ状の付着物がみられる。

171は高杯の脚部である。脚部はスカート状に開く形態で、杯部はほぼ水平に広がる。脚接合部径は6.0cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。

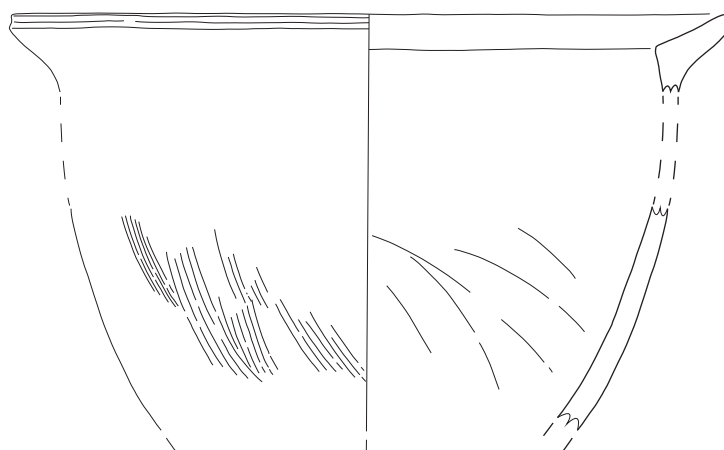
172は高杯の脚部である。脚部は直線的に開き、端部は丸い。脚部径は復元径22.2cmを測る。内外面ともナデ調整である。

173は小型壺の底部から胴部である。底部はゆがみがみられる平底で、胴部は樽状に膨らむ。底径は3.6cmを測る。外面調整はナデ調整、内面調整は工具ナデ調整である。

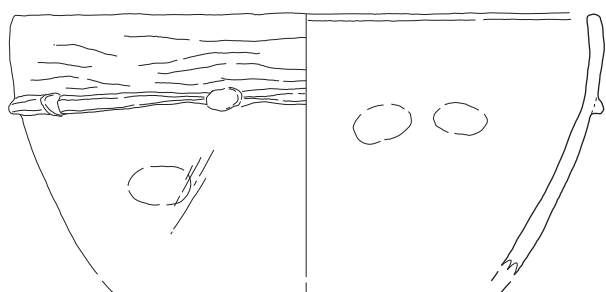
174は磨製石鏃である。幅4.1cm、高さ9.0cm、厚さ4.1cmを測る



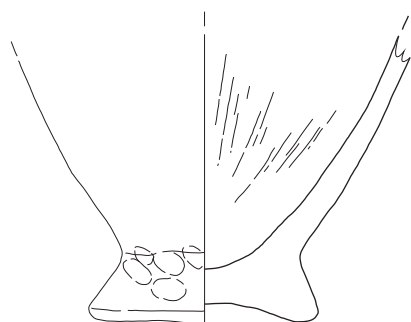
162



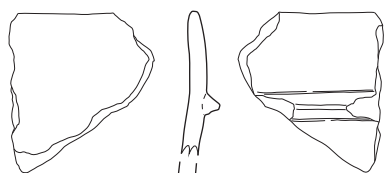
163



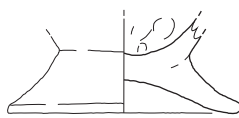
164



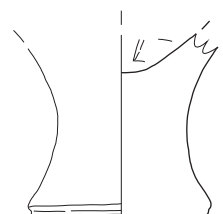
165



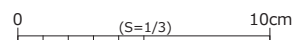
166



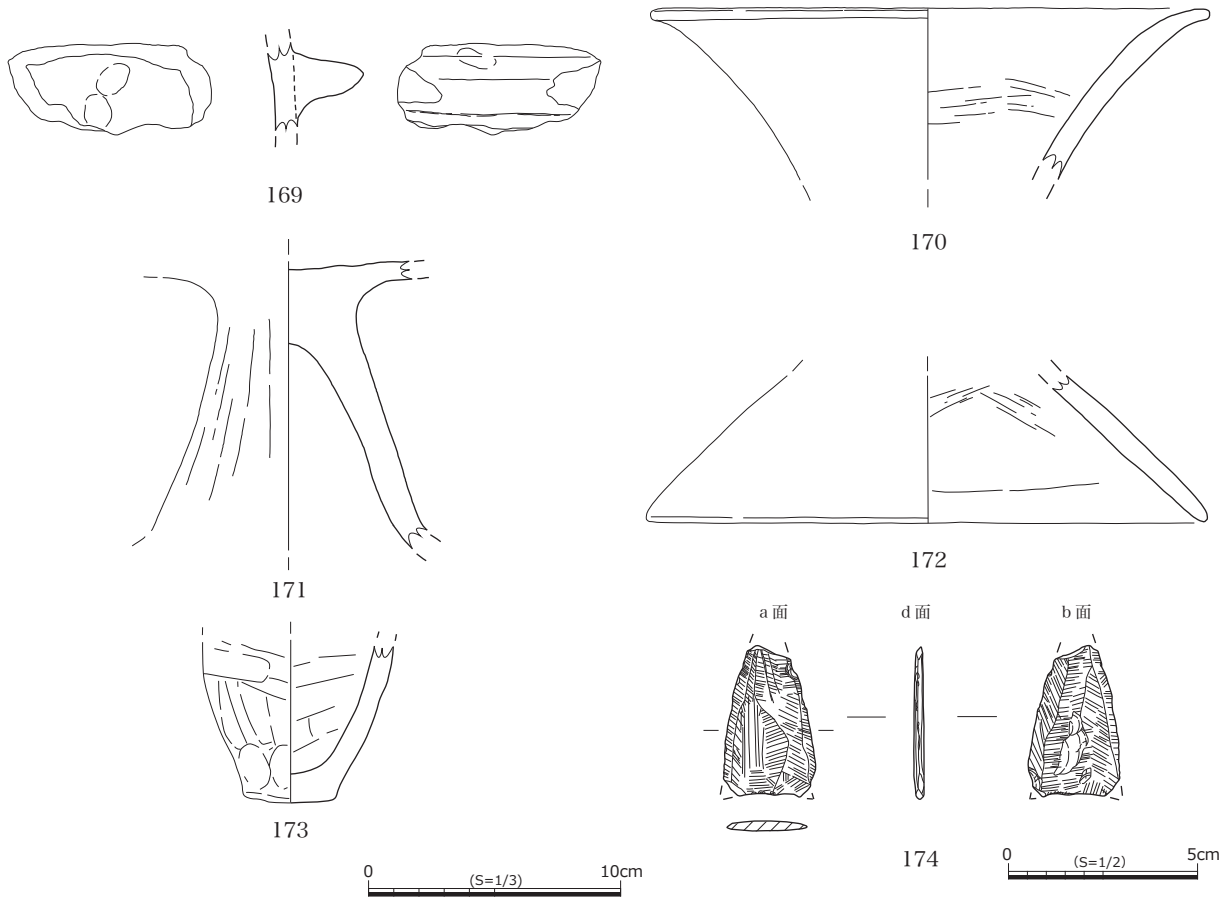
167



168



第60図 SB13 出土遺物 1



第 61 図 SB13 出土遺物 2

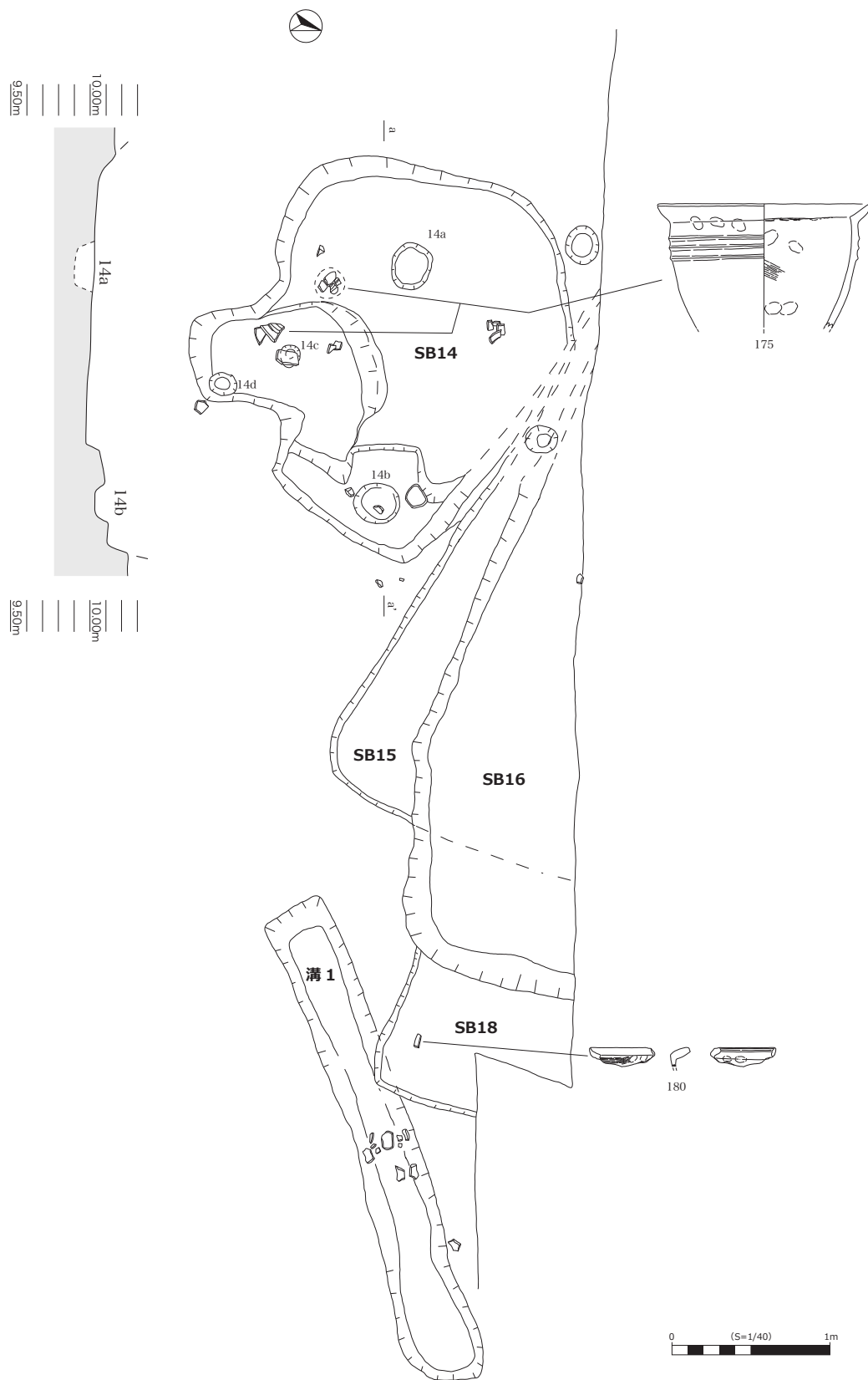
【SB14】(第 62・63 図, 図版 9-3・9-5)

SB14 は、主軸を北西-南東にとり、長軸 2.9 m、短軸 2.1 m の歪んだ柄鏡形のプランを呈する。検出面からの竪穴深さは約 20cm を測る。竪穴外にピットが 1 基検出されているため、方形+円形の二段掘りとなる大型竪穴住居の二段目のみが検出された可能性もある。ただ、竪穴の一部は SB15 と切り合っているため、一部形状が不明である。

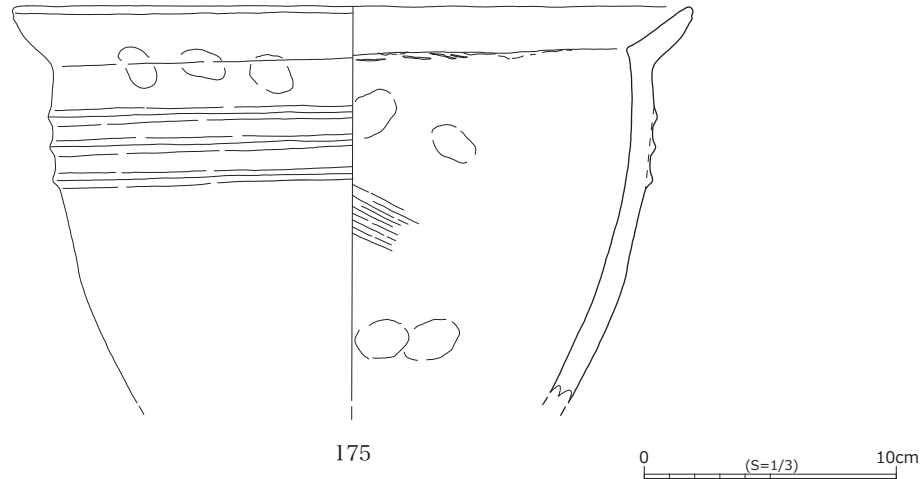
竪穴内の付帯遺構として、柱穴とみられるピット 2 基、小型のピット 2 基、張り出し部分に設けられた土坑 1 基、カーボン集中箇所 1 箇所検出された。

ピットは便宜上 14 a から 14 d とした。ピット 14 a は長軸 30cm、短軸 26cm の楕円形であり、深さ 14cm を測る。ピット 14 b は長軸 30cm、短軸 24cm の略円形であり、深さ 40cm を測る。ピット 14 c は長軸 17cm、短軸 12cm の楕円形であり、深さ 17cm を測る。ピット 14 d は長軸 18cm、短軸 14cm の楕円形であり、深さ 17cm を測る。ピット 14 c は、上端を礫が塞いだ状況で検出されており、主柱穴とは考えにくい。

張り出し部分の土坑は、奥行 1.2 m、幅 1.1 m を測るが、張り出し部分では幅 60cm 前後となる。床面とのレベル差は 5 cm 程度である。なお、ピット 14 b の周りの床面は、幅 94cm 程度、



第62図 SB14・15・16・18平面図



第63図 SB14 出土遺物

奥行が最大で60cm，最小で20cmの範囲で，他の床面より7cm程度高くなっている。段差を意図的に設けたものとみられ，ピット14bの部分だけ西側に張り出している。竪穴外のピットは長軸26cm，短軸22cmの楕円形で，深さ28cmを測る。

〈SB14 出土遺物〉

出土遺物総点数は36点である。

175は甕の口縁部から胴部である。頸部は強く屈曲する形態を呈し，内面には強い稜をもつ。口縁部はゆるやかに受け口状となり，口唇部はM字状を呈する。口径は復元径27.0cm，頸部径23.9cmを測る。頸部下には三条の断面三角突帯が貼り付けられ，丁寧なヨコナデで仕上げられる。頸部内面の口縁部との接合部分には，接合時の爪痕が残る。内外面ともハケ調整後，ナデ調整が主体である。器面は褐色で，胎土には雲母を多く含んでいる。

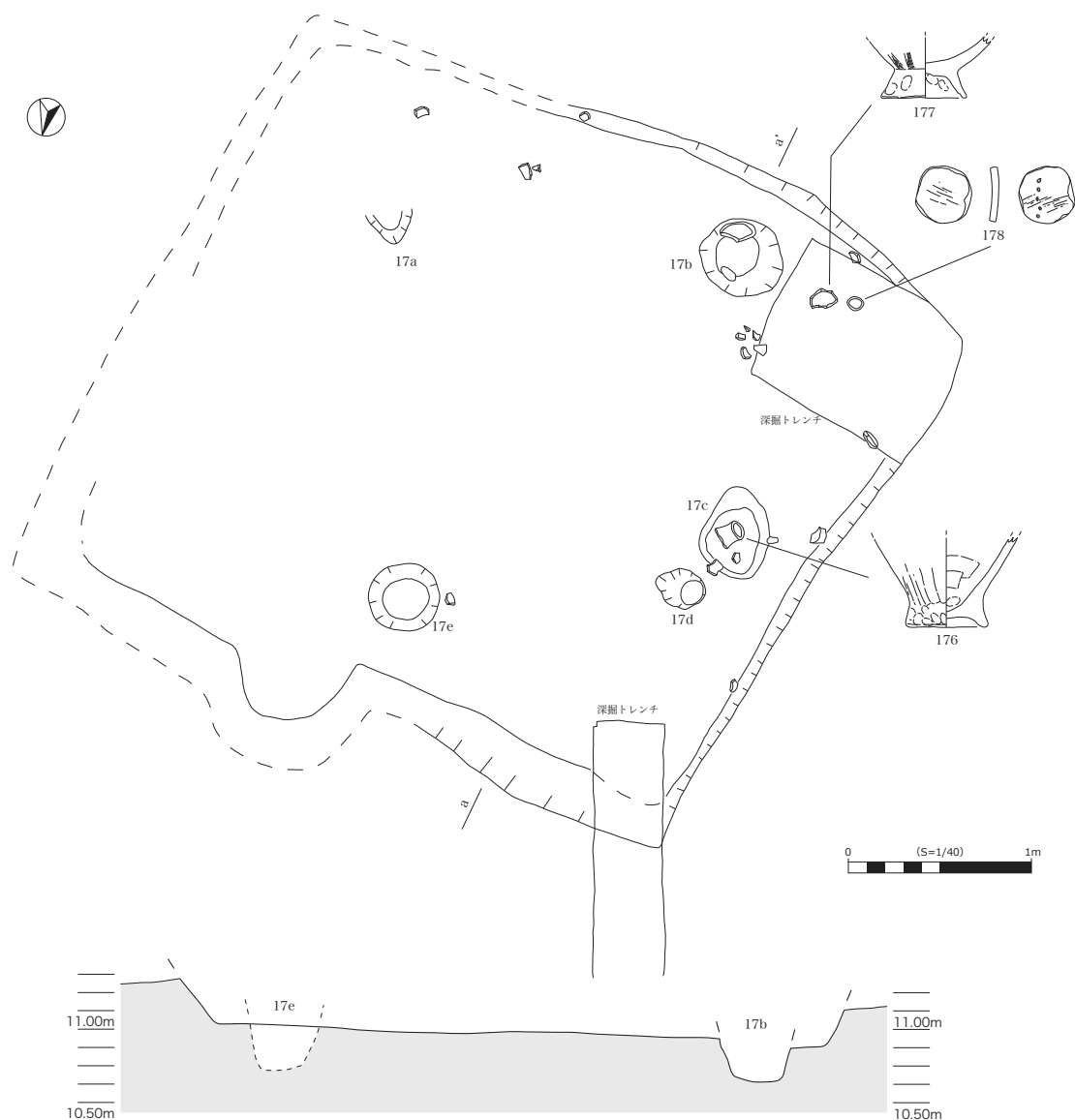
【SB15・16】(第62図，図版9-4～9-5)

SB15・SB16は，切り合いが大きく，また大半が調査区外に出ているため，全体形状は不明であるが，いずれも方形プランと考えられる。

SB15は，SB16に切られており，全体形は不明であるが，直角に近いコーナーが検出されており，方形プランと考えられる。検出された竪穴の一辺は3.5m以上となり，検出面からの竪穴深さは約10cmを測る。

付帯遺構として，床面にピット1基が検出された。法量は，長軸20cm，短軸18cmの略円形を呈し，深さ24cmを測る。出土遺物は無い。

SB16は，主軸をほぼ南北にとると考えられる。大半が調査区外に出ているため，全体形は不明であるが，直角に近いコーナーが検出されており，方形プランと考えられる。長軸4m以上となる。検出面からの竪穴深さは約30cmを測る。付帯遺構は検出されていない。出土遺物は無い。

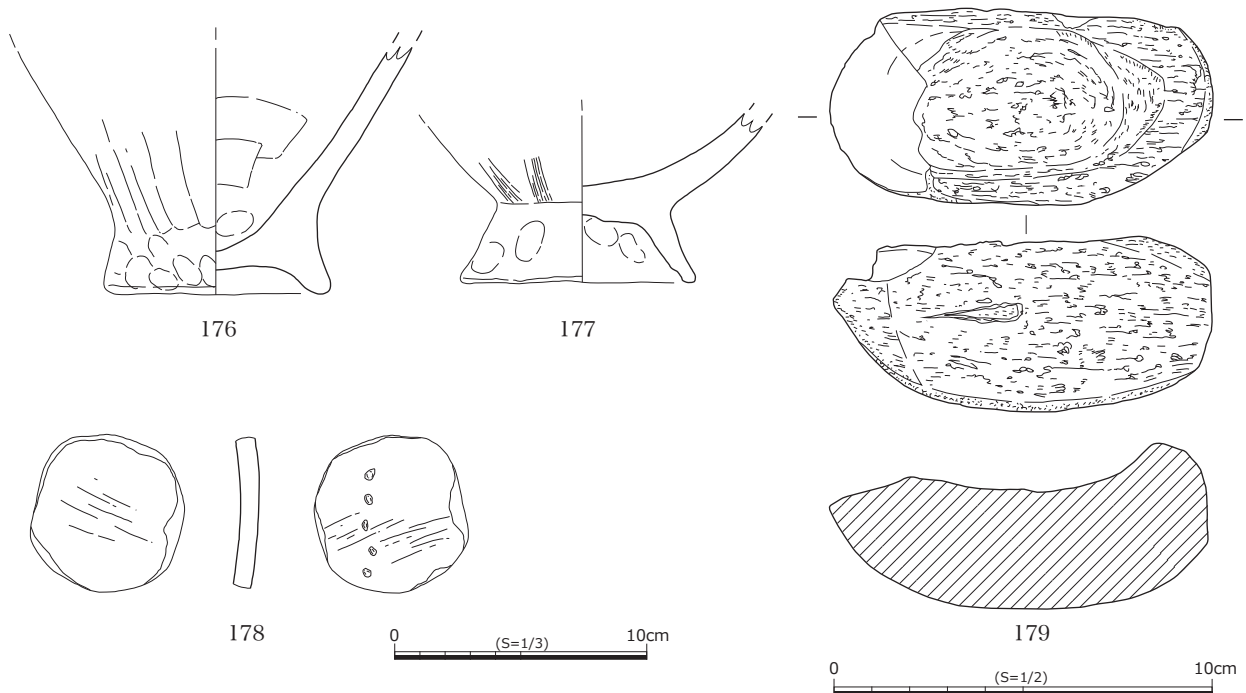


第64図 SB17 平面図・断面図

【SB17】(第64・65図, 図版10-1)

SB17は、主軸を東西にとり、検出できた1辺3.6mの方形プランを呈する。検出面からの竪穴深さは約22cmを測る。検出した竪穴下端形状からは、幅60cm、長さ30cm程度の舌状の張り出しを設けたものである。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット5基が検出された。ピット17aは検出された軸で幅24cm、深さ11cmを測る。ピット17bは長軸46cm、短軸42cmの楕円形であり、深さ21cmを測る。ピット17cは長軸42cm、短軸38cmのゆがんだ方形様を呈し、深さ1.3mを測る。ピット17dは長軸26cm、短軸20cmの楕円形であり、深さ9cmを測る。ピット17eは直径38cmの円形であり、深さ21cmを測る。ピット17cのみが他と比較して著しく深い。また、ピット



第65図 SB17出土遺物

ト 17 d はピット 17 c に近接しているため、柱穴の掘り直しも考慮にいたしたが、開口部の径が小さく浅い。また、斜めに入り込んでいることから、ピット 17 c の掘り直しの可能性は低いとみられる。したがって、柱構造を構成するピットは、2穴あるいは4穴である可能性がある。ピット b・e を主軸を構成する柱穴とすれば2穴となる。一方4穴の場合、軸組みと堅穴とが90度回転しずれており、堅穴と軸組みとの関係に整合性が失われる。このため、ピット a・c は床面付帯遺構の可能性も出てくる。

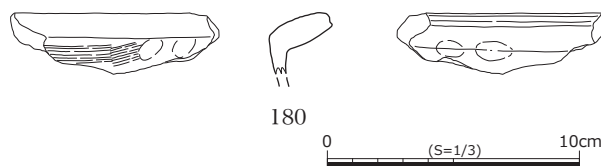
〈SB17 出土遺物〉

176 と 177 は甕の脚部から胴下部である。176 は脚部が短く伸びる形態を呈し、端部は丸い。脚部径 9.0cm、脚部高 2.1cm、底径は 8.0cm を測る。脚天井部形態はゆるやかな平坦面をもつ。脚部外面には成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。胴部は脚接合部から直線的に伸び、内底面には指頭圧痕がみられる。内外面とも工具ナデが主体である。

177 は甕の脚部から胴下部である。脚部は直線的に開き、端部は丸みを帯びるが歪む。脚部径 9.3cm、脚部高 2.9cm、底径 7.0cm を測る。脚天井部形態は歪みが大きく、中央部分がくぼむ。胴部は膨らみをもちながら立ち上がる。外面調整はハケ調整後ナデ調整、内面調整はナデ調整である。

178 は甕もしくは壺の胴部を転用した円盤土製品である。径 6.0cm ～ 6.2cm の略円形を呈する。端部は打ち欠かれ、その後研磨した痕跡がみられる。外面には直径 2 ～ 3mm の打ち欠きによる列点文がみられる。

179 は舟形軽石加工品である。軽石を平面形楕円に加工し、内面を抉り凹ませている。長さ



第66図 SB18 出土遺物

10.2cm, 幅 5.1cm, 厚さ 4.6cm を測る。

【SB18】 (第62・66図, 図版10-2)

SB18 は, 大半が調査区外に出ており, 全体の法量, 形状ともに不明であるが, 直角に近い竪穴のコーナーが検出されているため方形プランとみられる。検出面からの竪穴深さは約 5 cm を測る。

〈SB18 出土遺物〉

180 は甕の口縁部である。頸部で強く屈曲する形態で, 内面には強い稜線がみられる。口唇部は M 字状である。内面調整はハケ調整, 外面はナデ調整である。

【SB19】 (第67図)

SB19 は, 一部の検出であり, 法量や平面形状も不明である。検出面からの竪穴深さは約 10cm を測る。出土遺物は無い。

【SB20】 (第67図)

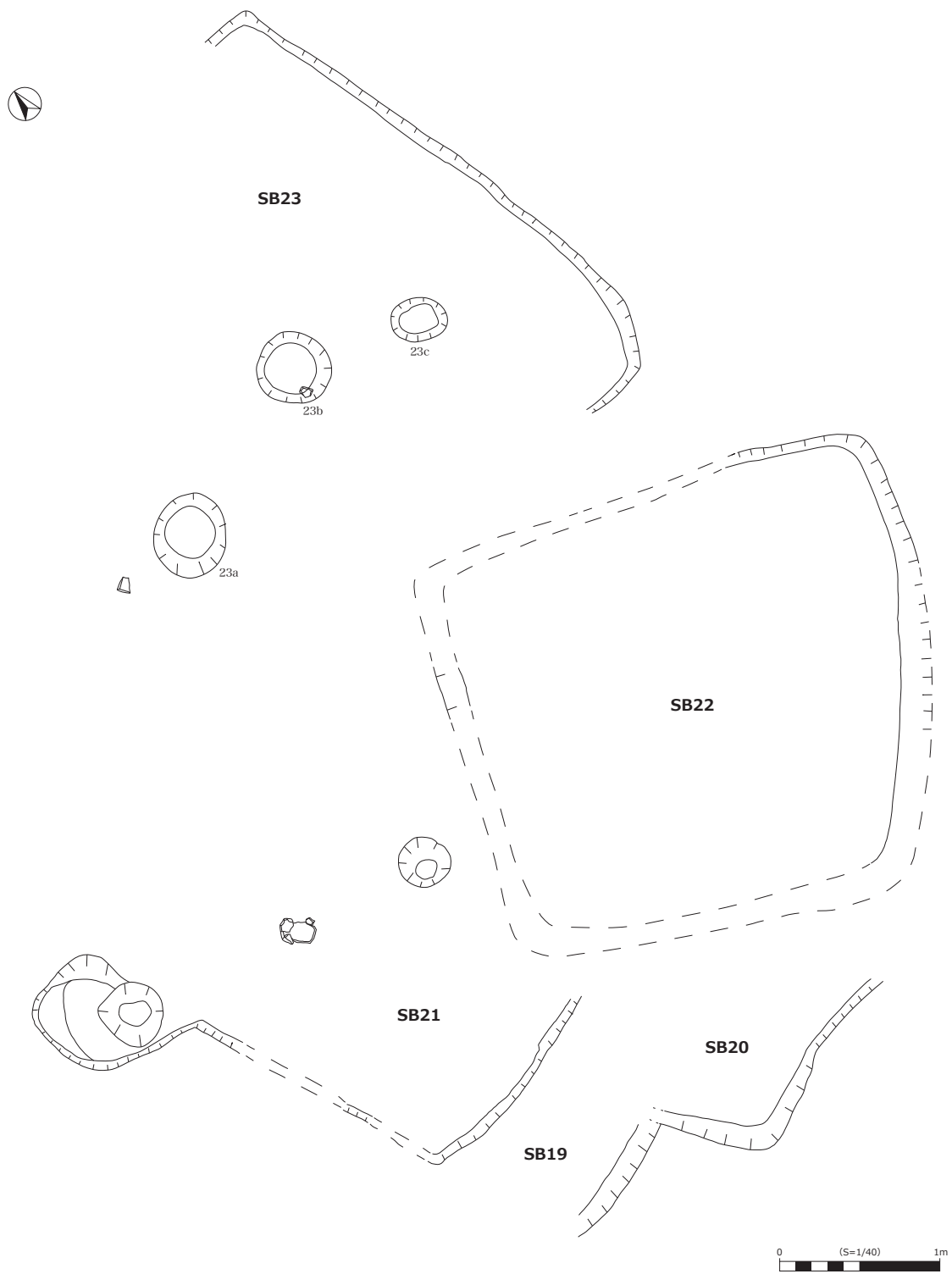
SB20 は, 一部の検出であり, 法量は不明である。直角に近いコーナーが検出されており, 方形プランの可能性がある。検出面からの竪穴深さは約 20cm を測る。SB20 ~ 22 については出土遺物総点数 1,425 点を数える。

【SB21】 (第67・68図)

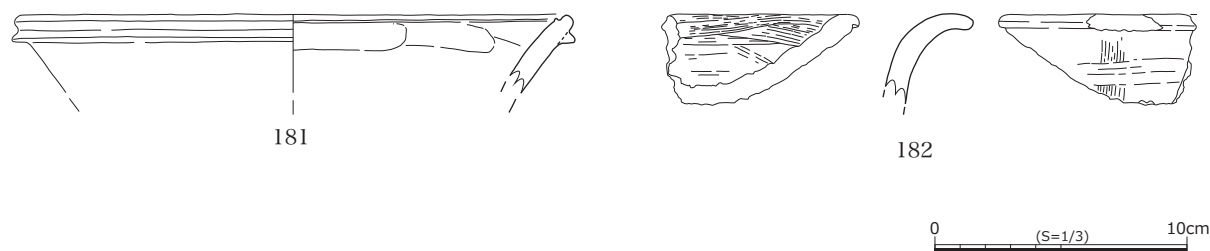
SB21 は, 一部の検出であり, 法量は不明であるが, 直角に近いコーナーが検出されており, 方形プランを呈すると考えられる。また, 竪穴一辺に幅 80cm, 長さ 60cm の舌状の張り出し部分が検出されている。検出面からの竪穴深さは約 10cm を測る。

付帯遺構として, 床面に柱穴とみられるピット 1 基, 張り出し部分に土坑 1 基が検出された。ピットは, 長軸 32cm, 短軸 32cm の円形であり, 深さ 34cm を測る。張り出し部分の土坑は, 長短軸 40cm を測り, 略円形を呈する。深さ 20cm を測り, 断面形状はすり鉢状を呈する。

〈SB21 出土遺物〉



第 67 図 SB19・20・21・22・23 平面図



第 68 図 SB21 出土遺物

出土遺物総点数は 799 点である。

181 は壺の口縁部である。直線的に開く形態で、口唇部は二分状になる。口径は復元径 22.3cm を測る。口縁部内面は微小な突出部分をもつ。内外面ともナデ調整がみられる。胎土には雲母が多く混入する。

182 は壺の口縁部である。口縁部は大きく外反する形態を呈し、口唇部はわずかに垂下する。口唇部は丸みをおびる。外面調整はハケ調整後ナデ調整、内面調整はハケ調整である。

【SB22】 (第 67・69 図)

SB22 は、竪穴の各辺が部分的に検出されているが、それから復元した形状は方形プランと考えられる。推定長軸 3.0 m、短軸 3.2 m の方形プランを呈すると推定される。検出面からの竪穴深さは約 23cm を測る。付帯遺構は切り合いのため検出されていない。

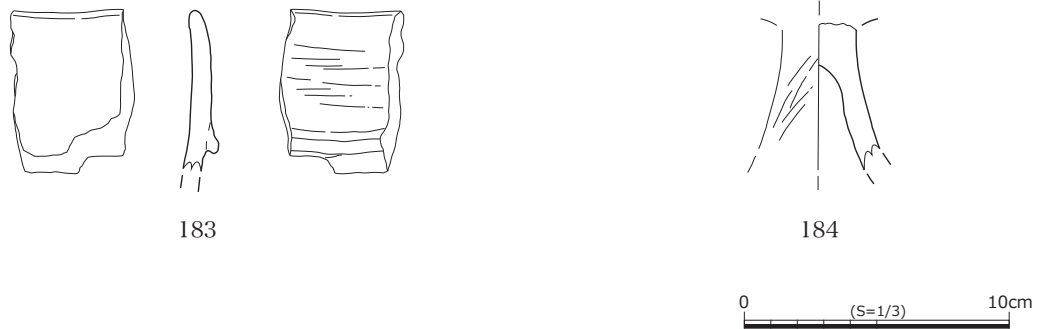
〈SB22 出土遺物〉

183 は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の突帯が貼り付けられる。内外面ともナデ調整がみられる。

184 は高杯の脚部である。ハの字に開く脚部で、杯部との接合部分で欠損している。脚接合部は復元径 2.8cm を測る。内外面ともナデ調整がみられる。赤色塗彩はみられないが、全体的に橙色の発色である。

【SB23】 (第 67 図)

SB23 は、竪穴一辺のみの検出であり、全体形は不明であるが、直角に近い角度で曲がる 2 コーナーが検出されているため、方形プランと考えられる。検出された一辺の長さは 3.3 m となる。検出面からの竪穴深さは約 13cm を測る。付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット 3 基が検出された。ピットは便宜上 23 a から 23 c とした。ピット 23 a は長軸 56cm、短軸 44cm の楕円形であり、深さ 29cm を測る。ピット 23b は長軸 46cm、短軸 44cm の略円形であり、深さ 21cm を測る。ピット 23 c は長軸 36cm、短軸 26cm の楕円形であり、深さ 1.3 m を測る。ピット 23 a と 23 b は規模や深さが類似しているため、この 2 穴を柱穴とし、検出された一辺の対辺までの距離が柱穴から同距離と仮定すると、竪穴長軸は 4 m を越える可能性がある。



第 69 図 SB22 出土遺物

〈SB23 出土遺物〉

出土遺物総点数は 930 点であったが、いずれも細片であった。

【SB24】(第 70 図)

SB24・SB25・SB26 は、調査区外に大半が出ており、全体形状は知ることができないが、いずれも方形プランと考えられる。

SB24 は主軸を南北にとるとみられる。竪穴の推定長は 3 m である。検出面からの竪穴深さは約 14cm を測る。付帯遺構として、床面に一辺約 1 m の土坑 1 基、柱穴の可能性のあるピット 2 基が検出された。ピットは便宜上 24 a と 24 b とした。ピット 24 a は長軸 18cm、短軸 16cm の楕円形で、深さ 8 cm である。ピット 24 b は、直径 36cm の略円形で、深さ 68cm の二段掘りである。出土遺物は無い。

【SB25】(第 70・71 図)

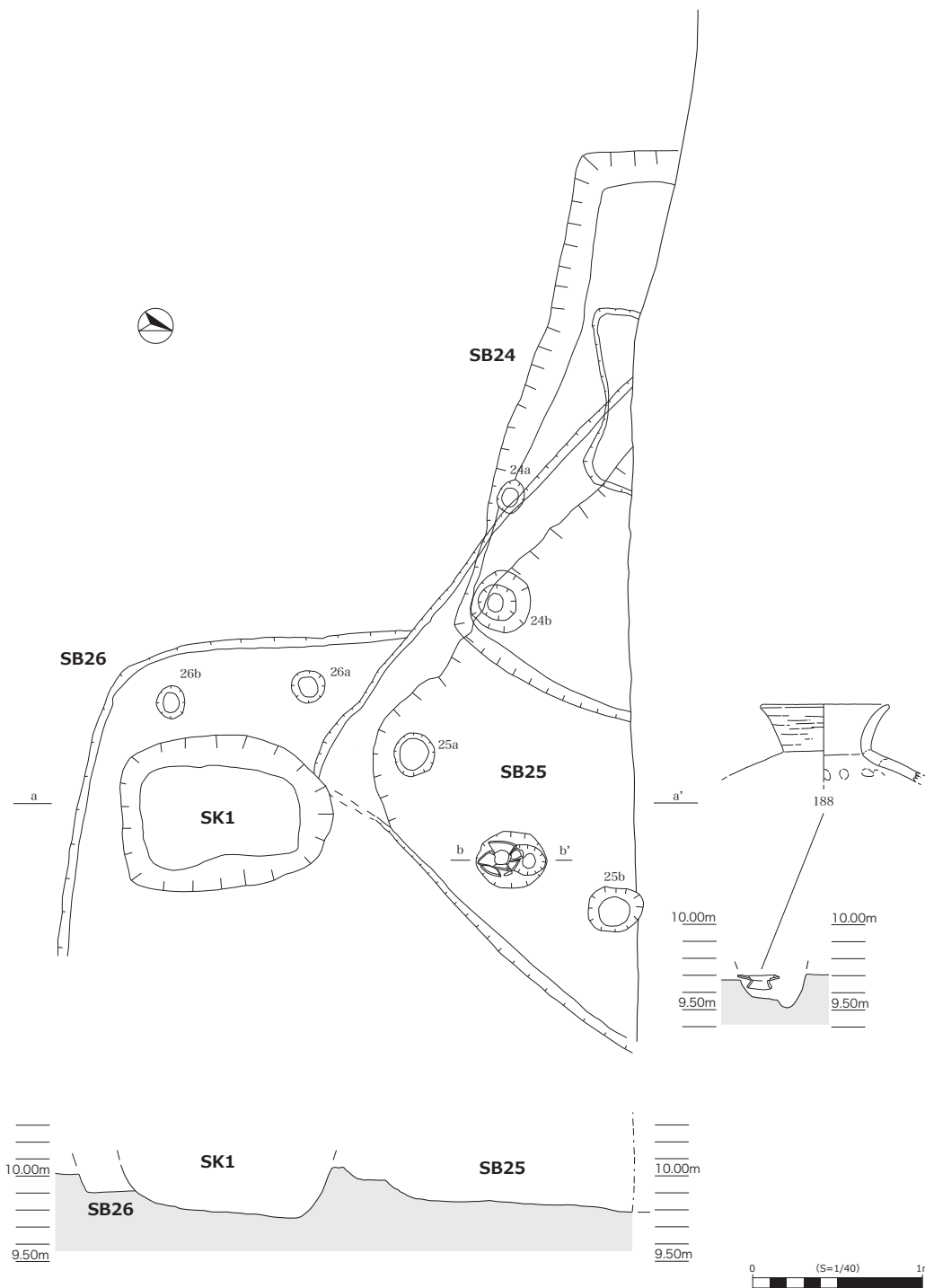
SB25 は、主軸を南西・北東にとる方形プランと考えられる。検出した竪穴の最大辺は 3 m 以上である。検出面からの竪穴深さは約 9 cm を測る。付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット 2 基、土坑 1 基が検出された。ピットは便宜上 25 a と 25 b とした。ピット 25 a は長軸 26cm、短軸 26cm の楕円形で、深さ 15cm である。ピット 25 b は、長軸 32cm、短軸 24cm の楕円形で、深さ 23cm である。土坑は長軸 40cm、短軸 32cm の楕円形を呈し、二段掘りとなる。埋土中から壺 188 が出土している。

〈SB25 出土遺物〉

出土遺物総点数は 238 点である。

185 は甕の口縁部から胴部である。口縁部は内湾する形態で、口唇部はコの字状を呈する。口径 27.8cm を測る。口縁部下には一条の貼付け突帯が見られ、接合しない。不接合部分を正面にすると、左側がわずかに上方へのびる。突帯内には刻目が施され、この刻目の間隔は平均 8.7cm を測る。突帯の原体は一部に木目が見られることから、木製工具であると考えられる。外面調整はナデ調整、外面は工具ナデ調整、ナデ調整である。

186 は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、

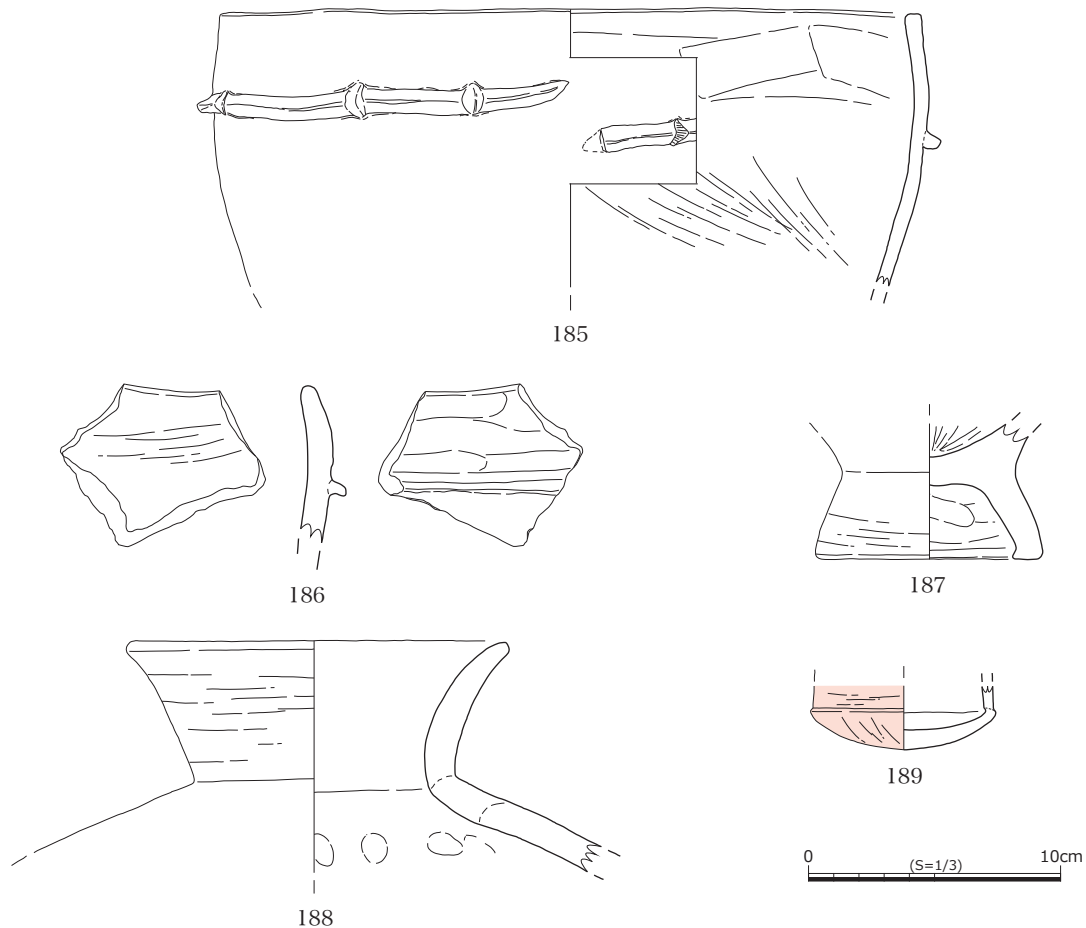


第70図 SB24・25・26 平面図・断面図

やや垂下する形態である。内外面ともナデ調整がみられる。

187は甕の脚部である。脚部はやや膨らみを持ちながら開き、端部は内面に突出部分をもつ。脚部径は復元径9.0cm、脚部高3.5cm、底径は6.9cmを測る。脚天井部形態は中央がわずかに突出する形態である。外面調整はナデ調整、内面調整は工具ナデ調整である。

188は壺の口縁部から肩部である。口縁部はゆるやかに外反する形態で、口唇部はコの字状を呈する。口径は復元径15.2cm、口縁部高5.5cmを測る。頸部は強く屈曲し、肩部にかけて膨らみをもつ。頸部径は10.4cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整である。頸部内面には



第71図 SB25 出土遺物

成形時の指頭圧痕が残る。

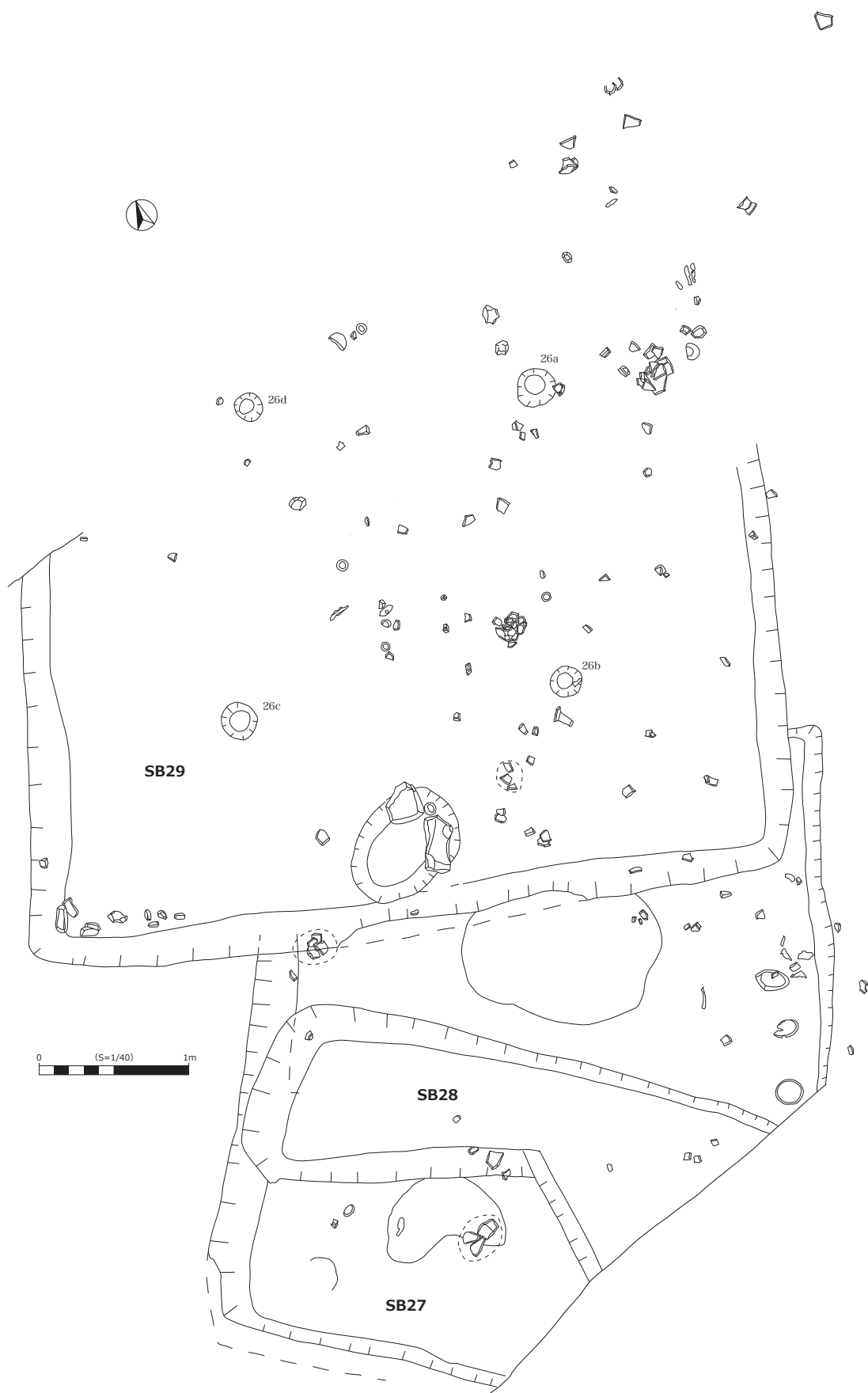
189は埴の底部から胴部である。底部は平底を呈する。胴部は強く屈曲し、外面に段を有する。胴部最大径は復元径7.3cmを測る。胴部から肩部は直線的に立ち上がる。外面は赤色塗彩がみられる。

【SB26】(第70図)

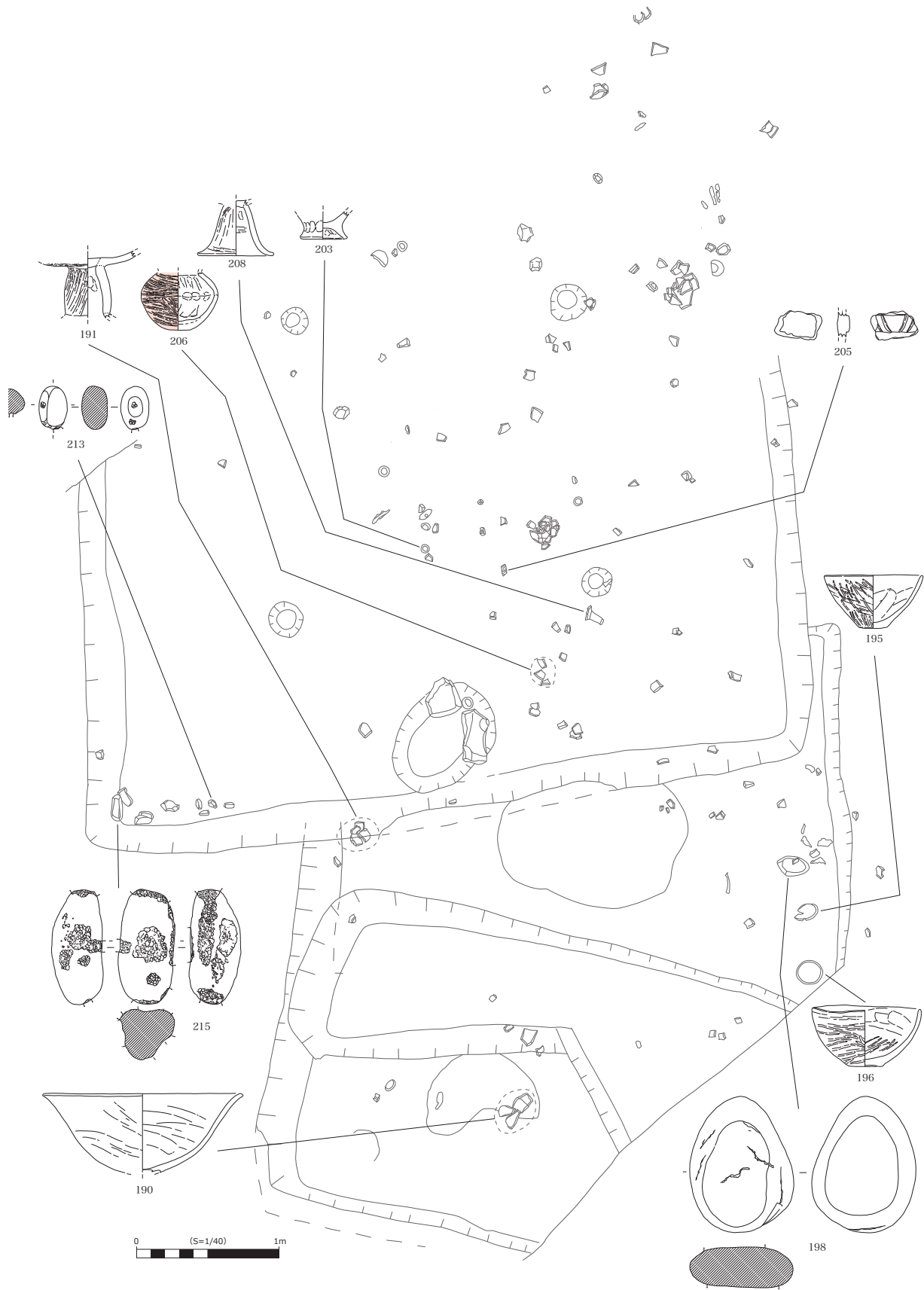
SB26は、主軸を南北にとる方形プランのコーナーのみの検出である。検出された竪穴は一辺1.6m程度であり、全体の法量は不明である。検出面からの竪穴深さは約12cmを測る。付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット2基が検出された。ピットは便宜上26aと26bとした。ピット26aは直径19cmの円形で、深さ28cmである。ピット26bは、長軸18cm、短軸18cmの楕円形で、深さ30cmである。出土遺物は無い。

【SB27】(第72～74図)

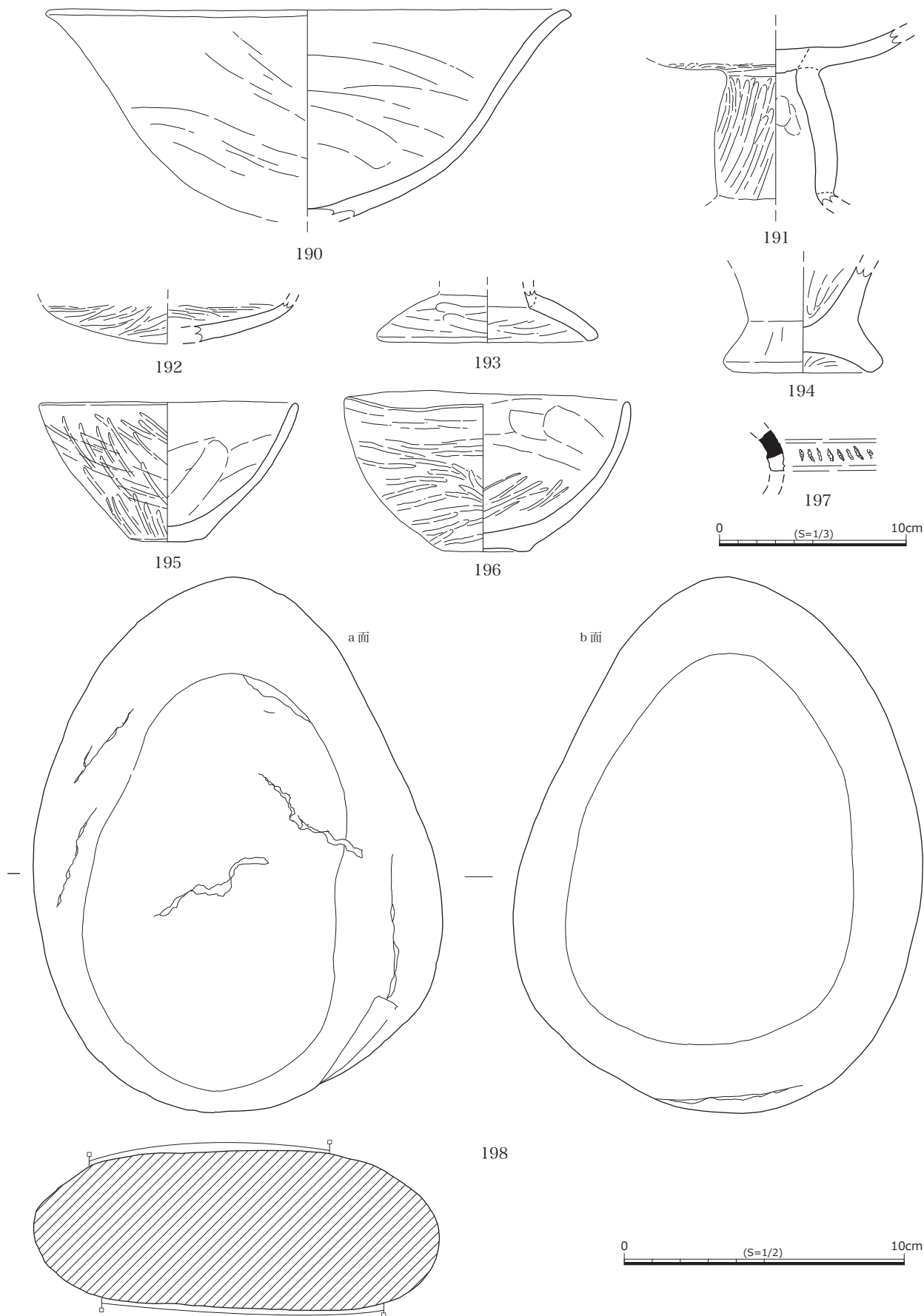
SB27は、主軸を北東－南西にとり、長軸推定4m、短軸3.8mの方形プランを呈する。検出面からの竪穴深さは約15cmを測る。付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット1基、カーボ



第 72 図 SB27・28・29 平面図

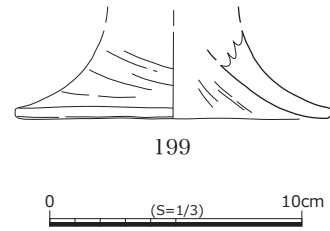


第73図 SB27・28・29遺物出土状況



第74図 SB27 出土遺物

ンが広がる範囲2基が検出された。ピット27 aは長軸18cm, 短軸16cmの円形を呈し, 深さ7cmである。カーボンが広がる範囲は北側のものが長軸1.3m, 短軸0.8mを測る楕円形を呈する。南側のものは, 幅0.8m程度の不整形を呈する。



第75図 SB28出土遺物

〈SB27 出土遺物〉

出土遺物総点数は752点である。

190は高杯の杯部である。胴部は丸みをおび, 口縁部はゆるやかに外反する。口唇部はコの字を呈する。口径は復元径28.1cm, 杯部高は推定高11.1cmである。内外面ともナデ調整である。

191は高杯の脚部である。脚部はエンタシス状を呈し, 下部は大きく開く形態であると考えられる。脚接合部径は5.0cm, 筒部径6.8cm, 筒部高6.8cmを測る。杯部は大きく開く形態で, 杯部と脚部との接合は粘土塊を充填して接合している。外面調整は縦方向のミガキ調整で, 内面はナデ調整である。

192は高杯の杯部である。椀状の形態を呈する。内外面ともミガキ調整である。

193は高杯の脚部である。やや膨らみながらのびる形態で, 口唇部はコの字状を呈する。脚部径は11.8cmを測る。筒部は直線的にのびる。内外面ともナデ調整である。

194は甕の脚部である。短くのびる脚部形態で, 口唇部はコの字状である。脚部径は復元径8.5cm, 脚部高2.8cm, 底径は復元径5.9cmを測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状を呈する。胴部は直線的にのびる。内外面ともナデ調整である。

195は鉢である。平底でボウル状の形態を呈する。胴部から口縁部にかけてやや膨らみをもちながら立ち上がり, 口唇部は丸い。口径は復元径13.9cm, 器高7.5cm, 底径4.0cmを測る。外面調整は縦方向のミガキ調整後ナデ調整, 内面調整はナデ調整である。

196は鉢である。底部はやや上げ底上で, ボウル状を呈する。胴部から口縁部にかけて丸みをおび, 口唇部は丸く, 口縁部はゆがむ。口径15.3cm, 器高8.0~8.5cm, 底径4.7cmを測る。外面調整は胴下部は横方向のミガキ調整, 口縁部はヨコナデ調整である。

197は須恵器甕の胴部片である。胴部には櫛状施文具による刻みが施されている。

198は厚さ約7.5cmの扁平な楕円磔を用い, a・b両面の平坦面を使用している。平坦面は他の面と比べ滑らかであり, 全体的に摩滅している。敲打今は特に認められない。

【SB28】(第72・73・75図)

SB28は, 不整形を呈する土坑状の遺構である。SB27の床面のカーボン集中部を一部切って掘削されたものとみられる。形状からは住居の可能性は低いと考えられる。

〈SB28 出土遺物〉

出土遺物総点数は368点である。

199は高杯の脚部で, ハの字に開く形態を呈する。脚部径は復元径12.5cmを測り, 脚端部は面をもつ。内外面ともナデ調整である。

【SB29】 (第72・73・76・77図)

SB29は、主軸を北東－南西にとり、一辺5.1mの方形プランを呈する。検出面からの竪穴深さは最大で約48cmを測る。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット4基、土坑1基が検出された。ピットは便宜上29aから29dとした。ピット29aは長軸28cm、短軸26cmの略円形であり、深さ57cmである。ピット29bは直径20cmの略円形であり、深さ48cmである。ピット29cは長軸26cm、短軸24cmの略円形であり、深さ48cmである。ピット29dは直径20cmの略円形であり、深さ49cmである。土坑は南辺の竪穴下端中央にあり、長軸82cm、短軸58cmの楕円形を呈し、深さ20cm程度である。支柱穴4基で上部構造を支える構造となる。上端と下端の形状は同様である。土坑の中心軸は竪穴の中心軸とはずれている。上端には礫が2点出土している。

〈SB29 出土遺物〉

出土遺物総点数は2,267点である。

200は甕の口縁部である。頸部は屈曲し、内面は強い稜線をもつ。口縁部は直線的のび、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、頸部内面はナデ調整である。

201は甕の口縁部である。口縁部は直口し、端部は内湾気味である。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯はゆがむ。内面はミガキ調整、外面はナデ調整である。

202は甕の口縁部片である。口唇部形態は欠損のため不明だが、口縁部下には一条の絡縄突帯をもつ。内外面ともナデ調整である。

203は甕の脚部から胴下部である。脚部径6.6cm、脚部高2.0cm、底部径5.4cmを測る。脚接合部には接合時の指頭圧痕が明瞭に残る。脚端部は内面に突出する部分がみられる。脚天井部は小さな平坦面をもつ。内外面ともナデ調整である。

204は鉢の底部である。平底の底部で、底径は復元径4.6cmを測る。底部から胴部にかけては丸みをもって立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

205は壺の胴部である。胴部には幅2.4cmのやや幅の狭い突帯をもつ。突帯内は鋸歯状の刻目が施される。刻目の原体は木製工具であると考えられる。外面はナデ調整で、内面は摩滅のため調整不明である。

206は埴の底部から頸部である。胴部は球胴状で、底部はまるみをもった平底である。胴部最大径10.8cm、底径3.5cm、器部高8.1cmを測る。内底面には粘土を付加した痕跡がみられ、指頭圧痕が残る。胴部内面の屈曲部分は接合線が残り、指頭圧痕がみられる。頸部内面は成形時のシボリ痕跡が残る。外面調整はミガキ調整で、外面全体に赤色塗彩がみられる。

207は埴の底部から頸部である。底部は座りの悪い平底で、底径は3.2cmを測る。胴部下部分が算盤玉状に膨らむ形態で、胴部最大径は11.6cmを測る。胴部最大径部内面には接合痕跡がみられる。口縁部形態は欠損のため不明だが、受け口状になるものと考えられる。

208は高杯の脚部である。スカート状に開く脚部形態で、口唇部は丸みをもつ。脚部径は復元径10.7cm、脚部高7.8cmを測る。脚接合部で欠損しており、粘土塊を充填する形で接合される。脚天井部は接合時の指頭圧痕がみられる。赤色塗彩はみられないが、外面は橙色の発色である。内外

面ともナデ調整である。

209 は高杯の脚部である。ハの字に開く形態で、口唇部はコの字状である。脚部径は復元径 14.8cm を測る。外面調整はミガキ調整で、外面には赤色顔料の塗彩がみられる。

210 は須恵器二重口縁壺の口縁部である。第一口縁部は端部に面をもち、第二口縁部はくの字に強く屈曲する形態を呈する。

211 は須恵器杯蓋である。口径は復元径 11.8cm, 口縁部高 3.0cm を測る。口唇部は丸みをおびる。内外面とも回転ナデ調整で、硬質な焼成である。

212 は鉄製鉞である。ほぼ全形が残存している。断面形はいずれも刃部が薄い U 字状を呈し、基部は方形断面を呈する。長さ 13.7cm, 刃部の最大幅 1.9cm を測る。

213 は安山岩の楕円礫を用い、a 面下端部左側面と b 面中央部に敲打痕が認められる。法量的に手のひらに収まるもので、手の指先からわずかに使用面の顔が出るぐらいである。

214 は平坦面を三面有する安山岩の不整形な礫を用いた凹石である。a 面中央部に凹面が認められるが平坦面のごく限られた範囲である。また a 面左側面と右側面 (d 面) に敲打痕が認められる。上部は a 面中央部からの加撃により欠損している。

215 は断面形状が隅丸三角形を呈する楕円礫を用いた凹石である。三面中央部それぞれに凹面が認められる。また a 面上下両端と左側面 (d 面) に敲打痕が認められる。

【SB30】(第 78・79 図)

SB30 は、主軸を南北にとり、長軸 2.2 m 以上、短軸 2.1 m 程度の方形プランを呈する。検出面からの竪穴深さは約 22cm を測る。

付帯遺構は検出されていない。竪穴住居にしては法量が小さいと考えられるが、方形+方形の竪穴住居の場合であれば、2 段目の竪穴の法量程度となる。29 号住居の竪穴との切り合いが不明瞭であるため断言できないが、29 号住居床面レベルと 30 号の床面レベルが 15cm 程度の差しかないことから、あるいは 1 段目の竪穴が掘削により失われ、検出されていない可能性も考えておく必要がある。

〈SB30 出土遺物〉

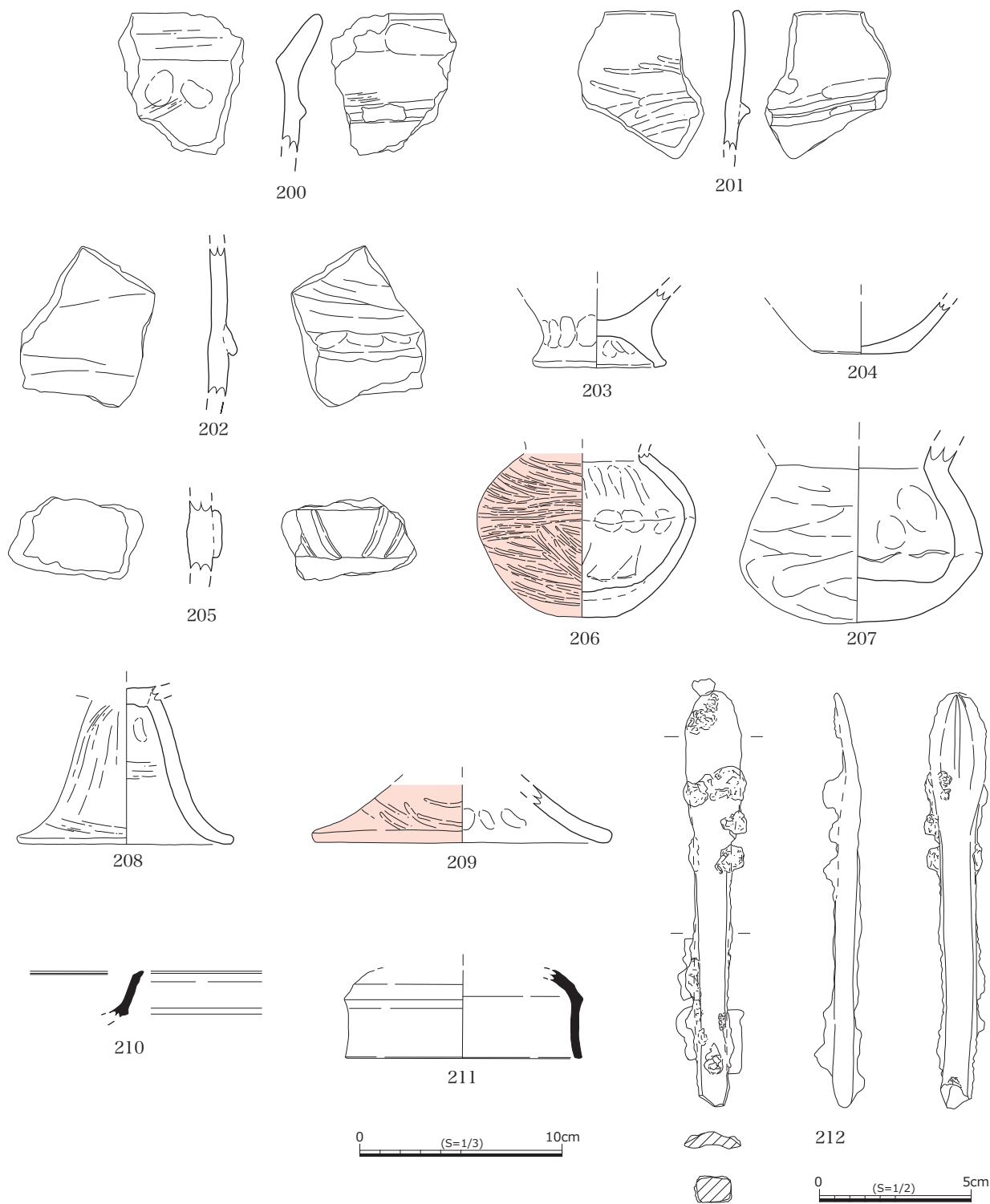
出土遺物総点数は 143 点である。

216 は甕の口縁部である。やや内湾気味の口縁部で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。外面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴部は縦方向のミガキ調整である。内面調整は工具ナデ調整で、口唇部には成形時の指頭圧痕がみえる。

217 は甕の脚部で、短く踏ん張る形態を呈する。接地部には平坦面をもち、口唇部はややゆがむ。脚部径 8.7cm, 脚部高 3.4cm, 底径 7.0cm を測る。脚天井部形態はドーム状で、指頭圧痕がみられる。内底面はナデ調整、外面は全体的に摩滅しているため調整不明である。

218 は甕の脚部で、ハの字状に開く形態である。接地部には平坦面をもつ。脚部径は復元径 10.7cm, 脚部高 4.0cm, 底径は復元径 6.6cm を測る。脚天井部形態は粘土の付加やユビオサエによってゆがみが大きく、不整形である。内外面ともナデ調整である。内底面にはコゲの付着がみられる。

219 はやや踏ん張る形の脚部で、接地部には面をもつ。脚部径 7.2cm, 脚部高 2.0cm, 底径は

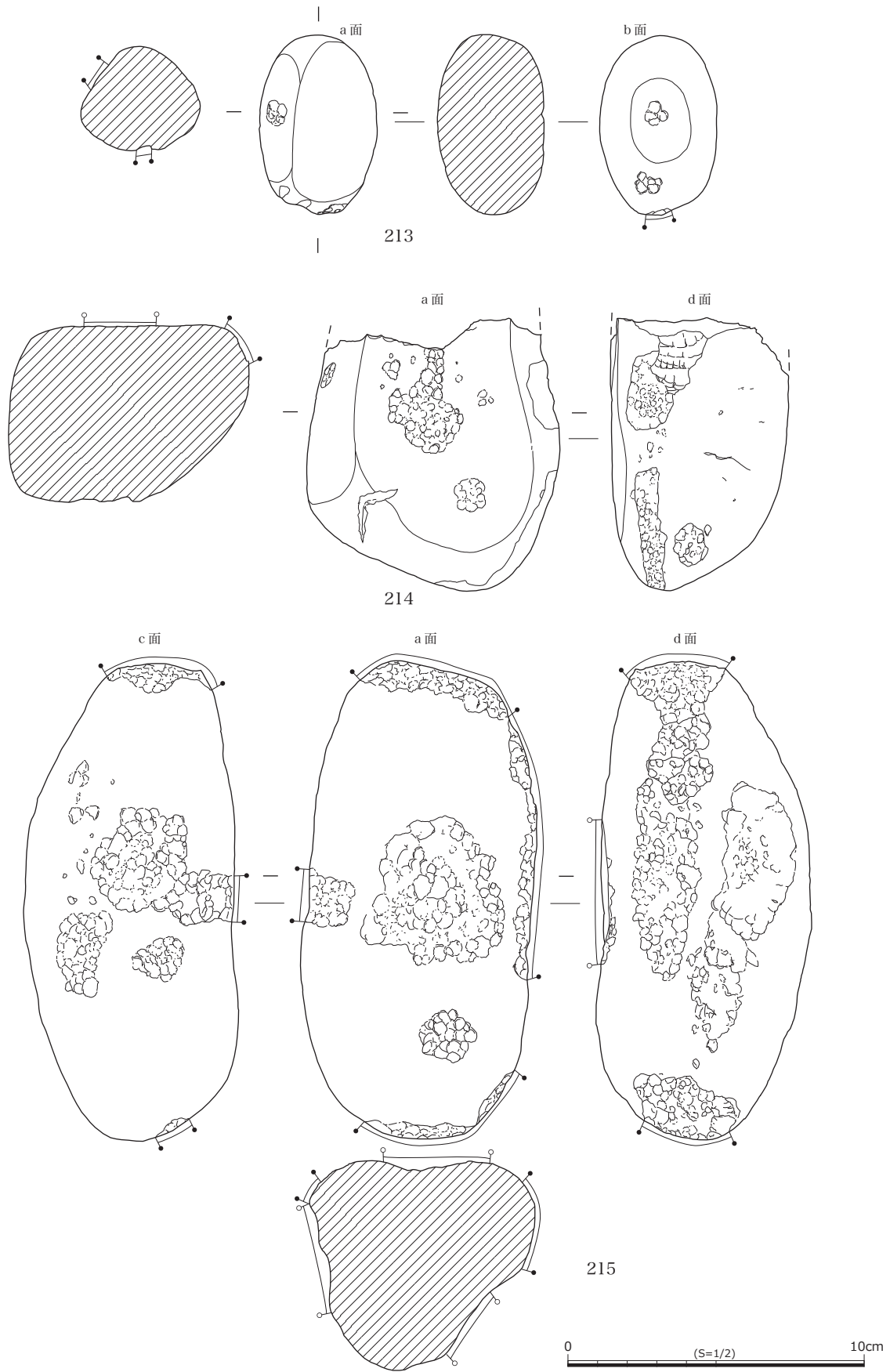


第76図 SB29 出土遺物 1

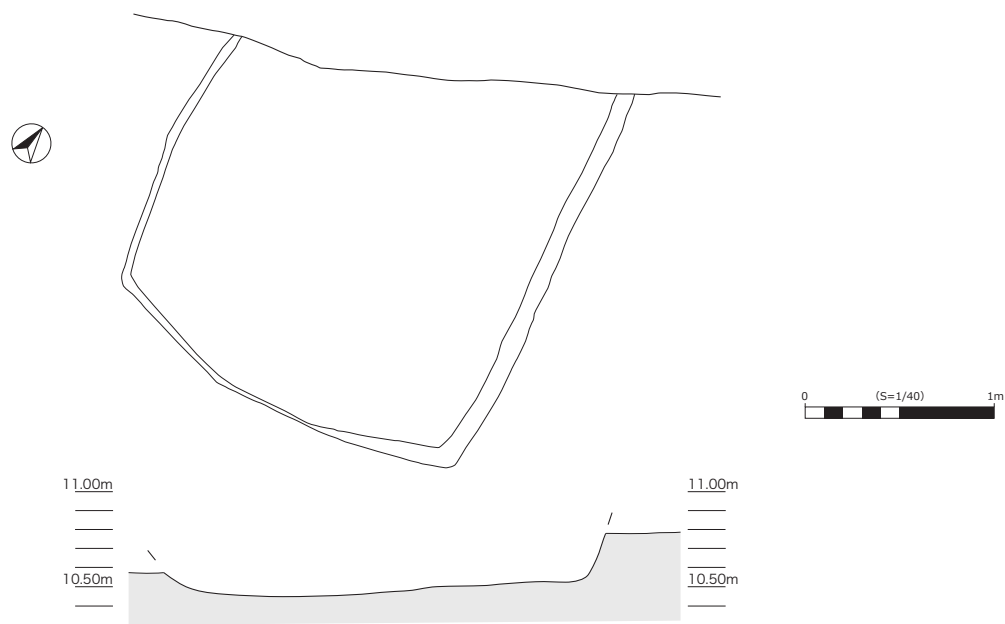
復元径 5.4cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内画面ともナデ調整がみられる。

220 は平底の鉢である。ボウル状の形態を呈し、口唇部は丸い。口径は復元径 11.8cm, 底径 5.4cm, 器高 6.1cm を測る。口縁部内面には成形時の指頭圧痕がみられ、外面は工具ナデ調整である。胴下部から底部外面にかけて黒斑がみられる。

221 は高杯の脚部である。大きくハの字に開く形態で、脚内部に接地面をもつ。口唇部はコの字



第77図 SB29 出土遺物2



第78図 SB30 平面図・断面図

状である。脚部径は復元径 17.5cm，脚部高 6.7cm，脚接合部径 5.0cm を測る。杯部は水平に開く形態である。外面調整は細かいミガキ調整，内面調整はナデ調整である。外面全体と杯部内面，脚部内面の一部に赤色顔料の塗彩がみられる。

222 は須恵器甕の口縁部である。二重口縁をもち，第一口縁端部は平坦面がみられる。口径は復元径 10.2cm を測り，外面には櫛描き波状文が施されている。

【SB31】

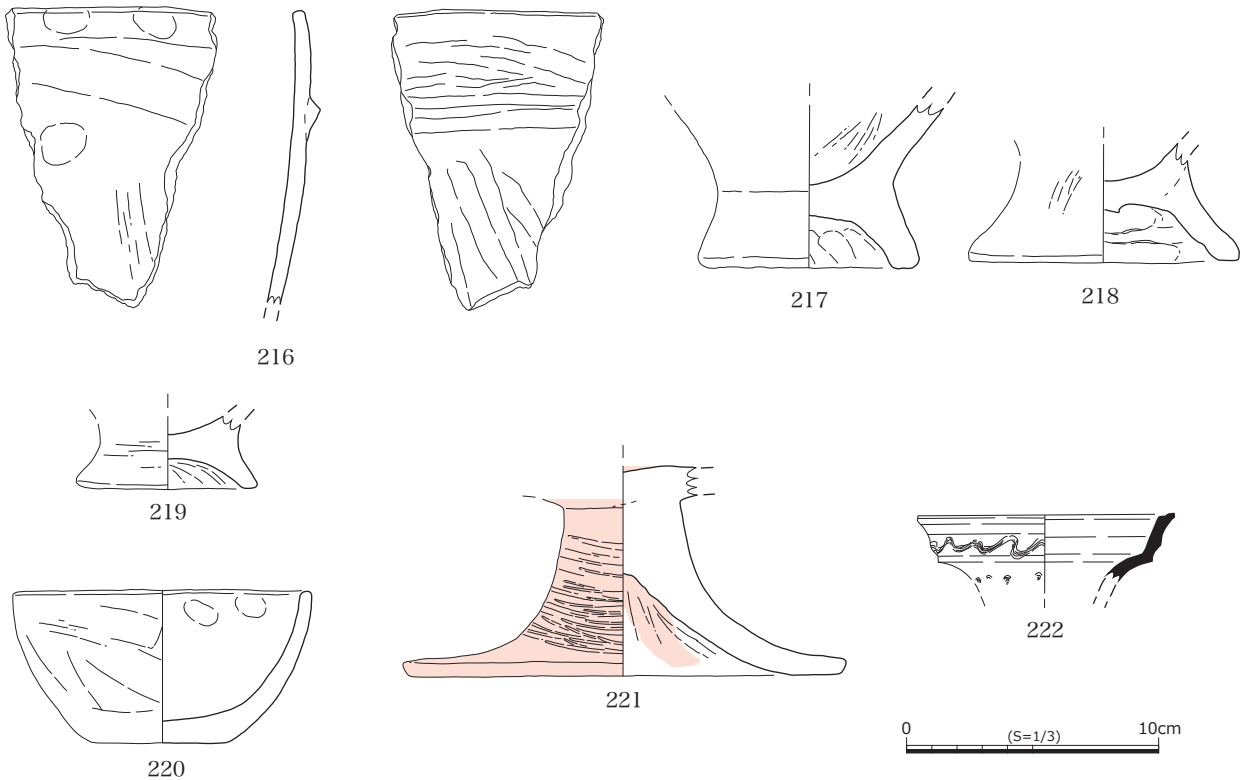
SB31 は，平面形状の検出記録がなく，プランや規模は不明であるが，北壁層位断面で断面のみ確認された住居跡である。第6層から第7層青コラ火山灰層を掘り抜いて造営されている。掘り込み深さは 30cm 程度とみられる。出土遺物等は不明である。

【SK1】 (第70図)

SB25 を切って掘削された土坑が 1 基検出された。長軸 124cm，短軸 88cm の不整形であり，北面には辺を作り出し，南面は丸く収まる形状を呈する。下端形状は隅丸方形を呈する。位置関係から，26号住居の床面土坑を疑ったが，26号住居を切った25号を切っていることからその可能性はない。遺物は出土していない。

【溝状遺構 1】 (第80・81図)

溝状遺構 1 は，18号住居に一部重なった位置で検出され，18号住居に切られている。長さ 3.2 m，



第79図 SB30 出土遺物

幅は最大 50cm、深さ 20cm 前後を測り、両端が閉じている。用途は不明である。

溝状遺構 2 は、調査区東端の SB 9 に接して検出され、SB29 と接続するような状態で検出した。途中で方向を変えており、「く」の字状を呈する。検出全長 8 m であり、溝幅は 64cm ～ 70cm を測り、深さは 20cm ～ 34cm を測る。断面は U 字形を呈する。SB 9 との切り合い関係は不明瞭であり、接続部分の反対側には連続する溝の検出はない。このため、集落内の排水用として設置された溝ではなく、SB 9 と一体の遺構、土地を区画する目的の溝、あるいは、何らかの構造物を囲む目的で設置した等の可能性が考えられる。構造物を囲む目的である場合は、位置関係から SB30 の可能性も棄却できない。ただ、SB 9 については、竪穴住居の項でも記載したように、平面形状や深さ、柱穴の検出がなく、竪穴住居の可能性に疑問がある。このため、SB 9 と一体の遺構と仮定した場合は、SB 9 が水溜め用の土坑であった可能性も出てくる。

遺物は 1 点出土している。223 は甕の脚部で、脚部径 8.8cm を測る。

【溝状遺構 2】(第 82 図)

溝状遺構 2 は、調査区東端の SB 9 から、SB 7 に向い伸びている状態で検出された。途中で方向を変えており、「く」の字状を呈する。検出全長 8 m であり、溝幅は 64cm ～ 70cm を測り、深さは 20cm ～ 34cm を測る。断面は U 字形を呈する。

SB 9 との新旧関係については、溝状遺構 2 は北側層位断面において 8a 層中位からの掘り込みであることが判明している。一方、SB 9 は南側層位断面において第 8a 層下位からの掘り込みで

あることが確認できることから溝状遺構2がSB9よりも新しいと判断できる。

(2) 第9層出土遺物(第83～103図)

第9層は古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田カルデラ降下軽石を若干含む。やや粘質であり、厚さは50cm～1m程度である。第9層中から遺構が掘りこまれた場合は土色などからの判別が困難であり、下位層の第10層に達している場合は、第10層上面で検出できる。第9層の形成は、出土須恵器から5世紀から6世紀代の集落形成による地層の攪乱と、複数回にわたる河川の氾濫などによる堆積などの要因が複合しているとみなされる。

224から316は甕である。224は甕の口縁部から胴部で、屈曲する頸部をもつ。内面にはやや強い稜線が入る。口径は復元径26.0cm、頸部径は復元径23.3cm、口縁部長2.6cmを測る。口唇部はM字にくぼむ形態である。頸部から胴部にかけては膨らみを持たない寸胴状の形態である。外面調整は工具ナデ調整、内面はナデ調整で、胴部には指頭圧痕がみられる。

225は甕の口縁部である。頸部で逆L字に屈曲する形態で、内面には小さな突出部をもつ。口唇部は内面にわずかに突出し、外面はM字にくぼむ形態である。口径は復元径35.0cm、頸部径は復元径30.4cm、口縁部長2.8cmを測る。内外面ともナデ調整が主体である。

226は甕の口縁部から胴部である。内湾する形態を呈し、口唇部はコの字状である。口径は復元径30.8cmを測る。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、この突帯内部にはやや間隔の広い刻目が施される。刻目の間隔は平均2.5cmである。内外面ともナデ調整で仕上げられ、外面にはスリッパ状の付着物がみられる。

227は甕の口縁部から胴部である。バケツ状に大きく開く形態を呈し、口唇部は上方に面をもつ。口径は復元径32.8cmを測る。口縁部下には一条の絡縄突帯が貼り付けられ、突帯下方にはユビオサエが明瞭に残る。外面は工具ナデ調整、内面はナデ調整である。突帯貼り付け部分の内面には指頭圧痕が列状にみられることから、突帯貼付け時の成形痕跡であると考えられる。

228は甕の口縁部から胴部である。口縁部は大きく内湾する形態で、口唇部は丸く内面には稜をもつ。口径は復元径32.0cmを測る。口縁部下やや低い位置に一条の貼付け突帯が巡る。突帯内には刻目が施され、刻目の原体は木製工具であると考えられる。内外面ともナデ調整で仕上げられる。

229は甕の口縁部から胴部で、胴部から口縁部にかけて直線的に広がる形態を呈する。口径は24.2cmを測る。口唇部は丸みをもち、口縁部下には断面台形の貼付け突帯を一条もつ。この突帯は接合せず、不接合部分を正面にした場合、右側が下方へのびる形態である。外面調整は胴下部が縦方向のミガキ調整、口縁部はナデ調整である。内面調整は工具ナデ調整の痕跡がみられる。

230は甕の口縁部から胴部である。内湾する形態で、口唇部はコの字を呈し、内面に稜線をもつ。口径は復元径26.0cmを測る。口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。内外面ともナデ調整がみられる。

231は甕の口縁部である。内湾する形態を呈し、口縁部下には一条の絡縄突帯をもつ。口径は復元径35.0cmを測る。突帯内部には間隔の広い刻目が施される。刻目の間隔は平均4.0cmを測る。刻目原体は布目が確認できることから、木製工具に布を巻き付けたものであると考えられる。

232は甕の口縁部から胴部である。頸部でゆるやかに屈曲する形態で、口唇部はコの字である。胴部は膨らみをもち、内面には成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。内外面とも工具ナデ調整が主体で、

一部内面にハケ調整がみられる。

233は甕の口縁部である。短く屈曲する頸部をもち、内面には丸みをおびた突出部がある。口縁部は受け口状を呈し、口唇部はM字状にくぼむ。頸部内面には接合痕がみえる。表面は褐色系の発色で、胎土には雲母を多く含んでいる。

234は甕の口縁部である。頸部でゆるやかに屈曲する形態で、口唇部は丸い。内外面ともヨコナデ調整である。

235は甕の口縁部である。ゆるやかに内湾する形態で、口唇部はコの字状である。口径は復元径27.6cmを測る。口縁部下には一条の絡縄突帯が貼り付けられる。内外面ともナデ調整である。

236は甕の口縁部である。直口する形態で、口唇部は丸みをおびる。口縁部下には一条の貼付け突帯がめぐり、やや垂下気味である。内外面ともナデ調整がみられる。

237は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯がみられる。内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整で仕上げられる。

238は甕の口縁部である。ゆるやかに外反する口縁部をもち、口唇部はコの字状になる。内外面ともナデ調整である。

239は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部はコの字状である。器壁は成形時のユビオサエによりゆがんでいる。内外面ともナデ調整である。

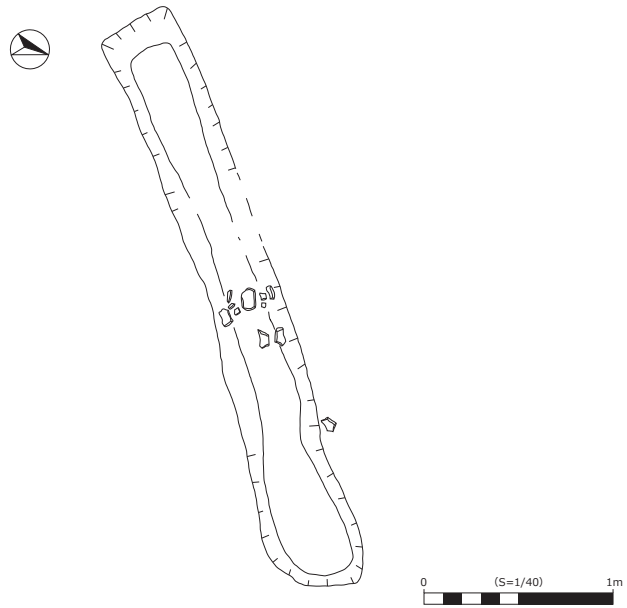
240は甕の口縁部である。直口する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯を持ち、突帯下方には貼り付け時の指頭圧痕がみられる。内外面ともナデ調整である。

241は甕の口縁部から胴部である。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する形態で、口唇部は先細りとなる。口径は復元径22.2cmを測る。頸部下には一条の絡縄突帯をもち、欠損のため詳細は不明だが接合しない突帯である。突帯の不接合部分を正面にした場合、右側が下方へのびる形態を呈する。突帯内には間隔の広い刻目をもち、刻目の間隔は平均3.2cmである。刻目原体は木製工具であると考えられる。内外面ともナデ調整である。

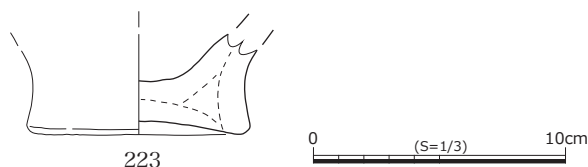
242は甕の口縁部から胴部である。頸部でくの字に屈曲する形態を呈し、口縁部は直線的に開く。口唇部は丸みをおび、口径は復元径21.4cmを測る。頸部内面は強く突出し、稜線がみられる。内外面ともナデ調整で仕上げられる。

243は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部はコの字状である。口縁部下には一条の貼付け突帯を持ち、突帯内には刻目が施される。刻目原体は指頭によるものである。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。

244は甕の口縁部から胴部である。頸部で屈曲する形態で、口唇部はコの字状である。胴部は球胴状に膨らむ形態であると考えられる。内面はナデ調整、外面は頸部から口縁部にかけて縦方向の



第80図 溝状遺構1平面図



第81図 溝状遺構1出土遺物

工具ナデのちヨコナデがみられる。

245は甕の口縁部である。頸部でゆるやかに屈曲し、直線的に開く形態である。口唇部は丸みをおびる。頸部下には一条の貼付け突帯をもち、間隔の広い刻目が施される。刻目の間隔は平均2.8cmで、原体は木製工具である。内面は工具によるナデ調整、外面はナデ調整である。口唇部には黒斑の付着がみられる。

246は直口する甕の口縁部である。口唇部は丸みをおびる。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯下方にはユビオサエの痕跡がわずかに残る。内外面ともナデ調整である。

247は甕の口縁部である。内湾する形態で口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯内部には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は $3.3\text{cm} + \alpha$ である。刻目原体は指頭によるものである。外面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴部は縦方向のミガキ調整である。内面はナデ調整である。

248は甕の頸部から胴部片である。頸部下に多条突帯をもつタイプで、一段目の突帯上部には焼成後穿孔がみられる。この穿孔径は5mmで、補修孔であると考えられる。内面はハケ調整、外面はヨコナデ調整である。土器胎土には雲母が多く含まれる。

249は甕の口縁部である。口唇部は丸く、口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。この突帯は一部欠損しているが、突帯の痕跡から接合しない突帯と判断できる。不接合部を正面にした場合、右側が下方へのびるタイプである。突帯内には間隔の広い刻目が施され、刻目の間隔は $4.4\text{cm} + \alpha$ である。刻目原体は木製工具によるものである。内外面ともナデ調整である。

250は甕の口縁部である。頸部で屈曲し、短くのびる形態である。口唇部はコの字になる。外面調整はナデ調整、内面調整は工具ナデ調整である。

251は大型甕の口縁部である。頸部で強く屈曲する形態で、頸部で逆L字に屈曲し、受け口状になる。頸部下には一条の貼付け突帯がめぐり、強いヨコナデが見られる。頸部と突帯の間には径7mmの穿孔がみられる。内面はハケ調整、外面はナデ調整である。

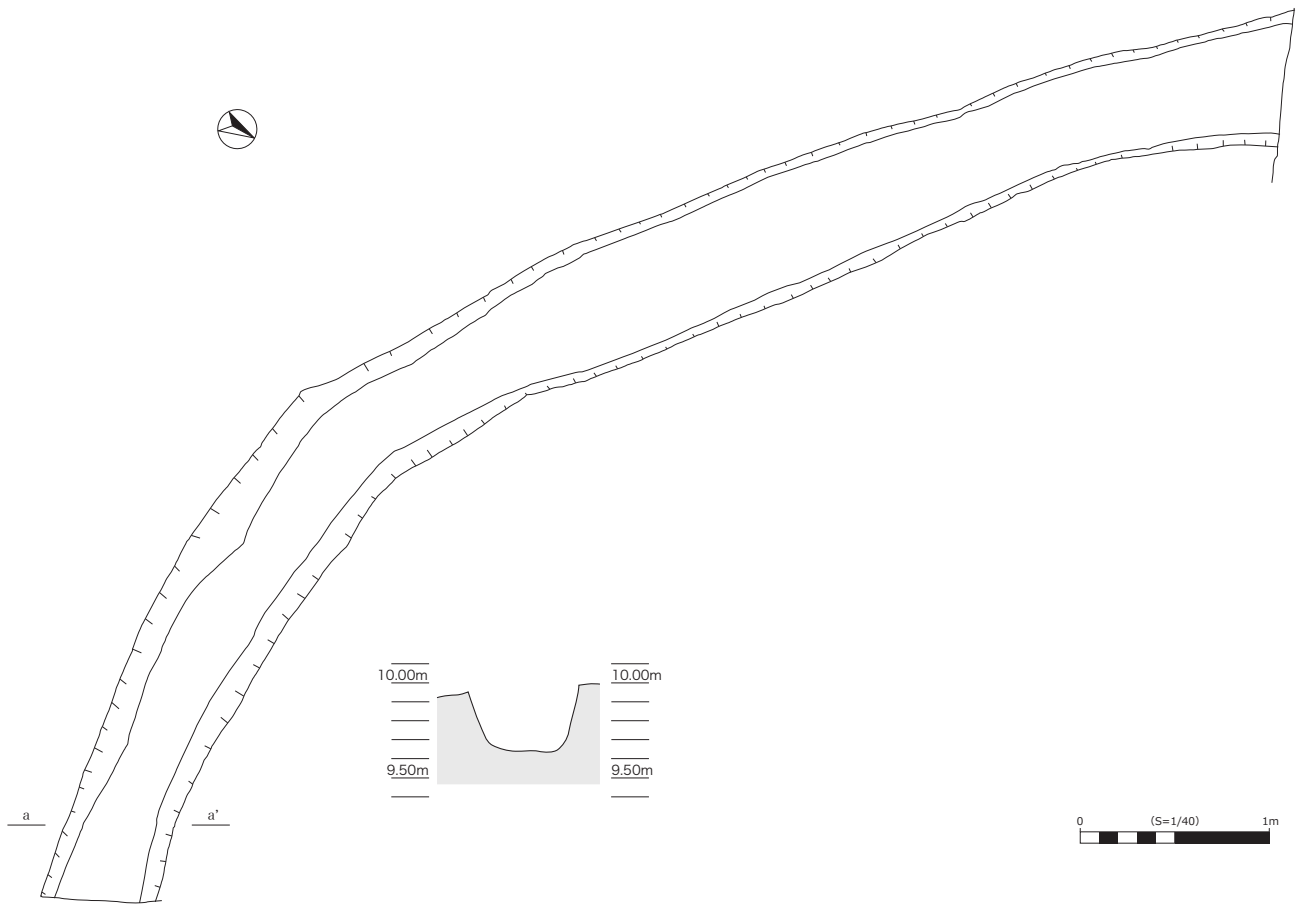
252は甕の口縁部から胴部である。直口する口縁部をもち、口唇部はコの字になる。外面胴下部にミガキ調整がわずかにみられるが、全体的にナデ調整が主体である。

253は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯内には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は3.4cmを測る。刻目原体は木製工具であると考えられる。内外面ともナデ調整である。

254は甕の口縁部である。口縁部がゆるやかに内湾する形態で、口唇部はコの字状である。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯内部には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は $4.0\text{cm} + \alpha$ で、原体は木製工具によるものである。内外面とも工具ナデ調整である。

255は甕の口縁部である。内湾する口縁部で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯内部には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は $6.3\text{cm} + \alpha$ で、刻目原体は指頭によるものである。内外面ともナデ調整がみられる。

256は甕の口縁部である。直口する口縁部で、口唇部はコの字状を呈する。口縁部下には一条の貼付け突帯を持ち、突帯内部には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は4.7cmを測り、原体は木製工具である。内外面とも工具ナデ調整がみられる。



第 82 図 溝状遺構 2 平面図・断面図

257 は大型甕の突帯部である。突帯は断面台形状で、突帯上方は平坦面をつくる。外面調整はナデ調整、内面調整は剥落のため不明である。

258 は甕の口縁部である。直口する口縁部形態で、口唇部は丸く、ゆがんでいる。口縁下部には一条の貼付け突帯がめぐり、突帯内部には刻目が施される。この刻目の間隔は 2.6cm を測り、原体は指頭によるものである。内外面ともナデ調整がみられる。

259 は甕の胴下部である。底部付近から直線的に開く形態を呈する。内外面ともナデ調整がみられ、内底面付近は工具ナデ調整による工具痕跡がみられる。外面にはススが付着する。

260 は甕の脚部から胴下部である。脚部は短くハの字に開く形態を呈し、口唇部はコの字状になる。脚部径 9.3cm、脚部高 3.0cm、底径 7.5cm を測る。脚天井部形態は中心部が下方に膨らむ形態である。胴部は脚接合部からやや膨らみを持ちながら立ち上がる。内外面ともナデ調整がみられる。

261 から 316 は甕の脚部である。261 はわずかに上げ底上になるが、充実した脚台で、端部は M 字状にくぼむ。脚部径は復元径 8.1cm、脚部高 4.2cm、底径は復元径 7.6cm を測る。外面は縦方向の丁寧なハケ調整、内面はナデ調整である。内底面にはコゲが付着する。

262 はハの字に開く形態の脚部で、接地部には面をもつ。脚部径は復元径 6.8cm、脚部高 1.8cm、底径は復元径 4.6cm を測る。脚天井部形態は平坦面をもつ。胴部は丸みを持ちながら立ち上がり、脚接合部には指頭圧痕が列状にみられる。

263 は短く直線的に開く脚部形態で、口唇部はコの字状である。器壁はややゆがみをもつ。脚部径 7.4cm, 脚部高 2.2cm, 底径 5.6cm を測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状である。内外面ともナデ調整である。

264 はくびれながらハの字に開く形態の脚部形態で、口唇部は丸い。鉢の可能性もある。脚部径 5.8cm, 脚部高 2.0cm, 底径 4.2cm を測る。脚天井部形態は平坦である。胴部は膨らみを持ちながら立ち上がる。脚接合部はヨコナデ調整, 内面はナデ調整である。

265 は上げ底状の脚部形態を呈し、口唇部は丸い。脚部径は復元径 9.1cm, 脚部高 2.7cm, 底径は復元径 7.1cm を測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状である。内外面ともナデ調整である。

266 は短く開く形態の脚部で、接地部には面をもつ。脚部径は復元径 8.1cm, 脚部高 2.3cm, 底径は復元径 6.6cm を測る。天井部形態は低いドーム状である。外面調整は胴下部に縦方向のミガキ調整がみられる。内面はナデ調整で、コゲが付着する。

267 は短く開く脚部で、口唇部は丸みをおびる。脚部径 9.9cm, 脚部高 2.6cm, 底径 8.7cm を測る。脚天井部形態は中心部分がわずかに膨らむ形態である。脚部は全体的に指頭圧痕が残り、ゆがんだ形態である。外面はナデ調整, 内面は工具ナデ調整の痕跡がみられる。

268 はハの字に開く脚部形態を呈し、口唇部はコの字状だが、内面にわずかな突出部をもつ。脚部径は復元径 7.7cm, 脚部高 1.9cm, 底径 6.0cm を測る。脚天井部形態は平坦面をもつ。外面はナデ調整, 脚内面は工具ナデ調整である。

269 はハの字に開く脚部で、端部は丸みをもつ。脚部径 10.8cm, 脚部高 2.9cm, 底径 8.6cm を測る。脚天井部形態は低いドーム状である。脚外面には接合時の指頭圧痕が明瞭に残り、ゆがみも大きい。内底面はミガキ調整, その他はナデ調整である。

270 は断面三角形状に突出した脚部形態で、端部は先細りする。脚部径 8.3cm, 脚部高 3.0cm, 底径 7.6cm を測る。脚天井部形態はドーム状を呈する。内外面ともナデ調整である。

271 はハの字に開き、脚端部にかけて先細りする形態を呈する。脚部径は復元径 7.7cm, 脚部高 2.5cm, 底径は復元径 6.5cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。胴部は直線的に開く形態で、内外面ともナデ調整で仕上げられる。

272 は短く直線的に開く形態を呈し、端部は丸みをおびる。脚部径は復元径 9.2cm, 脚部高 3.3cm, 底径は復元径 7.4cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

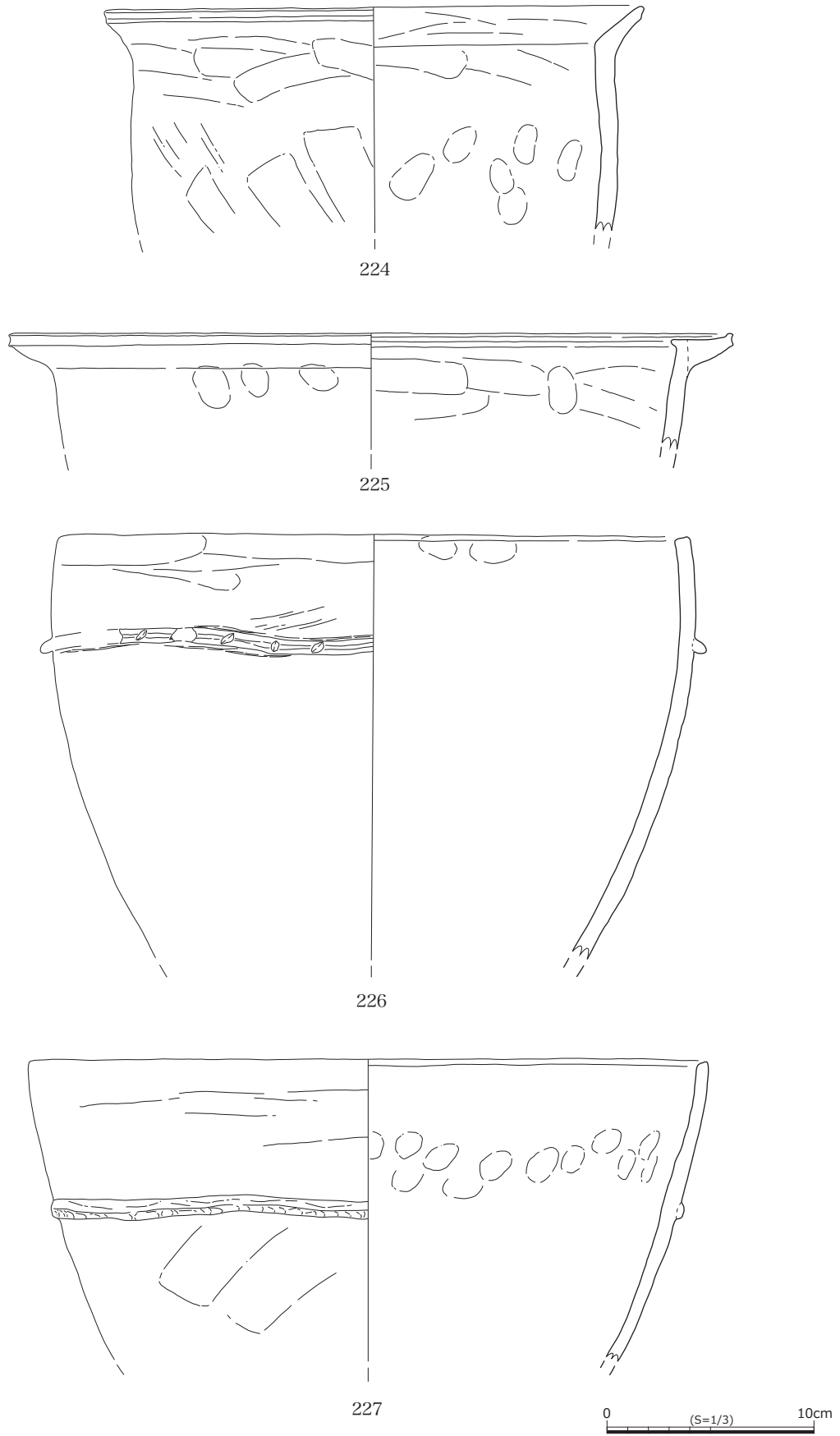
273 は脚部が袋状となる形態を呈し、端部は丸い。脚部は内外面とも接合時の指頭圧痕が多く残り、ゆがみが大きい。脚部径は復元径 7.1cm, 脚部高 2.4cm, 底径は復元径 5.7cm を測る。脚天井部形態は中心部が突出する形態である。

274 は上げ底状になる底部である。底径は復元径 8.3cm を測る。底端部は丸みをおびる形態で、胴下部にかけてゆるやかに膨らみをもつ。外面にはハケ調整の痕跡がみられる。

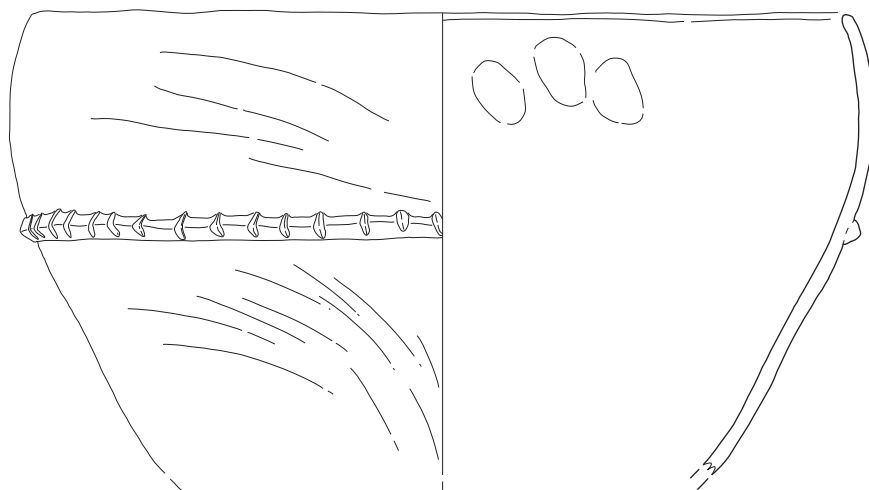
275 は短く先細りしながらのびる形態の脚部で、端部は丸い。脚部径は復元径 9.4cm, 脚部高 2.4cm, 底径は復元径 7.5cm を測る。内外面ともナデ調整が見られるが、脚接合部外面には接合線が明瞭に残る。

276 は脚台状にくびれる底部をもつ甕である。脚部径は復元径 9.2cm, 脚部高 1.8cm, 底径は復元径 6.6cm を測る。脚部には接合痕跡が残り、底部まで整形した後に、脚部を付加したことがわかる。胴部は球胴状に膨らむ形態を呈する。内外面とも工具ナデ調整である。脚端部には黒斑がみられる。

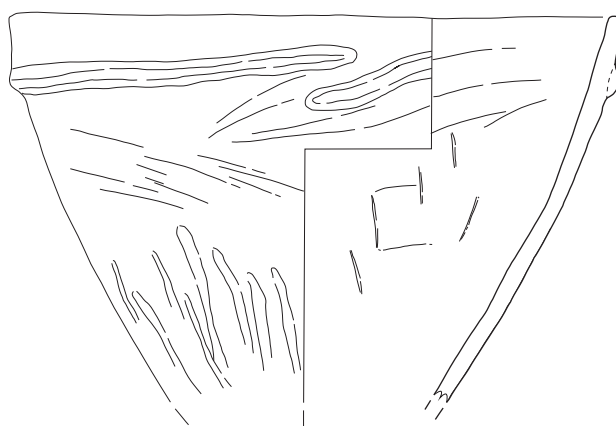
277 は脚台状にくびれる底部をもつ甕である。脚部径 10.2cm, 脚部高 2.0cm, 底径 9.4cm を測る。



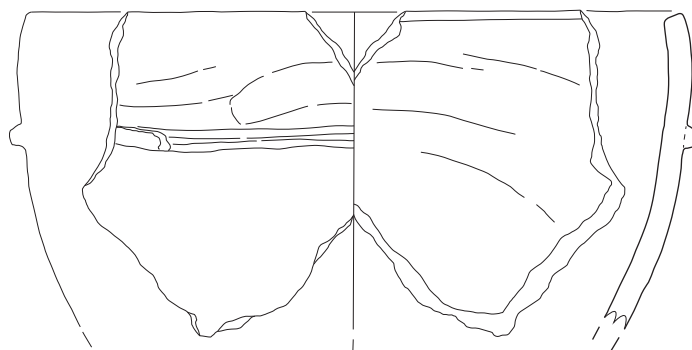
第83図 第9層出土遺物1



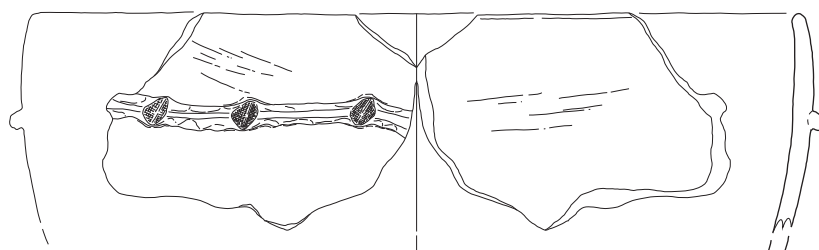
228



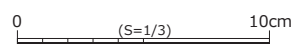
229



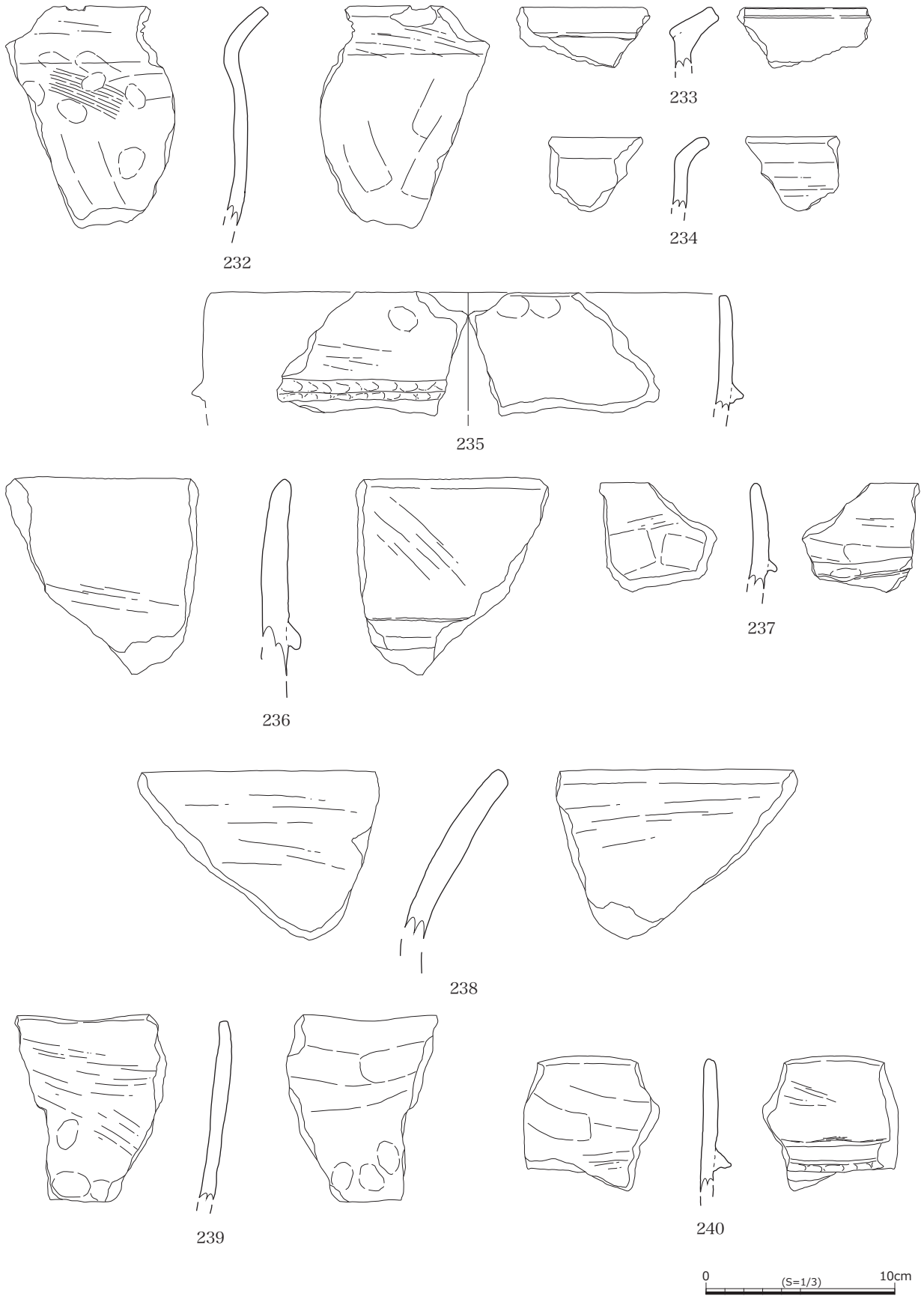
230



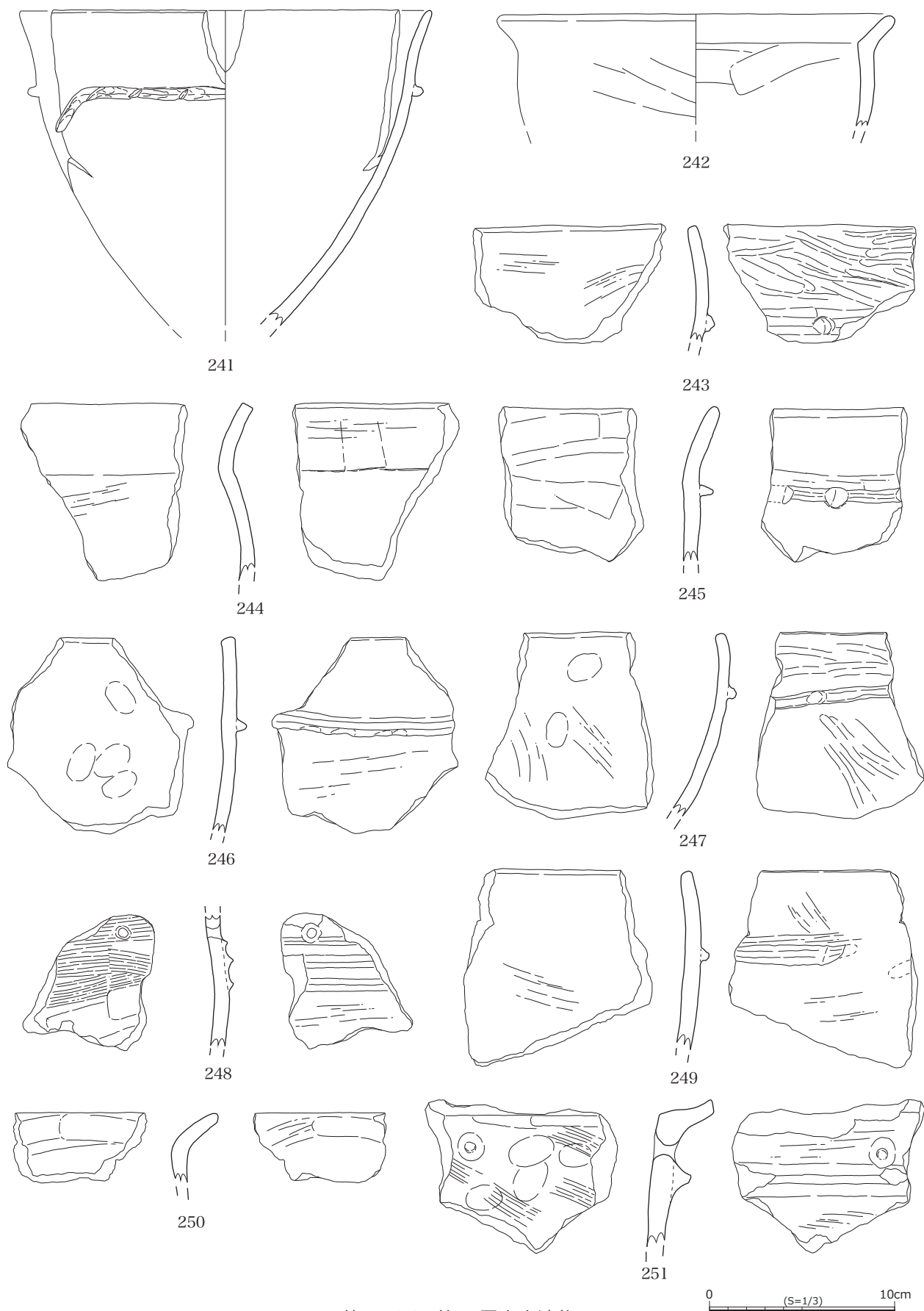
231



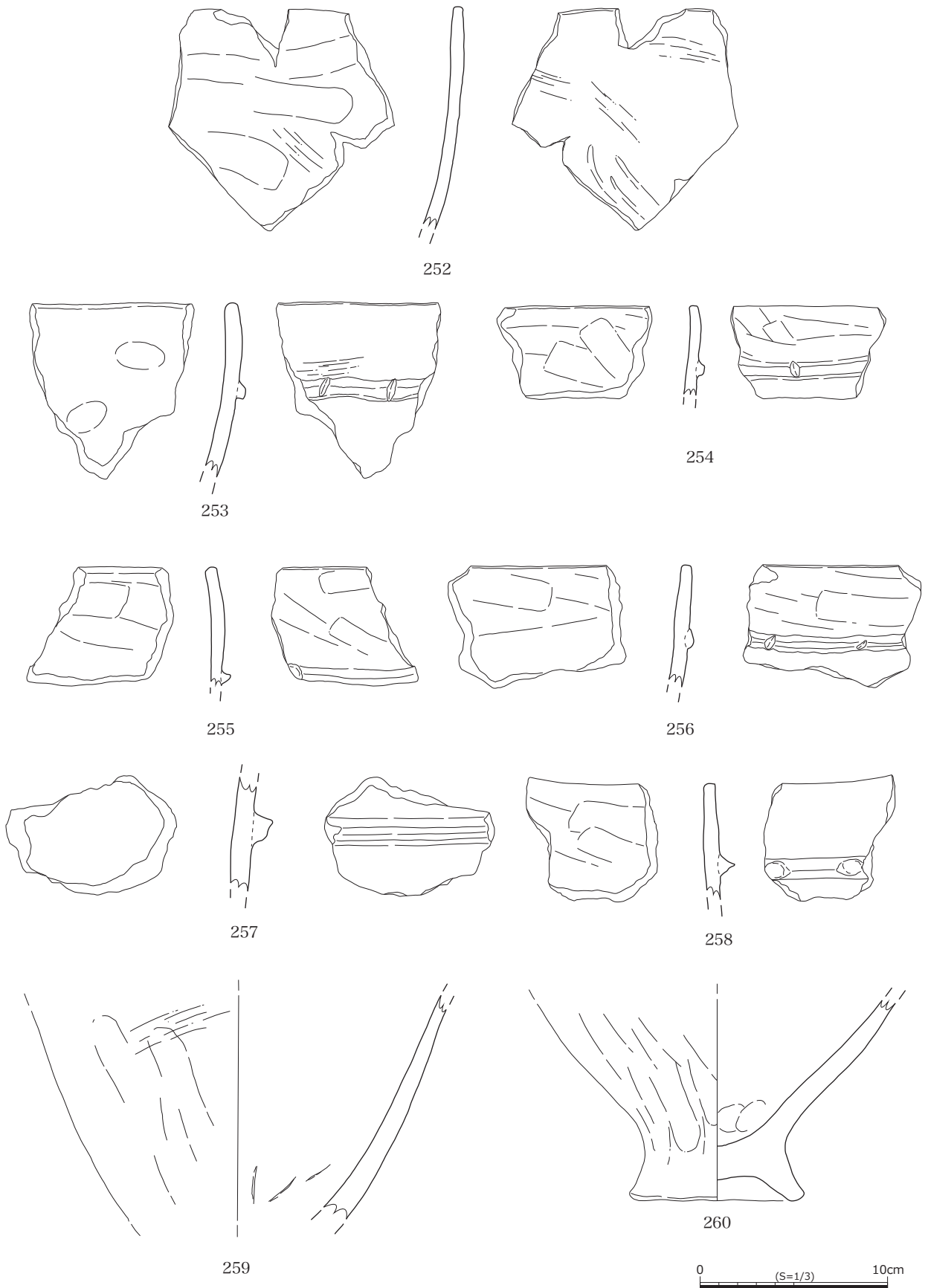
第84図 第9層出土遺物2



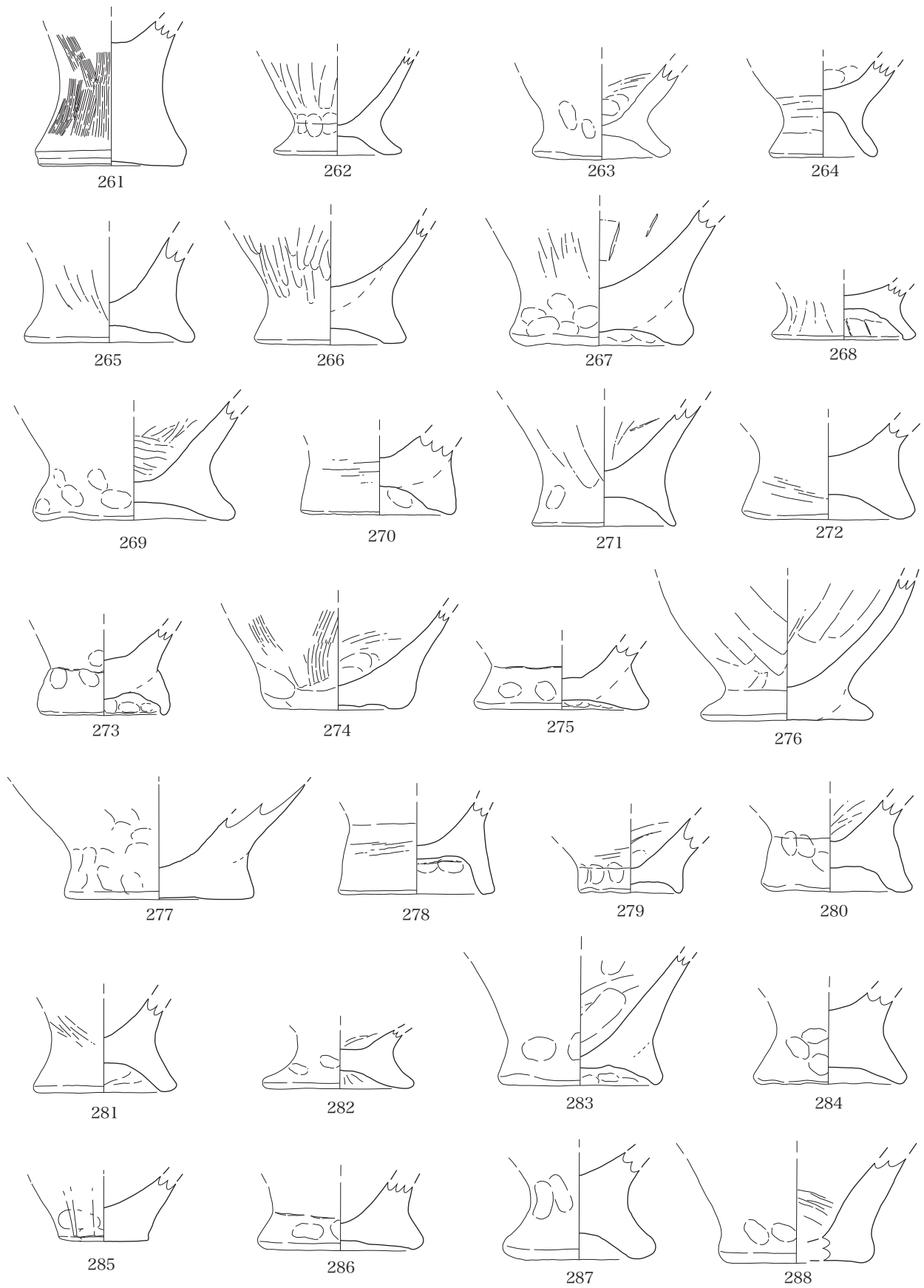
第85図 第9層出土遺物3



第86図 第9層出土遺物4

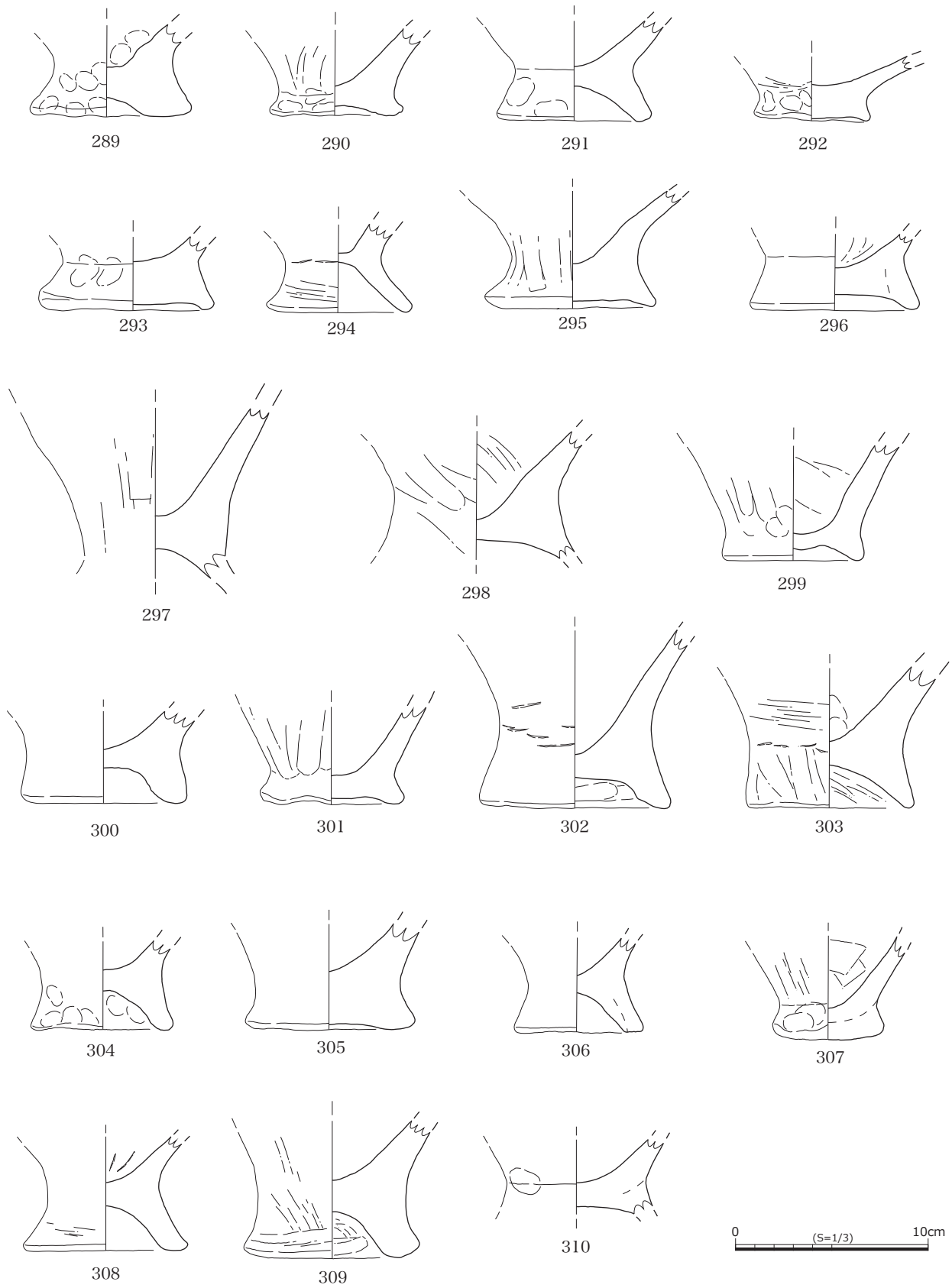


第87図 第9層出土遺物5

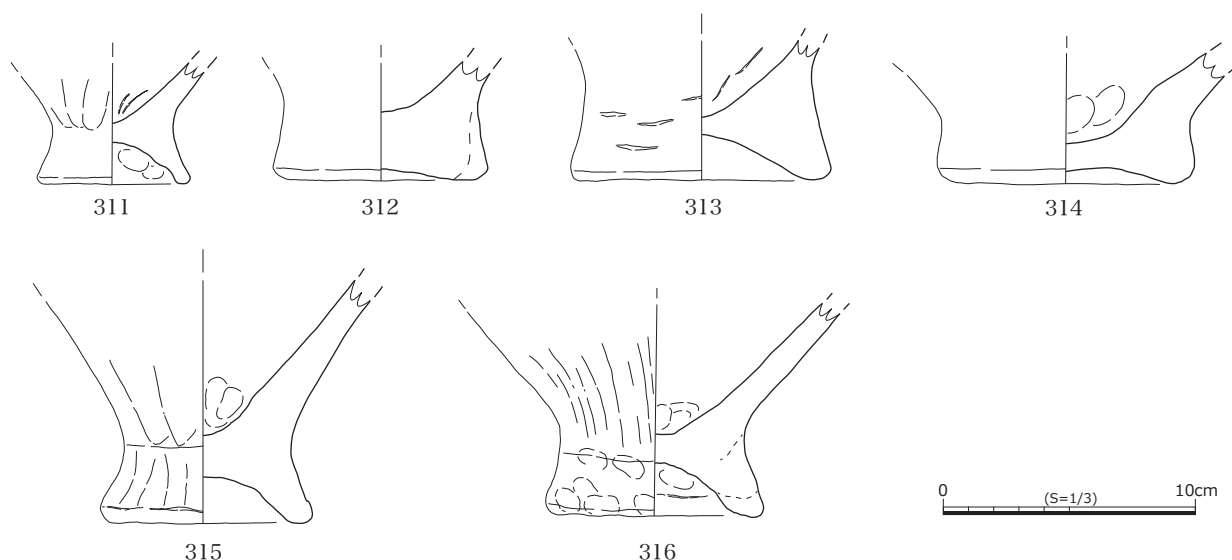


第88図 第9層出土遺物6

0 (S=1/3) 10cm



第89図 第9層出土遺物7



第90図 第9層出土遺物8

底端部は丸みをもつ。内外面ともナデ調整で、脚外面には成形時の指頭圧痕が残る。脚接合部には接合線がみられる。

278 は箱形の脚部形態で、接地部には面をもつ。脚部径 8.4cm，脚部高 3.0cm，底径 7.2cm を測る。脚天井部形態は平坦面をもつ形態である。内外面ともナデ調整がみられる。

279 は短くのびる脚部形態で、端部は先細りになる。脚部形態は復元径 5.6cm，脚部高 1.4cm，底径は復元径 5.7cm を測る。脚天井部形態は中心部がわずかに膨らむ。脚接合部には指頭圧痕が明瞭に残り、ゆがみがみられる。内外面ともナデ調整である。

280 はハの字に開く脚部形態で、端部は丸みをもつ。脚部径 8.0cm，脚部高 3.0cm，底径 6.6cm を測る。脚天井部形態は平坦面をもつ。内外面ともナデ調整で、外面には接合時の指頭圧痕が残る。

281 は直線的に開く形態の脚部で、口唇部はコの字状である。脚部径 7.7cm，脚部高 2.7cm，底径 5.5cm を測る。脚天井部形態は平坦である。内外面ともナデ調整がみられる。

282 はハの字に開く形態の脚部で、端部は丸みをおびる。脚部径 8.1cm，脚部高 2.0cm，底径 5.1cm を測る。脚天井部形態は低いドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

283 は短く開く脚部形態で、端部に向かって先細りする形態である。脚部径は復元径 8.8cm，脚部高 2.4cm，底径は復元径 7.7cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。胴部は直線的にのびる形態である。内外面ともナデ調整がみられる。

284 は短く開く脚部形態で、脚部径は復元径 8.1cm，脚部高 3.0cm，底径 5.7cm を測る。脚天井部形態は低いドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

285 は平底の底部である。端部はわずかにくびれ、脚台状にもみえる。底径 4.7cm を測る。外面調整は工具ナデ調整，内面調整はナデ調整である。

286 は上げ底状の脚台で、端部は丸い。脚部径は復元径 8.9cm，脚部高 2.0cm，底径は復元径 7.2cm を測る。脚天井部形態は低いドーム状である。脚接合部外面は工具を当てた痕跡がみられる。

287 はハの字に開く脚部形態を呈し、端部は丸みをおびる。脚部径は復元径 8.2cm，脚部高 3.1cm，底径は復元径 5.2cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整である。

288 はくびれた底部形態で脚台状を呈する。底径は復元径 8.3cm を測る。胴部はやや外反しながら立ち上がる。外面調整はナデ調整, 内面はミガキ調整である。

289 は短く開く形態で, 脚部径 8.4cm, 脚部高 2.7cm, 底径は復元径 6.1cm を測る。脚部外面には成形時のユビオサエが明瞭に見える。脚天井部形態は小さなドーム状を呈する。

290 は短くハの字に開く形態を呈し, 端部は先細りする。脚部径 6.9cm, 脚部高 1.3cm, 底径 6.0cm を測る。脚部外面には接合時の指頭圧痕が残る。脚天井部形態は低いドーム状である。内外面ともナデ調整である。

291 は直線的に開く形態の脚部で, 端部はコの字状である。脚部径は復元径 8.0cm, 脚部高 2.6cm, 底径は復元径 6.1cm を測る。脚天井部径はドーム状を呈する。内外面ともナデ調整である。

292 はわずかに上げ底となる脚部形態を呈する。脚部径 6.0cm, 脚部高 1.1cm, 底径 5.5cm を測る。脚接合時の指頭圧痕が明瞭に残り, 口唇部はゆがみが大きくなる。胴部は大きく開く開きながら立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

293 は上げ底状になる脚部形態で, 端部がコの字に飛び出す形態を呈する。脚部径 9.1cm, 脚部高 2.5cm, 底径 7.0cm を測る。脚天井部形態は平坦面をつくり, 丁寧なナデ調整が施される。内外面ともナデ調整である。

294 はハの字に開く脚部形態を呈し, 端部は丸い。脚部径 7.5cm, 脚部高 2.9cm, 底径は復元径 5.0cm を測る。脚天井部はドーム状を呈する。脚部外面はヨコナデ調整, 内面はナデ調整である。

295 は上げ底状になる脚部で, 端部に向かい先細りになる。脚部径 6.5cm, 脚部高 2.4cm, 底径 8.3cm を測る。脚接合部から胴下部にかけて外反しながら立ち上がる。脚部天井は平坦面をもつ。外面調整は工具ナデ調整, 内面調整はナデ調整である。

296 は直線的に短く開く脚部形態を呈し, 端部は丸みをおびる。脚部径は復元径 8.8cm, 脚部高 2.8cm, 底径は復元径 7.1cm を測る。脚天井部形態は平坦面をもち, 断面には脚部内面に粘土を充填した痕跡がみられる。内外面ともナデ調整である。

297 は脚接合部から胴下部である。胴部は直線的にのびる形態を呈する。底径 8.1cm を測る。脚天井部形態はドーム状となる。外面調整は工具ナデ調整, 内面はナデ調整である。内底面にはコゲがみられる。

298 は脚接合部から胴下部である。胴部は外反しながら開く形態を呈する。底径は復元径 8.5cm を測る。脚天井部形態は低いドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

299 は短く開く形態の脚部で, 端部は丸みをおびる。脚部径は復元径 7.3cm, 脚部高 1.5cm, 底径は復元径 7.0cm を測る。脚天井部形態は中央が膨らむ形態を呈する。脚接合部から胴下部にかけて直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

300 は短く直線的にのびる脚部で, 端部は丸みをおびる。脚部径 8.6cm, 脚部高 2.7cm, 底径 8.0cm を測る。脚天井部形態は平坦である。内外面ともナデ調整がみられる。

301 は低くハの字に開く脚部で, 端部は丸みをおびる。脚部径 7.5cm, 脚部高 1.6cm, 底径 6.4cm を測る。脚端部はゆがみが大きく, 波うった形態である。内外面ともナデ調整で, 内底面にはコゲの付着がみられる。

302 はハの字に開く形態の脚部で, 端部は先細りとなる。脚部径 9.9cm, 脚部高 4.2cm, 底径 7.8cm を測る。脚天井部形態はゆるやかに平坦面をつくりだす。脚接合部外面には工具ナデ痕跡がみられ, 胴部は外反しながら立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

303 は直線的にのびる脚部形態で, 端部にかけて先細りとなる。脚部径 8.8cm, 脚部高 2cm,

底径 7.9cm を測る。脚天井部はドーム状を呈する。脚接合部には工具ナデの痕跡が残り、胴下部にかけて外反しながら立ち上がる。外面は工具ナデ調整，内底面は摩滅のため不明である。

304 は直線的にのびる脚部形態で，端部は丸みをおびる。脚部径 7.4cm，脚部高 2.6cm，底径 6.3cm を測る。脚天井部はドーム状である。脚端部には成形時の指頭圧痕が残る。内外面ともナデ調整である。

305 は上げ底状となる脚部形態で，端部は丸みをもつ。脚部径 8.8cm，脚部高 2.2cm，底径 7.4cm を測る。内外面ともナデ調整が施される。

306 は直線的に開く脚部で，接地部には面をもつ。脚部径 6.7cm，脚部高 2.4cm，底径 5.2cm を測る。脚天井部形態はドーム状で，脚部内面には粘土貼り付けの接合線がみえる。

307 は脚台状の底部で，丸底に近い。脚部径は復元径 8.8cm，脚部高 1.6cm，底径は復元径 7.9cm を測る。断面には丸底の底部成形後に，粘土を付加し脚台を作り出している痕跡が確認できる。外面調整はナデ調整，内面調整は工具ナデ調整である。

308 はハの字に開く形態の脚部で，接地部には面をもつ。脚端部はわずかに外反する。脚部径 8.5cm，脚部高 3.0cm，底径 5.8cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

309 は短く開く脚部形態で，端部はコの字状である。接地部は脚部径 9.1cm，脚部高 3.0cm，底径 7.6cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられ，内底面には全面にススの付着がみられる。

310 は脚接合部から胴下部である。底径は復元径 7.2cm を測る。脚天井部形態はドーム状を呈する。内外面ともナデ調整である。

311 は直線的に開く脚部形態で，接地部には面をもつ。脚部径 6.1cm，脚部高 2.3cm，底径 4.8cm を測る。脚天井部は指頭圧痕によってゆがみがみられるが，ドーム状を呈する。内外面ともナデ調整である。

312 は上げ底状の脚部形態である。脚部径は復元径 8.5cm，脚部高 3.0cm，底径は復元径 7.6cm を測る。脚端部には粘土を付加した痕跡がある。内外面ともナデ調整がみられる。

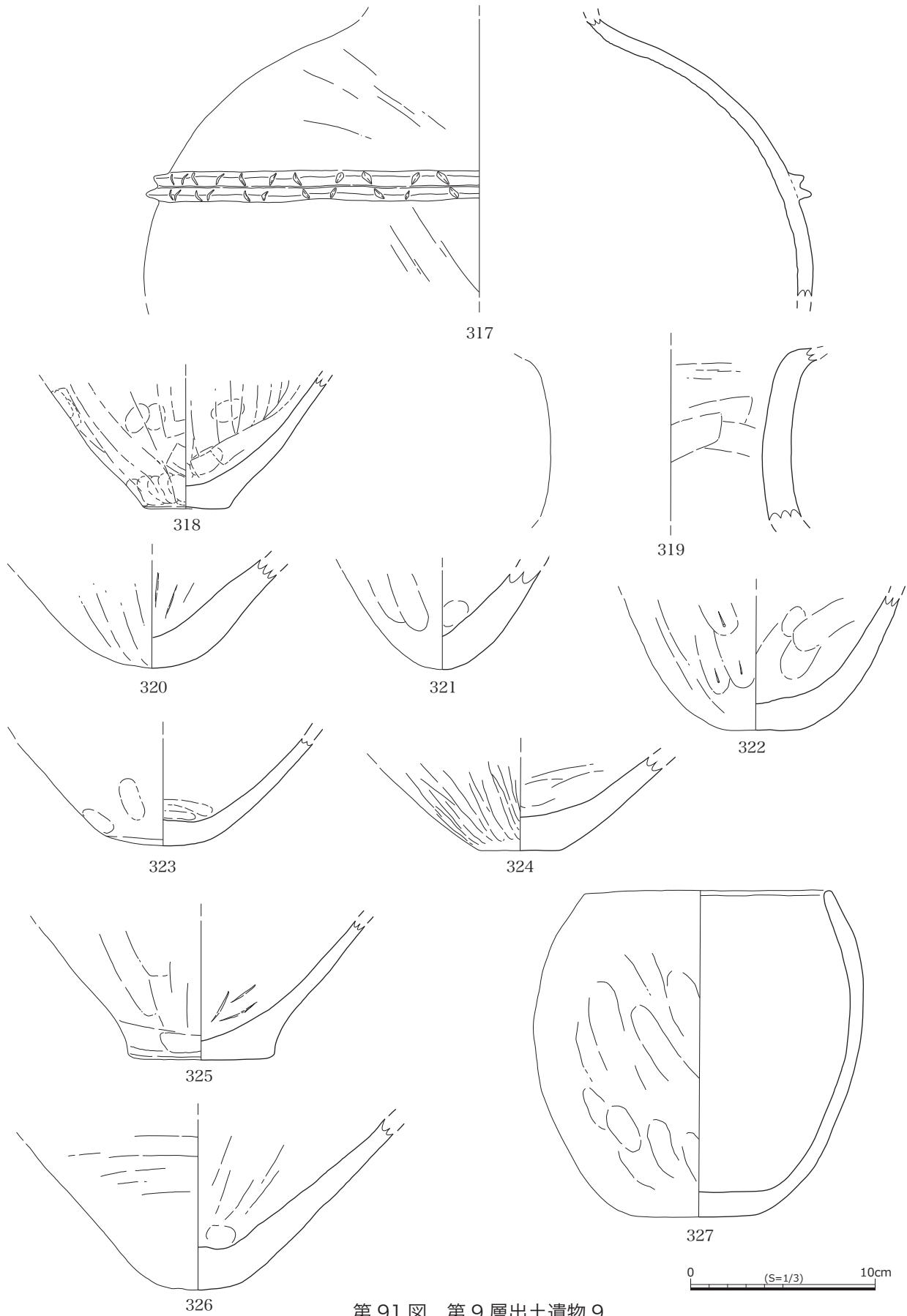
313 は直線的に先細りしながらのびる脚部形態を呈する。脚部径 10.3cm，脚部高 2.3cm，底径 9.0cm を測る。脚天井部形態はドーム状を呈する。脚部外面には工具ナデの痕跡がみられる。内外面ともナデ調整である。

314 は甕の脚部で，端部は丸みをもつ。脚部径は復元径 10.2cm，脚部高 2.6cm，底径 9.8cm を測る。脚天井部はゆるやかな平坦面をもつ。内外面ともナデ調整である。

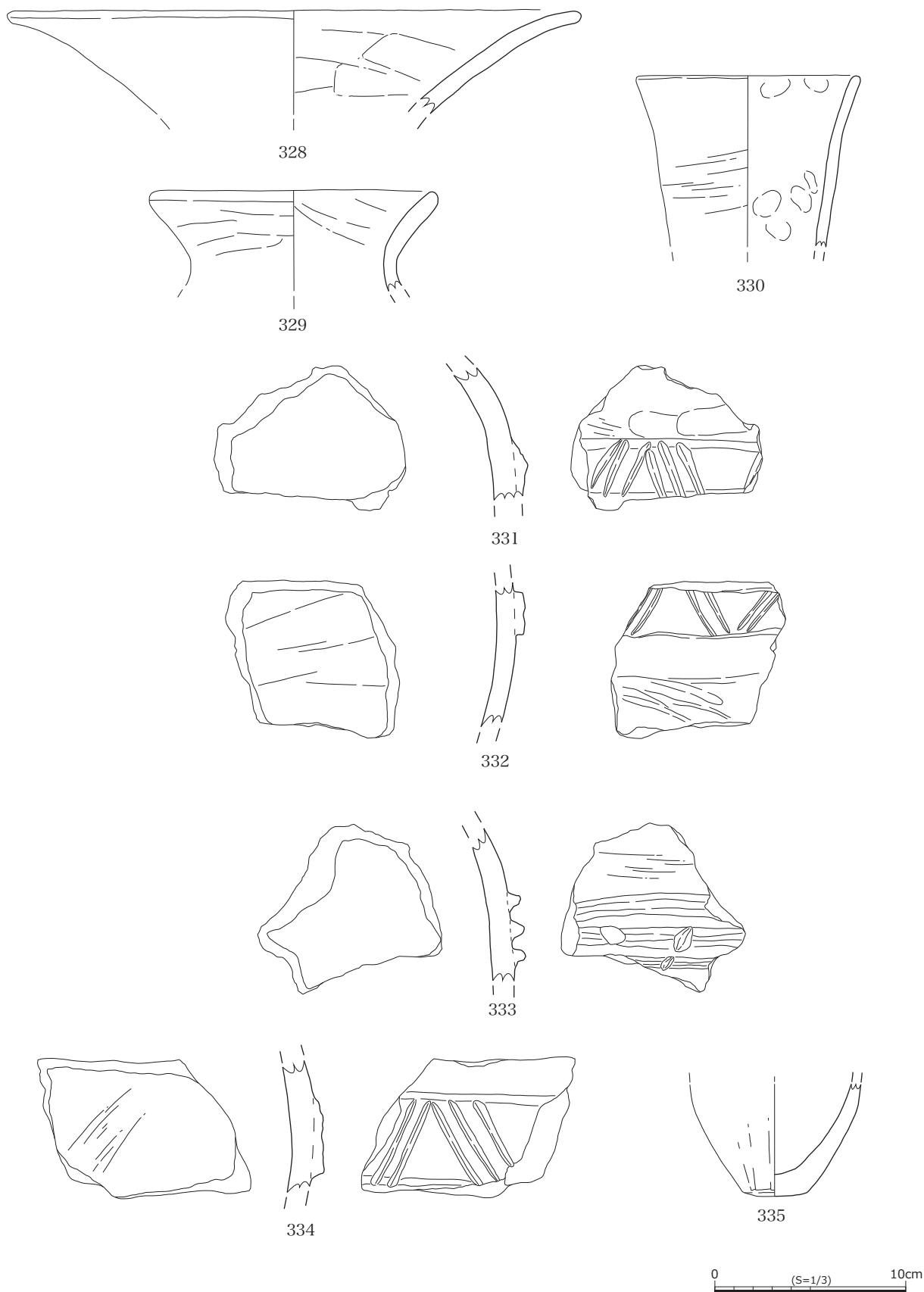
315 はハの字に開く脚部形態で，接地部に面をもつ。脚部径 8.4cm，脚部高 2.9cm，底径は復元径 6.6cm を測る。脚端部には粘土を付加した痕跡が確認できる。脚天井部形態はドーム状を呈する。外面は工具ナデ調整，内面はナデ調整である。

316 は脚部から胴下部である。直線的に開く脚部形態で，脚部径は 8.6cm，脚部高 2.0cm，底径 7.3cm を測る。脚天井部形態はドーム状で，摩滅しているが内外面ともナデ調整が主体で，脚外面には指頭圧痕が明瞭に残る。また，脚端部には粘土を付加した痕跡がみられる。

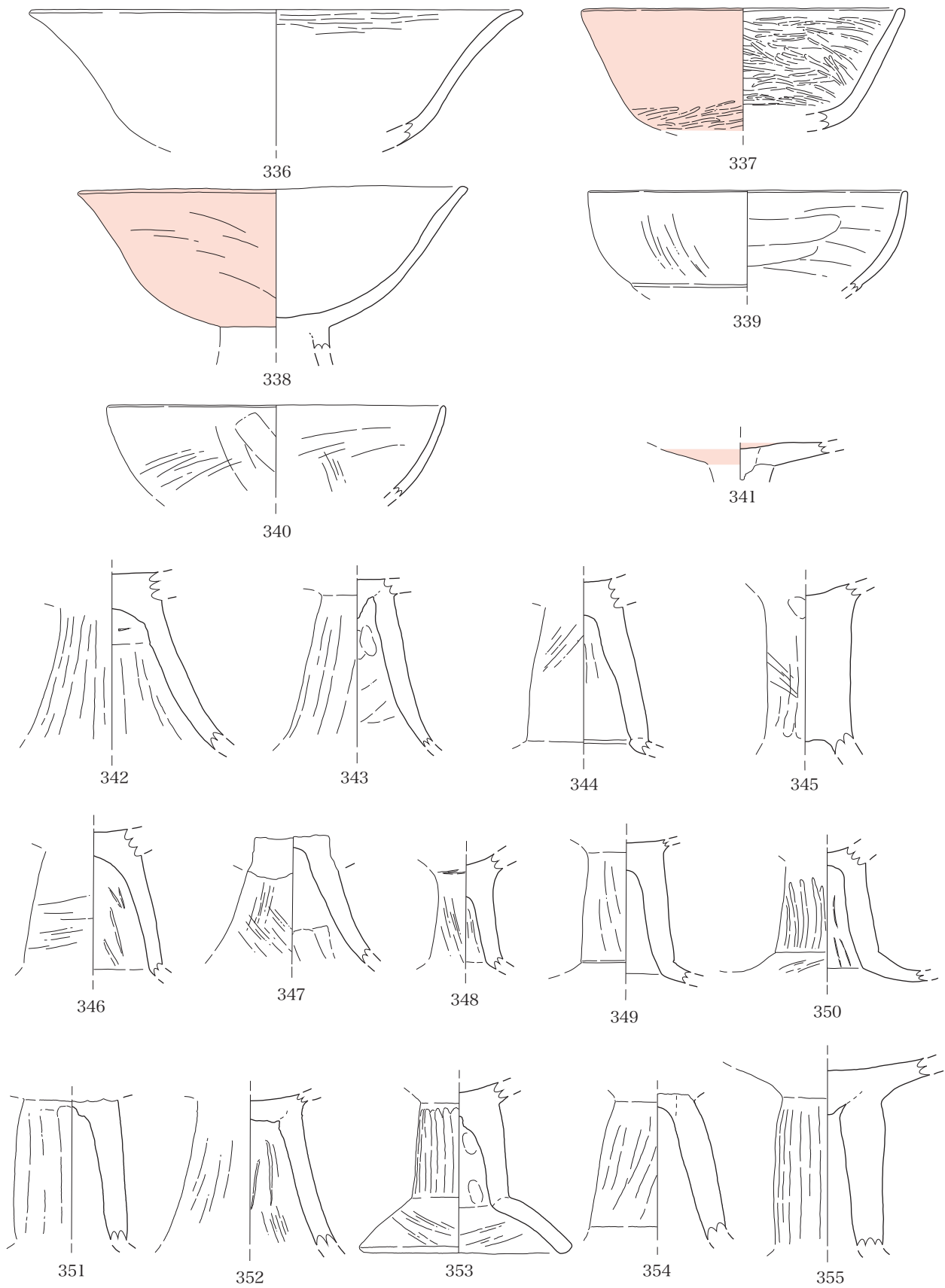
317 から 335 は壺である。317 は壺の頸部から胴部である。胴部最大径は復元径 36.0cm を測る。肩部には二条の突帯がめぐり，この突帯は粘土帯を貼り付けた後に，ヨコナデによって二条の突帯を作り出す「見かけ多条突帯」である。突帯幅は 1.7cm を測り，二条の突帯内部には刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具である。外面調整はナデ調整で，内面調整は摩滅により不明で



第91図 第9層出土遺物9

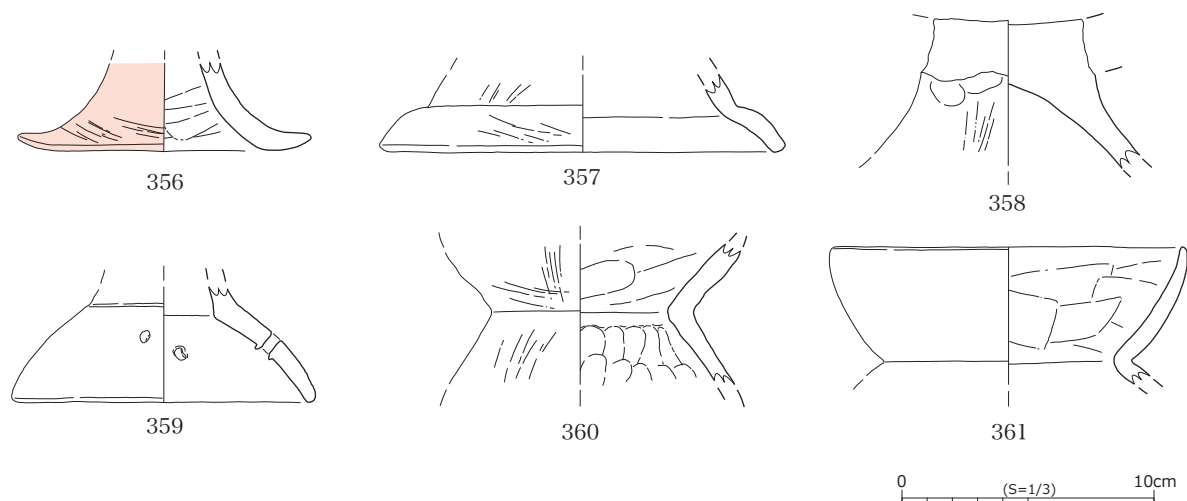


第92図 第9層出土遺物 10



0 (S=1/3) 10cm

第93図 第9層出土遺物11



第94図 第9層出土遺物12

ある。

318は壺の底部から胴下部である。底部は指頭圧痕によってわずかに上げ底状となる。底径は復元径4.6cmを測る。底部から胴下部にかけて丸みをもちながら立ち上がり、底端部には成形時のユビオサエが残る。内外面とも工具ナデが主体である。

319は大型壺の頸部である。口縁部はつよく外反する形態で、頸部は直線的にのびる。頸部径は復元径13.0cmを測る。内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整がみられる。

320は壺の底部で、丸底を呈する。内底面には赤色顔料が固結したような物質が付着している。内外面とも工具ナデ調整である。

321はやや尖底気味の壺底部である。胴下部にかけて直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整がみられる。

322は壺の底部である。底部形態はゆるやかな平底で、底径は復元径で4.0cmを測る。内面調整はナデ調整、外面は下方向へのケズリ調整がみられる。

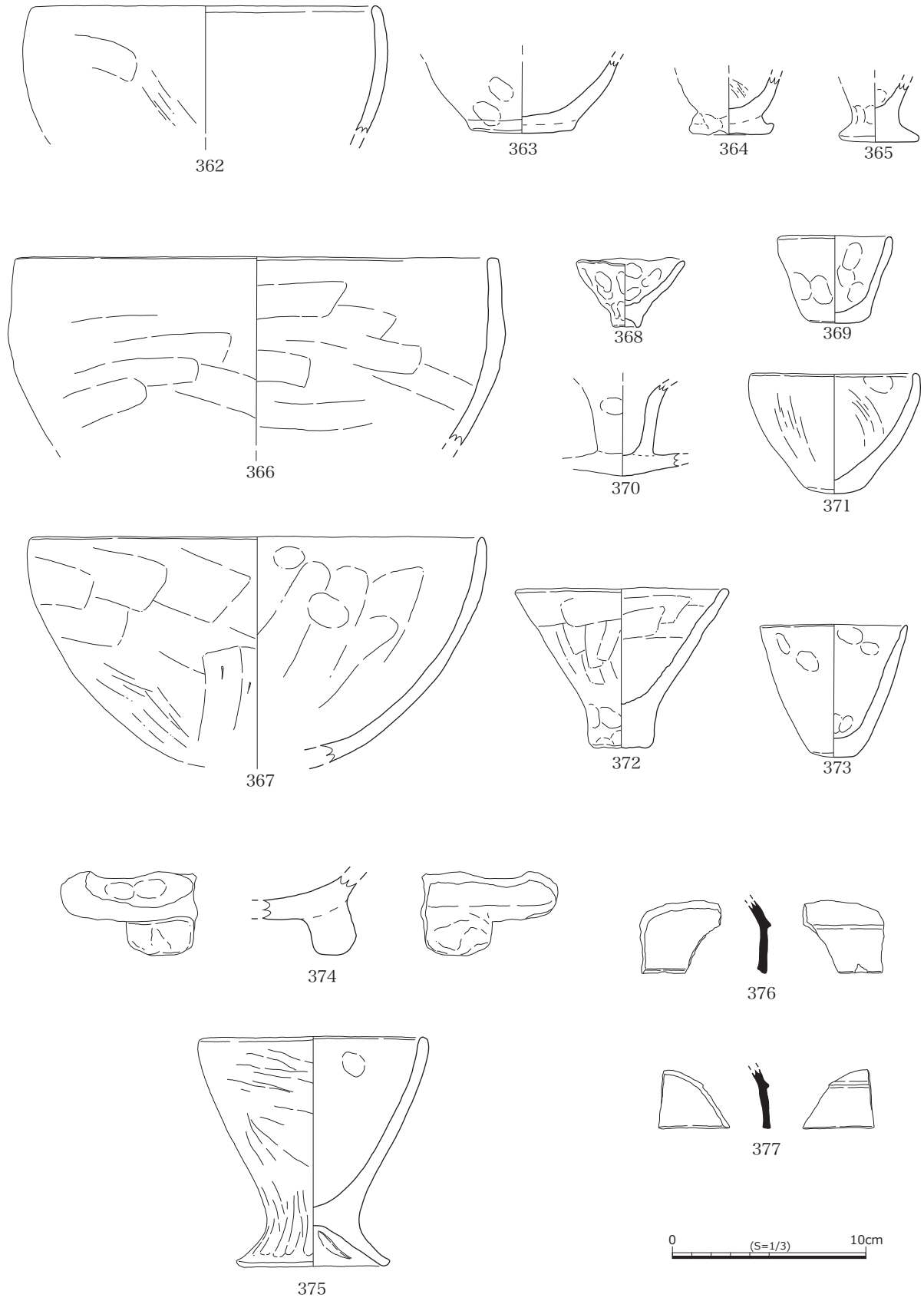
323は底部が丸みをおびた甕底部である。底径は5.4cmを測り、底端部にはゆるやかな稜線がみられる。胴部は直線的に立ち上がり、立ち上がり部分は摩滅している。内外面ともナデ調整である。

324は壺の底部から胴下部で、底部は平底を呈する。底径は復元径4.4cmを測る。底端部はシャープな作りで、胴下部にかけて膨らみをもちながら立ち上がる。外面は縦方向のミガキ調整、内面はナデ調整が施される。

325は壺の底部から胴下部で、底部は平底を呈する。底径は復元径8.0cmを測る。底端部は丸みをもち、くびれをもちながら立ち上がる。外面調整は、胴下部が縦方向のナデ調整、のちに底部に横方向のナデ調整がみられる。内底面には工具ナデ調整の痕跡がある。

326は壺の底部から胴下部で、底部形態はやや尖底気味の丸底である。胴下部にかけて直線的に立ち上がる。胴下部外面調整は横方向のナデ調整、内面は縦方向のナデ調整である。

327は無頸壺である。底部は平底で、胴部は球胴に膨らむ。口縁部は内湾し、端部は丸みをもつ。口径は復元径13.5cm、器高17.8cm、底径7.0cm、胴部最大径は17.7cmを測る。内外面ともナデ調整である。



第95図 第9層出土遺物13

328は壺の口縁部である。大きく外反する口縁部形態で、口径は復元径で30.0cmを測る。口唇部は丸く、内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整がみられる。

329は短頸壺である。口唇部は丸く、頸部でくの字に屈曲するが、内面の稜線は緩い。口径は復元径15.2cmを測る。内外面ともナデ調整である。

330は長頸壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる形態を呈し、口唇部は丸みをもつ。口径は復元径11.7cmを測る。内外面ともナデ調整である。

331から334は壺胴部の幅広突帯である。331は突帯内部に三条ずつの刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具によるものである。突帯の幅は3.6cmを測る。突帯端部は丁寧なヨコナデがみられる。

332は突帯内部に二条ずつの刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具である。突帯幅は2.4cmを測り、断面はコの字を呈する。外面調整はミガキ調整、内面調整はナデ調整である。

333は三条の多条突帯が貼り付けられる壺胴部片である。突帯は一条ずつ貼り付けられるもので、突帯貼付け後に一条の刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具である。外面はナデ調整、内面は摩滅しており調整不明である。

334は突帯内部に三条ずつの刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具による。突帯幅は4.4cmを測る。内外面ともナデ調整である。

335は小型壺の底部である。やや丸みをもつ底部で、自立はしない。底径は3.4cmを測る。外面は工具ナデ調整、内面はナデ調整である。

336から359は高杯である。336は高杯杯部で、口縁部がゆるやかに外反する形態を呈する。口唇部は丸く、口径は復元径26.0cmを測る。内外面ともナデ調整である。

337は箱形の杯部で、胴屈曲部から口縁部にかけて直線的に開く。口径は復元径17.0cm、杯部高7.0cmを測る。内外面とも単位の細かいミガキ調整が施され、外面には赤色塗彩がみられる。

338は杯部から脚接合部である。形態は椀状を呈し、口縁部はわずかに外反する。口径は復元径20.5cm、杯部高7.0cm、脚接合部径は5.7cmを測る。内外面とも摩滅が著しいが、杯部外面には赤色塗彩がみられる。

339は椀状の杯部で、口唇部は丸い。口径は復元径16.8cmを測る。胴部には凹線状のくぼみがみられる。内外面ともナデ調整である。

340は椀状の杯部で、口径は復元径17.8cmを測る。内外面ともナデ調整である。

341は脚接合部で、接合部径は復元で3.6cmを測る。内外面とも赤色塗彩がみられる。杯接合方法は円錐塊を充填するものである。

342から359は高杯脚部である。342はスカート状に開く脚部形態で、脚接合部径は5.2cmを測る。外面はミガキ調整、内面はナデ調整、ケズリ調整がみられる。

343は緩やかに開く脚部形態で、脚接合部は3.9cmを測る。杯接合方法は円錐塊を充填するものである。内外面ともナデ調整である。

344は脚部の途中から強く屈折して開くものである。脚接合部径は4.1cmを測る。内外面ともナデ調整である。

345は筒状の充填脚部で、筒部径は4.3cmを測る。欠損しているが脚部に向かって緩やかに外反する形態であると考えられる。

346はわずかにエンタシス状を呈する脚部形態で、途中で屈折する。脚接合部径は5.0cmを測る。外面はナデ調整、内面は工具ナデ調整である。

347 はスカート状に開く脚部形態で、脚接合部で剥落している。杯接合方法は脚部を杯部に挿入する法で、接合部径は復元径 4.8cm を測る。内外面ともナデ調整がみられる。

348 は筒部の途中から屈折する脚部形態である。脚接合部径は 2.9cm を測る。内外面ともナデ調整である。

349 はわずかにエンタシス状を呈する筒部を持ち、筒部の途中から強く屈折する脚部である。脚接合部径は 4.0cm、屈折部径は 4.8cm を測る。内外面ともナデ調整である。

350 は筒部からやや反り返りながら屈折する脚部形態をもつ。脚接合部径は 4.1cm、屈折部径は 5.3cm を測る。外面調整は縦方向のミガキ調整、内面は工具ナデ調整である。

351 はエンタシス状の筒部である。脚接合部径は 4.9cm、屈折部径は 5.8cm を測る。外面はナデ調整、内面は摩滅のため調整不明である。

352 はスカート状に開く脚部形態で、脚接合部は剥落している。脚接合部径は 5.3cm を測る。杯接合方法は脚部を杯部に挿入する方法である。内外面ともナデ調整がみられる。

353 は屈折部から袋状に開く脚部である。端部はコの字状となり、脚部径は 11.2cm を測る。筒部は直線に立ち上がり、筒部径 4.1 ～ 5.1cm を測る。筒部外面は縦方向のミガキ調整、内面はミガキ調整である。

354 はわずかにエンタシス状筒部をもつ脚部である。脚接合部径は 4.1cm、屈折部径は 7.1cm を測る。内外面ともナデ調整である。

356 は脚端部が反り返る形態のもので、脚部径は復元径で 11.7cm を測る。内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整で赤色塗彩がみられる。

357 は脚部下半から屈折して短く膨らむ形態を呈し、端部はコの字状である。脚部径は復元径 16.0cm を測る。内外面ともナデ調整である。

358 はハの字に開く形態の脚部で、杯部との接合部分で剥落している。内外面ともナデ調整である。脚接合部径は復元径 6.8cm を測り、脚部を杯部に挿入する方法で接合される。

359 は屈折部から袋状に開く形態を呈し、穿孔がみられる。脚部径は復元径 12.0cm、穿孔径は 0.6cm を測る。内外面ともナデ調整である。

360 と 361 は埴である。360 は頸部で強く屈曲する形態を呈し、頸部径は復元径 8.0cm を測る。頸部内面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内外面ともナデ調整が主体である。

361 は受け口状口縁をもつ埴で、頸部から球胴状に膨らむ形態であると考えられる。口径は復元径 14.1cm、頸部径は復元径 9.8cm を測る。内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整である。

362 から 375 は鉢である。362 は椀状の鉢で、口縁部は内湾する。口径は復元径 18.2cm を測り、口縁部内面には稜線がみられる。内外面ともナデ調整である。

363 は鉢の底部から胴下部である。底部形態は座りの悪い平底で、底面には粘土を付加した痕跡がある。底径は復元径 5.4cm を測る。内外面ともナデ調整である。

364 は小型の鉢である。球状の形態に粘土を貼り付け、脚台状にしたもので、底径は 4.4cm を測る。内外面ともナデ調整である。

365 は小型鉢で、欠損しているがコップ状の形態になると考えられる。底部には粘土を貼り付け、脚台状となる。脚部径は 4.1cm、脚部高 1.2cm、底径 2.5cm を測る。内外面ともナデ調整である。

366 は大型の鉢である。椀状の形態を呈するが、口縁部は直立する。口径は復元径 25.0cm を測る。内外面とも工具ナデ調整がみられる。

367 はボウル状の鉢で、底部は欠損しているが丸底を呈すると考えられる。口径は復元径

23.7cm, 器高は推定 17.0cm を測る。内外面とも工具ナデ調整が主体だが, 外面胴下半にはケズリ調整がみられる。

368 は手捏ねの小型鉢である。盃状の形態で, 底部は脚台状となる。口径 5.6cm, 器高 3.3 ~ 3.6cm, 脚部径 1.5cm, 脚部高 0.7cm, 底径 1.8cm を測る。内外面ともユビオサエが明瞭に残る。

369 はグラス状の鉢である。底部は平底で, 口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口径は復元径 5.9cm, 器高 4.6cm, 底径 2.8cm を測る。内外面ともナデ調整である。

370 は燭台形の鉢で, 器部は大きく外反する。底部は水平に広がるが, 全形は不明である。内外面ともナデ調整である。

371 は丸底状の小型鉢である。口縁部は内湾し, 口径は復元径 8.8cm, 器高 6.2cm を測る。内外面ともナデ調整である。

372 は漏斗形を呈する小型鉢で, 底部は厚く, 直線的に突出する。口縁部にかけて直線的に開く形態で, 口径は復元径 11.0cm, 器高 8.2cm, 底径は復元径 3.3cm を測る。内外面とも工具ナデ調整で, 底部にはユビオサエがみられる。

373 はコップ形の小型鉢で, 底部から口縁部にかけて直線的に開く。口縁部はユビオサエによりやや先細りする。口径は復元径 7.6cm, 器高 6.9cm, 底径 2.5cm を測る。

374 は脚付土器で, 幅 3.5cm ほどの脚が付けられる。器部にはゆるやかな平坦面がみられる。残存する脚の横にはもう一つの脚が貼り付けられていた痕跡がみられ, 本来二脚~三脚であったと考えられる。

375 は椀状の器部に脚部がつく鉢である。口縁部はわずかに内湾し, 脚部はハの字に開く。口径は復元径 11.9cm, 器高 12.1cm, 底径 4.8cm, 脚部径 7.9cm, 脚部高 2.3cm を測る。外面はミガキ調整, 内面はナデ調整である。外面には黒斑がみられる。

376 と 377 は須恵器杯蓋である。ともに口唇部が M 字にくぼむ形態を呈し, 丁寧な回転ナデがみられる。377 には自然釉の付着がみられる。

378 は頁岩製の剥片を素材とした両面加工石器である。上端部は欠損している。b 面上部の大きな剥離面には磨面が認められる。

379 は扁平な楕円礫の剥片を素材とした楔形石器である。a・b 両面の上下両端に剥離痕が認められる。b 面上部の 2 枚の剥離痕が他の面に比べ摩滅しているのは, 使用によるものと考えられる。

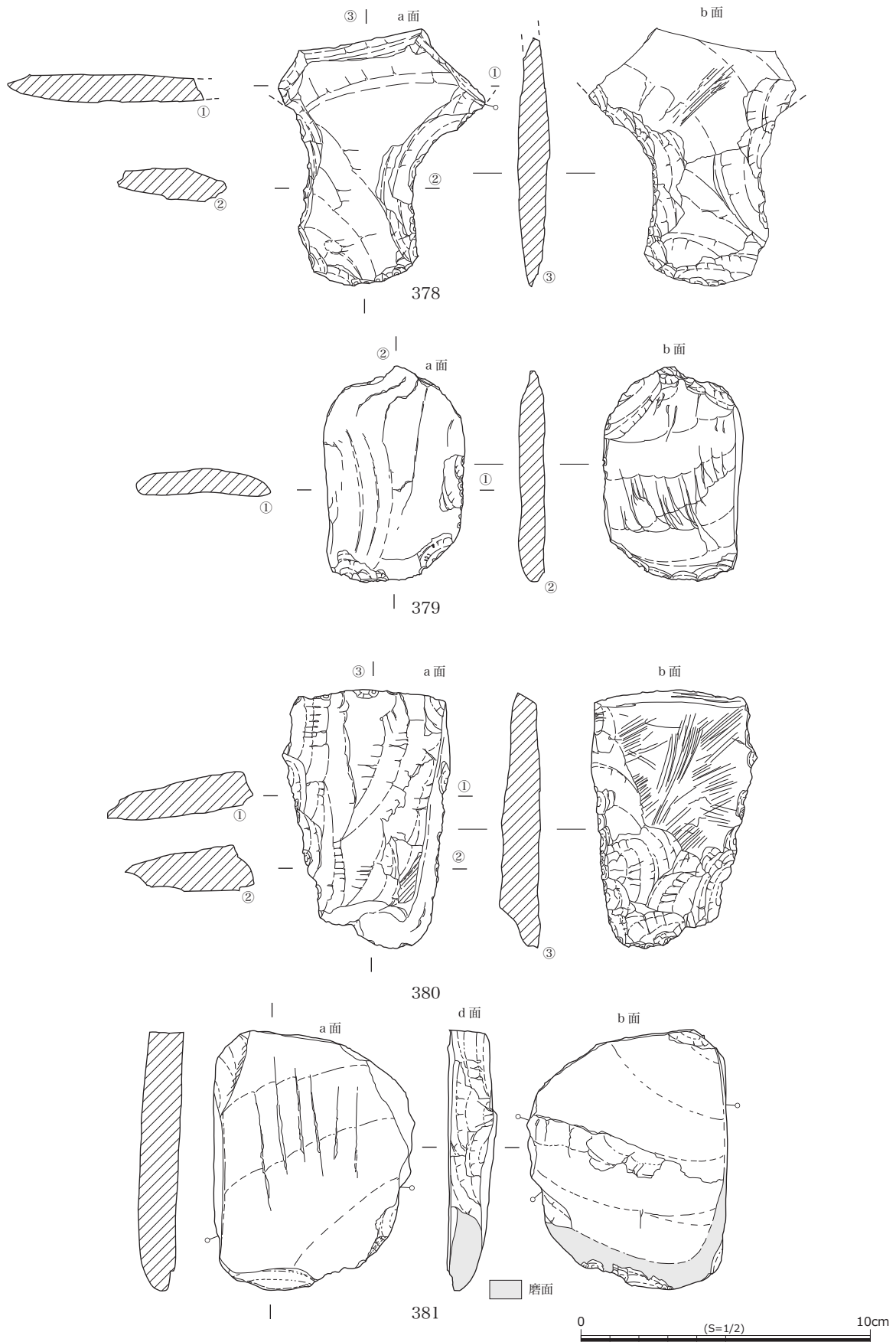
380 は下端部に自然面を残す横長剥片を素材とし, d 面左側部と b 面下部両側部に二次加工が施されている。また b 面上部には磨面が認められる。

381 は厚さ約 1.3cm の剥片を素材とした削器である。a 面右側部 (d 面) にみられるような二次加工が施されたのち, b 面下端部を使用面として削器として使われている。使用面の断面は丸みを帯び, 顕著な摩滅が認められる。

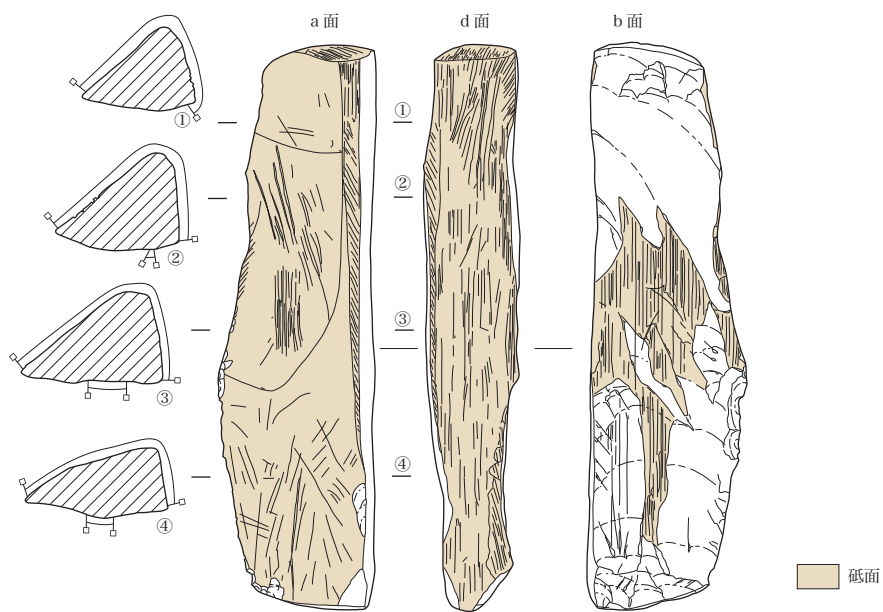
382 は断面隅丸の棒状礫を用いた砥石である。四面に砥面があり, 下端部には敲打痕が認められることから, 多機能の石器である。また d 面上端部にも敲打痕があるが, 凹面となっていることから何らかの道具の加撃があったと考えられる。

382 は長さ 15cm の頁岩製の剥片を素材とした砥石である。a 面と d 面を主な砥面として利用されており, また b 面の主要剥離面にも砥面が認められる。砥面には線状痕がみられ, 特に a 面上部と d 面上部には幅 1 ~ 2mm の線状痕があることから, 鋭利な道具を研いだことが想定できる。a 面上下両端にも磨面がある。a 面左側縁は剥片の縁辺であるが, 使用により稜が潰れている。

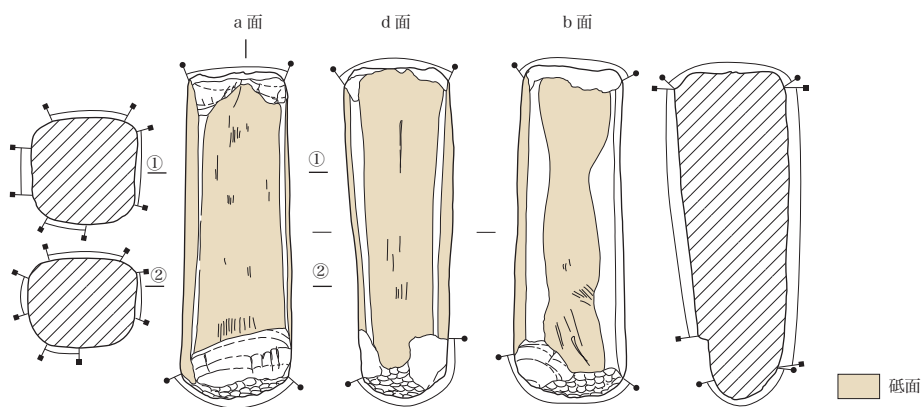
383 は板状の砂岩礫を用いた砥石である。a・b・c 面に砥面が認められ, a・b 面はその砥面の



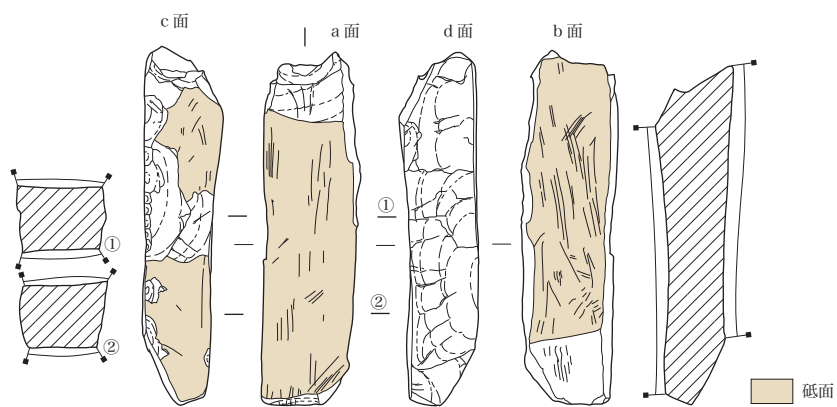
第96図 第9層出土遺物 14



382



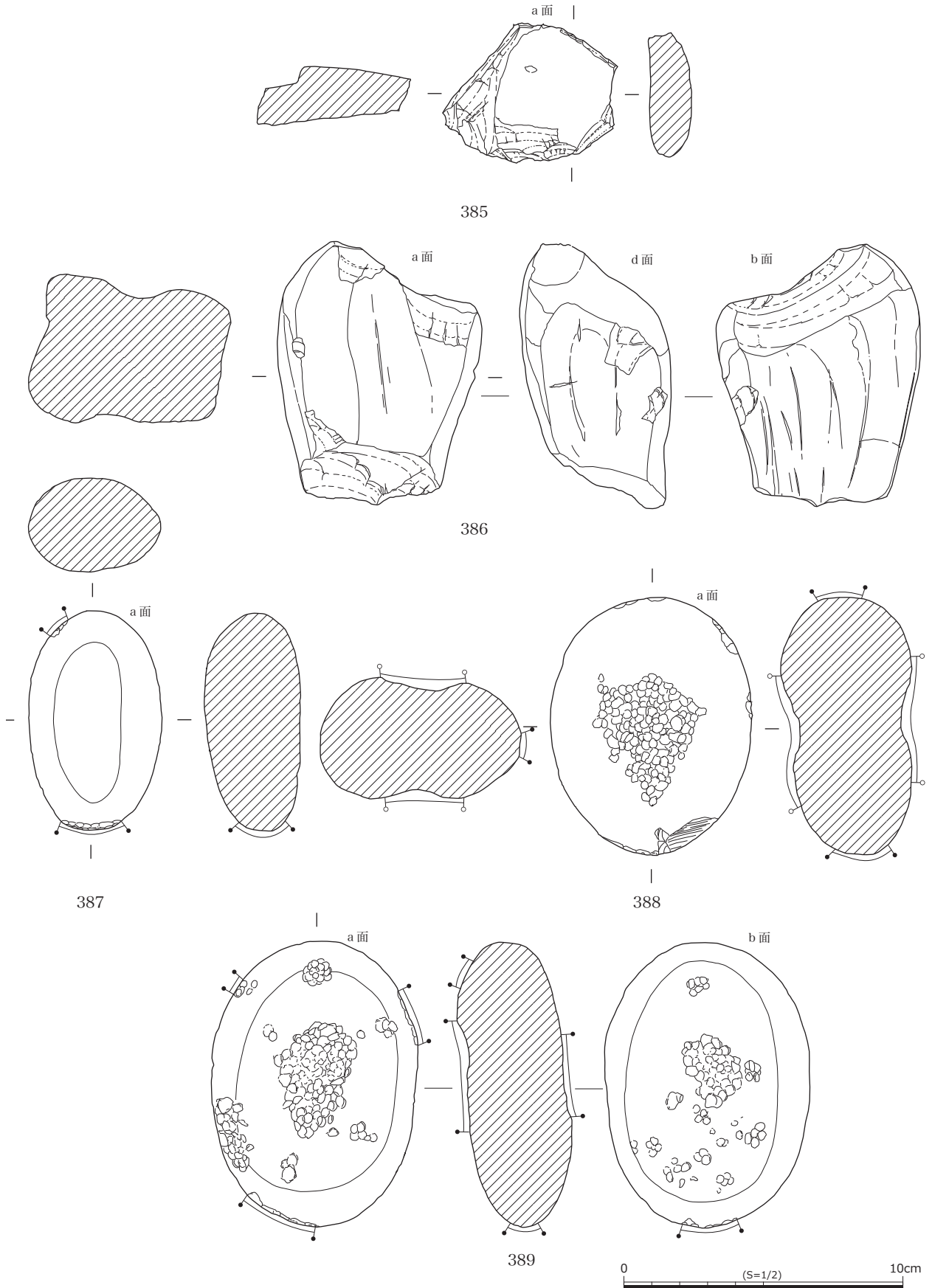
383



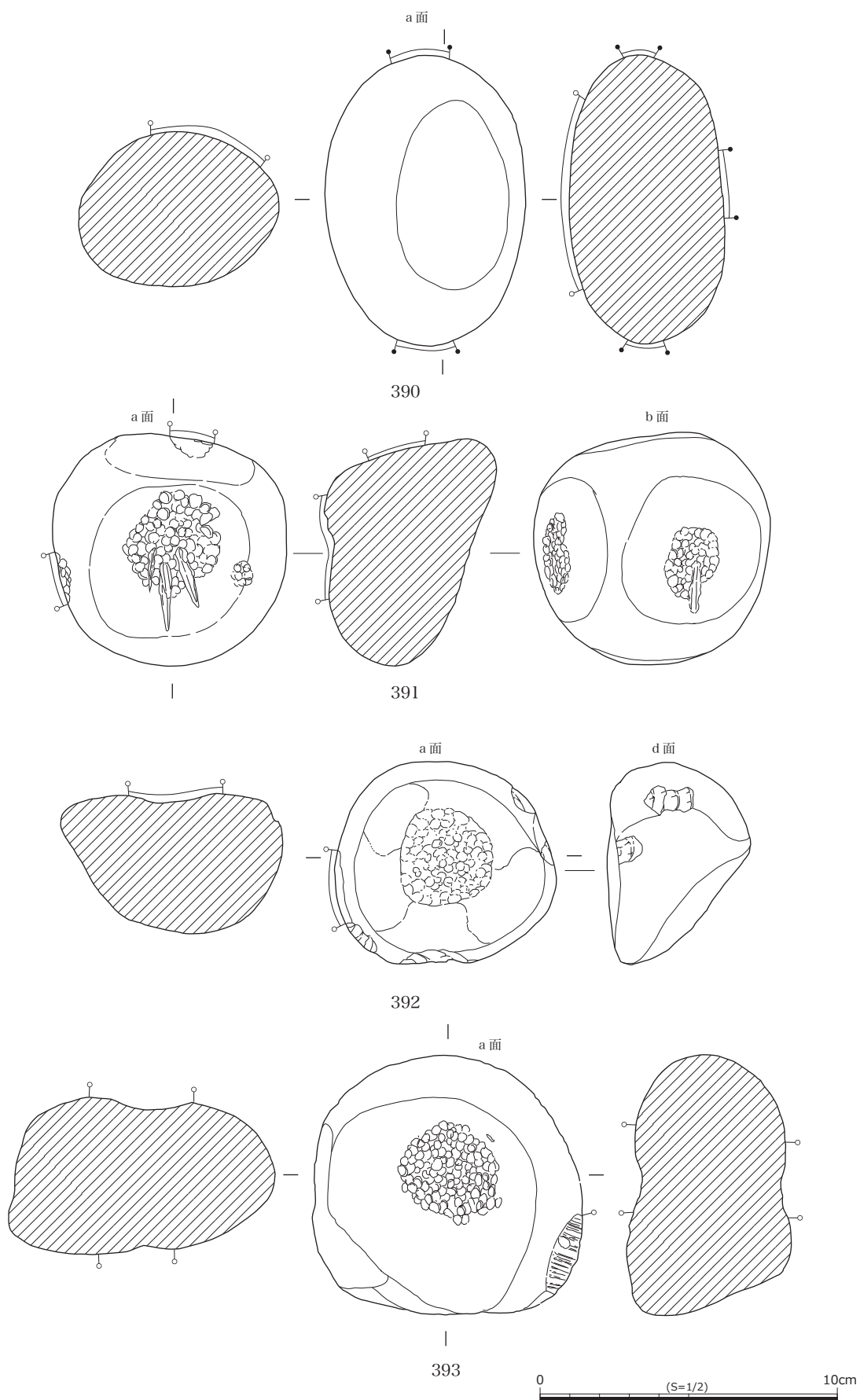
384

0 (S=1/2) 10cm

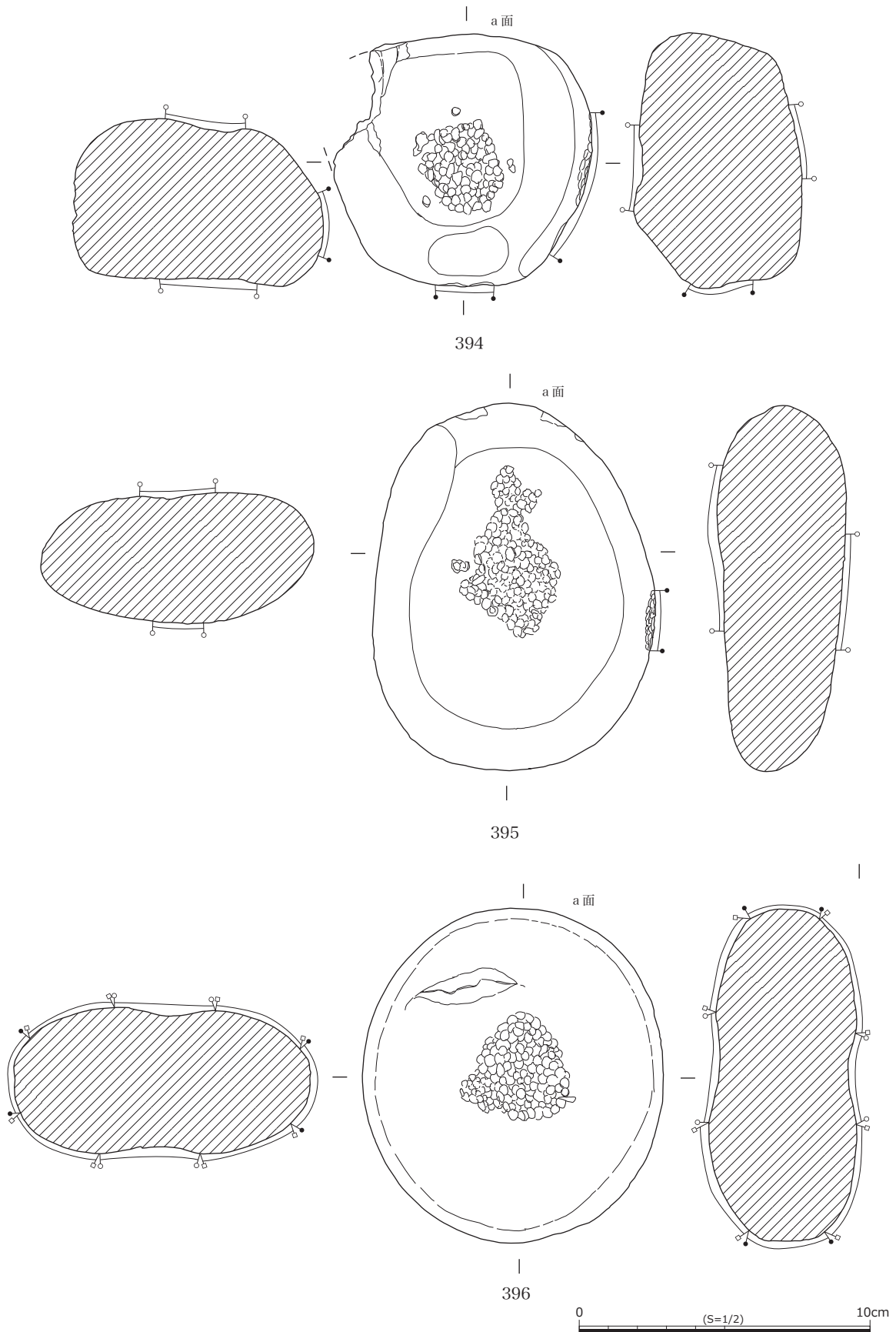
第97図 第9層出土遺物 15



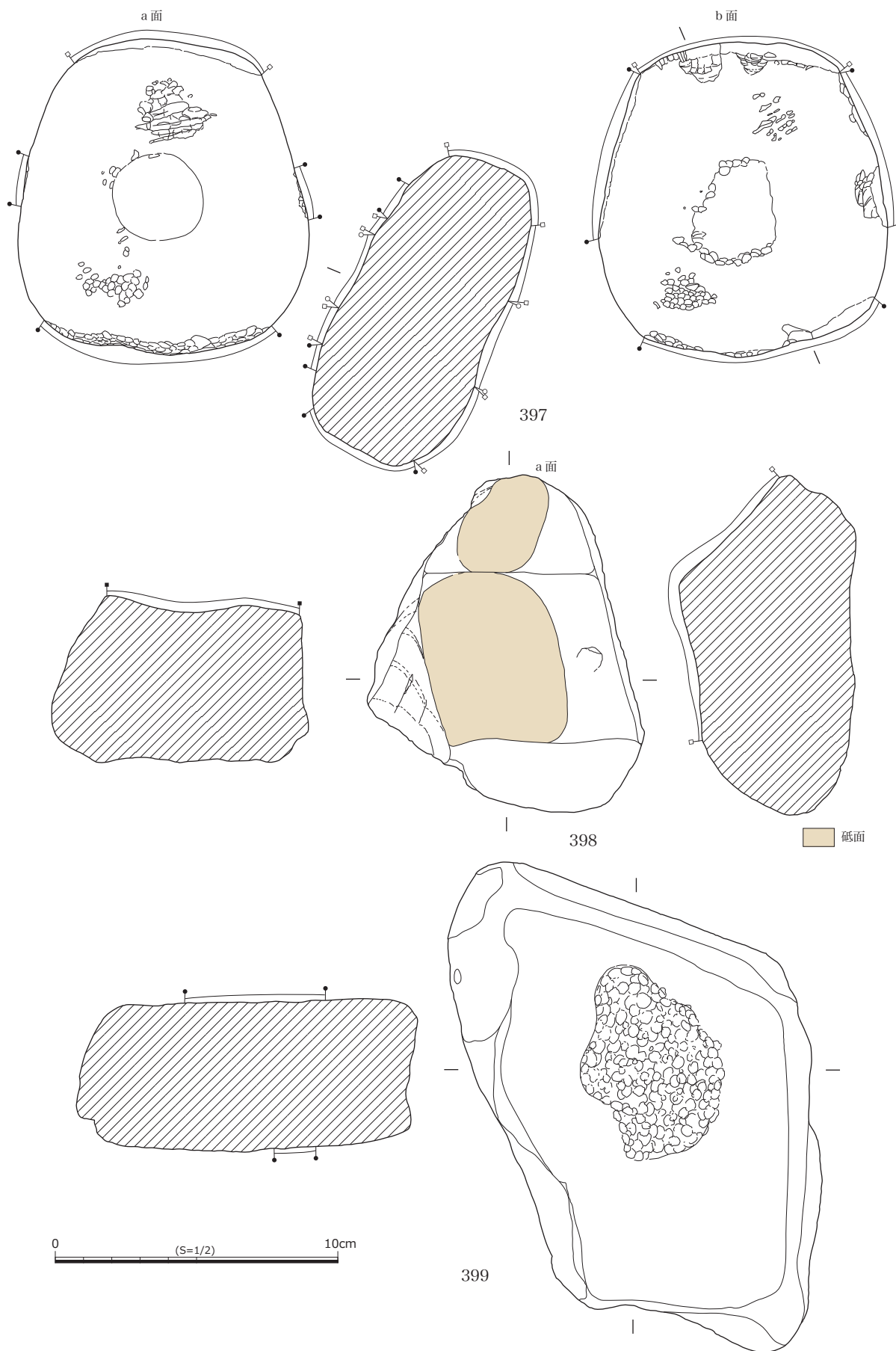
第98図 第9層出土遺物 16



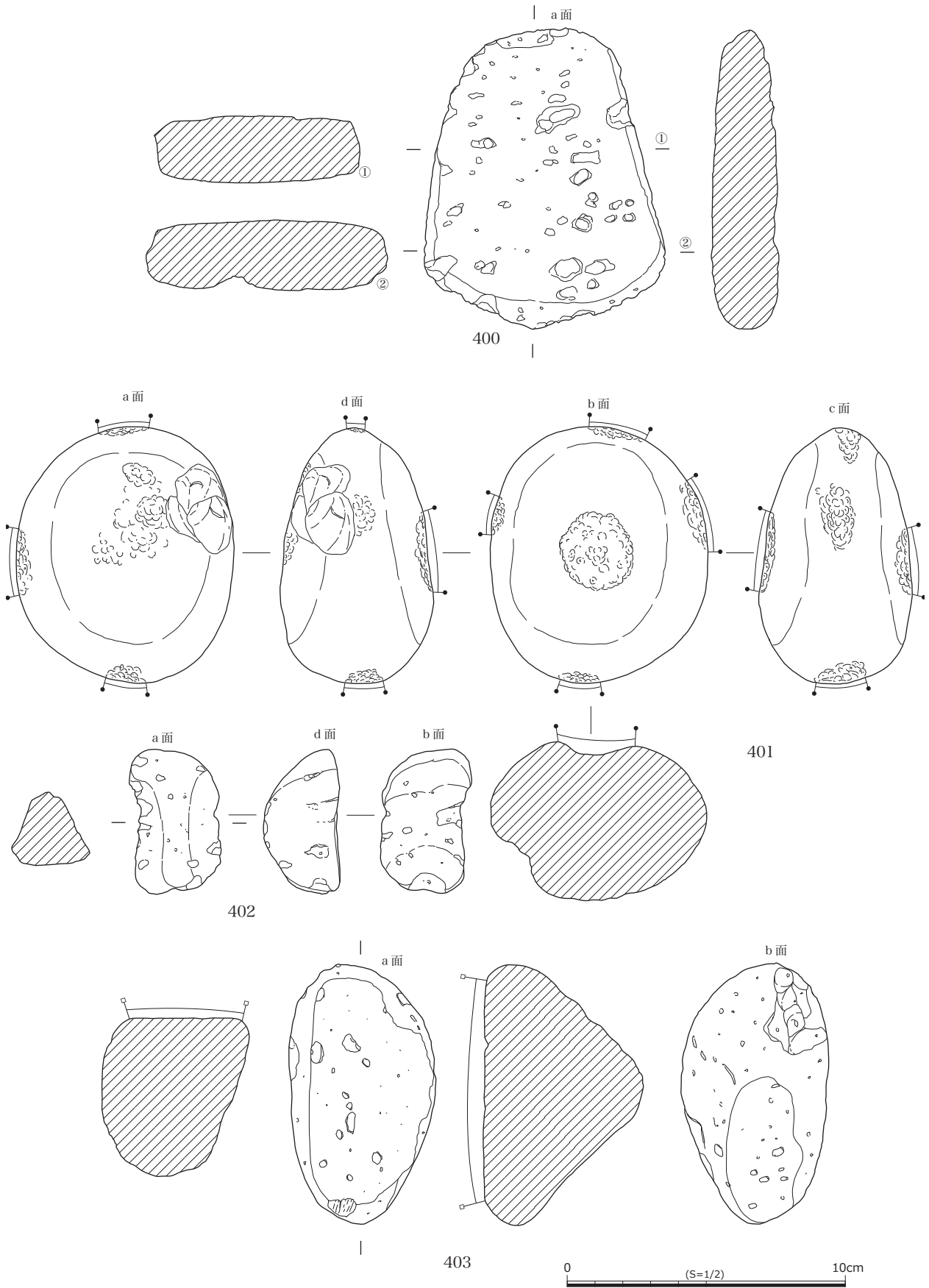
第99図 第9層出土遺物 17



第100図 第9層出土遺物18



第101図 第9層出土遺物19



第102図 第9層出土遺物20



第 103 図 第 9 層出土遺物 21

曲面から用いられた方向が推測でき、おおむね下部から上面に向けて縦方向の使用が想定できる。d 面は b 面側からの加撃による剥離面である。

385 は砂岩を素材とした砥石片である。砥面は a 面中央部にみられる平坦面がみられる。砥面の中でも特に a 面右側部はややへこみが認められることから使用頻度が他の面より高かったものと推測できる。砥石全体の全体形は周囲の意図的な打撃により不明である。

386 は砂岩礫を素材とした砥石である。四面に砥面があり、a・b・d 面に断面凹面を呈している。特に a 面が顕著である。a 面左側面の砥面には幅 6mm 長さ 5.4cm の溝状の砥面がある。b・d 面には使用による線状痕が明瞭に認められる。

387 は安山岩の楕円礫を用いた敲石である。a 面の上下両端に敲打痕が認められる。

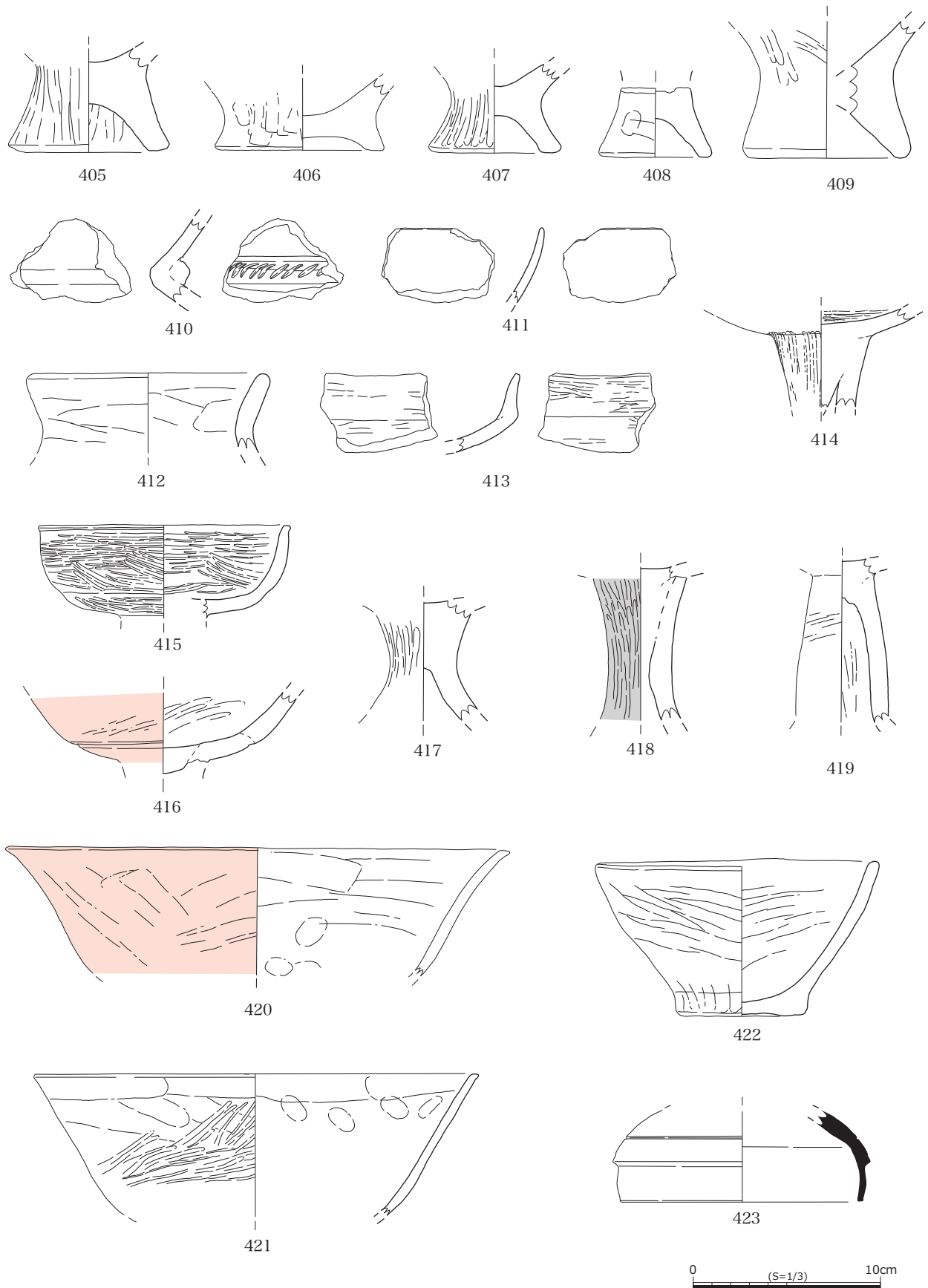
388 は安山岩の楕円礫を用いた凹石である。a 面とその裏面の中央部に凹面が認められる。また a 面左側部下部には削面がある。また石器周辺には敲打痕が認められる。

389 は安山岩の楕円礫を用いた凹石である。a・b 両面中央部に敲打による凹面が認められる。また a 面下部，a 面左側面中部・上部より，右側面上部よりに敲打痕が認められる。

390 は砂岩の楕円礫を用いた敲石である。a 面上下両端に浅い敲打痕が認められる。a 面中央から右側面にかけて磨面が認められる。a 面裏面中央部にわずかに敲打痕が認められる。敲打痕はいずれも浅いものである。

391 は断面隅丸三角形を呈する安山岩礫を用いた凹石である。a 面中央部・上部と b 面左・右側面に凹面が認められる。a 面左側面下部には敲打痕が認められる。なお b 面右側面凹面の周辺は他の面より滑らかであり，磨面と考えられる。また a 面，b 面の凹面には棒状の削痕がみられる。

392 は平坦面を有する安山岩の不整形礫を用いた凹石である。平坦面中央に約深さ約 2.5mm 程



第104図 第8層出土遺物

度の凹面がある。a面下部と右側面上部には剥離面が認められることから、何らかの打撃を行ったものと考えられる。またa面左側面には一部磨面が認められるが、後世の攪乱によるものと推測できる。

393は平坦面を有する不整形な安山岩礫を用いた凹石である。凹面にはa面とその裏面の中央部に認められ、よりa面の方がくぼみの深さは深い。またa面右側面下部には線状痕が認められ、敲打だけではない別の使われ方が行われていたことが推測できる。

394は不整形な安山岩礫を用いた凹石である。a面とその裏面に凹面が認められるがよりa面が深い。a面右側部と下部に敲打痕が認められる。a面左側面上部はb面からの加撃により欠損している。

395は扁平な面を有する楕円形礫を用いた凹石である。a面中央部とその裏面中央部に敲打による凹面が認められる。またa面右側面に敲打痕が認められる。

396はほぼ円形に近い安山岩礫を用いた凹石である。a面中央部とその裏面に凹面が認められる。凹面の深さはほぼ同じ約2mmを測る。またa面とその裏面の凹面の周辺は磨面である。石器の全集には敲打痕が認められる。

397は厚さ約5.6cmを測る楕円形の砂岩礫を用いた凹石である。a・b面中央部に凹面があるが、敲打痕のち磨面として利用されている。上下両端は形状が平坦面になるほど利用されている。a・b面とも凹面の左下部には敲打痕が、右上部には約2mmの棒状のもので削るような行為があったと推測される。両面の位置関係が同じことから決められた作業によるものと思われる。

398は分割面をa面左側部とa面裏面に有する砂岩礫を用いた砥石である。a面中央部に2面砥面がありいずれも凹面を呈している。

399は平坦面を有する不整形な安山岩礫を用いた台石である。a面とその裏面に敲打痕が認められる。敲打痕が認められる範囲外は平坦面であるが、磨面は認められない。

400は軽石の両面と側面を平坦に加工しながら、全体的な形状を整えた加工品である。a面下端部は角を有するように加工されている。用途は不明である。

401は安山岩を用いた凹石である。a面・d面の一部が欠損している。

403は軽石の一面に加工を施したものと考えられる軽石製加工品である。

404はa面に磨面が認められる軽石である。縦断面は隅丸三角形を呈しており、手のひらで持ちやすい形態と言える。

第5節 8層出土遺物 (第104図)

古墳時代に相当する扇状地堆積物層であり、5～30cmほど堆積する。層中には、スコリアのブロック（開聞岳の7世紀第4四半期の噴出物堆積層と休止期を挟んで下位に存在する初期の噴出物）や、砂層、池田湖起源の噴出物のブロック、池田湖降下軽石等を含む。古墳時代時などのローリングを受けたものが検出される。

405から410は甕である。405はハの字に開く脚部形態で、端部は平坦である。脚部径8.6cm、脚部高4.0cm、底径5.9cmを測る。脚天井部形態はドーム状で、内外面ともミガキ調整が施される。

406は短く開く脚部形態を呈し、接地面は平坦である。脚部径8.6cm、脚部高1.8cm、底径8.0cmを測る。脚天井部形態はゆるやかに平坦になる。内面はナデ調整、外面は工具ナデ調整である。

407 はハの字に開く形態の脚部で、接地面は平坦、端部はやや丸みをおびる。脚部径 7.0cm、脚部高 3.0cm、底径 4.8cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。外面は縦方向のミガキ調整、内面はナデ調整である。

408 はハの字に開く形態の脚部で、接地面は平坦である。脚部径は復元径 6.0cm、脚部高 3.7cm を測る。脚接合部で欠損している。内外面ともナデ調整がみられる。

409 は直線的にのびる脚部形態で、端部は丸い。脚部径は復元径 9.0cm、脚部高 4.7cm、底径は復元径 7.1cm を測る。外面はわずかにミガキ調整がみられるが、ナデ調整が主体である。

410 は甕の頸部である。くの字に強く屈曲する頸部で、屈曲部外面には一条の刻目突帯が貼り付けられる。口縁部は欠損しているが、直線的にのびるものと考えられる。

411 は鉢の口縁部である。内湾する形態で、器壁は薄い。内外面ともナデ調整である。

412 は短頸壺の口縁部である。口唇部は丸く、口径は復元径 13.0cm を測る。内外面とも工具ナデ調整がみられる。

413 は高杯の口縁部である。胴部で屈折して直立する口縁部で、口唇部は先細りする。内外面とも横方向のミガキ調整がみられる。

414 は高杯の脚接合部から脚部である。脚接合部径は 5.5cm を測る。脚部はややくびれる形態を呈し、内面には接合時の円錐塊が見える。脚外面は縦方向のミガキ調整、杯部は横方向のミガキ調整である。

415 は椀状高杯の杯部である。口唇部は外反し、口径は復元径 13.5cm、杯部高は 4.9cm を測る。杯部の屈折部は凹線状にくぼみがみられる。内外面とも横方向の丁寧なミガキ調整が主体で、外面は赤色塗彩がみられる。

416 は高杯の杯部で、脚接合部で欠損している。杯部形態は椀状で、外面には凹線状のくぼみがみられる。脚接合部は円錐粘土塊を充填する方法で接合される。内面はミガキ調整、外面はナデ調整である。

417 はくびれた形態の脚部で、大きくスカート状に開く形態を呈すると考えられる。内外面ともミガキ調整で、外面には黒斑がみられる。

418 はわずかにくびれる形態の脚部で、脚接合部で欠損している。接合方法は粘土円錐塊を充填する方法である。外面は縦方向のミガキ調整で、全体的に黒い発色である。

419 はエンタシス状を呈する脚部で、脚部途中で屈折する形態である。脚接合部径は 3.4cm を測る。内外面ともナデ調整である。

420 は高杯の杯部で、大きく外反する形態を呈する。口唇部は上方に面をもつ。口径は復元径 27.0cm を測る。内外面とも工具ナデ調整がみられる。

421 は高杯の杯部で、直線的に開く形態である。口唇部は上方に面を持ち、口径は復元径 23.7cm を測る。口縁部外面は丁寧なヨコナデ調整、体部外面はミガキ調整、内面はナデ調整がみられる。

422 は平底鉢で、底面はわずかに上げ底になる。椀状の形態で、口唇部は丸く、口径は 15.2cm を測る。器高 8.0～8.4cm、底径 7.3cm を測る。外面はミガキ調整、内面はナデ調整がみられる。

423 は須恵器杯蓋である。口唇部は平坦面をもち、口径は復元径 13.0cm を測る。内外面とも丁寧な回転ナデがみられる。

第4節 古代の遺構と遺物

(1) 遺構

古代に位置づけられる遺構として竪穴住居跡1基(SB1)、掘立柱建物跡2軒(SB2・8)がある。本来は、SB7とSB31も古代の遺構へ含まれるべきだが、調査時の整理状況を優先したため、節が別れることとなってしまった。

SB1・7・31は7世紀後半に位置づけられる第7層(青コラ火山灰層)上位の第6層から掘り込まれて作られていることから、7世紀後半から第6層(紫コラ火山灰層:874年)の間に位置づけられる。

【SB1】(第13図, 第106図~第108図)

SB1は、第7層青コラ火山灰層を掘り抜いて造営された竪穴建物である。また、竪穴埋没途中の窪地の状態で紫コラ火山灰が降下したものとみられ、第5層紫コラ火山灰層は竪穴中央部に向かって窪んでいる。橋牟礼川遺跡地内では、平成4年度・5年度において、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡で検出された4基の竪穴建物が同様の検出状況であった(下山他1996)。このことから、1号竪穴建物の造営時期は6世紀後半以降、874年までの間であると言える。

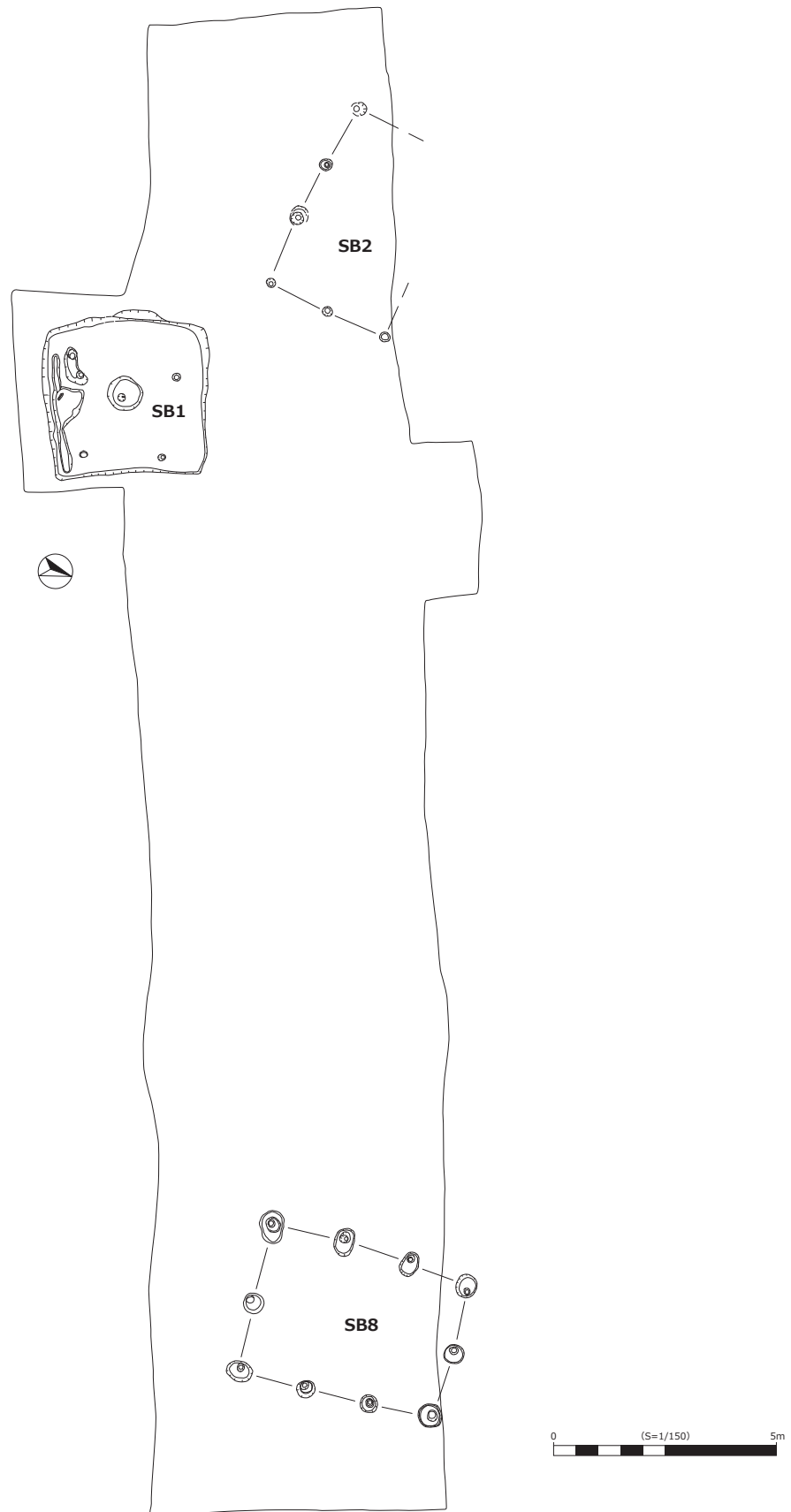
主軸を略東西にとり、長軸3.7m、短軸3.6mの略方形プランを呈する。東面に幅1.2m、長さ0.2m程度の張り出しがある。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット5基、床面中央の土坑1基(中央土坑)、北面竪穴下端に溝状の遺構等が検出された。中央土坑は長軸78cm、短軸76cmの略円形であり、深さは12cm程度、浅い逆台形の断面を呈する。土坑の床面中央から南東にややずれて直径16cm程度の浅い窪みが検出され、この内部でカーボンが出土した。なお、中央土坑検出面10cm程度上のレベルでは炭化物がまとまって検出されたが、土坑の埋土(青コラ火山灰のブロックを含むシルト質土壌)中にはカーボンが少量含まれる状況あったことから、建物埋没途上に形成されたカーボンとみられる。

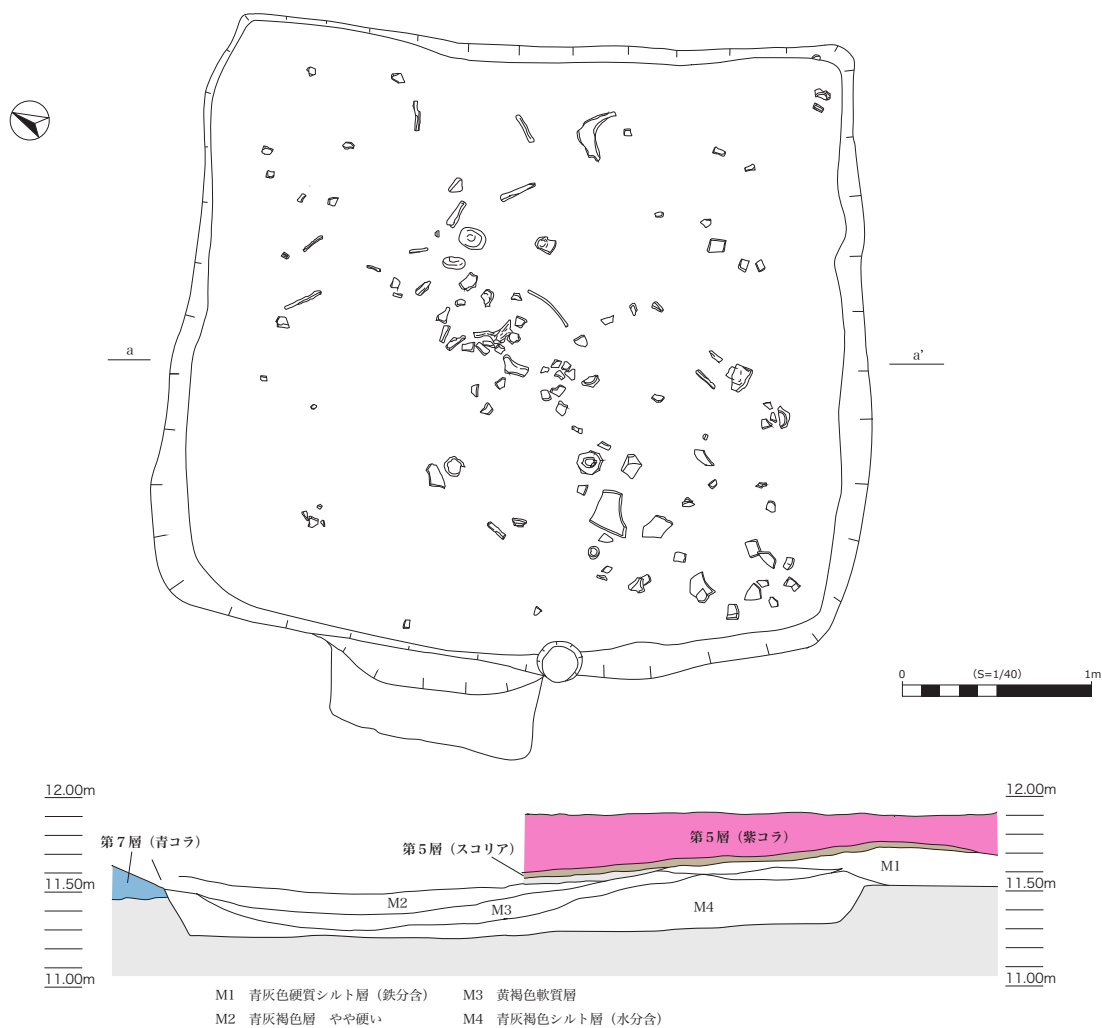
床面のピットは便宜上a~eとした。法量は、ピットaが最大径19cmの円形で深さ26cm、ピットbが最大径15cmの楕円形で深さ55cm、ピットcが最大径18cmの楕円形で深さ36cm、ピットdが最大径18cmの楕円形で深さ64cm、ピットeが最大径39cmの楕円形で深さ19cmである。ピットdとeは隣接し、深さ1cm程度の溝状の窪みで繋がっている。

北面の竪穴下端で検出された溝状遺構は、全長2.6m程度で幅20cm程度、深さ5cm程度であるが、北面中央付近で中央土坑に向かって奥行き70cm程度で台形状に張り出す形状となる。埋土は青コラ火山灰の混じるサラサラした砂質シルト土である。

ピットの配置に関しては、例えば西面からピットbまでが26cm、東面からピットaまでが1.1mとなり、床面西側に著しく偏っている状況である。また、ピット配置は竪穴東面に向かって開く台形状となる。このような形状の例として、古墳時代に帰属する宮ノ前遺跡3号住居址があり、支柱配置が台形状であり、かつこれが竪穴の南面に偏った配置となっている(弥栄・中島1981)。いづれにしても、柱や梁材の曲がりやゆがみに対応した柱配置の調整の範疇を超えていると考えられる。したがって、これらの建物では垂木の角度が西面と東面で異なる等の、上部構造の特徴を反映



第105図 古代遺構配置図



第 106 図 SB1 平面図・断面図

したものである可能性も考慮したい。なお、柱ピット e は他のピットに比べ浅く、東側に 1 基離れた位置にある。上部構造を構成する柱穴かは不明である。

〈SB1 出土遺物〉

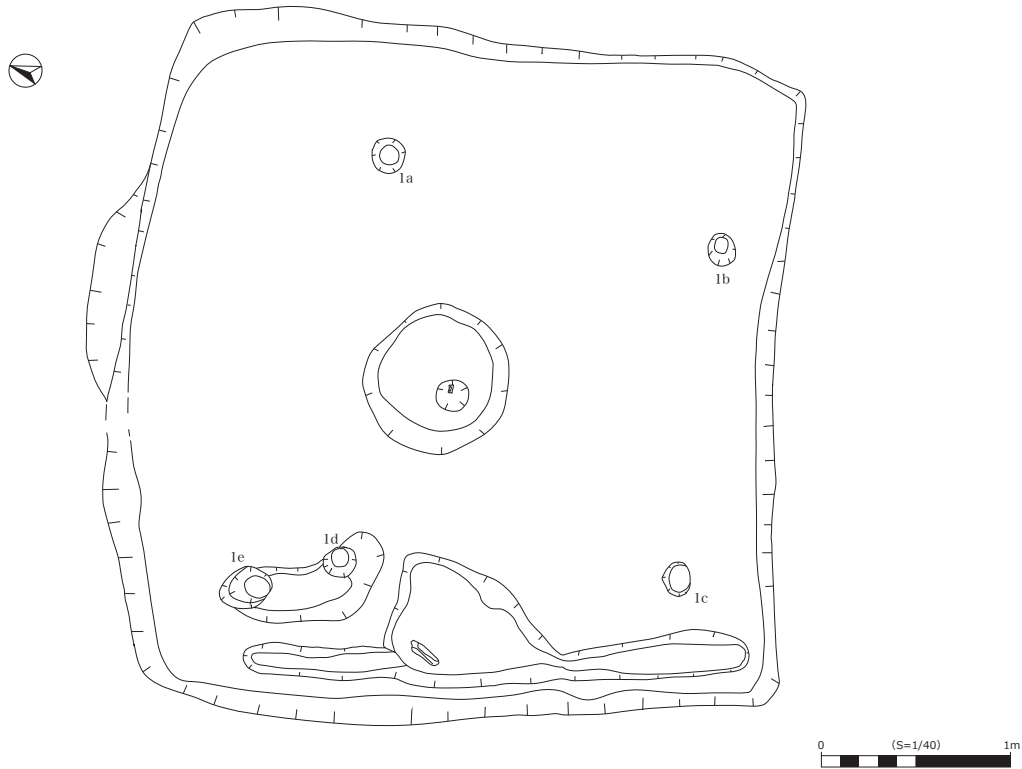
SB1 出土遺物は平面図を見る限り、土器・石器・獣骨などが出土していることがわかるが、明確に SB1 出土であることが判明した遺物は須恵器杯 424 のみであった。SB1 の出土遺物については今後の整理作業を通じて再検討する必要がある。

424 は須恵器杯である。口径 15.8cm を測り、底部形態は不明である。口唇部は丸みをおび、胴部から口縁部にかけて直線的に開く形態である。表面の発色は淡黄色であるが、硬質である。丁寧な回転ナデの痕跡が見られる。

文献

弥栄久志・中島哲郎 1981 『宮之前遺跡』指宿市埋蔵文化財調査報告書 5

下山覚・中摩浩太郎・渡部徹也・鎌田洋昭 1996 『橋牟礼川遺跡 X I』指宿市埋蔵文化財調査報告書 21



第 107 図 SB1 完掘平面図

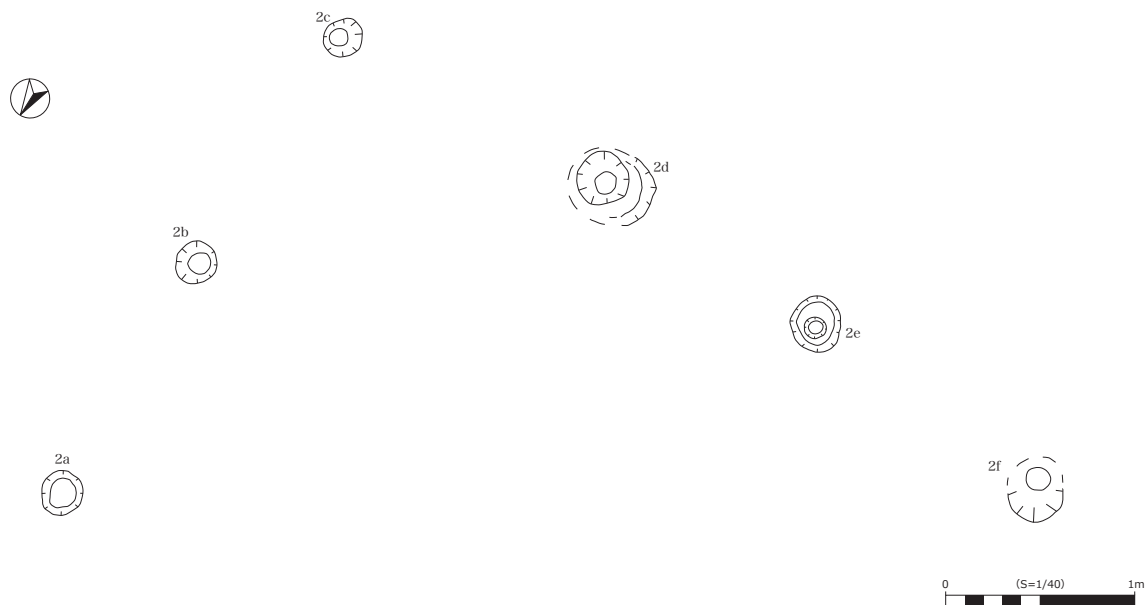
【SB2】 (第 109 図)

SB2 は梁間 2.8 m, 桁行 5.6 m を測る。柱の法量は, 柱 1 が長軸 24cm, 短軸 22cm, 柱 2 が長軸 23cm, 短軸 22cm, 柱 3 が長軸 22cm, 短軸 20cm, 柱 4 が長軸 46cm, 短軸 40cm, 深さ 50cm, 柱 5 が直径 26cm, 柱 6 が長軸 34cm, 短軸 32cm, 深さ 64cm を測る。柱間は梁間で 1.6 m・1.3 m・1.4 m, 桁行で 1.4 m となる。柱穴は平面形が楕円形あるいは略円形を呈する。2 段掘りになるのは, 柱穴 4・5 の 2 基であり, 他は素掘りとなる。

周辺の出土遺物は建物南側で青銅製帯金具 464 と須恵器 452 がある。SB2 に伴うものであるかは不明である。



第 108 図 SB1 出土遺物



第109図 SB2平面図

【SB8】(第110図)

SB8は梁間2.9m、桁行4.7mを測る。柱1が長軸57cm、短軸52cm、深さ80cm、柱2が長軸40cm、短軸40cm、深さ86cm、柱3が長軸40cm、短軸34cm、深さ82cm、柱4が長軸59cm、短軸44cm、深さ66cm、柱5が直径44cm、深さ84cm、柱6が長軸70cm、短軸54cm、深さ78cm、柱7が長軸64cm、短軸44cm、深さ68cm、柱8が長軸59cm、短軸40cm、深さ74cm、柱9が長軸50cm、短軸46cm、深さ60cm、柱10が直径42cm、深さ54cmを測る。柱穴は平面形が楕円形あるいは略円形を呈し、二段掘りとなる。柱7・8以外は、柱穴底部に柱が入るピットがある形状であるが、断面には柱痕がみられるが、柱7・8は深さ20cm程度の柱穴を設け、底部に倍近く深いピットを設けたものである。

周辺出土遺物は建物東面の桁直下で、須恵器杯蓋443、墨書土器「真」436・437がある。

2号と8号建物の周辺あるいは内部で焼土が検出されている。2号は柱列の内部であり、8号は南西角の柱穴に接した部分とその外側である。

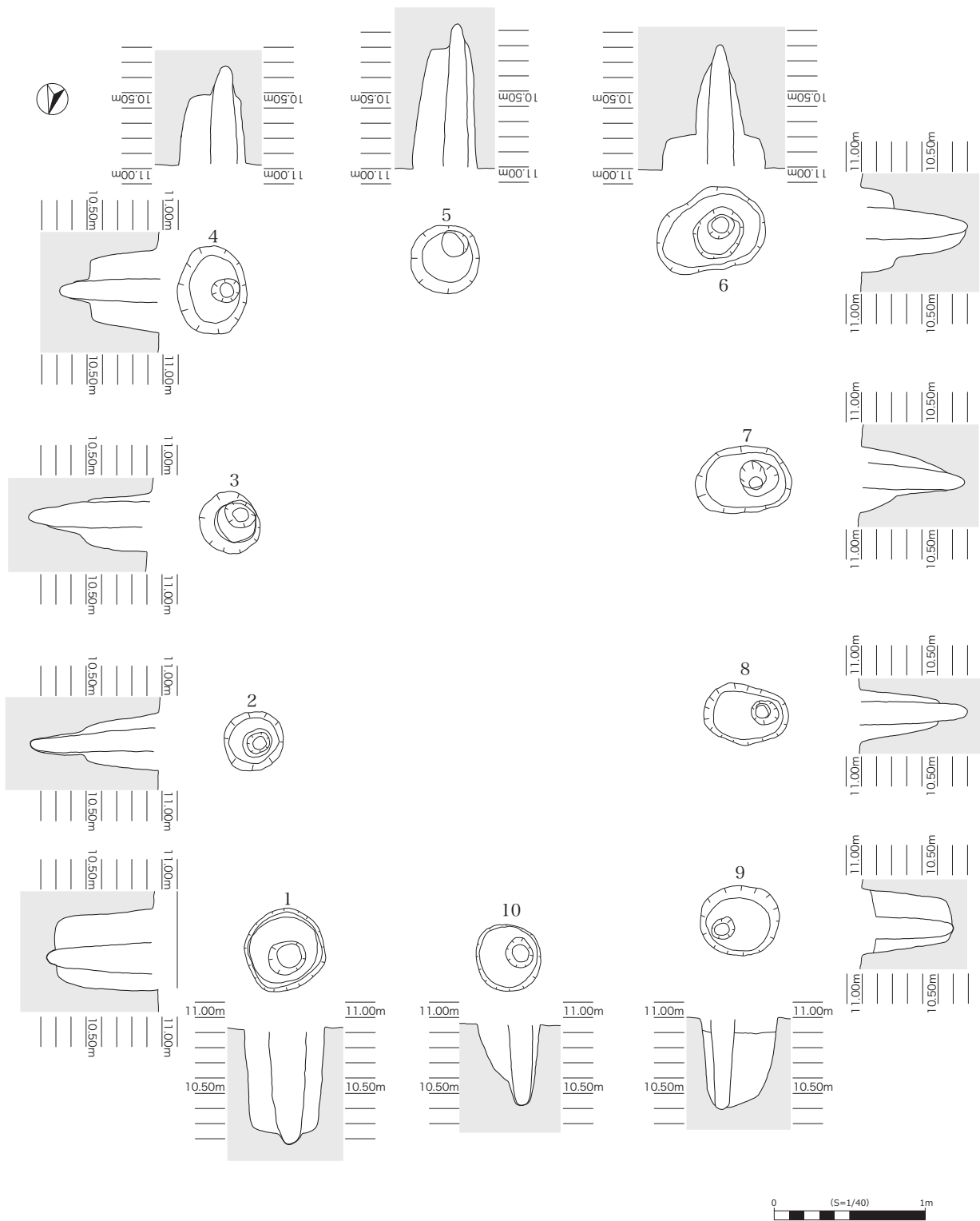
〈SB8出土遺物〉

425は須恵器杯蓋である。口径15.0cm、器高2.4cmを図る。つまみはなく、口唇部は嘴状に屈曲する。

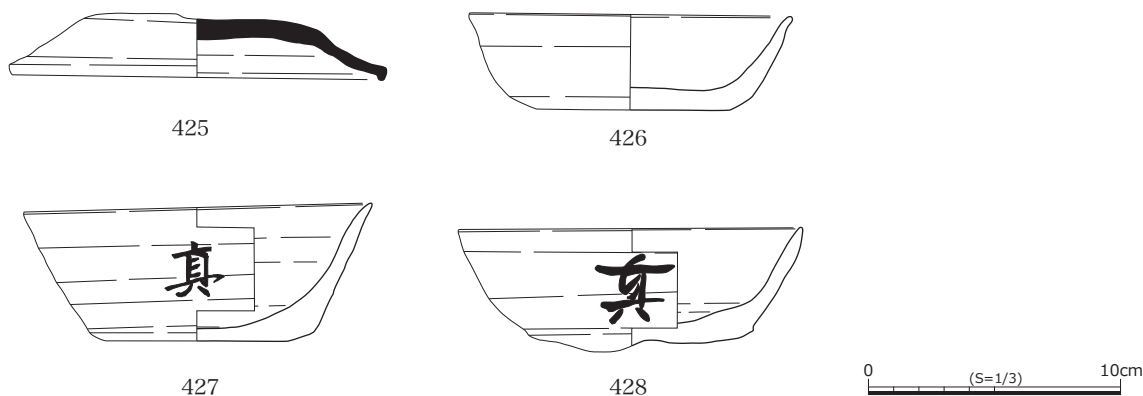
426は土師器杯である。口径12.4cm、器高3.9cm、底径8.0cmを測る。底部外面には、回転ヘラ切りの痕跡がみられ、底端部はゆるやかなケズリがみられる。

427は墨書土師器杯である。口径13.5cm、器高5.7cm、底径8.0cmを測る。体部外面には楷書体「真」が書かれている。底部外面には回転ヘラ切りの痕跡がみられる。

428は墨書土師器杯である。口径13.7cm、器高4.2～5.2cm、底径8.7cmを測る。外底面は手持ちヘラ切りの痕跡がみられ、ゆがみが大きい。体部外面には行書体「真」が書かれている。



第110図 SB8平面図・柱穴断面図



第111図 SB8 出土遺物

(2) その他の遺構

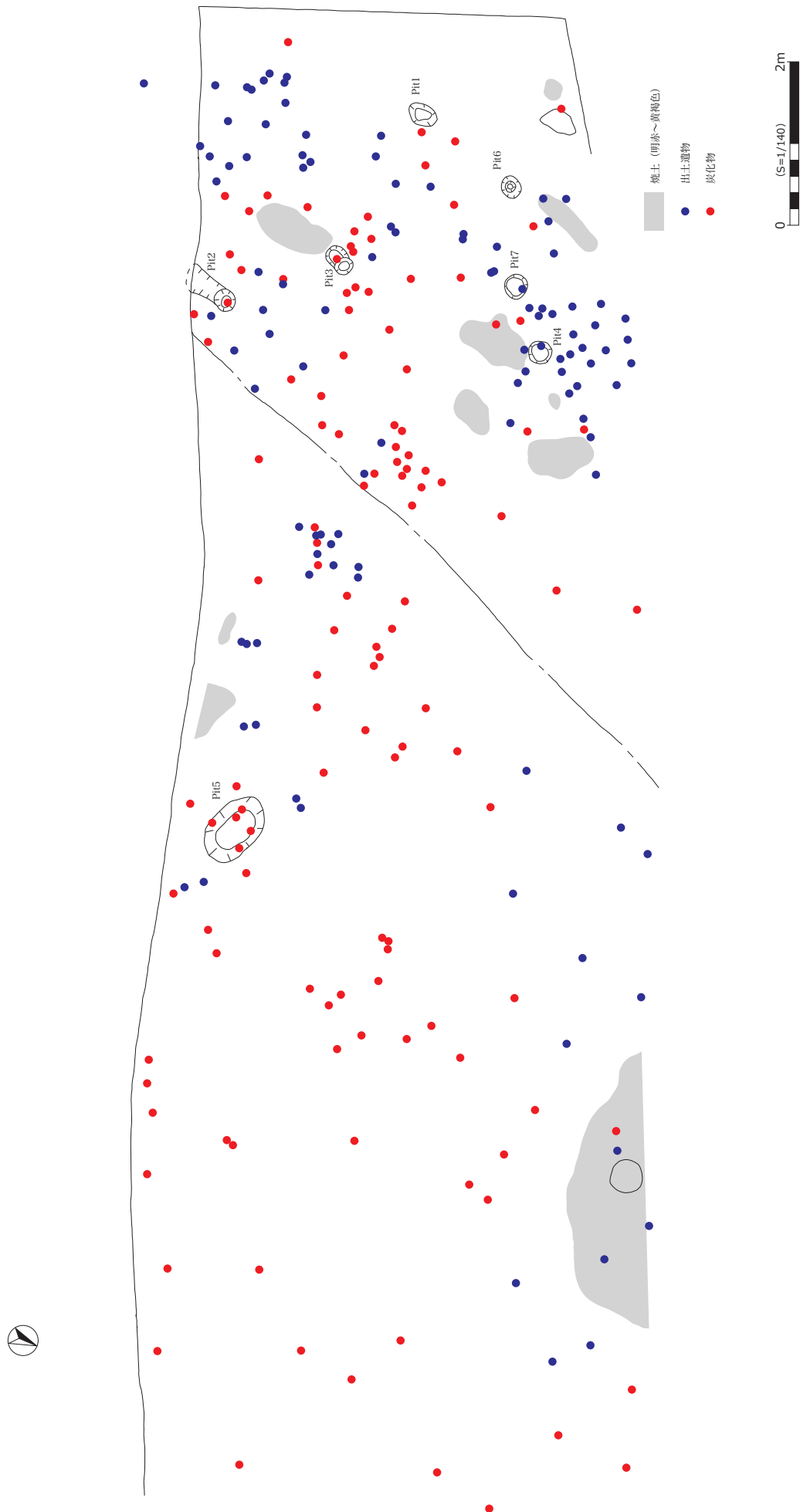
貞観16(874)年の開聞岳噴火に伴う第5層紫コラ火山灰層直下の第6層上面では、畠遺構等は見られず、土坑1基、ピット7基と焼土及びカーボン集中箇所が検出された。なお、ピット等の遺構に関しては、874年に極めて近い時期の遺構であるが、874年の埋没遺構ではない。

土坑1は、第6層中に帰属する1号竪穴建物の全体形検出のため設けられた、拡幅部で検出された。検出面は第6層上面であり、他の第6層上面検出のピットよりも規模が大きく、土坑とした。埋土は黄灰色の軟質土であり、土器小片を含んでいた。長軸66cm、短軸38cm、深さ34cmである。東端に段を形成する。土坑断面形状は逆台形を呈する。

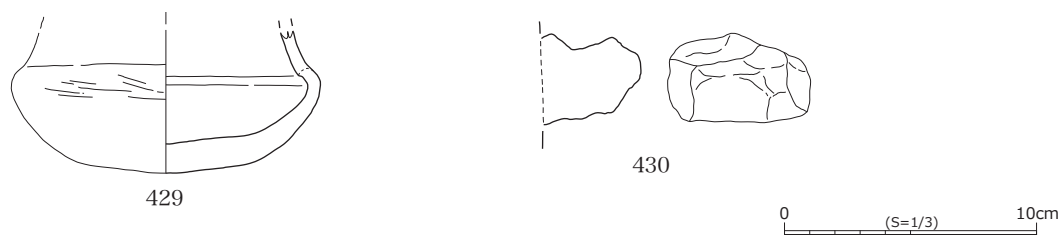
Pit1は、隅丸三角形を呈し、長軸40cm、短軸32cm、極めて浅いものである。Pit2は、円形ピットと溝状の掘り込みの組み合わせであり、円形ピットは長軸27.5cm、短軸25.5cm、深さ27cmであり、溝状の掘り込みは長さ77.5cm以上、最大幅30cmである。Pit3は、楕円形の二段掘りであり、長軸36cm、短軸24.5cm、深さ25cmである。Pit4は、円形を呈し、径27.5cmを計る。Pit5は、大型の楕円形を呈し、長軸92.5cm、短軸55cm、深さ8cmである。Pit6は、円形の二段掘りであり、長軸30cm、短軸23cmを計る。Pit7は、円形を呈し、長軸30cm、短軸28cmを計る。ピットに関しては、Pit5を除くと、直径4m程度の範囲にまとまって配置するように見えるが、配置に規則性が見られず、一つの遺構を構成するものとは考えにくい。

焼土及びカーボン集中箇所については、調査区の西側に偏って検出されている。焼土範囲は長軸60cmから長軸1m程度の不整楕円形を呈し、ピット3南側に1箇所、ピット4の周辺に4箇所、ピット5の南西に大小1箇所ずつ検出された。焼土集中範囲周辺にはカーボンが集中して検出されている。一方、これらとは別に、調査区中央の北側壁面に向って長軸3m程度の範囲でやや黒味を帯びた土色の部分があり、中央部分に直径45cm程度のカーボンを含む範囲が検出されている。この周辺でもカーボンがある程度検出されているが、ピット集中箇所では検出した焼土とは形状が異なっており、形成要因が異なっているものと考えられる。

なお、ピット集中箇所と焼土・カーボン集中箇所とは概ね重なる傾向があるとみえる。また、調査時において、ピット集中範囲の6層上面が硬く締まっていることが記録されており、また、その部分では6層上面が平坦で、かつ、8世紀代の須恵器が集中して出土している。これらを総合すると、874年に極めて近い時期において、ピットを用いた何らかの構造物の存在した可能性が考えられる。



第112図 6層上面検出遺構・遺物分布状況



第113図 Pit1 出土遺物

焼土・カーボン集中箇所はその構造物に伴うか、または、構造物の焼失、あるいは構造物廃棄後の処分のための焼却等が想定できるかもしれない。なお、この場所の直下に当たる第6層中においては、掘立柱建物と焼土とが関連する状況で検出されていることは示唆に富むと考えられる。ただ、ピット群は建物を構成するとは考えにくいことから、それ以外の構造物を検討する必要があるところである。

〈Pit1 出土遺物〉

429 は埴である。胴部が張る形態で、最大径は 12.2cm を測る。底部はゆるやかな丸底となっている。頸部からは欠損しているが、内径しながら直線的にのびる形態であると考えられる。

430 は甕もしくは甑の把手である。器面は摩滅が著しく、調整等は確認することができない。

(3) 第6層出土遺物

奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は 874 年開間岳噴出物層に直接被覆され、旧地表面の地形をそのままに留めている。第6層は標準層位では、a, b, c の3分層が可能である。a層は腐食が進行しており、特に畠跡周辺では黒色が強くなる。b層はオリーブ褐色を呈するが、河川跡付近では砂層となる場合がある。c層は7層青コラの二次堆積層である。

431～437 は甕である。431 は甕の胴部から口縁部で、口縁部にかけてゆるやかに外反する形態である。器壁のゆがみが大きく、外面には単位の太い工具ナデがみられる。敷領遺跡3号建物跡から出土している成川式土器と類似タイプの甕である。

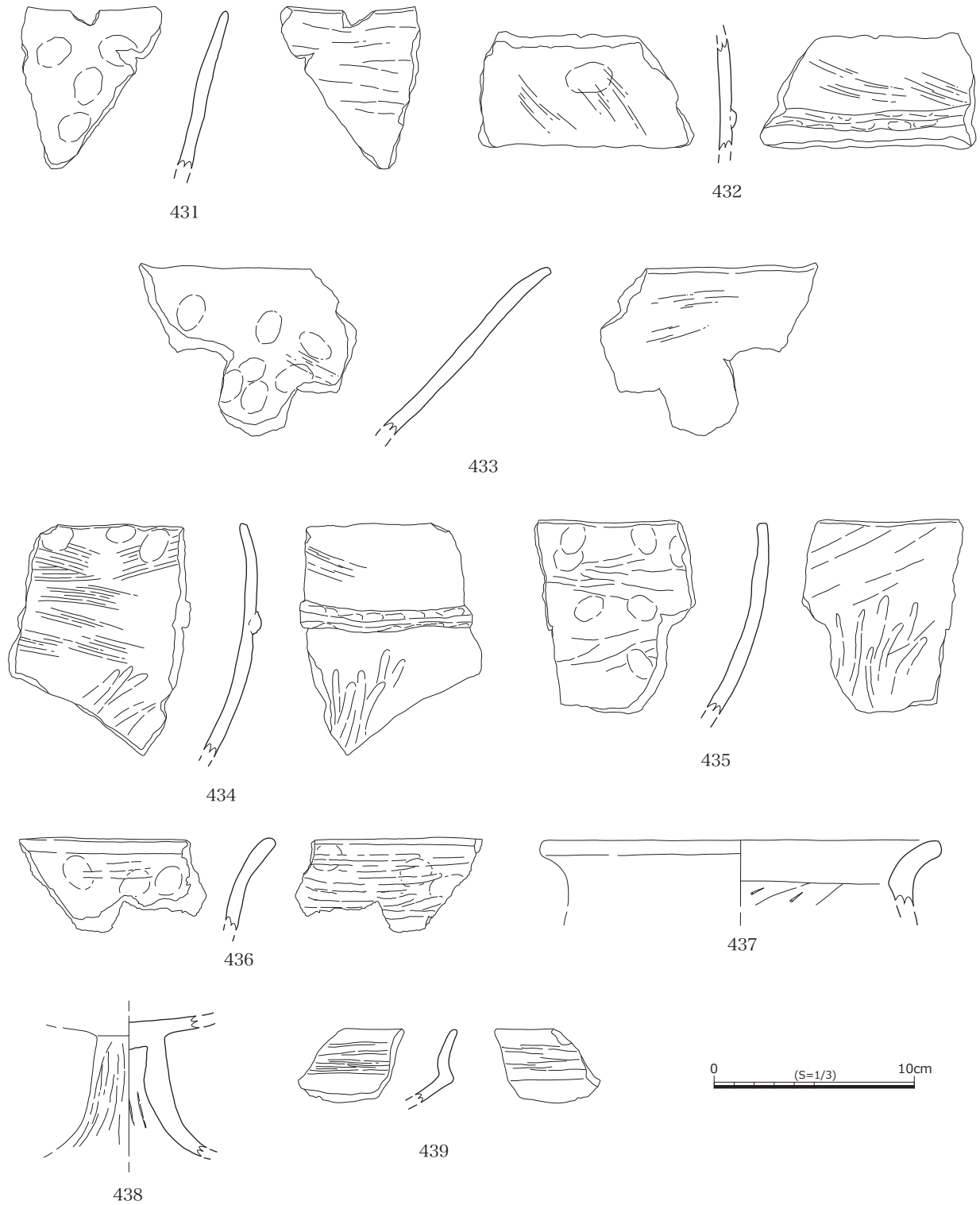
432 は甕の突帯部である。一条の絡縄突帯が貼り付けられており、内外面はナデ調整で仕上げられる。

433 は大きく外反する甕の胴部から口縁部である。口唇部はゆるやかなコの字状である。内外面ともナデ調整で、内面には指頭圧痕が多く見られる。

434 は内湾する形態の甕の胴部から口縁部である。口縁部下には一条の絡縄突帯が貼り付けられる。内面はハケ調整、外面は突帯下部に縦方向のミガキ調整がみられる。

435 は内湾する形態の甕の口縁部である。口唇部はコの字を呈する。内面は横方向のミガキ調整、外面は縦方向のミガキ調整がみられる。

436 は口縁部からわずかに外反する形態の甕である。口唇部は丸く、器壁は歪みが大きい。内面はナデ調整、外面は横方向のミガキ調整がみられる。

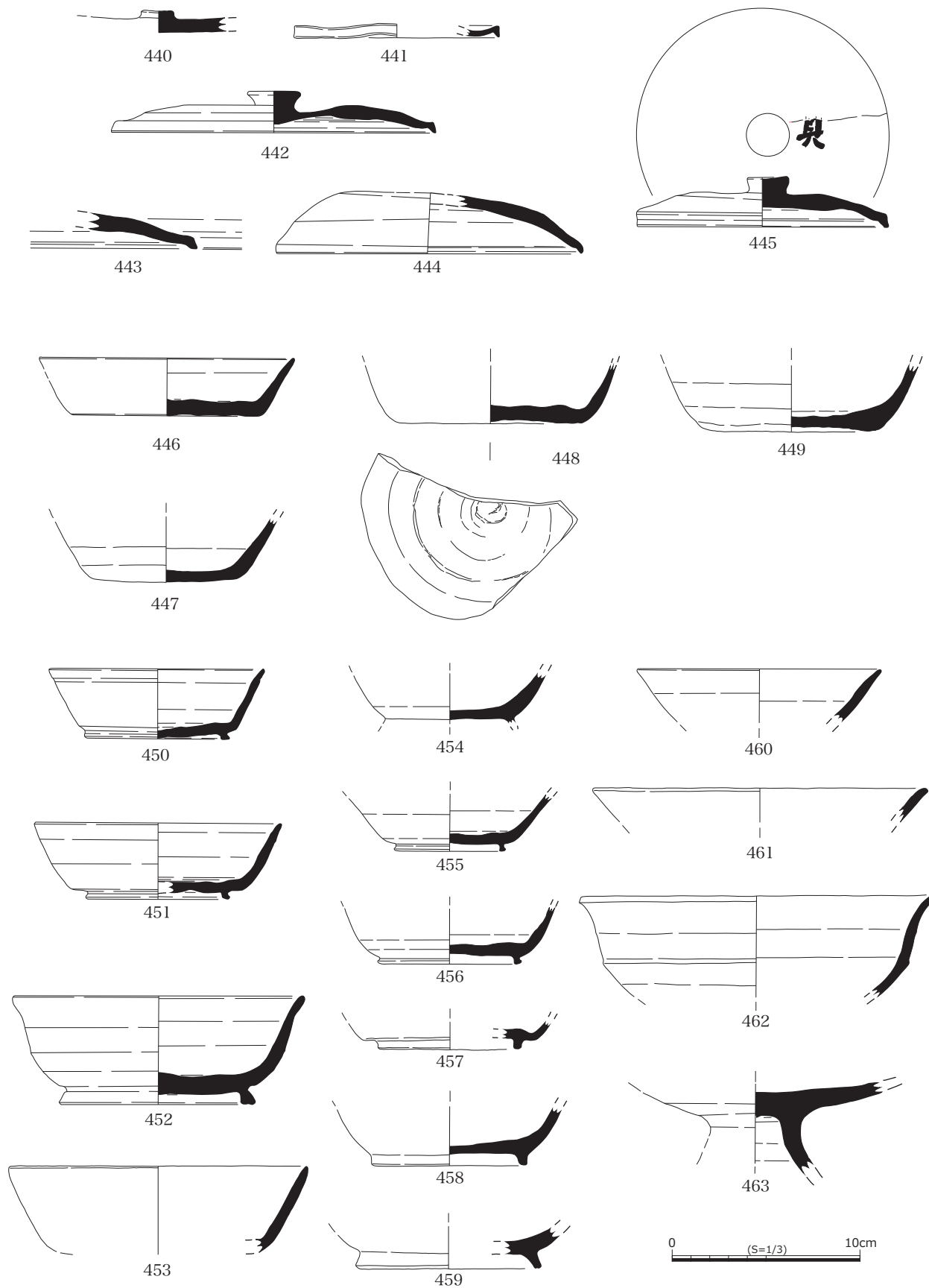


第 114 図 第 6 層出土遺物 1

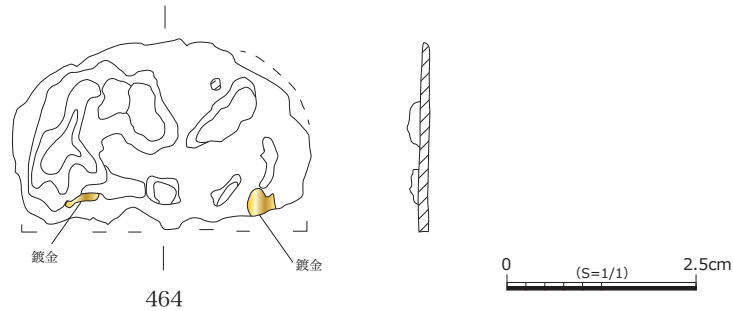
437 はくの字に外反する甕の口縁部である。口径は復元径 20.0cm, 頸部径 14.6cm を測る。頸部内面には強い稜がみられ, 屈曲部下には斜め方向のケズリがみられる。

438・439 は高杯である。438 は高杯の脚部で, スカート状に大きく開く形態を呈する。脚接合部径は 3.4cm を測る。外面には縦方向のミガキ調整がみられる。

439 は高杯の口縁部である。杯部は体部で強く屈曲する形態で, 口唇部にかけて外反する。内外面とも横方向のミガキ調整がみられる。



第115図 第6層出土遺物2



第116図 第6層出土遺物3

440 は須恵器杯蓋のツマミ部分である。ツマミ径は 1.7cm を測る。

441 は須恵器杯蓋の端部である。ややゆがみが大きく、口径は復元径 11.0cm を測る。

442 は須恵器杯蓋である。口径 17.4cm、器高 2.2cm、ツマミ径 2.8cm を測る。口唇部は嘴状になる。

444 はツマミのない須恵器杯蓋である。口唇部は緩やかに嘴状になり、口径 16.2cm、器高 3.3cm を測る。全体形は歪みが大きい。

445 は須恵器杯蓋で、ツマミ上面がやや凹んでいる。口径 13.2cm、器高 2.5cm、ツマミ径 2.2cm を測る。天井部外面のツマミ横に墨書がある。欠損のため、墨書の全体は不明であるが、「真」の下半に見える。天井部は回転ヘラケズリのちナデ調整がみられる。口唇部のカエリは痕跡程度である。発色は赤みをおびる。

446 は須恵器杯である。口径 13.5cm、器高 3.0cm、底径 9.9cm を測る。口縁部が外反し、内外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ調整が行われる。外底面は回転ヘラケズリ後にナデが行われる。

447 は赤焼け須恵器杯である。底径 7.8cm を測り、底面がわずかに膨らむ。内外面とも回転ナデ調整がみられる。

448 は須恵器杯である。底径 9.6cm を測り、底部は上げ底状となる。内外面とも回転ナデ調整で仕上げられ、外底面は回転ヘラ切りの痕跡がみられる。

449 は赤焼須恵器杯である。底径は復元径 9.0cm を測る。内外面とも回転ナデ調整で、底部は上げ底状となる。外底面には手持ちヘラ切りの痕跡がみられる。

450 から 459 は高台付きの須恵器杯である。450 は高台径 7.5cm、高台高 0.3cm、口径 11.4cm を測る。口縁部にかけて直線的に開く形態を呈する。

451 は高台径 7.5cm、高台高 0.3cm、器高 3.9cm、口径 12.9cm を測る。高台は短く開く形態を呈し、口縁部にかけて直線的に開く。

452 は高台径 10.2cm、高台高 0.7cm、口径 15.3cm、器高 5.7cm を測る。胴部は椀状に丸みをおびる形態で、高台は踏ん張る形で開く。口唇部は外反する。

453 は口径 15.6cm を測る。底部形態は不明である。口縁部にかけて直線的に開く。

454 は高台が欠損しているが、高台付須恵器である。体部は椀状に開く。

455 は高台径 5.7cm、高台高 0.4cm を測る。内外面とも回転ナデ調整である。発色は青灰色を呈する。

456 は高台径 7.5cm、高台高 0.3cm を測る。内外面とも回転ナデ調整で、高台内面は回転ヘラケズリのち回転ナデ調整である。内面の発色は褐色をおびる。

457 は高台径 7.5cm, 高台高 0.5cm を測る。高台の形状は箱形である。

458 は高台径 8.1cm, 高台高 0.5cm を測る。高台内面は回転ヘラケズリのち、回転ナデ調整である。高台の形状は箱形で、体部はやや膨らみをもちながら立ち上がる。発色は赤焼である。

459 は高台径 9.9cm, 高台高 0.9cm を測る。高台はハの字に開く形態で、やや高めである。高台接地面はわずかに M 字にくぼむ。

460 は口径 12.9cm を測る。口唇部は先細りとなり、直線的に開く形態である。

461 は口径 17.7cm を測る。

462 は口径 18.6cm を測る。体部は膨らみをもち、外面には稜線をもつ。外面の発色は赤みをおび、体部下半はヘラケズリのち回転ナデ調整がみられる。

463 は須恵器高杯の脚部である。脚部はハの字状に大きく開く。尽きない面は調整痕が消えケズリの痕跡が残る。外面は回転ヘラケズリのちナデ調整が行われる。盤の可能性もある。

464 は青銅製丸軛である。幅 3.9cm, 高さ 2.5cm, 厚さ 0.1cm で半円形を呈する。右上部に一箇所孔が残っているが、鑄が発達した左上部にも孔があるものとみられる。表面の一部に金が残っており、鍍金が施されていたものと考えられる。SB2 の南側で出土した。

第3表 住居別遺物集計表

	甕形土器	壺形土器	高杯形土器	埴形土器	鉢形土器	石器	軽石	不明	計
SB 2	12	2						89	103
SB 3	61	8	1		4	15	4	795	888
SB 4	251	20	6	3	3	55	19	3,244	3,601
SB 5	85	12	2			13	14	825	951
SB 6	136	11	1	5	2	27	10	1,594	1,786
SB 9	315	46	21	9	1	40	14	2,613	3,059
SB 10	26	8	2		6	4		338	384
SB 13	17	8			1		1	146	173
SB 14	1	1			2	1		31	36
SB 20~22	126	24	12	3	4	16	5	1,235	1,425
SB 21	92	14		5	3	6	1	678	799
SB 23	112	19	10	2	2	6		779	930
SB 25	39	3	6	2	4	8	2	174	238
SB 27	98	10	9	2	1	8	1	623	752
SB 27~28	22	4	2	5		4		200	237
SB 28	46	4	1	7	3	3	1	303	368
SB 29	271	42	33	14	16	45	23	1,823	2,267
SB 30	19		1	2		4	2	115	143

第4表 VI区出土遺物観察表1

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法					色調					混和剤	取上番号
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面	丹		
1	C24	10		甕	口～突部	30.0cm						7.5YR7/6橙	10YR4/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐		石英, 角閃石, 褐色粒	1835
2	C24	10		甕	口縁部							7.5YR4/3橙	7.5YR6/8褐	7.5YR4/3褐		石英, 長石, 黒曜石	1819
3	C24	10		甕	脚部			6.0cm	7.0cm	1.3cm		2.5YR7/2明赤灰	5YR8/3淡橙	5YR8/3淡橙		石英, 角閃石, 褐色粒	1810
4	C24		SB3	甕	口～突～胴部	30.5cm						7.5YR6/2灰褐	2.5YR7/4淡赤橙	—		石英, 角閃石	1258
5	C24		SB3	甕	脚部			(5.7cm)	(9.7cm)	5.0cm		7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	2.5YR7/4淡赤橙		石英, 白色粒	757
6	C24		SB3	甕	脚部				(10.0cm)			10YR6/3にぶい黄橙	10R5/2灰赤	10R5/6赤		石英, 角閃石	
7	C24		SB3	壺	口～頸部	(16.2cm)					頸部径:(10.1cm)	5YR8/3淡橙	5YR8/3淡橙	5YR8/3淡橙		石英, 角閃石, 白色粒	754
8	C24		SB3	壺	底部			(9.0cm)				5YR6/8橙	7.5YR6/4にぶい黄橙	5YR6/8橙		石英, 白色粒	1401
9	C24		SB3	壺	底部			(6.3cm)				2.5YR6/8橙	5YR7/4にぶい黄橙	2.5YR6/8橙		石英, 角閃石	849
10	C24		SB3	ミニチュア土器	脚部			2.6cm	2.2cm	0.8cm		5YR8/4淡橙	10YR8/3淡黄橙	10YR8/3淡黄橙		石英, 褐色粒	
11	C24		SB3	高杯	脚部						脚接合部:(3.6cm)	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	10R4/8赤	石英, 角閃石	
12	C24		SB3	高杯	筒部?						筒部径:(5.0cm) 屈曲部径:(5.4cm)	10R5/8赤	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/3淡赤橙		石英, 角閃石, 白色粒	1240
13			SB3	高杯	筒部?							5YR7/8橙	5YR6/6橙	5YR6/6橙	黒色:10YR4/1褐灰	石英, 赤褐色粒	
14			SB3	高杯	脚部				(15.1cm)			7.5YR7/6橙	10YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/6橙		石英, 白色粒	
15			SB4	甕	口～脚部	(26.6cm)	20.5cm	4.9cm				10YR6/3にぶい黄橙	10R5/4赤褐	7.5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石	948
16	B・C25		SB4	甕	口～脚部	(21.4cm)	24.1cm	4.8cm	7.0cm	2.0cm	最大径:(22.2cm)	2.5YR5/4にぶい赤褐	2.5YR6/4にぶい黄橙	—		石英, 角閃石, 白色粒	821
17	B26		SB4	甕	口～突～胴部	(30.8cm)					最大径:(32.2cm)	5YR7/3にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙		石英, 角閃石	1027
18			SB4	甕	口～突～胴部	(35.7cm)					最大径:38.0cm	2.5YR6/6橙	7.5YR7/3にぶい黄橙	7.5YR8/2灰白		石英, 角閃石	956
19			SB4	甕	口～突～胴部	(31.6cm)						10YR7/4にぶい黄橙	5YR8/3淡橙	5YR8/1灰白		石英, 角閃石, 褐色粒	819
20	C26		SB4	甕	口～突～胴部	24.1cm						5YR6/6橙	7.5YR6/6橙			精良, 黒色粒	947
21	C26		SB4	甕	口～突～胴部	(26.2cm)						5YR7/3にぶい黄橙	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙		石英, 角閃石, 白色粒	1051
22			SB4	甕	口～突～胴部	(27.0cm)					最大径:(27.6cm)	10YR7/4にぶい黄橙	2.5Y5/3黄橙	2.5Y6/2灰黄		石英, 角閃石	818
23	B・C26		SB4	甕	口～突～胴部	(29.0cm)						7.5YR6/3にぶい褐	10R4/2灰赤	10R4/2灰赤		石英, 角閃石	943
24	C26		SB4	甕	口～突部	(25.0cm)						5YR7/2明褐灰	2.5YR5/4にぶい赤褐	2.5YR5/4にぶい赤褐		石英, 角閃石	1004
25	B25		SB4	甕	口～突部	(25.9cm)						5YR8/2灰白	2.5YR7/2明赤灰	5YR8/2灰白		石英, 角閃石	1048
26	B26		SB4	甕	口～突部	(30.2cm)						5YR7/2明褐灰	5YR7/2明褐灰	7.5YR8/2灰白		石英, 角閃石	958
27	C26		SB4	甕	口縁部							2.5YR5/6にぶい褐	7.5YR6/3明赤褐	2.5YR6/3にぶい黄橙		石英, 角閃石, 長石	1052
28	B25		SB4	甕	口～突～胴部							2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙		石英, 角閃石	811
29	B26		SB4	甕	脚～脚下部		6.1cm	(8.1cm)	2.5cm			7.5YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石, 長石, 黒色粒	831
30	B26		SB4	甕	脚～脚下部		6.1cm	(10.9cm)				7.5YR7/2明褐灰	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石, 長石, 炭化物	820
31	C26		SB4	甕	脚部		5.5cm	8.5cm	3.8cm			7.5YR7/2明褐灰	5YR6/6橙	7.5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石, 白色粒	1069
32	C26		SB4	甕	脚部		4.7cm	6.8cm	2.5cm			7.5YR5/4にぶい褐	5YR7/4にぶい黄橙	5YR7/4にぶい黄橙		石英, 角閃石	1065
33	B26		SB4	甕	脚部と脚下部		6.1cm	6.9cm	1.3cm			7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/4にぶい黄橙	7.5YR5/4にぶい黄橙		石英, 角閃石, 長石, 黒曜石	815
34	B26		SB4	甕	脚部		4.0cm	6.3cm	3.6cm		脚接合:4.0cm 残存高:4.3cm	2.5YR6/3にぶい黄橙	5YR7/3にぶい黄橙	5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石, 長石	1013
35	B26		SB4	甕	脚部		(4.8cm)	(6.9cm)	2.4cm			5YR7/4にぶい黄橙	5YR8/1灰白	5YR8/1灰白		石英, 角閃石	1041
36	B26		SB4	甕	脚部		4.0cm	7.4cm	4.3cm			5YR8/2灰白	5YR8/2灰白	5YR8/3淡橙		石英, 角閃石	1070
37	B26		SB4	甕	脚部		3.3cm	7.7cm	5.0cm			2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/2明赤灰		石英, 角閃石	1130
38	C25-26		SB4	甕	脚部		(6.9cm)	(10.7cm)	4.2cm			5YR7/2明褐灰	5YR8/1灰白	5YR8/1灰白		石英, 角閃石	1032
39	B26		SB4	甕	脚～脚下部		6.8cm	(10.5cm)	3.9cm			2.5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐		石英, 角閃石, 長石, 黒曜石	822
40	C26		SB4	甕	脚～脚下部		(9.5cm)	(9.5cm)	4.6cm			5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	2.5YR5/6明赤褐		石英, 角閃石	946
41	B26		SB4	甕	脚～脚下部		(6.0cm)	(8.3cm)	2.5cm			7.5YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい赤褐	10YR6/4にぶい赤褐		石英, 角閃石, 長石	970
42			SB4	甕	脚～脚下部		(6.2cm)	(8.9cm)	4.3cm			2.5Y7/3淡黄	7.5YR7/3にぶい黄橙	—		石英, 角閃石	1009
43			SB4	大型壺	胴～底部		9.0cm				突帯幅:3.5cm 胴部最大径:(42.4cm)	10R6/4にぶい赤橙	5YR7/4にぶい黄橙	10R6/4にぶい赤橙		石英, 角閃石	
44	B26		SB4	大型壺	肩部						胴部最大径:(42.4cm) 突帯幅:3.5cm	7.5YR5/4にぶい褐	2.5YR6/6橙	10R5/6赤		石英, 角閃石, 白色粒, 礫	1131
45	B25		SB4	壺	完形	15.8cm		5.5cm			頸部径:12.0cm 頸部高:7.5cm 胴部最大径:30.5cm	7.5YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい黄橙	—		石英, 角閃石	810①
46	C25		SB4	壺	口～胴部	12.3cm					頸部径:12.7cm 肩部径:35.1cm	10R6/4にぶい赤橙	10R6/6赤橙	2.5YR7/2明赤灰		石英, 角閃石	1123
47	C26		SB4	壺	頸～口縁部	(17.2cm)					頸部径:13.1cm	2.5YR6/6橙	5YR8/3淡橙	5YR8/3淡橙		石英, 角閃石	996
48	B26		SB4	壺	口縁部							7.5YR6/4にぶい黄橙	5YR6/4にぶい黄橙	2.5YR6/6橙		石英, 角閃石, 長石, 黒曜石	1011
49	B25		SB4	壺	突部						幅:3.5cm	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙			礫	810③
50	B26		SB4	壺	底部			7.9cm				5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白		石英, 角閃石	971
51	B25		SB4	壺	突部						突帯幅:3.1cm	—	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙		石英, 雲母, 白色粒	810②
52			SB4	壺	底部							2.5YR6/8橙	7.5YR7/3にぶい黄橙	2.5YR6/8橙		石英, 角閃石	1141
53			SB4	壺	底部			(13.0cm)				2.5Y6/4にぶい黄	7.5YR6/4にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい黄橙		石英, 角閃石, 白色粒	1906

第5表 VI区出土遺物観察表 2

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法					色調				混和剤	取上番号	
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面			丹
54	B26		SB4	壺	底部			(8.2cm)				2.5YR6/6橙	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/3淡赤橙		石英, 角閃石	1018
55	B26		SB4	壺	底部			(8.3cm)				5YR8/2灰白	5YR7/2明褐灰			雲母, 礫	1126
56	C26		SB4	壺	底部			5.0cm				2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙		石英, 角閃石, 白色粒	1060
57	C26		SB4	壺	底部							10R5/6赤	10R6/4にぶい赤橙	10R6/4にぶい赤橙		石英, 角閃石	974
58			SB4	壺	底部							2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/4淡赤橙		石英, 角閃石, 赤色粒	
59	C26		SB4	鉢	口~杯部	(21.7cm)						2.5YR6/6橙	10R5/6赤	10R6/4にぶい赤橙		黒色粒	1061
60	B26		SB4	鉢	口~底部	22.0cm	9.7cm	(8.5cm)				10R6/4にぶい赤橙	10R6/4にぶい赤橙	10R6/4にぶい赤橙		石英, 角閃石	1068
61	B26		SB4	鉢	口~脚部	13.5cm		6.9cm			高台径:6.9cm 高台高:0.4cm	5YR7/2明褐灰	2.5YR7/3淡赤橙	2.5Y7/2灰黄		石英, 角閃石	1039
62	C26		SB4	鉢	口~底部	10.6cm	8.7cm	4.5cm				5YR7/4にぶい赤橙	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/3淡赤橙		角閃石, 白色粒	945
63	B・C25		SB4	鉢	脚部			6.0cm	3.2~6.0cm		高台高:0.2cm	10YR4/3にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙		角閃石	826
64	B26		SB4	高杯	杯~脚部	17.8cm					杯部高:5.6cm 接合径:5.2m	5YR7/8橙	5YR6/6橙	5YR7/8橙		精良, 小礫	1133
65	B26		SB4	高杯	杯部	(20.0cm)						5YR5/2灰褐	5YR6/6橙	5YR6/6橙		白色粒	1009
66	C25		SB4	高杯	杯部						接合部径:(4.8cm)	10YR7/6明黄褐	5YR7/8橙	2.5Y7/2灰黄	2.5Y4/8赤褐	石英, 白色粒	963
67	B25		SB4	高杯	脚部							2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/4浅黄	2.5YR6/8橙		石英, 白色粒	1063
68	B26		SB4	高杯	脚部			10.7cm	9.2cm		筒部径:3.0cm 脚接合部径:4.3cm	10YR2/1黒	10YR2/1黒	10YR2/1黒		褐色粒	1137
69	B26		SB4	高杯	脚部			8.9cm	9.3cm		筒部径:3.3cm 脚接合部径:3.7cm	7.5YR7/4にぶい赤橙			10R4/8赤	褐色粒, 礫混入	1024
70	C26		SB4	埴	底~胴部			3.5cm				5YR7/8橙	7.5R4/6赤	5YR7/8橙		白色粒	1058
83	C25		SB5	甕	口縁部	(23.0cm)						5YR7/4にぶい赤橙	7.5YR6/2灰黄	7.5YR8/2灰白		石英, 角閃石, 雲母	1190
84	C25		SB5	甕	口縁部							10YR5/2灰黄褐	10R4/8赤	10R4/3赤褐		石英, 角閃石	884①
85	C25		SB5	甕	胴~脚部			(4.1cm)	(4.4cm)	1.1cm		7.5YR6/6橙	10YR6/6明黄褐	10YR7/4にぶい黄橙		石英, 角閃石	1185
86	C25		SB5	甕	脚部			7.6cm	(11.3cm)	6.1cm		2.5YR5/8明赤褐	7.5YR6/6橙	10R5/8赤		石英, 白色粒, 黒色粒	1182
87	C25		SB5	甕	脚部			6.4cm	(9.3cm)	5.3cm		10R6/6赤橙	2.5YR6/6橙	10R6/6赤橙		石英, 角閃石	1183
88	C25		SB5	甕	脚部			(5.9cm)	8.9cm	4.6cm		10R5/6赤	10YR7/6明黄褐	2.5Y7/2灰黄		石英, 角閃石, 白色粒	1181
89	C25		SB5	甕	脚部			5.3cm	7.8cm	3.1cm		2.5YR7/2明赤灰	5YR8/2灰白	10R6/8赤橙		石英, 角閃石	1178
90	C25		SB5	甕	脚部			7.2cm	8.8cm	3.3cm		2.5YR7/3淡赤橙	10R6/6赤橙	10R6/6赤橙		石英, 角閃石, 褐色粒	1177
91	C25		SB5	甕	脚部			5.6cm	8.7cm	4.3cm		10R6/8赤橙	2.5YR6/6橙	10R6/8赤橙		石英, 角閃石	882
92	C25		SB5	高杯	脚部							7.5YR7/8黄橙	7.5YR7/8黄橙	5Y7/1灰白		石英, 角閃石, 褐色粒	1186
93	C25		SB5	高杯	脚部				(11.5cm)	10.7cm		5YR7/6橙	5YR7/8橙	5Y4/1灰		石英, 角閃石, 赤色粒	1191
94			SB5	壺	口縁部	(20.1cm)						7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙			白色粒, 赤色粒	
95	C25		SB5	壺	底部			8.5cm				10Y6/3にぶい黄橙	5YR6/6橙	10YR8/3浅黄褐		石英, 角閃石	884②
102	C25		SB6	甕	口~胴部	(30.8cm)						10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白		石英, 角閃石, 白色粒	注記なし
103	C25		SB6	甕	口~胴部	(38.2cm)						2.5YR7/4淡橙	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙		石英, 角閃石	1219
104	C25		SB6	甕	口~胴部	(27.3cm)						10R6/6赤橙	10R6/4にぶい赤橙	5YR6/2灰褐		石英, 角閃石	1149①
105			SB6	甕	口縁部	(30.0cm)						7.5YR8/2灰白	5YR6/3にぶい赤橙	10YR8/2灰白		石英, 角閃石, 雲母	1147
106	C25		SB6	甕	口縁部							7.5YR8/2灰白	5YR7/2明褐灰	2.5YR7/3淡赤橙		石英, 角閃石, 茶褐色粒	1149②
107	C25		SB6	甕	口縁部							2.5Y6/4にぶい黄	5YR7/2明褐灰	5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石	1153②
108	C25		SB6	甕	口縁部							5YR8/2灰白	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白		石英, 角閃石	1151
109	C25		SB6	甕	脚~胴下部			(6.8cm)	(8.5cm)	3.0cm		2.5Y7/4浅黄	10R6/8赤橙	2.5Y5/2暗灰黄		石英, 角閃石, 白色粒	1142
110	C25		SB6	甕	脚部			(4.9cm)	(9.0cm)	4.3cm		7.5YR8/1灰白	5YR8/1灰白	5YR8/2灰白		石英, 角閃石	1205
111			SB6	甕	脚部			7.1cm	8.8cm	2.9cm		10R4/4赤褐	2.5YR7/3淡赤橙	10R6/6赤橙		石英, 角閃石	1208
112			SB6	甕	脚部			5.8cm	8.3cm	4.4cm		2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/4淡赤橙	10R5/6赤		石英, 角閃石	1215
113	C25		SB6	甕	脚部			(5.3cm)	(7.5cm)	3.8cm		10YR6/3にぶい黄橙	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石	1200
114	C25		SB6	甕	脚~脚下部			(5.1cm)	(6.0cm)	1.6cm		5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白	2.5YR7/4淡赤橙		石英, 角閃石, 赤色粒	1264
115	C25		SB6	壺	頸~肩~突部						突部径:(35.0cm) 突部幅:3.4cm	5YR6/3にぶい赤橙	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白		石英, 角閃石	1220
116	C25		SB6	壺	底~胴下部			5.8cm				7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/3にぶい褐		石英, 角閃石, 長石, 黒曜石	1233
117			SB6	壺	底~胴下部			5.1cm				2.5YR6/6橙	7.5YR6/3にぶい褐	2.5YR6/6橙		石英, 角閃石, 長石	1210
118			SB6	壺	底~胴下部			6.9cm				10YR6/6明黄褐	2.5YR6/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙		石英, 角閃石, 長石	1207
119	C25		SB6	高杯	杯部	(22.2cm)						5YR6/6橙	5YR7/8橙	5YR6/6橙	10R4/8赤	石英, 褐色粒	1198
120	C25		SB6	高杯	杯部	(23.0cm)						5YR6/6橙	—	10R4/1暗赤灰	10R4/6赤	石英	1164
121	C25		SB6	高杯	杯部	(21.3cm)						5YR7/6橙	5YR7/6橙	5YR7/6橙	10R4/6赤	石英, 白色粒	1148
122	C25		SB6	高杯	脚接合部~脚部						脚接合部径:(5.5cm)	7.5YR7/2明褐灰	5YR7/4にぶい赤橙	5YR8/2灰白		石英, 角閃石, 褐色粒	1153①
123	C25		SB6	高杯	脚部				10.7cm	10.7cm	筒部径:3.3cm	5YR7/8橙	5YR6/8橙	10YR8/2灰白	10R4/6赤	石英, 角閃石	1265
124	C25		SB6	高杯	脚部						筒部径:3.6cm	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR6/4にぶい赤橙	10Y7/1灰白		石英, 角閃石, 褐色粒, 白色粒	1230

第6表 VI区出土遺物観察表3

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法						色調					混和剤	取上番号
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面	丹			
125	C25		SB6	高杯	脚部						脚接合部径:(4.1cm)	7.5YR6/6橙	5YR6/6橙	7.5YR4/1褐灰		石英,角閃石,褐色粒	1161	
126			SB6	埴	底~胴部			3.5cm			胴部最大径:7.5cm 頸部径:6.5cm	5YR7/8橙	2.5YR6/8橙	2.5YR4/1赤灰	7.5R4/6赤	石英,白色粒	1209	
127	C25		SB6	鉢	完形	7.5cm	4.4cm	3.9cm				10YR8/3淡黄橙	10YR8/2灰白	10YR8/3淡黄橙		石英	1263	
132a			SB7	甕	口~突~胴部	25.1cm	21.0cm					10YR7/6明黄褐	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐		石英,角閃石	①	
132b			SB7	甕	口~突~胴部	25.1cm	21.0cm					10YR7/6明黄褐	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐		石英,角閃石	②	
133	C26		SB7	甕	口~胴部	27.2cm						10YR8/2灰白	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白		石英,白色粒	1305	
134	C26		SB7	甕	口~胴部	(27.3cm)					最大径:(28.4cm)	10R6/6赤橙	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐		石英,角閃石	1312	
135	C26		SB7	鉢	完形	(13.1cm)	9.2cm	5.4cm	5.9cm	0.8cm		10YR6/6明黄褐	2.5Y6/4にぶい黄	2.5Y6/4にぶい黄		石英,赤褐色粒	1290	
136	C26		SB7	鉢	脚部			4.1cm	4.5cm	0.9cm		10YR6/4にぶい黄橙	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐		石英,白色粒	1313	
137	C26		SB7	甕	脚~胴下部			6.5cm	6.9cm	1.0cm		7.5YR7/4にぶい橙	2.5Y7/4淡黄	2.5Y7/4淡黄		石英,礫	1302	
138			SB7	甕	脚~脚下部			(5.9cm)	(6.7cm)	1.6cm		7.5YR7/2明褐灰	10YR6/3にぶい黄橙	10YR4/1褐灰		石英,白色粒	1299	
139			SB7	高杯	杯部							5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR6/4にぶい橙	7.5Y6/1灰		石英,白色粒	1313	
140	C26		SB7	須恵器杯	口~底部	11.7cm	3.2cm	(6.5cm)				N3/0暗灰	N3/4灰	N3/5灰		緻密	1288	
141	C26		SB7	須恵器杯	口~底部	9.2cm	4.3cm	6.1cm				7.5Y7/1灰白	10Y7/1灰白	10Y7/1灰白		やや砂粒粗	1307	
142	C26		SB7	須恵器杯	口~底部	8.2cm	3.8cm				高台径:(6.2cm)	N5/0灰	N4/0灰	N7/00灰白			1307	
146			SB9	甕	口縁部							2.5YR7/3淡赤橙	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白		石英,角閃石	1415	
147			SB9	甕	口縁部							7.5YR7/2明褐灰	7.5YR6/1褐灰	7.5YR7/2明褐灰		石英	1396	
148			SB9	甕	脚~胴部			(7.8cm)	(9.0cm)	1.5cm		7.5YR8/1灰白	7.5YR8/3淡黄橙	7.5YR8/1灰白		石英,角閃石	1409	
149			SB9	甕	脚部			5.9cm	7.0cm	3.0cm		2.5YR4/1赤灰	10R5/6赤	10R4/6赤		石英,白色粒	1422	
150			SB9	甕	脚~脚下部			(6.0cm)	(6.8cm)	1.9cm		5YR8/3淡橙	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白		石英,角閃石		
151			SB9	甕	脚部			(6.0cm)	(7.7cm)	3.3cm		5YR8/2灰白	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白		石英,角閃石	1429	
152	B27		SB9	甕	脚~胴下部			(4.2cm)	(6.0cm)	2.4cm		5YR6/2灰褐	2.5YR5/4にぶい赤褐	2.5YR7/3淡赤橙	10R4/6赤	石英	2746	
153			SB9	壺	胴部						突帯幅:3.7cm	2.5YR6/8橙	7.5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/8橙		石英	1395	
154	B27		SB9	埴	底~胴部						胴部径:(5.1cm)	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙		石英,角閃石	2732	
155			SB9	壺	底部			(8.2cm)				10R5/6赤	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/3淡赤橙		石英,角閃石	1421	
157	B26		SB10	甕	脚部			6.0cm	9.6cm	5.7cm		5YR7/3にぶい橙	5YR7/3にぶい橙	5YR8/2灰白			1378	
158	B26		SB10	甕	脚部			4.8cm	7.5cm	4.8cm		7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白		石英,角閃石	1375	
159	B26		SB10	甕	口縁部							5YR8/3淡橙	7.5YR8/1灰白	5YR8/3淡橙		石英,角閃石	1383	
160	C24		SB12	甕	脚部			(7.0cm)				7.5YR5/4にぶい褐	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐		石英,白色粒	1916	
161	C24		SB12	甕	脚部			(5.0cm)				2.5YR4/1赤灰	2.5YR5/8明赤褐	5YR4/4にぶい赤褐		石英,白色粒	1915	
162	C25		SB13	甕	口~胴部	(29.1cm)					頸部径:(25.0cm) 口縁部長:3.8cm	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR4/1褐灰		石英,角閃石,雲母	2188	
163	C25		SB13	甕	口~胴部	(28.5cm)					頸部径:(24.8cm) 口縁部長:2.8cm	10YR6/3にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR3/1黒褐		石英,雲母	2188	
164	C25		SB13	甕	口~胴部	(23.5cm)					刻目突帯間隔:6.9cm	2.5YR5/1赤灰	10R5/4赤褐	10R5/4赤褐		石英,角閃石	2203	
165	C24		SB13	甕	脚~胴下部			7.0cm	9.1cm	2.8cm		10R4/4赤褐	10R6/6赤橙	10R6/6赤橙		石英,角閃石,白色粒	1917	
166	B25		SB13	甕	口縁部							10YR7/2にぶい黄橙	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙		石英,角閃石	2238	
167	B25		SB13	甕	脚部			5.2cm	9.0cm	2.3cm		7.5YR7/6橙	2.5YR6/6橙	5YR7/3にぶい橙		石英,角閃石,長石	2210	
168	C24		SB13	甕	脚部			7.1cm	7.2cm	3.5cm		7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙		石英,雲母(大きい)	1923	
169	C24		SB13	大型甕	突帯部						突帯幅:2.3cm	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	10YR4/1褐灰		石英,雲母,白色粒	1934	
170	C24		SB13	壺	口縁部	(22.0cm)						10R6/3にぶい赤橙	10R6/3にぶい赤橙	10R6/3にぶい赤橙		石英,角閃石	1935	
171	C24		SB13	高杯	脚部						脚接合部径:6.0cm	2.5YR7/2明赤灰	10R6/4にぶい赤橙	10R6/4にぶい赤橙		石英,角閃石	1931	
172	B25		SB13	高杯	脚部				(22.2cm)			7.5YR7/6橙	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙		石英,角閃石	2227	
173			SB13	壺	底~胴部			3.6cm									總括3-75	
175	C24		SB14	甕	口~胴部	(27.0cm)					頸部径:(23.9cm)	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄橙		雲母,白色粒,半透明粒	1962		
176	C25		SB17	甕	胴下部			8.0cm	9.0cm	2.1cm		10R6/4にぶい赤橙	2.5YR7/3淡赤橙	10R6/4にぶい赤橙		石英,角閃石	2341	
177	C25		SB17	甕	脚~胴下部			7.0cm	9.3cm	2.9cm		2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR6/3にぶい橙		褐色粒	2335		
178	C25		SB17	円盤土製品							径:6.0~6.2cm	5YR6/2灰褐	2.5YR6/2灰赤	2.5YR6/2灰赤		石英,角閃石	2336	
180	C25		SB18	甕	口縁部							口縁部長:3.3cm	10YR8/2灰白	10YR5/1褐灰	10YR8/2灰白		石英,角閃石	2328
181	C26		SB21	壺	口縁部	(22.3cm)						7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	10YR8/3淡黄橙		石英,雲母,白色粒	2571	
182	C25		SB21	壺	口縁部							2.5YR5/4灰赤	2.5YR5/2にぶい赤褐	2.5YR5/4にぶい赤褐		石英,角閃石,長石,黒曜石	2573	
183	B25		SB22	甕	口縁部							5YR7/6橙	5YR7/6橙	5YR7/6橙		白色粒	2557	
184	B25		SB22	高杯	脚部						脚接合部径:(2.8cm)	5YR8/2灰白	2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/4淡赤橙		石英	2556	
185	C26		SB25	甕	口~胴部	(27.8cm)						7.5YR7/4にぶい橙	5YR7/8橙	5YR7/3にぶい橙		石英,角閃石	2625	
186	C26		SB25	甕	口縁部							10R6/3にぶい赤橙	10R6/3にぶい赤橙	—		石英,角閃石	2665	

第7表 VI区出土遺物観察表4

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法				色調				混和剤	取上番号		
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高							
187	C26		SB25	甕	脚部			6.9cm	(9.0cm)	3.5cm			5YR8/3淡橙	5YR7/4にぶい橙	10R5/6赤	石英, 角閃石	2665
188	C26		SB25	壺	口~肩部	(15.2cm)					頸部径:10.4cm 口縁部高:5.5cm	10R6/6赤橙	10R6/4にぶい赤橙	10R6/4にぶい赤橙		石英, 角閃石, 褐色粒	2711
189	C26		SB25	埴	底~胴部						胴部最大径:(7.3cm)	5YR7/6橙	10YR7/3にぶい黄橙	5YR7/6橙	10R5/8赤	石英, 赤褐色粒	2617
190	B25		SB27	高杯	杯部	(28.1cm)					杯部高:11.1cm	7.5YR8/2灰白	2.5YR6/6橙	7.5YR8/2灰白		石英, 角閃石	2750
191	B26		SB27	高杯	脚部						接合部径:5.0cm 筒部径:6.8cm 筒部高:6.8cm	5YR8/3淡橙	2.5YR7/4淡赤橙	5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石	2847
192	B26		SB27	高杯	杯部							5YR7/8橙	5YR7/8橙	2.5YR8/1灰白		石英	2649
193	B26		SB27	埴	脚部				11.8cm			7.5YR8/2灰白	2.5YR7/4淡赤橙	7.5YR8/2灰白		石英, 角閃石	2596
194	B26		SB27	甕	脚部			(5.9cm)	(8.5cm)	2.8cm		2.5YR4/2灰赤	5YR6/6橙	2.5YR6/8橙		石英, 角閃石	2597
195	B26		SB27	鉢	口~底部	(13.9cm)	7.5cm	4.0cm				2.5YR6/6橙	10YR7/6明黄褐	10YR8/2灰白		石英, 角閃石, 白色粒	2867
196	B26		SB27	鉢	完形	15.3cm	8.0~8.5cm	4.7cm				2.5YR7/3淡赤橙	10R6/6赤橙	10R6/6赤橙		石英, 角閃石	2866
197			SB27	須恵器甕	胴部												総括3-94
199	B26		SB28	高杯	脚部				(12.5cm)			10YR8/6黄橙	5YR7/8橙	5YR7/8橙		白色粒	2595
200	C27		SB29	甕	口縁部							2.5YR7/2灰黄	5YR6/6橙	2.5Y4/1黄灰		石英, 角閃石, 白色粒	2813
201	C26		SB29	甕	口縁部							10R6/6赤橙	10R4/1暗赤灰	10R6/6赤橙		石英, 角閃石	2688
202	C26		SB29	甕	口縁部片							2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR6/3にぶい橙	10R6/6赤橙		石英, 角閃石	2699
203	C26		SB29	甕	脚~胴下部			5.4cm	6.6cm	2.0cm		2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR6/2灰赤	2.5YR7/3淡赤橙		石英, 角閃石	2792
204	C26		SB29	鉢	底部			(4.6cm)				2.5GY7/1明オリーブ灰	5YR6/8橙	7.5Y7/1灰白		緻密, 橙色粒	2685
205	C27		SB29	壺	胴部						突帯幅:2.4cm	7.5YR8/2灰白	10YR8/4浅黄橙	N3/0暗灰		石英, 角閃石, 褐色粒	2797
206	C25		SB29	埴	底~頸部			3.5cm			胴部最大径:10.8cm 胴部高:14.8cm	7.5YR7/4にぶい橙	10R4/8赤	2.5YR6/6橙		雲母	2830
207			SB29	埴	底~頸部			3.2cm			胴部最大径:12.0cm 頸部径:8.4cm						総括3-68
208	C27		SB29	高杯	脚部				(10.7cm)	7.8cm		5YR8/2灰白	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR5/6明赤褐		石英, 角閃石	2826
209			SB29	高杯	脚部				(14.8cm)								総括3-93
210	C26		SB29	須恵器壺	口縁部							黒斑の為不明	丹塗の為不明	10YR8/2灰白	7.5R4/8赤	石英, 角閃石	2824
211	C26		SB29	須恵器蓋	蓋	(11.8cm)					口縁部高:3.0cm	N5/0灰	N3/0暗灰	2.5YR6/2灰赤			2642
216	C27		SB30	甕	口縁部							2.5YR6/8橙	2.5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/4にぶい橙		石英, 角閃石, 白色粒	2861
217	C27		SB30	甕	脚部			7.0cm	8.7cm	3.4cm		2.5YR4/1赤灰	2.5YR7/6橙	2.5YR6/3にぶい橙		石英, 角閃石, 輝石	2863
218	C27		SB30	甕	脚部			(6.6cm)	(10.7cm)	4.0cm		スス付着の為不明	10YR8/6黄橙	10YR8/3浅黄橙		石英, 角閃石, 黄色粒	2851
219	C26		SB30	甕	脚部			(5.4cm)	7.2cm	2.0cm		2.5Y6/3にぶい黄	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙		石英, 角閃石, 黒色粒	2818
220	C27		SB30	鉢	口~底部	(11.8cm)	6.1cm	5.4cm				2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/3淡赤橙		石英, 角閃石	2850
221	C27		SB30	高杯	脚部				(17.5cm)	6.7cm	脚接合部径:5.0cm	2.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙	10R5/8赤	石英, 白色粒	2857
222			SB30	須恵器甕	口縁部	(10.2cm)											総括3-90
223	C26		溝1	甕	脚部			8.4cm	(8.8cm)	2.0cm		5YR4/4にぶい赤褐	10YR6/4にぶい黄橙	10R5/6赤		石英, 角閃石	2352
224	C25	9		甕	口~胴部	(26.0cm)					頸部径:(23.3cm) 口縁部長:2.6cm	2.5Y7/3浅黄	2.5YR8/2灰白	2.5Y5/1黄灰		石英, 褐色粒	2188
225	C24	9		甕	口縁部	(35.0cm)					頸部径:(30.4cm) 口縁部長:2.8cm	2.5Y7/2灰黄	7.5YR7/4にぶい橙	2.5Y4/1黄灰		石英, 角閃石, 褐色粒	1766
226	C25	9		甕	口~胴部	(30.8cm)					刻目突帯間隔:2.5cm	10R5/8赤	2.5YR5/8明赤褐	10R5/8赤		石英, 角閃石	1872
227	C26	9		甕	口~胴部	(32.8cm)						2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/8明赤褐		石英, 白色粒, 赤色粒	2445
228	C25	9		甕	口~胴部	(32.0cm)						10R6/4にぶい赤橙	10R6/4にぶい赤橙	10R6/4にぶい赤橙		石英, 角閃石	1905
229	C25	9		甕	口~胴部	24.2cm						2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	—		石英, 角閃石	1678
230	C25	9		甕	口~胴部	(26.0cm)						5YR8/2灰白	2.5YR7/6橙	2.5YR7/6橙		石英, 角閃石	2163
231	B25	9		甕	口縁部	(35.0cm)					刻目突帯間隔:4.0cm	10R5/6赤	10R5/6赤	10R5/6赤		石英, 角閃石, 白色粒	2047
232	C24	9		甕	口縁部							5YR6/8橙	5YR6/8橙	7.5YR7/6橙		石英, 角閃石, 雲母	1664
233	C24	9		甕	口縁部							10YR3/2にぶい褐	7.5YR5/3黒褐	10YR6/3にぶい黄橙		石英, 長石, 雲母	
234	C26	9		甕	口縁部							10YR4/2灰黄褐	10YR3/1黒褐	10YR4/2灰黄褐		石英, 茶褐色粒	2673
235	C26	9		甕	口縁部	(27.6cm)						5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙		石英, 角閃石	2579
236	B25	9		甕	口縁部							10R6/6赤橙	10R6/6赤橙	10R6/6赤橙		石英, 角閃石, 白色粒	一般①
237	C25	9		甕	口縁部							5YR8/2灰白	2.5YR7/1明赤灰	2.5YR6/3にぶい橙		石英, 角閃石	1711
238	B25	9		甕	口縁部							2.5YR6/6橙	7.5YR5/3にぶい褐	10R5/8赤		石英, 角閃石	一般②
239	C24	9		甕	口縁部							10R5/8赤	10R5/8赤	10R5/8赤		石英, 褐色粒	1484
240	C27	9		甕	口縁部							5YR8/2灰白	10R6/6赤橙	10R6/6赤橙		石英, 角閃石	2765
241	C24	9		甕	口~胴部	(22.2cm)					刻目突帯間隔:3.2cm	10R5/6赤	2.5YR5/4にぶい赤褐	10R5/6赤		石英, 角閃石	1663
242	C25	9		甕	口~胴部	(21.4cm)						5YR6/4にぶい橙	2.5YR5/6明赤橙	10R6/8赤橙		石英, 角閃石	2192
243	C25	9		甕	口縁部							2.5YR6/6橙	2.5YR5/4にぶい赤褐	10R5/8赤		石英, 角閃石	1789
244	C25	9		甕	口~胴部							10R5/6赤	10R6/8赤橙	10R5/8赤		石英, 角閃石, 白色粒	1910

第8表 VI区出土遺物観察表5

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法						色調				混和剤	取上番号	
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面	丹			
245	C25	9		甕	口縁部						刻目突帯間隔:2.8cm	10R5/6赤	10R5/6赤	10R5/6赤		角閃石, 白色粒	1852	
246	C25	9		甕	口縁部							10YR6/6明黄褐	2.5YR6/6にぶい橙	2.5YR6/6にぶい橙		石英, 角閃石, 橙粒, 砂質	1720	
247	C25	9		甕	口縁部						刻目突帯間隔:3.3cm+α	2.5YR6/4にぶい橙	5YR6/2灰褐	2.5YR6/3にぶい橙		石英, 角閃石	2198	
248	C25	9		甕	頸~胴部片						穿孔部径:0.5cm	2.5Y7/3浅黄	7.5YR6/6橙	2.5Y7/2灰黄		石英, 黒母, 褐色粒	1908	
249	C25	9		甕	口縁部						刻目突帯間隔:4.4cm+α	5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/4にぶい橙	10R5/6赤		石英, 角閃石, 白色粒	1827	
250	C24	9		甕	口縁部							2.5Y7/4浅黄	10YR7/4にぶい黄橙	5Y5/1灰		石英, 角閃石, 白色粒	1775	
251	C25	9		甕	口縁部						穿孔部径:0.7cm	10YR5/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙		石英	2289	
252	C25	9		甕	口~胴部							2.5YR6/4にぶい橙	2.5YR5/4にぶい赤褐	2.5YR6/4にぶい橙		角閃石	1755②	
253	C24	9		甕	口縁部	(21.4cm)					刻目突帯間隔:3.4cm	10YR7/3にぶい黄橙	5YR8/2灰白	5YR4/1褐灰		石英, 橙色粒	1636	
254	C25	9		甕	口縁部						刻目突帯間隔:4.0cm+α	2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR5/3にぶい赤褐	2.5YR6/6橙		石英, 角閃石	1747	
255	C25	9		甕	口縁部						刻目突帯間隔:6.3cm+α	7.5YR7/2明褐灰	5YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石	1747	
256	C25	9		甕	口縁部						刻目突帯間隔:4.7cm	5YR7/2明褐灰	10R6/6赤橙	5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石	1747	
257	C25	9		甕	突帯部							10YR8/3淡黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	2.5YR2/1黒		石英, 白色粒	1991	
258	B25	9		甕	口縁部						刻目突帯間隔:2.6cm	7.5YR8/2灰白	2.5YR7/6橙	2.5YR7/6橙		石英, 角閃石	2031②	
259	C25	9		甕	胴上部							10R6/8赤橙	10R6/8赤橙	10R6/8赤橙		石英, 角閃石	1760	
260	C26	9		甕	脚~胴下部			7.5cm	9.3cm	3.0cm		10YR8/1灰白	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白		石英, 角閃石	2407	
261	C27	9		甕	脚部			(7.6cm)	(8.1cm)	4.2cm		2.5YR5/8明赤褐	5YR6/8橙	2.5YR5/8明赤橙		石英, 角閃石	2767	
262	C25	9		甕	脚部			(4.6cm)	(6.8cm)	1.8cm		10R6/8赤橙	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR8/2灰白		石英, 角閃石	1713	
263	C24	9		甕	脚部			5.6cm	7.4cm	2.2cm		10YR7/3にぶい黄橙	10R6/8赤橙	10R6/8赤橙		石英, 角閃石, 赤色粒	1320	
264	C24	9		甕	脚部			4.2cm	5.8cm	2.0cm		10YR4/8灰黄褐	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR4/2灰褐		石英, 褐色粒	1665	
265	C24	9		甕	脚部			(7.1cm)	(9.1cm)	2.7cm		2.5Y6/4にぶい黄	2.5Y6/4にぶい黄	2.5Y6/4にぶい黄		石英, 角閃石		
266	C24	9		甕	脚部			(6.6cm)	(8.1cm)	2.3cm		7.5YR5/2灰褐	5YR6/4にぶい橙	2.5YR5/3にぶい赤橙		石英, 角閃石, 褐色粒	1437	
267	C25	9		甕	脚部			8.7cm	9.9cm	2.6cm		7.5YR7/2明褐灰	2.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙		石英, 角閃石	1839	
268	C26	9		甕	脚部			6.0cm	(7.7cm)	1.9cm		5YR7/3にぶい橙	5YR7/3にぶい橙	5YR7/3にぶい橙		石英, 角閃石	2453	
269	C24	9		甕	脚部			8.6cm	10.8cm	2.9cm		2.5YR6/4にぶい橙	5YR8/2灰白	2.5YR6/8橙		石英, 角閃石		
270	B25	9		甕	脚部			7.6cm	8.3cm	3.0cm								2091
271	C24	9		甕	脚部			(6.5cm)	(7.7cm)	2.5cm		2.5YR5/2灰赤	7.5R6/2灰赤	7.5R6/2灰赤		石英, 角閃石	1453①	
272	C24	9		甕	脚部			(7.4cm)	9.2cm	3.3cm		5YR8/3淡橙	5YR8/3淡橙	10R5/6赤		石英, 角閃石	1319	
273	C24	9		甕	脚部			(5.7cm)	(7.1cm)	2.4cm		10R5/8赤	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙		石英, 角閃石, 白色粒	1346	
274	C24	9		甕	底部			(8.3cm)				2.5YR7/4淡赤橙	7.5YR7/4にぶい橙	5YR8/3淡橙		石英, 角閃石, 褐色粒		
275	C24	9		甕	脚部			(7.5cm)	(9.4cm)	2.4cm		7.5YR6/3にぶい褐	10R6/4にぶい赤橙	10R6/4にぶい赤橙		石英, 黒色粒, 白色粒	1474	
276	C25	9		甕	脚部			6.6cm	9.2cm	1.8cm	頸部径:(6.6cm)	7.5YR7/8黄橙	2.5YR8/3淡黄	2.5YR8/1灰白		石英, 白色粒	2120	
277	C24	9		甕	脚部			9.4cm	10.2cm	2.0cm		7.5YR7/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙		石英, 長石, 雲母	1448	
278	C25	9		甕	脚部			7.2cm	8.4cm	3.0cm		7.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙			やや粗, 透明粒	1735	
279	C25	9		甕	脚部			(5.7cm)	(5.6cm)	1.4cm		2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/2明赤灰		石英, 赤色粒	1879	
280	C24	9		甕	脚部			6.6cm	(8.0cm)	3.0cm		5YR4/4にぶい赤褐	5YR8/2灰白	5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石, 砂っぽい	1439	
281	B26	9		甕	脚部			5.5cm	7.7cm	2.7cm		—	10YR7/6明黄褐	2.5YR6/8橙		石英, 角閃石, 雲母	2552	
282	B26	9		甕	脚部			5.1cm	8.1cm	2.0cm		2.5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/4にぶい橙		石英, 角閃石	2485	
283	C25	9		甕	脚部			(7.7cm)	(8.8cm)	2.4cm		2.5YR7/8橙	2.5YR7/8橙	2.5YR6/8橙		石英, 角閃石, 褐色粒	2152	
284	C24	9		甕	脚部			5.7cm	(8.1cm)	3.0cm		7.5YR6/3にぶい褐	10R6/4にぶい赤橙	10R6/4にぶい赤橙		石英, 角閃石	1643	
285	C24	9		甕	底部			4.7cm				10R5/6赤	10YR7/3にぶい黄橙	10R5/6赤		石英, 角閃石, 長石	1337	
286	C24	9		甕	脚部			(7.2cm)	(8.9cm)	2.0cm		—	10R6/8赤橙	10R6/8赤橙		石英, 角閃石	1576	
287	C25	9		甕	脚部			(5.2cm)	(8.2cm)	3.1cm		10YR6/3にぶい黄橙	7.5YR8/3浅黄橙			粗, 透明粒, 黒色粒	1842	
288	C25	9		甕	底部			(8.3cm)				10R6/6赤橙	2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/4淡赤橙		石英, 角閃石	2111	
289	C24	9		甕	脚部			(6.1cm)	8.4cm	2.7cm		7.5R6/2灰赤	7.5R6/2灰赤	7.5R5/3にぶい赤褐		石英, 角閃石, 褐色粒	1452	
290	C24	9		甕	脚部			6.0cm	6.9cm	1.3cm		10YR6/3にぶい黄橙	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙		石英, 角閃石	1471	
291	C25	9		甕	脚部			(6.1cm)	(8.0cm)	2.6cm		2.5Y7/2灰黄	2.5YR6/6橙			黒色粒	2065	
292	C26	9		甕	脚部			5.5cm	6.0cm	1.1cm		2.5YR6/6橙	2.5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/4にぶい橙		石英, 角閃石	2435	
293	B24	9		甕	脚部			7.0cm	9.1cm	2.5cm		—	2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR6/4にぶい橙		石英, 角閃石, 褐色粒	1542	
294	C24	9		甕	脚部			(5.0cm)	7.5cm	2.9cm		—	10YR7/2にぶい黄橙	5YR6/2灰褐		石英, 橙色粒	1648	
295	C24	9		甕	脚部			8.3cm	6.5cm	2.4cm		7.5YR7/4にぶい橙	2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/4淡赤橙		石英, 角閃石, 長石		
296	B25	9		甕	脚部			(7.1cm)	(8.8cm)	2.8cm		5YR8/2灰白	2.5YR7/6橙	5YR8/2灰白		石英, 角閃石	2031①	
297	C24	9		甕	脚~胴下部			8.1cm				2.5YR3/2暗赤褐	2.5YR6/6橙	10YR7/4にぶい黄橙		石英, 角閃石, 長石	1444	

第9表 VI区出土遺物観察表6

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法					色調				混和剤	取上番号	
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面			丹
298	C24	9		甗	脚~胴部			(8.5cm)				5YR8/2灰白	5YR8/4淡橙	2.5YR7/4淡赤橙		石英, 角閃石	1462
299	B24	9		甗	脚部			(7.0cm)	(7.3cm)	1.5cm		5YR7/1明褐灰	5YR6/6橙	5YR6/6橙		石英, 褐色粒	1543
300	C25	9		甗	脚部			8.0cm	8.6cm	2.7cm		2.5YR6/6橙	5YR8/3淡橙	2.5YR6/6橙		石英, 白色粒	1676
301	C24	9		甗	脚部			6.4cm	7.5cm	1.6cm		焦げで不明	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR6/6橙		石英, 角閃石	
302	C25	9		甗	脚部			7.8cm	9.9cm	4.2cm		2.5YR6/3にぶい 橙	7.5YR6/6橙	2.5YR6/3にぶい 橙		石英, 角閃石	1675
303	C25	9		甗	脚部			7.9cm	8.8cm	2.0cm		10R5/6赤	7.5YR6/8橙	2.5YR5/8明赤褐		石英, 角閃石, 小 礫	1761
304	C25	9		甗	脚部			6.3cm	7.4cm	2.6cm		5YR7/6橙	2.5YR6/8橙	2.5YR5/3にぶい 赤褐		石英, 礫石	2314
305	C25	9		甗	脚部			7.4cm	8.8cm	2.2cm		2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/2明赤灰		石英, 角閃石	1868
306	C25	9		甗	脚部			5.2cm	6.7cm	2.4cm		2.5YR7/4淡赤橙	10YR7/3にぶい 黄橙	5YR7/2明褐灰		石英, 角閃石	1746
307	C25	9		甗	底部			(7.9cm)	(8.8cm)	1.6cm		10R6/3にぶい赤 橙	2.5YR6/2灰赤	10R5/4赤褐		石英	1748
308	C25	9		甗	脚部			5.8cm	8.5cm	3.0cm		2.5YR6/6橙	5YR7/3にぶい橙	2.5YR7/4淡赤橙		石英, 角閃石	1739
309	C25	9		甗	脚部			7.6cm	9.1cm	3.0cm		7.5YR4/3褐	5YR7/2褐灰	10R6/4にぶい赤 橙		石英, 角閃石, 白 色粒	1762
310	C25	9		甗	脚部			(7.2cm)				2.5YR7/3淡赤橙	5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい 橙		石英, 角閃石, 白 色粒	1755
311	C25	9		甗	脚部			4.8cm	6.1cm	2.3cm		10YR7/3にぶい 黄橙	2.5YR6/6橙	10R5/6赤		石英, 角閃石	1845
312	C25	9		甗	脚部			(7.6cm)	(8.5cm)	3.0cm		5YR6/6橙	5YR6/2灰橙	5YR6/6橙		石英, 角閃石, 白 色粒	1862
313	C25	9		甗	脚部			9.0cm	10.3cm	2.3cm		5YR7/2明褐灰	10R6/3にぶい赤 橙	10R5/4赤褐		石英, 角閃石, 白 色粒, 砂質	1724
314		9		甗	脚部			9.8cm	(10.2cm)	2.6cm		2.5YR5/6明赤褐	2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/4淡赤橙		石英, 角閃石	1509
315	C25	9		甗	脚部			(6.6cm)	8.4cm	2.9cm		2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/6橙	2.5YR7/3淡赤橙		石英, 角閃石, 砂 質	1799
316	C25	9		甗	脚~胴下部			7.3cm	8.6cm	2.0cm		10R6/3にぶい赤 橙	2.5YR7/4淡赤橙	10R6/3にぶい赤 橙		石英, 角閃石	1900
317	C25	9		壺	頸~胴部						胴部最大径:(36.0cm) 突帯幅:1.7cm	2.5YR6/4にぶい 橙	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/3淡赤橙		石英, 角閃石, 白 色粒	1896
318	C24	9		壺	底~胴下部			(4.6cm)				5YR7/6橙	5YR7/8橙	7.5YR5/1褐灰		石英, 角閃石, 長 石, 赤色粒	
319	C24	9		大型壺	頸部						頸部径:(13.0cm)	10R5/8赤	2.5YR5/6明赤褐	10R5/8赤		石英, 角閃石, 白 色粒	1483
320	C24	9		壺	底部							10R6/6赤橙	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/3淡赤橙		石英, 角閃石, 白 色粒	1453②
321	C25	9		壺	底部							10R5/6赤	2.5YR6/6橙	10R6/8赤橙		石英, 角閃石, 褐 色礫	1734
322		9		壺	底部			(4.0cm)				2.5YR4/4にぶい 赤褐	5YR6/4にぶい橙	10R4/2灰赤		石英, 赤褐色粒	1517
323	C24	9		壺	底部			5.4cm				2.5YR6/6橙	7.5YR7/3にぶい 橙	7.5YR7/3にぶい 橙		石英, 角閃石, 長 石	1331
324	C25	9		壺	底~胴下部			(4.4cm)				10YR7/2にぶい 黄橙	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄		石英	2167
325	C25	9		壺	底~胴下部			(8.0cm)				5YR8/3淡橙	2.5YR7/6橙	2.5YR7/6橙		石英, 角閃石	1747
326	C24	9		壺	底~胴下部							10R6/4にぶい赤 橙	2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/2明赤灰		石英, 角閃石	1802
327	C24	9		無頸壺	底~胴下部	(13.5cm)	17.8cm	7.0cm			胴部最大径:17.7cm	10R5/8赤	7.5YR6/6橙	—		石英, 角閃石, 白 色粒	1260
328	C25	9		壺	口縁部	(30.0cm)						10R5/6赤	10R4/4赤褐	10R4/4赤褐		石英, 角閃石	1974
329	C24	9		短頸壺	口縁部	(15.2cm)						5YR7/6橙	5YR7/8橙	10YR7/1灰白		石英, 白色粒	1781
330	C25	9		長頸壺	口縁部	(11.7cm)						2.5YR7/6橙	5YR7/1明褐灰	2.5YR7/6橙		石英, 角閃石	1833
331	C25	9		壺	胴部						突帯幅:3.6cm	2.5YR5/4にぶい 赤褐	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR5/4にぶい 赤褐		石英, 褐色粒	1973
332	B24	9		壺	突帯部						突帯幅:2.4cm	2.5YR7/4淡赤橙	7.5YR7/3にぶい 橙	7.5YR7/3にぶい 橙		石英, 角閃石, 長 石	1541
333	B25	9		壺	胴部							2.5YR7/6橙	2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/6橙		石英, 角閃石	2030
334	C25	9		壺	突帯部						突帯幅:4.4cm	2.5YR7/4淡赤橙	5YR7/2明褐灰	2.5YR7/4淡赤橙		石英, 角閃石	1973
335	C26	9		小型壺	底部			3.4cm				5YR6/6橙	2.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙		石英, 褐色粒	2548
336	C24	9		高杯	杯部	(26.0cm)						2.5YR5/3にぶい 赤褐	2.5YR5/4にぶい 赤褐	2.5YR5/4にぶい 赤褐		石英, 角閃石, 長 石	1318
337	C24	9		高杯(丹 塗)	杯部	(17.0cm)				杯部高:7.0cm		7.5YR6/6橙	—	7.5YR5/2灰褐	10R5/8赤	石英, 褐色粒	1436
338	C24	9		高杯	杯部	(20.5cm)				杯部高:7.0cm 杯接合部径:5.7cm		5YR6/6橙	5YR6/6橙	5Y6/1灰	10R5/8赤	石英, 白色粒	1344
339	C25	9		高杯	杯部	(16.8cm)						2.5Y7/3浅黄	7.5YR7/6橙	5Y8/1灰白		白色粒, 褐色粒	1891
340	C25	9		高杯	杯部	(17.8cm)						10YR4/2灰黄褐	7.5YR5/4にぶい 褐	7.5YR7/2明褐灰		石英, 褐色粒	1892
341	C25	9		高杯	杯接合部					杯接合部径:(3.6cm)		7.5YR8/6浅黄橙	2.5YR7/8橙	7.5YR8/2灰白	2.5YR5/8明赤 褐	石英, 白色粒	1850
342	C25	9		高杯	脚部					杯接合部径:5.2cm		2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/2明赤灰		石英, 角閃石, 褐 色粒	1684
343	C24	9		高杯	脚部					杯接合部径:3.9cm		5YR7/3にぶい橙	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙		石英, 角閃石	1592
344	B25	9		高杯	脚部					杯接合部径:4.1cm		2.5YR6/4にぶい 橙	5YR8/2灰白	2.5YR6/4にぶい 橙		石英, 角閃石	2010
345	B25	9		高杯	脚部					筒部径:4.3cm		5YR8/2灰白	10R6/6赤橙	10R6/4にぶい赤 橙		石英, 角閃石, 白 色粒	2017
346	C24	9		高杯	脚部					杯接合部径:5.0cm		2.5YR7/6橙	2.5YR7/6橙	2.5YR7/6橙		石英, 角閃石	1569
347	C24	9		高杯	脚部					杯接合部径:(4.8cm)		10R5/6赤	10R5/8赤	10R4/6赤		石英, 角閃石	1455
348	C25	9		高杯	脚部					杯接合部径:2.9cm		2.5YR5/8明赤褐	2.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙		石英, 角閃石	1866
349	C25	9		高杯	脚部					杯接合部径:4.0cm 屈折部径:4.8cm		5YR5/4にぶい赤 褐	7.5YR6/4にぶい 橙	2.5YR6/6橙		石英, 褐色粒	1673
350	B25	9		高杯	脚部					杯接合部径:4.1cm 屈折部径:5.3cm		5YR7/3にぶい橙	10R6/8赤橙	10R6/4にぶい赤 橙		石英, 角閃石	2249

第10表 出土遺物観察表7

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法					色調				混和剤	取上番号		
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面			丹	
351	C25	9		高杯	脚部						杯接合部径:4.9cm 屈折部径:5.8cm	5YR7/4にぶい 橙	10R5/8赤	7.5YR7/3にぶい 橙		石英,角閃石	1741	
352	C25	9		高杯	脚部						杯接合部径:5.3cm	5YR8/3淡橙	2.5YR7/3淡赤橙	10R6/4にぶい 赤橙		石英,角閃石,黒 褐色粒	1723	
353	C25	9		高杯	脚部						筒部径:4.1~5.1cm	10R5/8赤	5YR8/2灰白	2.5YR6/4にぶい 橙		石英,角閃石,白 色粒	1721	
354	C25	9		高杯	脚部						杯接合部径:4.1cm 屈折部径:7.1cm 筒部径:4.2~7.5cm	10R5/4赤褐	2.5YR6/3にぶい 橙	10R5/6赤		輝石,石英	1989	
355	C25	9		高杯	脚部						筒部径:5.7cm	10R6/6赤橙	10R5/6赤	2.5YR4/2灰赤		石英,白色粒,褐 色粒	1744	
356	C25	9		高杯	脚部				(11.7cm)			2.5YR5/2灰赤		2.5YR4/2灰赤	10YR4/8赤	黒色粒	1707	
357	C27	9		高杯	脚部				(16.0cm)			10YR7/3にぶい 黄橙	10YR7/3にぶい 黄橙	10YR7/3にぶい 黄橙		石英,角閃石,白 色粒	2760	
358	C26	9		高杯	脚部					脚接合部径:(6.8cm)		10R5/8赤	2.5YR6/6橙	10R5/8赤		石英,角閃石	2408	
359	C24	9		高杯	脚部				(12.0cm)		穿孔径:0.6cm	2.5YR6/4にぶい 橙	5YR7/4にぶい 橙	5YR7/4にぶい 橙		石英,角閃石	1456	
360	C27	9		埴	頸部					頸部径:(8.0cm)		2.5YR7/3淡赤橙	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白		石英,角閃石	2775	
361	C27	9		埴	口~頸部	(14.1cm)				頸部径:(9.8cm)		5YR8/2灰白	5YR7/3にぶい 橙	5YR7/3にぶい 橙		石英,角閃石	2773	
362	C26	9		鉢	口縁部	(18.2cm)						2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐		石英,角閃石	2588	
363	C25	9		鉢	底~胴下部			(5.4cm)				10R6/4にぶい 赤橙	2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/3淡赤橙		石英,角閃石	1996	
364	C25	9		小型鉢	底部			4.4cm				10YR7/2にぶい 黄橙	5YR7/2明褐灰	5YR7/2明褐灰		石英,橙色粒	2456	
365	C25	9		小型鉢	底部			2.5cm	4.1cm	1.2cm		2.5YR7/3淡赤橙	2.5YR7/2明赤灰	2.5YR7/2明赤灰		石英,黒色粒	1890	
366	C25	9		大型鉢	口縁部	(25.0cm)						10R6/8赤橙	10R6/6赤橙	10R6/8赤橙		石英,白色粒	2178	
367	C26	9		鉢	口~杯部	(23.7cm)	推定17.0cm					7.5R4/6赤	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐		石英,角閃石	2538	
368	B25	9		小型鉢	口~底部	5.6cm	3.3~3.6cm	1.8cm	1.5cm	0.7cm		10YR7/3にぶい 黄橙	10YR7/3にぶい 黄橙	—		石英,褐色粒	2143	
369	B25	9		鉢	口~底部	(5.9cm)	4.6cm	2.8cm				5YR7/4にぶい 橙	10R6/4にぶい 赤橙	10R6/4にぶい 赤橙		石英,角閃石	2011	
370	C25	9		燭台形鉢	底部							5YR8/3淡橙	2.5YR6/6橙	10R5/6赤		石英,角閃石	2061	
371	C26	9		小型鉢	口~底部	(8.8cm)	6.2cm					7.5YR7/2明褐灰	2.5YR6/2灰赤	2.5YR6/2灰赤		石英,橙色粒	2378	
372	C24	9		小型鉢	口~底部	(11.0cm)	8.2cm	(3.3cm)				7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	N6/0灰		石英,角閃石,橙 色粒	1776	
373	C24	9		小型鉢	口~底部	(7.6cm)	6.9cm	2.5cm				5YR8/2灰白	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白		石英,角閃石	1662	
374	C25	9		脚付土器	脚部					脚幅:3.5cm		7.5YR5/3にぶい 褐	10R6/8赤橙	10R5/4赤褐		石英,角閃石	2105	
375	C27	9		鉢	口~脚部	(11.9cm)	12.1cm	4.8cm	7.9cm	2.3cm		10YR6/3にぶい 黄橙	10Y6/1灰	7.5Y6/1灰		石英	2729	
376	C22	9		須恵器杯 蓋	蓋部							2.5Y7/1灰白	10Y5/1灰	10YR6/2灰黄褐		白色粒	371	
377	C24	9		須恵器杯 蓋	蓋部							10R7/4にぶい 黄橙	5YR7/2明褐灰			石英,白色粒	1316	
405	C24	8		甕	脚部			5.9cm	8.6cm	4.0cm		2.5Y6/1黄灰	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白		石英,角閃石,長 石,雲母	839	
406	B24	8		甕	脚部			8.0cm	8.6cm	1.8cm		5YR6/4にぶい 赤褐	5YR5/4にぶい 赤褐	5YR5/4にぶい 赤褐		石英,角閃石,長 石,黒曜石	780	
407	B24	8		甕	脚部			4.8cm	7.0cm	3.0cm		7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白		石英,角閃石	774	
408	C25	8		甕	脚部				(6.0cm)	3.7cm		2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白		石英	744	
409	B25	8		甕	脚部			(7.1cm)	(9.0cm)	4.7cm		10YR8/2灰白	2.5YR7/8橙	2.5YR7/8橙		石英,角閃石,赤 色粒	1350	
410	C26	8		甕	頸部							5YR5/4にぶい 赤褐	2.5YR5/8明赤褐			石英,角閃石,長 石		
411	C26	8		鉢	口縁部							10YR7/4橙	5YR6/8にぶい 黄橙	10YR6/3にぶい 黄橙		石英,角閃石,長 石	1364	
412	C25	8		短頸壺	口縁部	(13.0cm)						7.5YR8/2灰白	2.5YR7/3淡赤橙	5YR7/2明褐灰		石英,角閃石		
413	B26	8		高杯	口縁部							5YR6/6にぶい 赤褐	5YR5/4橙	5YR6/4にぶい 橙		石英,角閃石,長 石		
414	B26	8		高杯	杯~脚部					脚接合部径:5.5cm		5YR6/8橙	5YR6/8橙	7.5YR7/4にぶい 橙		石英,角閃石,長 石	1387	
415	B25	8		高杯	杯部	(13.5cm)				杯部高:4.9cm		2.5Y6/4にぶい 黄	—	2.5Y6/2灰黄	2.5YR4/6赤褐	石英	1351	
416	B25	8		高杯	杯部					接合部径:(4.9cm)		5YR5/6明赤褐	7.5YR6/4にぶい 橙	5YR5/6明赤褐	10R4/6赤	石英,角閃石	1350③	
417	B25	8		高杯	脚部							5YR6/8橙	5YR5/6明赤褐	5YR5/3にぶい 赤褐		石英	1350②	
418	C25	8		高杯	脚部					筒部径:3.7~5.0cm		7.5YR4/1褐灰	2.5Y2/1黒	10YR5/2灰黄褐		石英,赤褐色粒	868	
419	C25	8		高杯	脚部					脚接合部径:3.4cm 筒部径:3.3~4.9cm		10YR7/6明黄褐	7.5YR7/4にぶい 黄橙	10YR7/4にぶい 黄橙		石英,角閃石,白 色粒	676	
420	C23	8		高杯	杯部	(27.0cm)						5YR6/6橙	10YR7/4にぶい 黄橙	7.5YR7/4にぶい 黄橙	10R5/8赤	石英,白色粒	411	
421	C23	8		高杯	杯部	(23.7cm)						5YR6/8橙	5YR7/8橙	5YR6/6橙	10R6/8赤	石英,白色粒	407	
422	B25	8		鉢	完形	15.2cm	8.0~8.4cm	7.3cm	7.0cm	1.3cm		5YR8/2灰白	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白		石英,角閃石	1366	
423	C26	8		須恵器杯 蓋	蓋部	(13.0cm)						N6/0灰	7.5Y3/1杓-7黒	5YR6/2灰褐		白色粒	2591	
424	B25		SB1	須恵器杯 蓋	口縁部	(15.8cm)						2.5YR8/3淡黄	5YR6/8橙	10YR8/3淡黄橙			1092	
425	C27	6		須恵器杯 蓋	蓋部	15.0cm	2.4cm											941
426	B27	6		土師器杯	杯部	12.4cm	3.9cm	8.0cm				7.5YR6/3にぶい 褐	7.5YR6/3にぶい 褐	7.5YR6/3にぶい 褐			938	
427	C27	6		土師器杯	完形	13.5cm	5.7cm	8.0cm				10YR6/1褐灰	10YR6/2灰黄褐	10YR6/1褐灰			940	
428	B27	6		土師器杯	完形	13.7cm	4.2~5.2cm	8.7cm				7.5YR6/3にぶい 褐	7.5YR6/3にぶい 褐	7.5YR6/3にぶい 褐			9394	
429	C24		Pit I	埴	胴~底部					胴部最大径:(12.2cm)		5YR8/3淡橙	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白		石英,角閃石,黒 色粒	1806	
430	C24		Pit I	甕or甗	口~胴部							7.5YR8/2灰白	5YR7/4にぶい 橙	5YR7/4にぶい 橙		石英,褐色粒		

第11表 出土遺物観察表9

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法					色調				混和剤	取上番号	
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面			丹
431	C24	6		甕	口～胴部							2.5Y4/1黄灰	2.5YR5/4にぶい赤褐	2.5YR5/4にぶい赤褐		石英、礫まじり粗い	418
432	C25	6		甕	口縁部							5YR4/4にぶい赤褐	5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐		石英、角閃石	592
433	C25	6		甕	口縁部							10R4/4赤褐	5Y4/3にぶい赤褐	10R4/4赤褐		石英、白色粒	577
434	C25	6		甕	口縁部							5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/3にぶい橙			茶褐色粒	582
435	C24	6		甕	口～胴部							7.5YR5/3にぶい橙	10R4/6赤	10R5/8赤		石英、白色粒	520
436	B24	6		壺	口縁部							2.5YR4/6暗赤褐	2.5YR3/2赤褐	5YR4/4にぶい赤褐		石英、長石	791
437	B27	6		甕	口縁部	(20.0cm)					頸部径:14.6cm	10YR6/6明黄褐	7.5YR7/6橙	5YR7/6橙		石英、白色粒	1119
438	B25	6		高杯	脚部						杯接合部径:3.4cm	2.5Y7/4浅黄	2.5YR7/4淡赤橙	2.5Y8/2灰白		石英、角閃石	632
439	C25	6		高杯	口縁部							5YR5/8明赤褐	7.5YR4/4褐	N5/0灰		石英、白色粒	600
440	B24	6		須恵器杯蓋	ツマミ部						ツマミ径:1.7cm	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白		緻密、白色粒	423
441	C25	6		須恵器杯蓋	端部	(11.0cm)						7.5Y5/1灰	7.5Y8/1灰	7.5Y3/1オリーブ黒		白色粒	575
442	C23	6		須恵器杯蓋	蓋部	17.4cm	2.2cm				ツマミ径:2.8cm						165
443	C23	6		須恵器杯蓋	蓋部												148
444	C23	6		須恵器杯蓋	蓋部	16.2cm	3.3cm										33
445	C25	6		須恵器杯蓋	蓋部	13.2cm	2.5cm				ツマミ径:2.2cm	5YR6/2灰褐	7.5YR7/3にぶい橙				
446	C23	6		須恵器杯	口～底部	13.5cm	3.0cm	9.9cm									62
447	C24	6		須恵器杯	胴～底部			7.8cm				7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙		精緻	662
448	C25	6		須恵器杯	胴～底部			9.6cm				5GY7/1明オリーブ灰	5GY7/1明オリーブ灰	2.5GY6/1オリーブ灰	5GY7/1明オリーブ灰		679
449	C26	6		須恵器杯	胴～底部			(9.0cm)				5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙		緻密、白色粒、橙褐色粒	936
450	C26	6		高台付須恵器杯	口～底部	11.4cm		7.8cm			高台径:7.5cm 高台高:0.3cm						931
451	SB1	6		高台付須恵器杯	口～底部	12.9cm	3.9cm	(7.6cm)			高台径:7.5cm 高台高:0.3cm						1076
452	C25	6		高台付須恵器杯	口～底部	15.3cm	5.7cm				高台径:10.2cm 高台高:0.7cm						402
453	C24	6		高台付須恵器杯	口～胴部	(15.6cm)						2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白		精緻	395
454	C25	6		高台付須恵器杯	胴～底部							7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙		石英	604
455	C26	6		高台付須恵器杯	胴～底部						高台径:5.7cm 高台高:0.4cm	7.5Y7/2灰白	2.5GYオリーブ灰	N5/1灰		精緻、白色粒	937
456	B-C27	6		高台付須恵器杯	胴～底部						高台径:7.5cm 高台高:0.3cm	5B6/1青灰	5B6/1青灰	5B6/1青灰		白色粒	
457	B24	6		高台付須恵器杯	底部			(9.2cm)			高台径:7.5cm 高台高:0.5cm	N4/0灰	N4/0灰	N4/0灰		緻密、白色粒	524
458	C24	6		高台付須恵器杯	胴～底部						高台径:8.1cm 高台高:0.5cm	10YR8/3淡黄橙	10YR8/3淡黄橙	10YR8/3淡黄橙		石英	537
459	B24	6		高台付須恵器杯	底部			(9.4cm)			高台径:9.9cm 高台高:0.9cm	7.5Y5/1灰	N5/0灰	7.5Y7/1灰白		精緻、白色粒	570
460	B25	6		須恵器杯	口縁部	12.9cm						10Y6/1灰	10Y6/1灰	10Y6/1灰		白色粒	8
461	C24	6		須恵器杯	口縁部	17.7cm						5Y8/2灰白	5Y5/1灰	7.5Y8/1灰白		精緻、白色粒、硬質	412
462	B25	6		須恵器碗	口～胴部	18.6cm						2.5GY7/1明オリーブ灰	2.5YR3/4暗赤褐	N7/0灰		精緻	793
463	BC25	6		須恵器高杯	脚部												900

第12表 出土遺物観察表10(石器)

番号	区	層	遺構	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上番号
71			SB4	敲石	砂岩	11.4cm	4.7cm	2.8cm	227.6g	1074
72			SB4	敲石	安山岩	9.2cm	5.0cm	4.2cm	294.7g	1072
73			SB4	凹石	安山岩	11.6cm	7.8cm	5.3cm	612.7g	1071
74			SB4	凹石・磨石	安山岩	10.6cm	8.4cm	5.4cm	641.6g	1067
75			SB4	凹石	安山岩	7.5cm	7.2cm	3.7cm	315.0g	1124
76	E-25		SB4	石皿	安山岩	11.2cm	9.4cm	2.5cm	351.3g	870
77			SB4	石皿片	泥岩	14.8cm	12.2cm	11.8cm	2376.7g	1128

第13表 出土遺物観察表11(石器)

番号	区	層	遺構	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上番号
78			SB4	凹石	安山岩	13.0cm	10.8cm	11.4cm	2425.6g	1125
79			SB4	軽石製加工品(人形)	軽石	12.6cm	6.5cm	4.2cm	115.5g	1055
80			SB4	軽石製加工品	軽石	10.3cm	5.6cm	3.3cm	27.8g	851
81			SB4	軽石製加工品	軽石	8.15cm	4.1cm	1.8cm	15.2g	1135
82			SB4	軽石製加工品	軽石	5.9cm	3.8cm	2.4cm	12.6g	999
96			SB5	蔽石	安山岩	9.0cm	4.1cm	3.3cm	185.6g	1189
97			SB5	磨石	安山岩	8.7cm	4.2cm	3.5cm	205.4g	1180
98			SB5	蔽石	砂岩	7.4cm	6.0cm	4.0cm	268.3g	1171
99	C-25		SB5	蔽石	安山岩	9.6cm	7.6cm	5.9cm	656.2g	1188
100	E-25		SB5	砥石	砂岩	9.8cm	10.2cm	7.1cm	671.7g	1179
101	C-25		SB5	分割剥片	頁岩	8.0cm	3.5cm	1.2cm	31.8g	1184
128	C-25		SB6	蔽石	安山岩	6.4cm	5.9cm	2.6cm	124.6g	1227
129	C-25		SB6	蔽石	安山岩	8.2cm	5.5cm	6.1cm	385.0g	1267
130			SB6	台石(凹石)	安山岩	18.6cm	9.9cm	5.0cm	1541.1g	1213
143	C-26		SB7	凹石	安山岩	12.4cm	8.4cm	7.3cm	1061.9g	1286
156			SB9	磨石石鏝	頁岩	3.3cm	2.5cm	0.6cm	5.4g	1400
174			SB13	磨石石鏝		4.1cm	9.0cm	4.1cm		総括3-106
179			SB17	舟形軽石製加工品	軽石	10.2cm	5.1cm	4.6cm		総括の119番
198			SB27	石皿	安山岩	19.2cm	14.6cm	7.8cm	2200.0g	2891
213			SB29	蔽石	安山岩	6.1cm	4.1cm	3.6cm	124.5g	2838
214			SB29	凹石	安山岩	9.2cm	8.5cm	6.0cm	697.0g	2815
215	B-29	9	SB29	凹石	安山岩	16.2cm	8.4cm	7.2cm	1182.8g	2845
270	B-25	9		凹石	安山岩	16.2cm	8.4cm	7.2cm	1183.5g	2091
378	B-26	9		両面加工石器	頁岩	8.95cm	7.1cm	1.1cm	66.5g	1023
379	C-25	9		楔形石器	安山岩	7.5cm	5.0cm	0.9cm	45.7g	1496
380	C-24	9		二次加工のある剥片	頁岩	9.0cm	5.8cm	1.3cm	93.7g	1449
381	C-24	9		削石	砂岩	9.0cm	6.9cm	1.3cm	102.3g	1493
382	C-24	9		砥石	頁岩	15.0cm	4.2cm	2.5cm	186.4g	1660
383	C-24	9		砥石	砂岩	8.7cm	2.9cm	2.9cm	126.9g	1778
384	C-25	9		砥石	砂岩	9.4cm	2.6cm	2.1cm	75.8g	1882
385		9		砥石片	砂岩	5.0cm	6.4cm	2.0cm	69.9g	2387
386	C-24	9		砥石	砂岩	9.4cm	7.4cm	5.2cm	442.6g	1647
387	C-25	9		蔽石	安山岩	7.9cm	4.7cm	3.5cm	196.7g	2519
388	C-24	9		凹石	安山岩	9.2cm	7.3cm	4.4cm	458.1g	1463
389	C-26	9		凹石	安山岩	10.2cm	7.5cm	3.6cm	446.6g	1000
390	C-25	9		蔽石	砂岩	9.8cm	6.8cm	5.3cm	113.5g	2166
391	B-25	9		凹石	安山岩	7.85cm	8.9cm	5.3cm	484.2g	2107
392	B-26	9		凹石	安山岩	6.8cm	7.5cm	4.9cm	320.6g	1020
393	B-26	9		凹石	安山岩	8.7cm	9.0cm	5.4cm	643.2g	1021
394	C-24	9		凹石	安山岩	8.7cm	8.8cm	5.8cm	692.6g	1451
395	B-25	9		凹石	安山岩	13.6cm	9.8cm	4.6cm	880.2g	1030
396	C-25	9		凹石	安山岩	11.6cm	10.3cm	5.0cm	931.4g	865
397	C-25	9		凹石	砂岩	11.0cm	10.3cm	5.6cm	1028.2g	1869
398		9		砥石	砂岩	8.0cm	9.8cm	7.0cm	844.4g	2816
399	B-26	9		台石	安山岩	17.4cm	12.2cm	5.4cm	1961.4g	1010
400	C-25	9		軽石製加工品	軽石	10.8cm	8.7cm	2.5cm	97.2g	1843
401		9		蔽石	安山岩	9.2cm	7.8cm	5.3cm	569.3g	1458
402	B-25	9		軽石製加工品	軽石	5.2cm	3.4cm	2.7cm	10.9g	一般
403		9		磨面をもつ軽石	軽石	8.4cm	5.3cm	5.5cm	65.8g	2346
404	B-26	9		磨面のある軽石製加工品	軽石	17.0cm	9.4cm	6.8cm	229.6g	979
426	C-24	9	SB1	穿孔のある軽石製加工品	軽石	9.0cm	8.4cm	5.2cm	83.2g	1463

第4章 VII区の調査成果

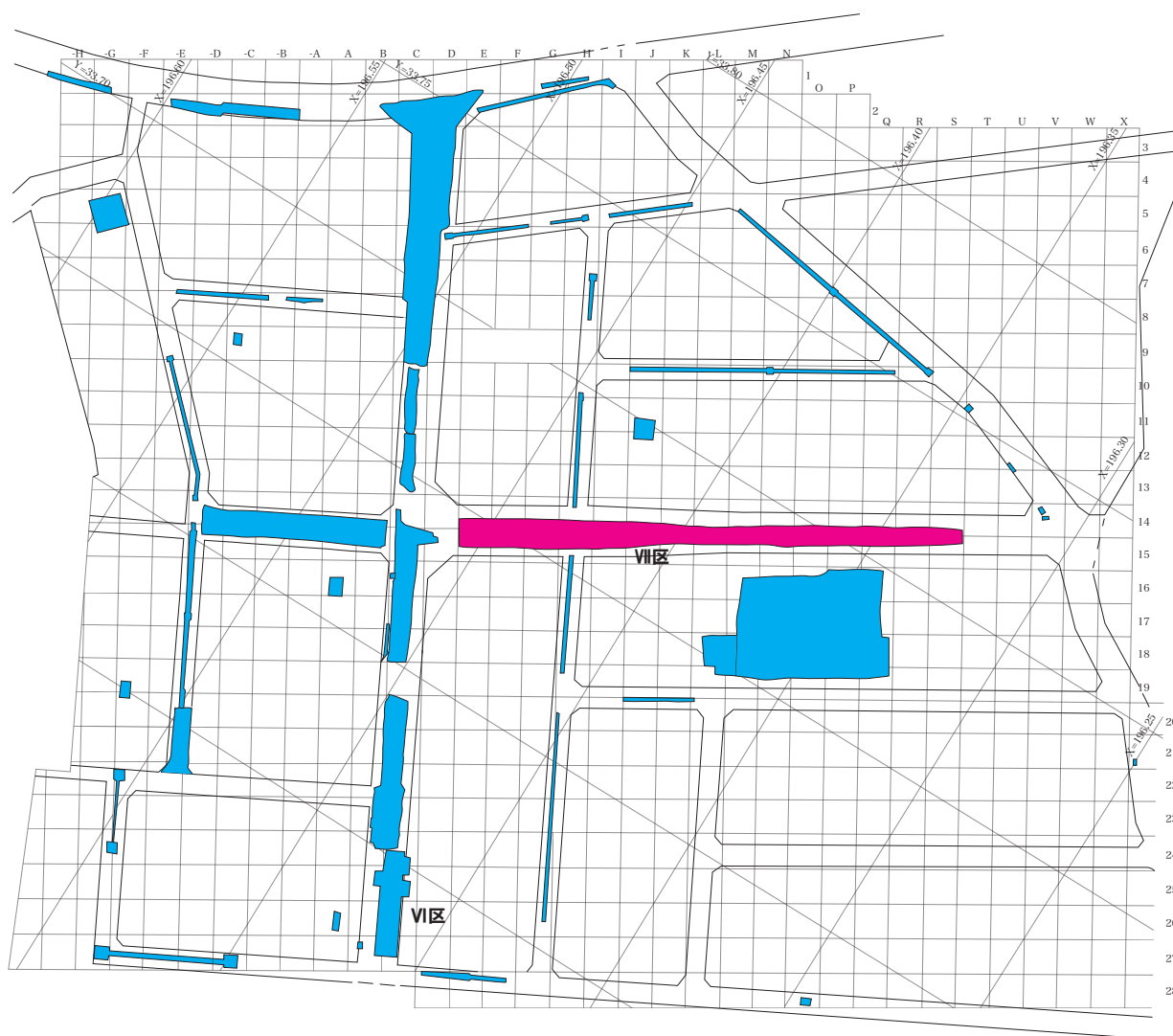
第1節 調査の概要

VII区の調査は昭和61年7月30日から昭和62年3月20日まで実施された。調査区は指宿駅西部土地区画整備事業に伴い、南北方向に新設される幹線道路予定地に設けられた(第117図)。

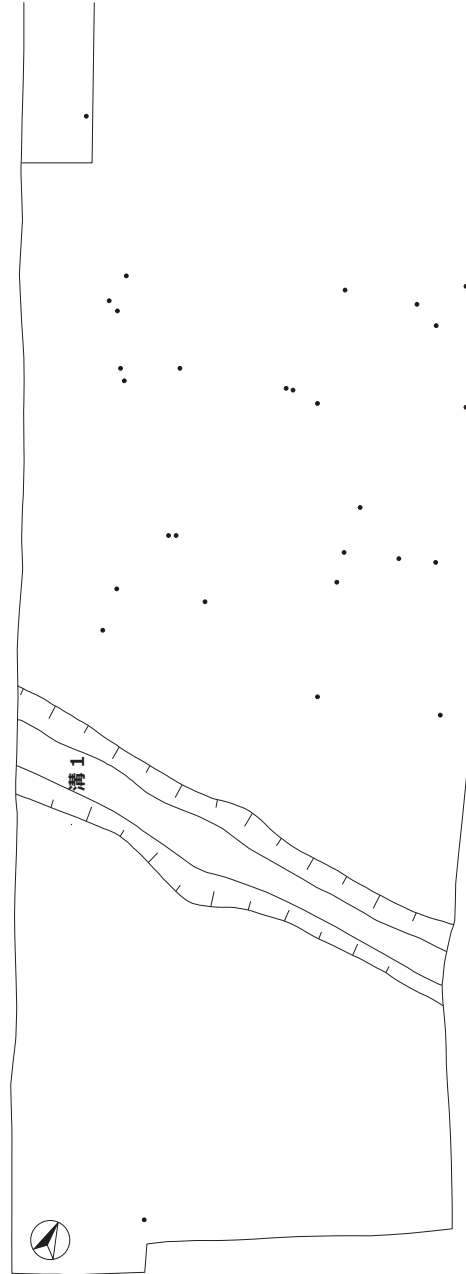
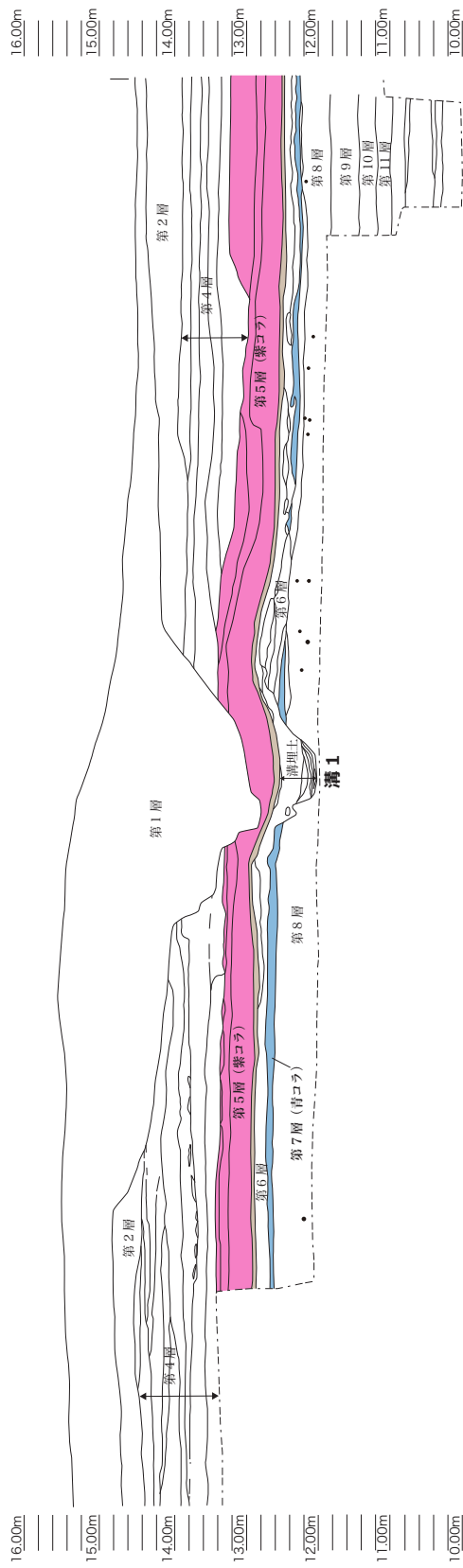
第2節 遺構

VII区において検出された遺構は、溝1、溝2、河川跡である(第118～120、136図)。

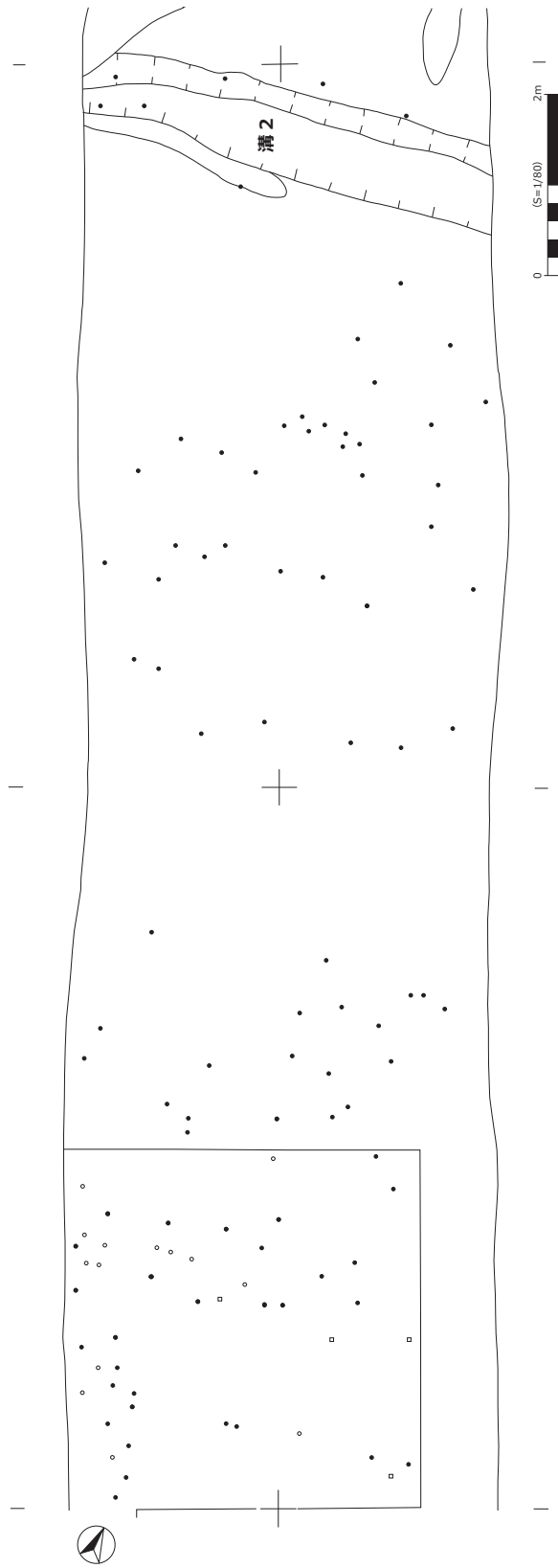
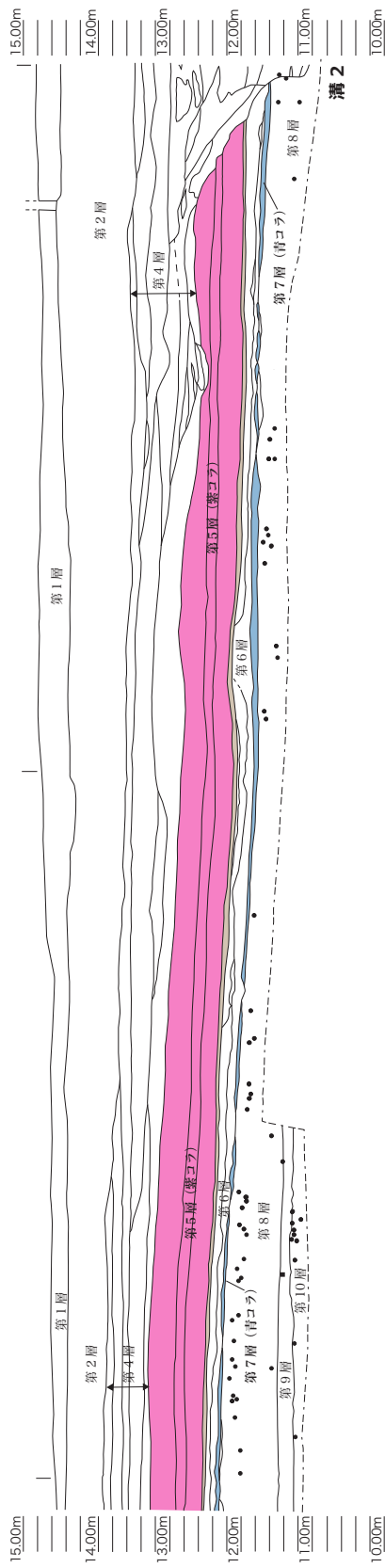
溝1は、第5層紫コラ火山灰層直下において、断面形状がレンズ状を呈した浅い溝状遺構として検出された。検出面での溝幅は約1.2m、深さ19cmであり、東西方向に設けられている。溝は、第6層中から掘削されたものとみられ、第7層青コラ火山灰層を掘り抜き、第9層に達し掘削され



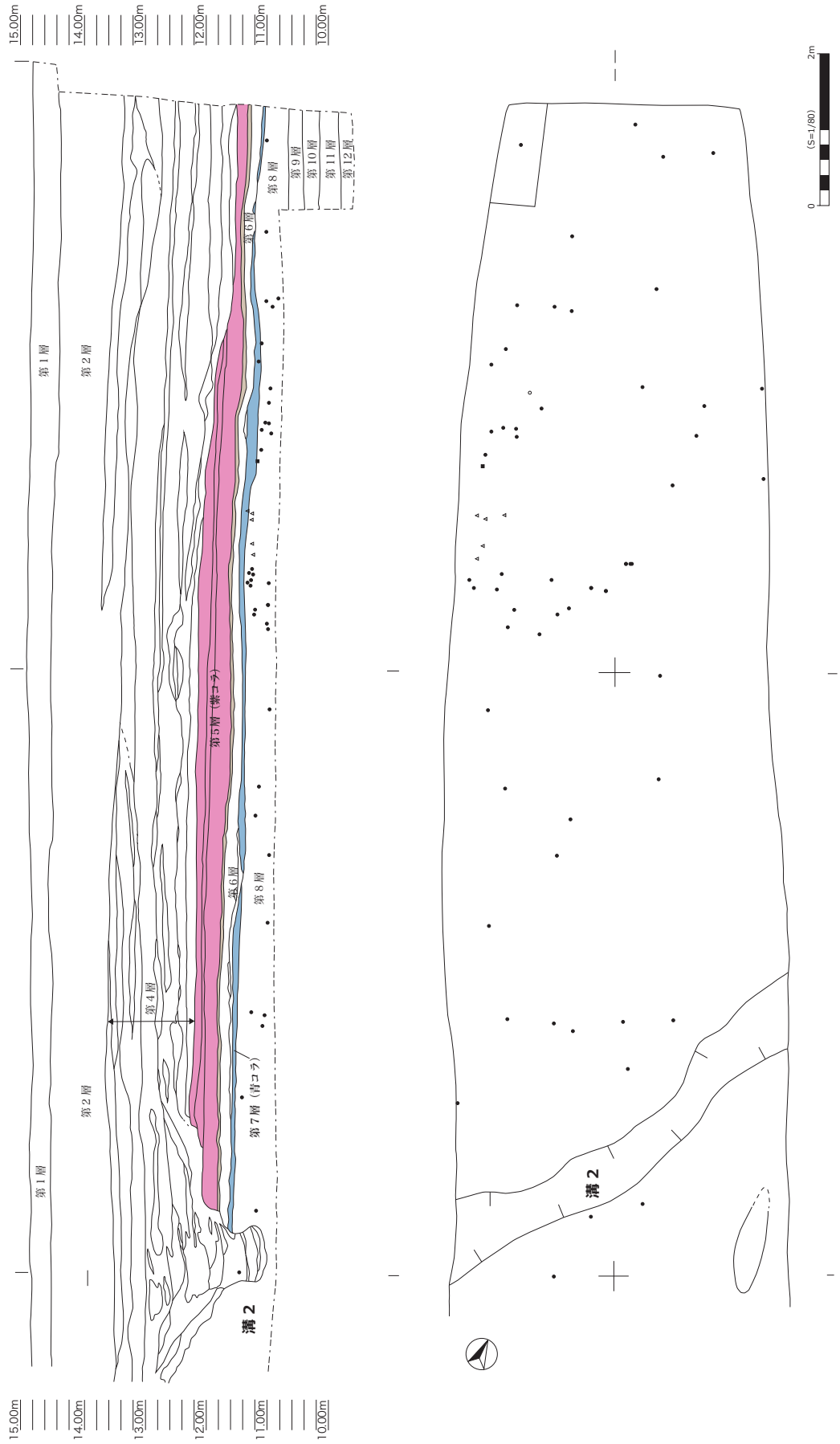
第117図 VII区の位置



第118図 VII区西壁土層断面図・平面図1



第119図 VII区西壁土層断面図・平面図2



第120図 VII区西壁土層断面図・平面図3



第121図 溝1出土遺物

ており、掘削当初の断面形はU字を呈し、深さ49cm程度であったものとみられる。溝の両外側の6層上面がかまぼこ状の高まりがみられ、西壁層位断面では北側において、幅95cm程度、高さ7cm程度の規模となる。この高まりの形成要因は、第6層中に薄い堆積層が複数形成された結果であることが見て取れる。層位断面においては、高まりの端部に青コラ火山灰ブロックがみられるため、溝の掘削の際の廃土を積み上げたことによって形成されたものとみら

れる。

一方、溝内の埋土堆積状況は下半分に青灰褐色シルト、軽石を含む砂層等の水成堆積物が確認でき、上半分には第6層上位層と同様の層序がまとまって入り込んでいる。溝掘削廃土上には第6層上位層が極めて薄く堆積しており、第6層上面に近い時期に掘削されたことが考えられるが、溝内下半が流水により埋もれた後に、第6層の上位層がまとまって入り込み、その後874年の開聞岳噴火で埋没したとみられる。

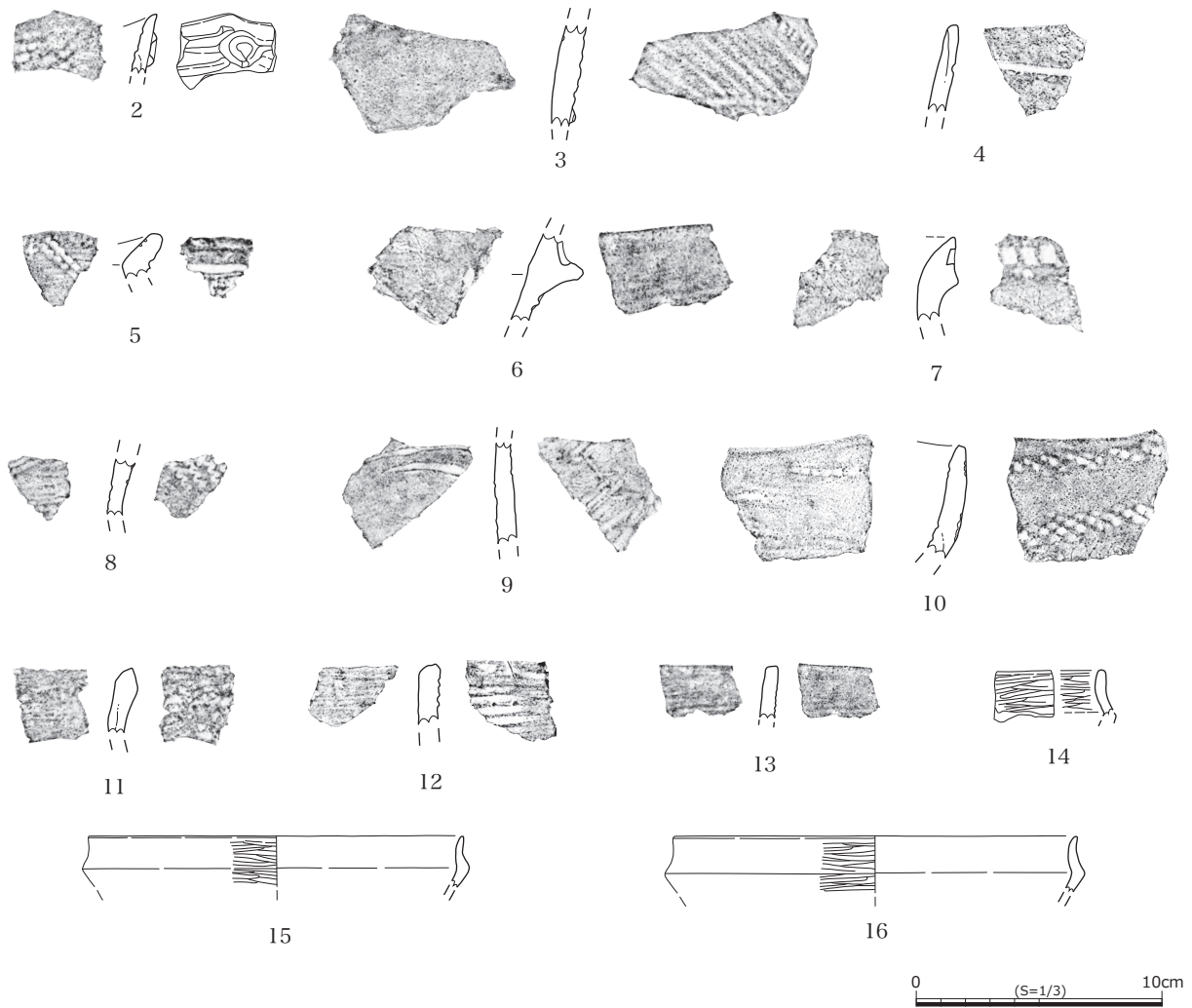
溝1の用途に関しては、Ⅶ区では同時期の遺構が溝1しか検出されていない状況であるが、隣接するⅨ区を斜めに横切って検出された河川跡に向かって伸びているようである。Ⅸ区の第6層中では、Ⅶ区により近い西半では道跡が複数条検出され、東半では密に設置された杭列複数条と道跡複数条が検出されているが、この段階での土地の用途は明確にはなっていない。続いて、第6層上位から874年（C期）において畠が造営されている。特にⅨ区西半部分の畠はⅦ区にむかって造営されていることは確実とみられる。Ⅸ区の畝方向が溝1の方向と近似していること（第136図）に注目したい。Ⅶ区の層位断面図（第118～120図）を見る範囲では、第6層上面に部分的に微妙な凹凸がみられるが、Ⅸ区西半の畠跡の畝状況に類似している。これは凹凸が極めて小さく、休閒畠とみられているものであり、Ⅶ区の第6層上面の微妙な凹凸が畠の畝痕跡であるなら、溝1は畠地に伴う施設の可能性が出てくる。なお、溝1の底部レベルはⅨ区河川底部には届かないことから導水施設とは考えにくい。

溝2は、第4層上位から掘削されており、中近世に帰属するものとみられる。

河川跡は、指宿駅西部土地区画整備事業に伴う発掘調査区のうち、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅶ区、Ⅸ区で検出されたものである。河川の流下方向は蛇行しており、Ⅰ区東端に向け北方向へ流下したが、Ⅱ区西端で東へ方向を変えⅢ区へと流下し、Ⅲ区東端付近で北東へ方向を大きく変え、Ⅳ区西端をかすり、Ⅶ区南端で北西へ方向転換する。さらに、Ⅶ区中央付近で北に方向を変え、Ⅸ区を斜めに流下している。河川の埋没課程に関しては、火山灰を主体とする1度目の土石流で一旦埋没したが、その後発生した2度目の土石流によりV字に抉られ埋没している。2度目の土石流堆積物は大小の礫を多く含んでいることが知られているが（中摩ほか2016）、本調査区での詳細は不明である。

〈文献〉

中摩浩太郎・鎌田洋昭・恵島英子 2016 『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（56）



第 122 図 縄文時代出土遺物

第 3 節 縄文時代の遺物

2から16は縄文土器である。

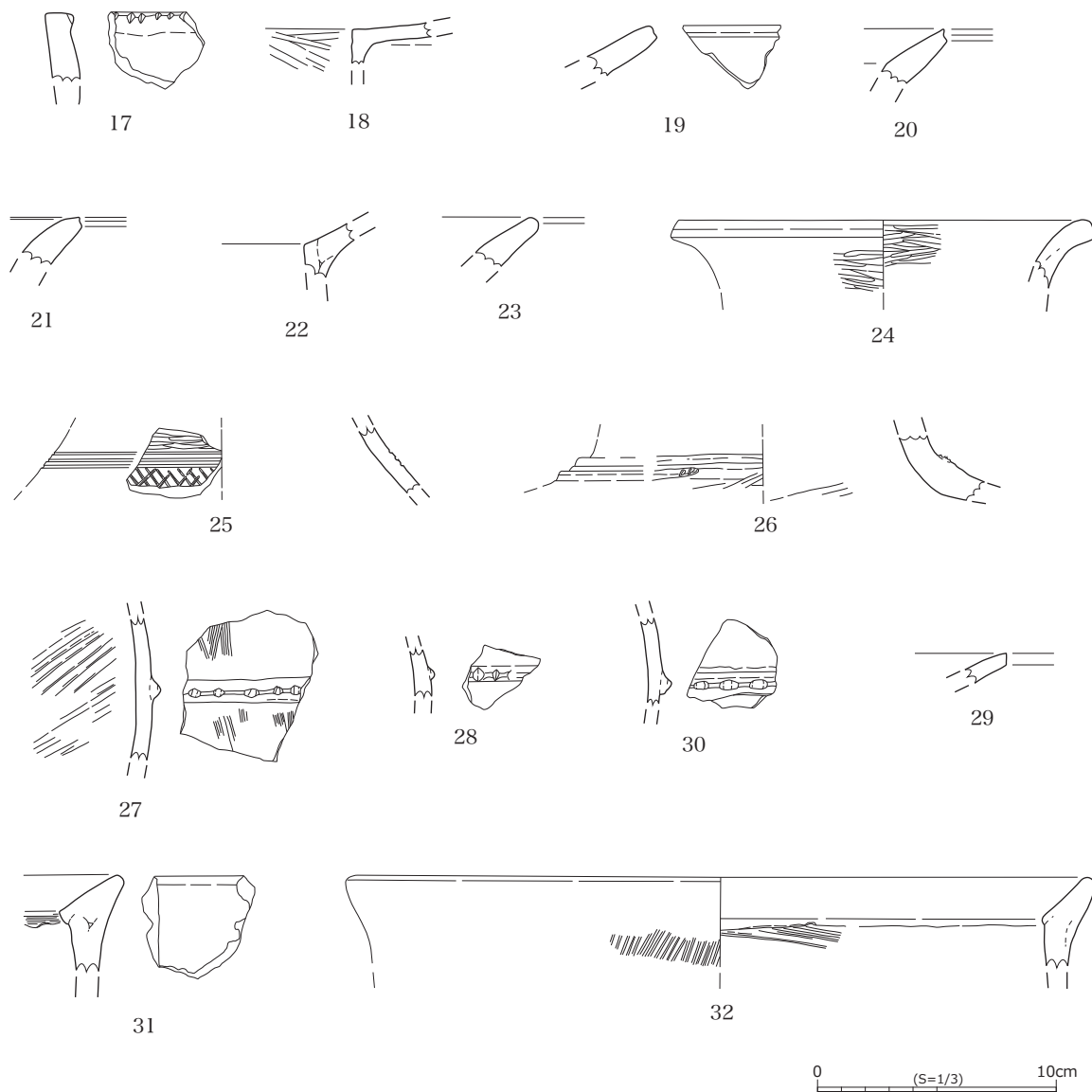
2は深鉢の口縁部である。波状口縁であり、やや外傾する形態を呈する。粘土紐を2条巡らせ、波頂部には紐を円形に貼り付ける文様を施す。

3は胴部である。粘土紐を巡らせ、貝殻条痕が施される。

4～12は縄文時代後期に位置づけられる土器である。

4・5は指宿式土器に位置づけられる。4は深鉢の口縁部である。棒状工具による沈線文を施す。内外面ともナデ調整である。5は鉢の口縁部である。肥厚させ、逆「く」の字状に屈曲する形態を呈する。外面には沈線文、内面には二枚貝の貝殻腹縁部による幾何学文様を施す。外面はナデ調整、内面は貝殻条痕のちナデ調整である。

6・7は市来式土器に位置づけられる深鉢の口縁部である。断面三角形状に肥厚させる形態を呈し、外形は「く」の字状に屈曲する。6は屈曲部の上下に、二枚貝の貝殻腹縁部による連続刺突文や棒状工具による連点文を施す。ナデ調整である。7は口唇部下に棒状もしくはへう状工具による



第123図 弥生時代出土遺物

連点文を施す。ナデ調整である。

8～10は丸尾式土器に位置づけられる深鉢の口縁部である。8・9はやや外反する形態を呈する。二枚貝の貝殻腹縁部による連続刺突文を施す。内面はナデ調整，外面は貝殻条痕である。10は波状口縁であり，緩く「く」の字に屈曲する形態を呈する。口唇部下と屈曲部に二枚貝の貝殻腹縁部による連続刺突文を施す。内面はナデ調整，外面は貝殻条痕である。

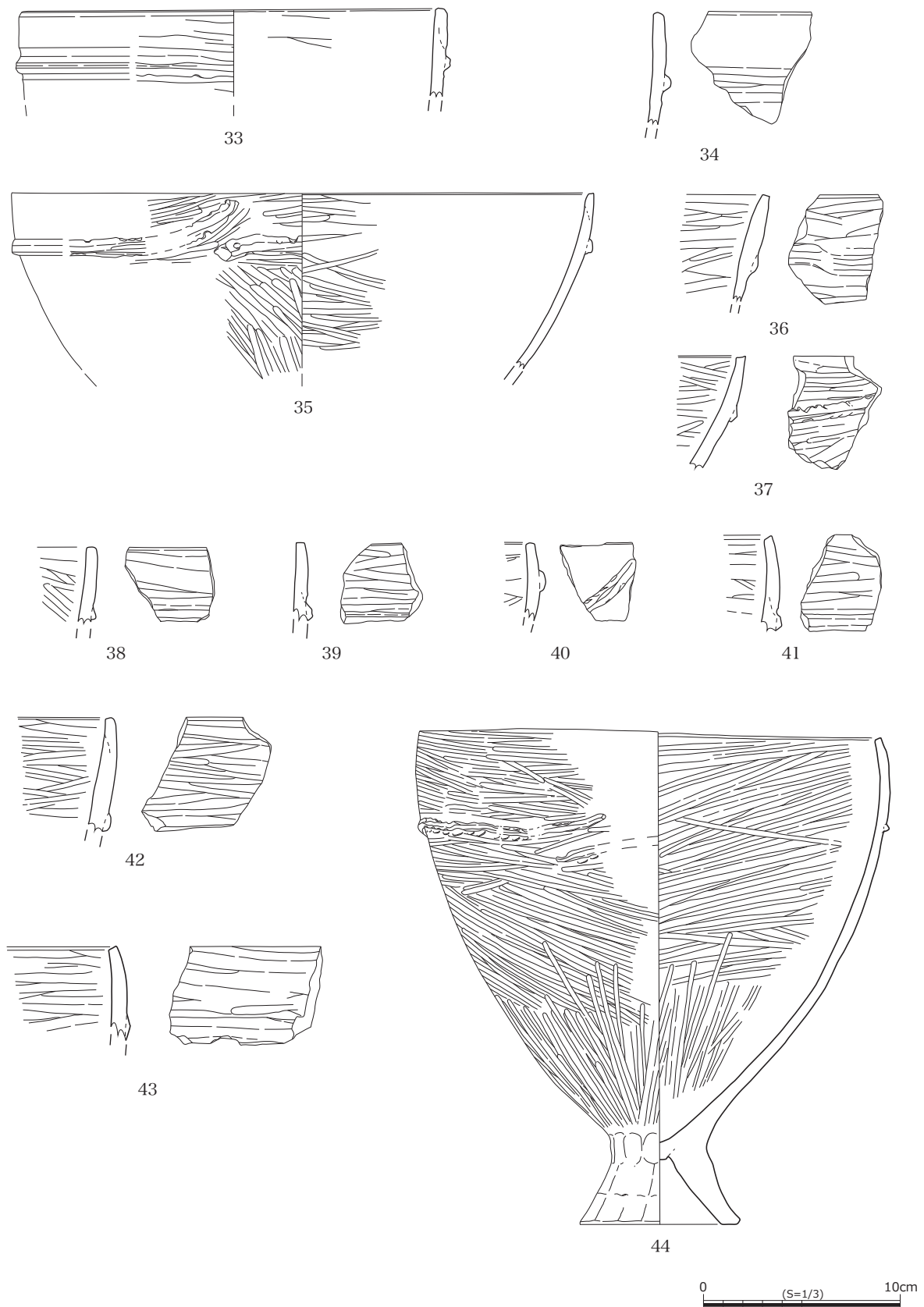
11は深鉢の口縁部である。口唇部は肥厚させ三角形状に仕上げる。

12は深鉢の口縁部である。口唇部はやや平らに仕上げる。調整は貝殻条痕である。

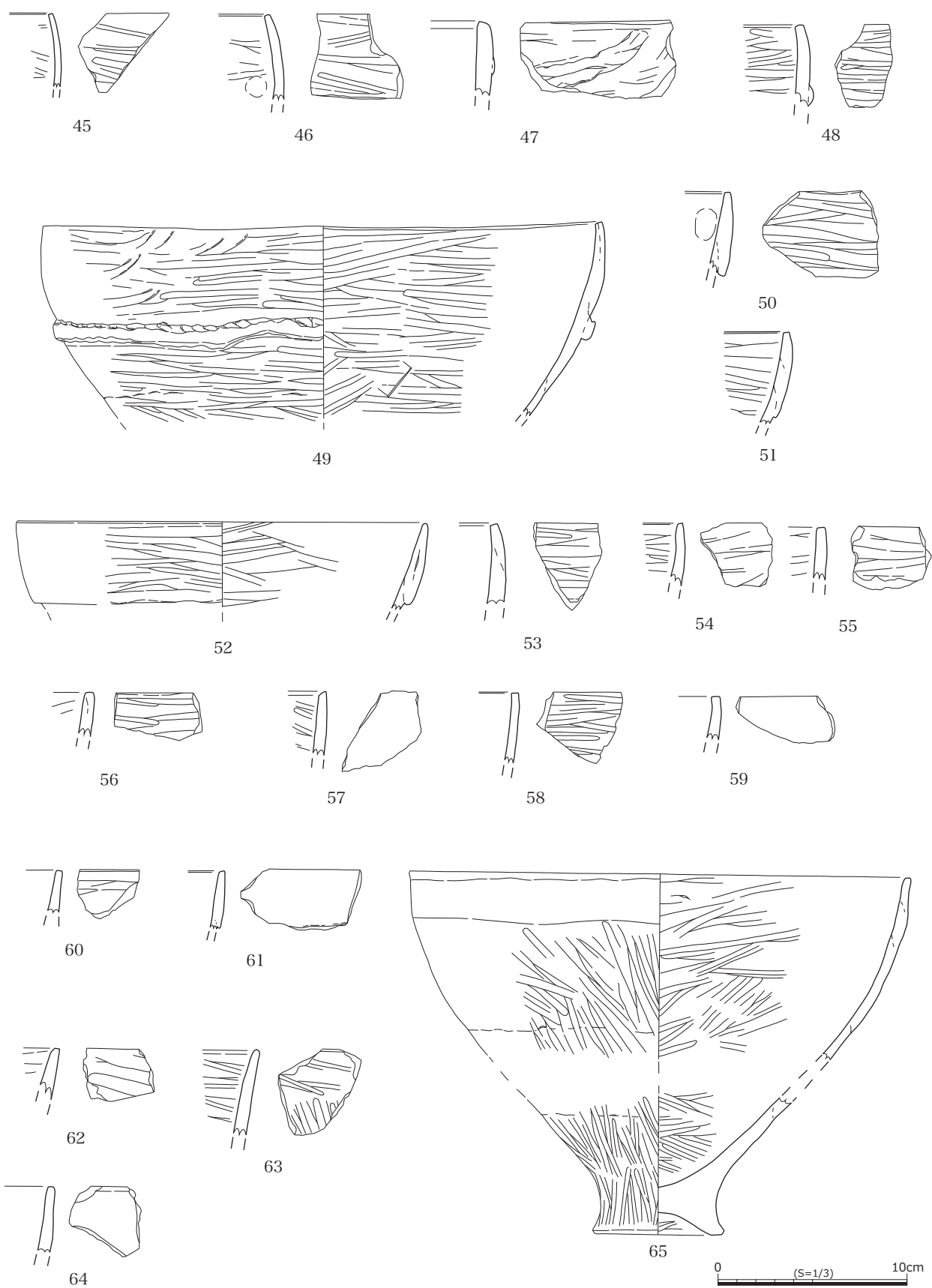
13は浅鉢の口縁部である。直立し口唇部はやや平らに仕上げる。調整は貝殻条痕のちミガキを施す。

14～16は，刻目突帯文をもつ深鉢と共伴して出土する浅鉢に類似する資料であるが，いずれも小片のためどの型式に属するものか判断が難しい。

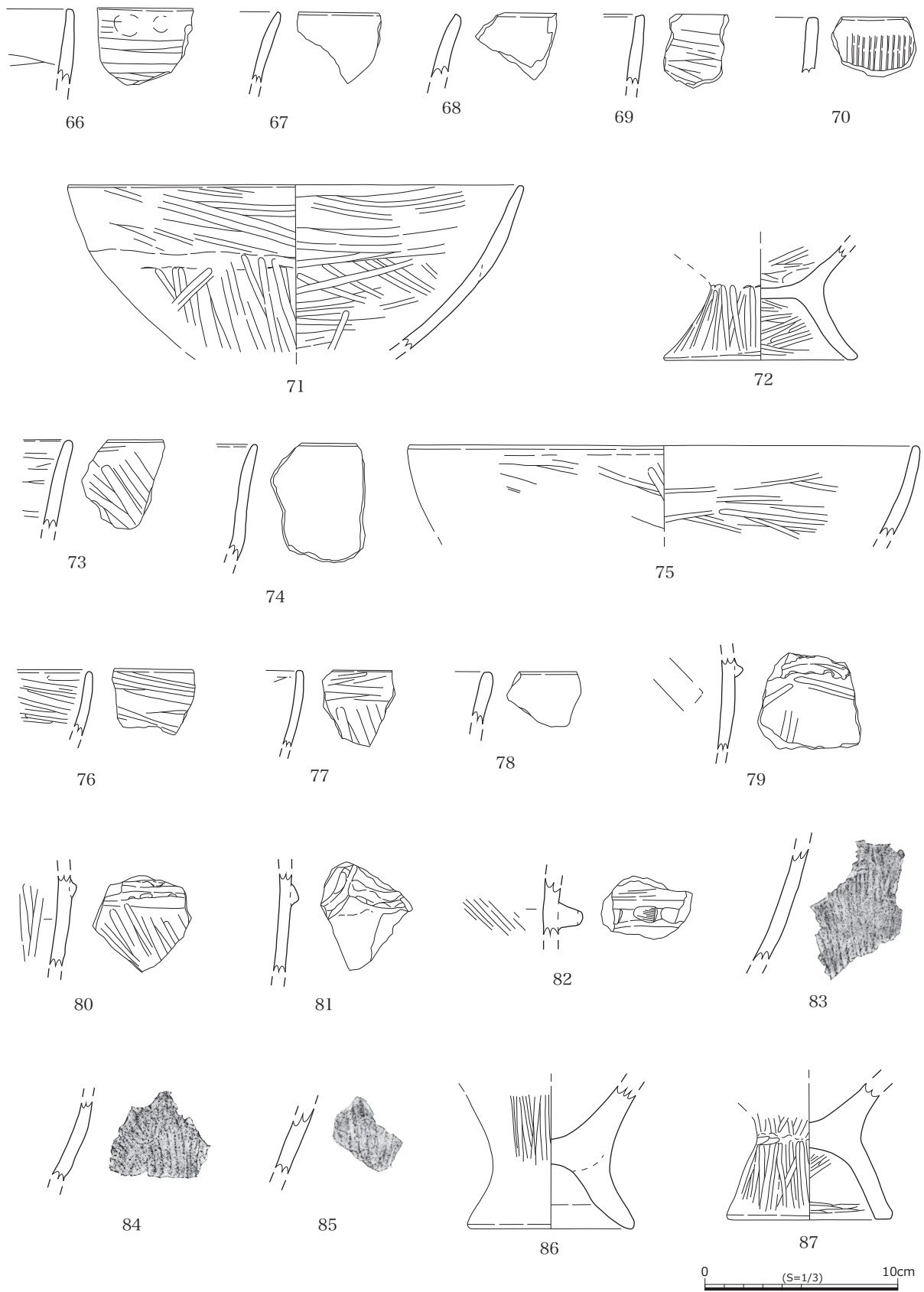
14は精製浅鉢の口縁部～頸部である。頸部は短く口縁端部はやや外反する形態を呈する。内外面ともミガキ調整を施す。15・16は精製浅鉢の口縁部～胴部である。胴部で強く屈曲し，頸部は



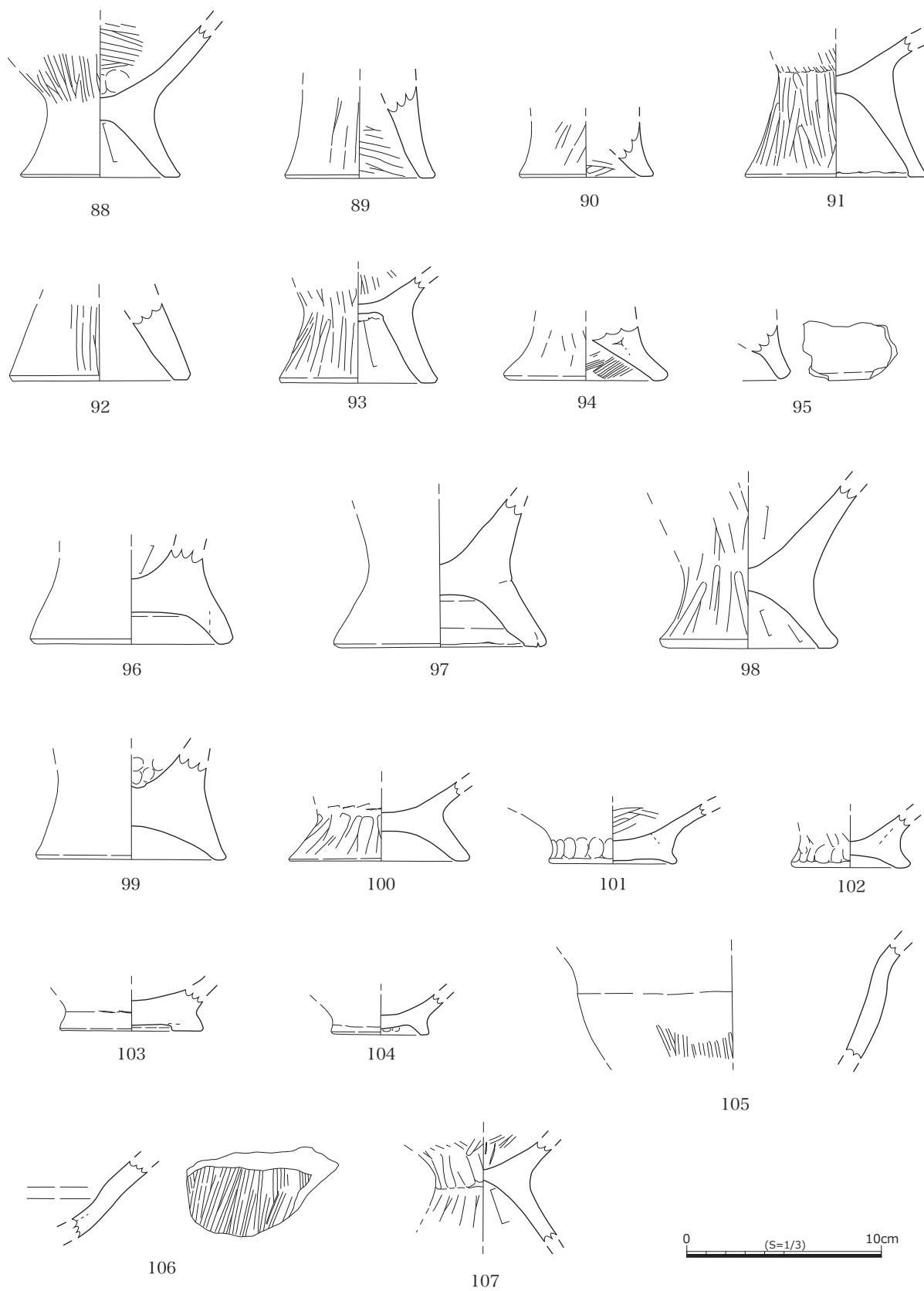
第124図 古墳時代出土遺物1



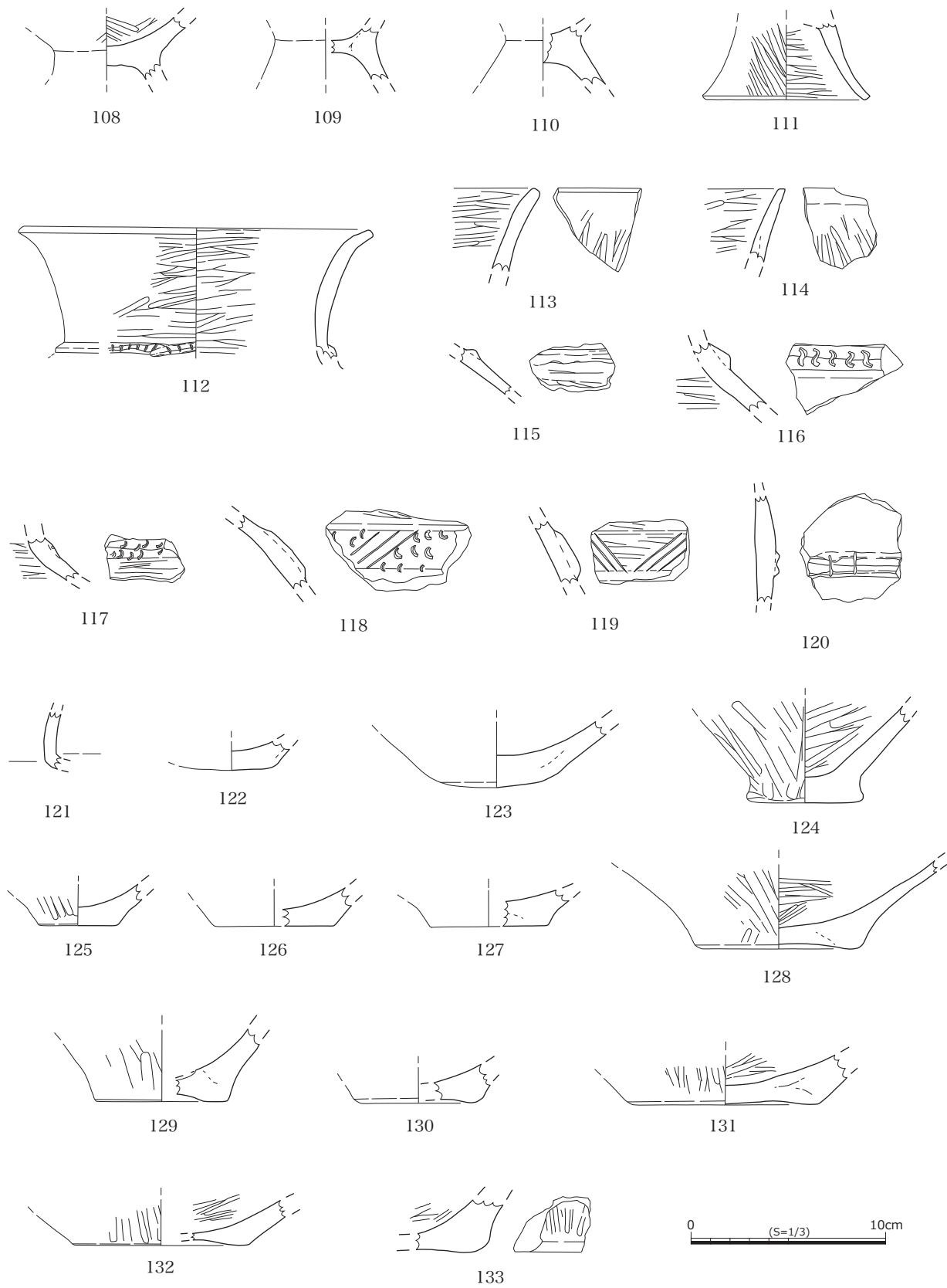
第 125 図 古墳時代出土遺物 2



第126図 古墳時代出土遺物3



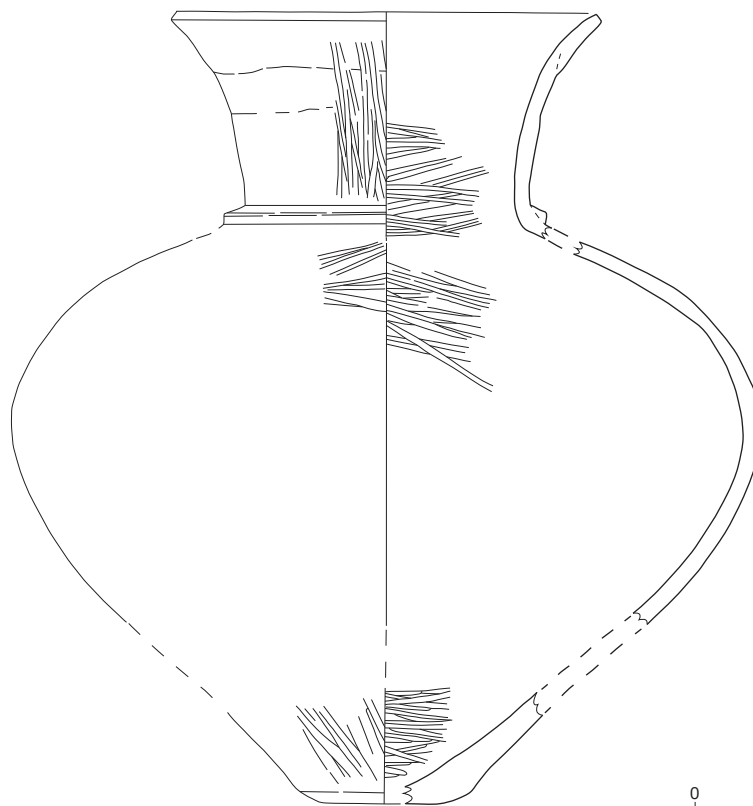
第 127 図 古墳時代出土遺物 4



第 128 図 古墳時代出土遺物 5



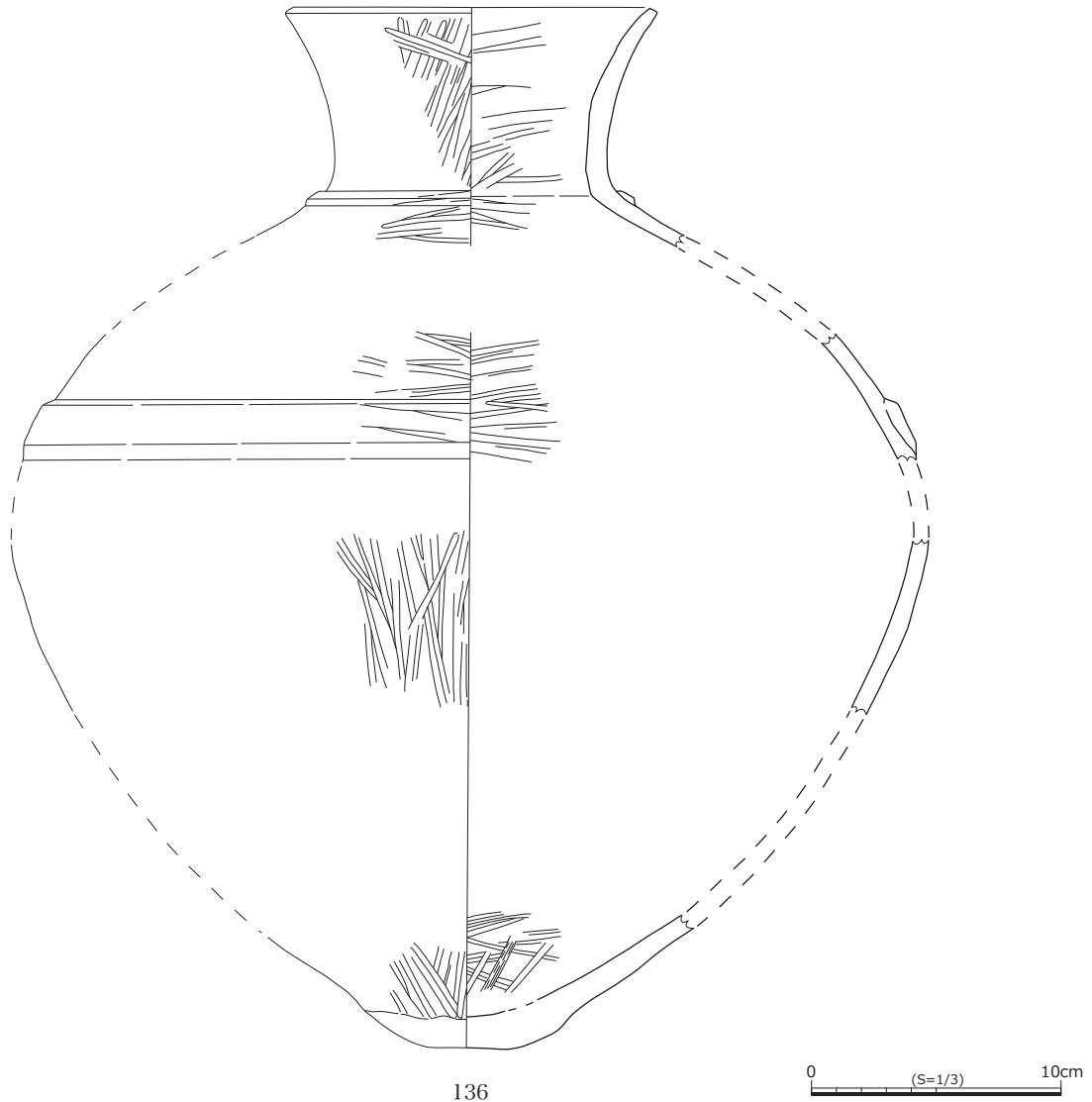
134



135

0 (S=1/3) 10cm

第 129 図 古墳時代出土遺物 6



第130図 古墳時代出土遺物7

短く口縁部にかけて直立し、端部はやや外反する形態を呈する。調整は内外面ともミガキ様ナデである。

第4節 弥生時代の遺物

17から23は甕である。17は口唇部に刻目が施される。

18は逆L字に屈曲する頸部で、内面には強い稜線がみられる。

19から21は口縁部で、先細りする形態である。口唇部はM字にくぼむ。22は、くの字に屈曲する頸部で、口縁部は欠損のため不明である。内面には強い稜線がみられる。23は口唇部が丸みをもつ甕の口縁部である。

24から30は壺である。24は外反する形態の壺口縁部で、復元径で17.2cmを測る。口唇部はわずかにくぼみがみられる。内外面ともミガキ調整である。

25・26は壺の頸部で、26は頸部に三条の沈潜とその下部に鋸歯文が施される。

26 は屈曲部に二条の貼り付け突帯がみられる頸部である。二条のうち的一条は突帯端部が見える。

27 から 29 は壺の胴部である。いずれも一条の突帯が貼り付けられ、その上から刻目が施される。刻目原体は木製工具と考えられる。

31 と 32 は甕の口縁部から頸部で、頸部内面には突出部をもつ。32 は復元径 30.5cm を測り、口縁部はわずかに受け口状になる。内面はハケ調整、外面はタタキ調整である。

第5節 古墳時代の遺物

33 から 111 は甕である。33 は直口する形態の甕の口縁部で、口径は復元径で 21.4cm を測る。口縁部下には一条の貼付け突帯がみられる。内外面ともミガキ調整である。

35 はバケツ状の形態を呈する甕である。口径は復元径 29.6cm を測り、口唇部内面には稜線がみられる。口縁部下には一条の絡縄突帯が貼り付けられるが、接合しない。不接合部を正面にした場合、左側が右上方へのびる。内外面ともミガキ調整である。

36 から 43 は甕の口縁部片である。いずれも口縁部下に一条の絡縄突帯をもつ形態で、内外面ともミガキ調整である。

44 は完形の甕である。口縁部は内湾する形態で、口径は 23.5cm を測る。口唇部はコの字状で、内面に稜をもつ。口縁部下には一条の絡縄突帯をもつ。この突帯は接合せず、不接合部を正面にした場合、左側の突帯が右上方へ、右側の突帯が左下方へのびる。脚部はハの字状に開き、接地部には面をもつ。内外面ともミガキ調整で、胴下部には縦方向のミガキ調整がみられる。

45 から 48 は甕の口縁部片である。47 は口縁部下に一条の貼付け突帯が見られ、口唇部近くに突帯端部がのびている。

49 は広口に広がる甕の口縁部から胴部である。口径は復元径 29.6cm を測り、口縁部はやや肥厚する。口縁部下には一条の絡縄突帯が貼り付けられる。内外面ともミガキ調整が施される。

50 から 63 は甕の口縁部片である。いずれも内外面ともナデ調整が見られる。50 から 52 の口縁部は肥厚する形態を呈し、50 についてはやや垂下する。

65 はバケツ状の形態を呈する鉢である。口縁部は直口気味に立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。口径は 26.5cm、器高 19.1cm を測る。脚部は短く開く形態を呈し、脚部径 6.7cm、脚部高 1.2cm、底径 6.1cm を測る。内面は横方向のミガキ調整、外面は縦方向のミガキ調整がみられる。

71 は甕もしくは鉢の胴部から口縁部である。口縁部付近はわずかに肥厚し、接合痕がみられる。口径は復元径 23.7cm を測る。内外面ともミガキ調整である。

72 は甕の脚部で、ハの字に開く形態を呈する。脚部径 10.2cm、脚部径 3.9cm、底径 4.2cm を測る。外面は縦方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整がみられる。

75 は甕の口縁部である。口径は復元径 26.7cm を測る。内外面ともミガキ調整がみられる。

79 から 82 は甕の突帯部である。79 から 81 は絡縄突帯が貼り付けられ、81 は不整合部がみられる。不整合部を正面にした場合、左側が右上方へのびる。

86 から 104 は甕の脚部である。86 はハの字に開く脚部形態で、脚部径 8.7cm、脚部高 3.9cm、底径 6.0cm を測る。外面にはミガキ調整がみられる。

87 は脚部径 8.4cm、脚部高 4.2cm、底径 5.1cm を測る。やや踏ん張る形に開く脚部形態で、接地部には面をもつ。内外面ともミガキ調整がみられる。

88は脚部径8.2cm、脚部高3.5cm、底径5.5cmを測る。直線的に開く脚部形態を呈する。

89は脚部径7.6cmを測る。内外面ともミガキ調整である。

90は短く開く脚部形態を呈し、脚部径6.8cmを測る。内外面ともミガキ調整がみられる。

91は直線的に開く脚部形態で、脚部内面はドーム状を呈する。脚端部は接地面をもち、内面にわずかに突出部をもつ。脚部径9.3cm、脚部高4.4cm、底径5.9cmを測る。内外面ともミガキ調整である。

93はハの字に開く脚部形態で、脚天井部は平坦面をもつ。脚部径8.0cm、脚部高3.6cm、底径5.6cmを測る。内外面ともミガキ調整である。

94は脚部径7.9cmを測る。短くハの字に開く脚部形態で、断面には接合痕がみられる。

96は短く開く脚部形態で、脚部径10.0cm、脚部高2.5cm、底径8.0cmを測る。

97はやや大型の脚部で、脚部径11.0cm、脚部高3.5cm、底径7.3cmを測る。脚端部と脚接合部に接合痕がみられる。脚天井部形態はゆるやかなドーム状である。

98は直線的に開く脚部形態で、脚部径9.2cm、脚部高3.7cm、底径6.7cmを測る。外面はミガキ調整で、内面は工具ナデ調整がみられる。

99は先細りする脚部形態で、脚部径9.9cm、脚部高3.0cm、底径7.8cmを測る。脚部形態はドーム状である。

100は直線的に開く脚部形態で、端部には接地面をもつ。脚部径9.9cm、脚部高2.1cm、底径6.5cmを測る。外面にはミガキ調整がみられる。

101はやや上げ底状となる底部形態で、くびれをもつ。底部径6.6cmを測り、端部は丸みをもつ。胴部にかけて大きく開く形態を呈する。

103は高台状になる底部形態で、端部には幅1.5cmの接地面をもつ。

105は小型甕の頸部から胴下部である。胴部外面はミガキ調整、頸部外面はナデ調整がみられる。

112から136は壺である。112は壺の頸部から口縁部である。口径17.8cmを測り、頸部からゆるやかに外反する形態を呈する。頸部には一条の刻目突帯が施される。

115から117は壺の頸部で一条の貼付け突帯をもつ。116は半裁竹管をあわせた逆S字の刻目、117は逆C字の半裁竹管による刻目が施される。

118から119は幅広突帯である。118は肩部に施された幅広突帯で、三条の鋸歯文の間にC字形の半裁竹管文が充填されるものである。

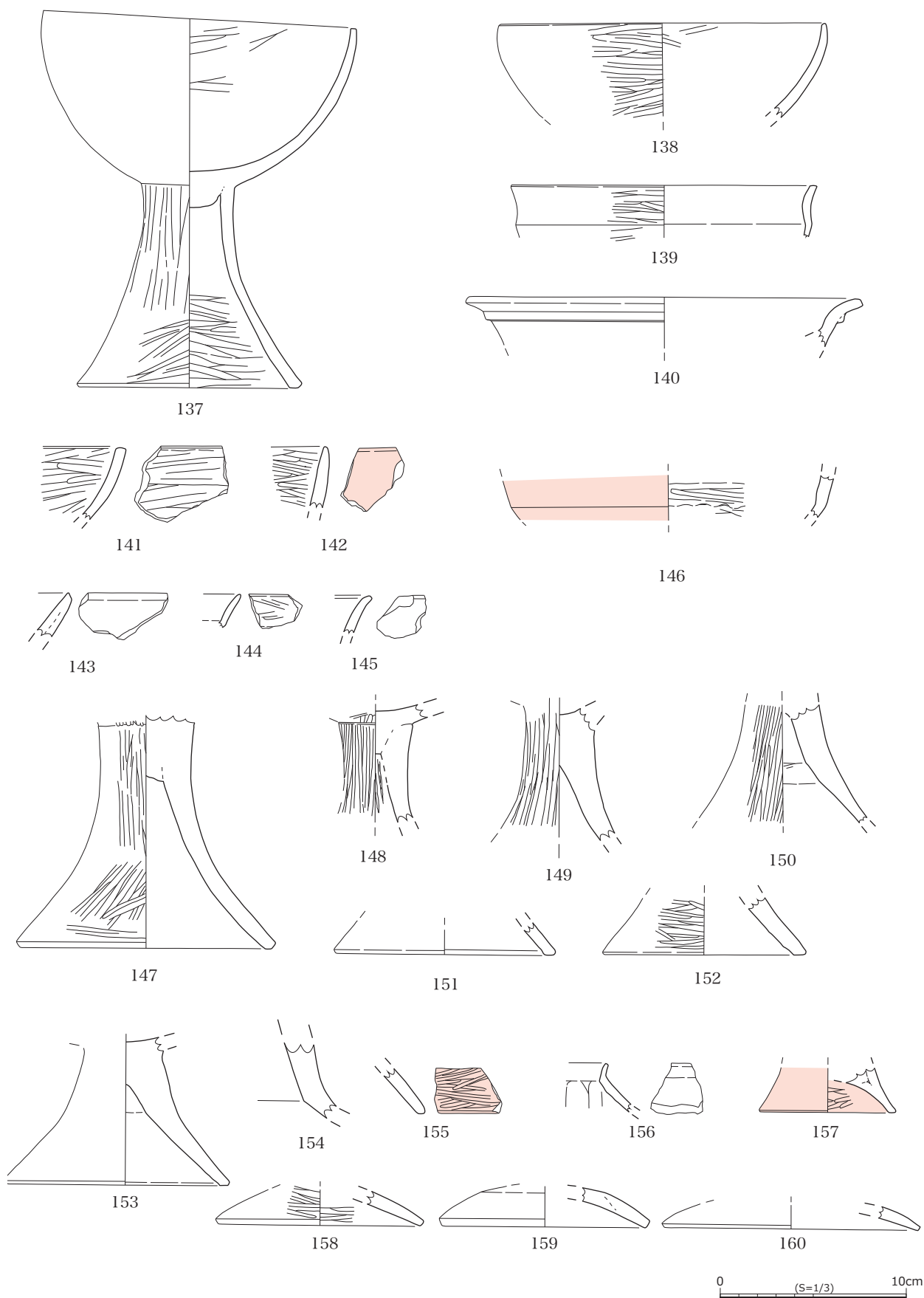
119は三条の鋸歯文が施された幅広突帯である。

134は脚台状の底部を有する壺である。口径15.0cm、器高30.7cm、底径は6.3cm、脚台高0.9cmを測る。胴部最大径がやや下方にあり、27.0cmを測る。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がる。頸部外面調整はミガキ調整、胴部外面は斜方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整が施される。

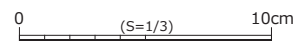
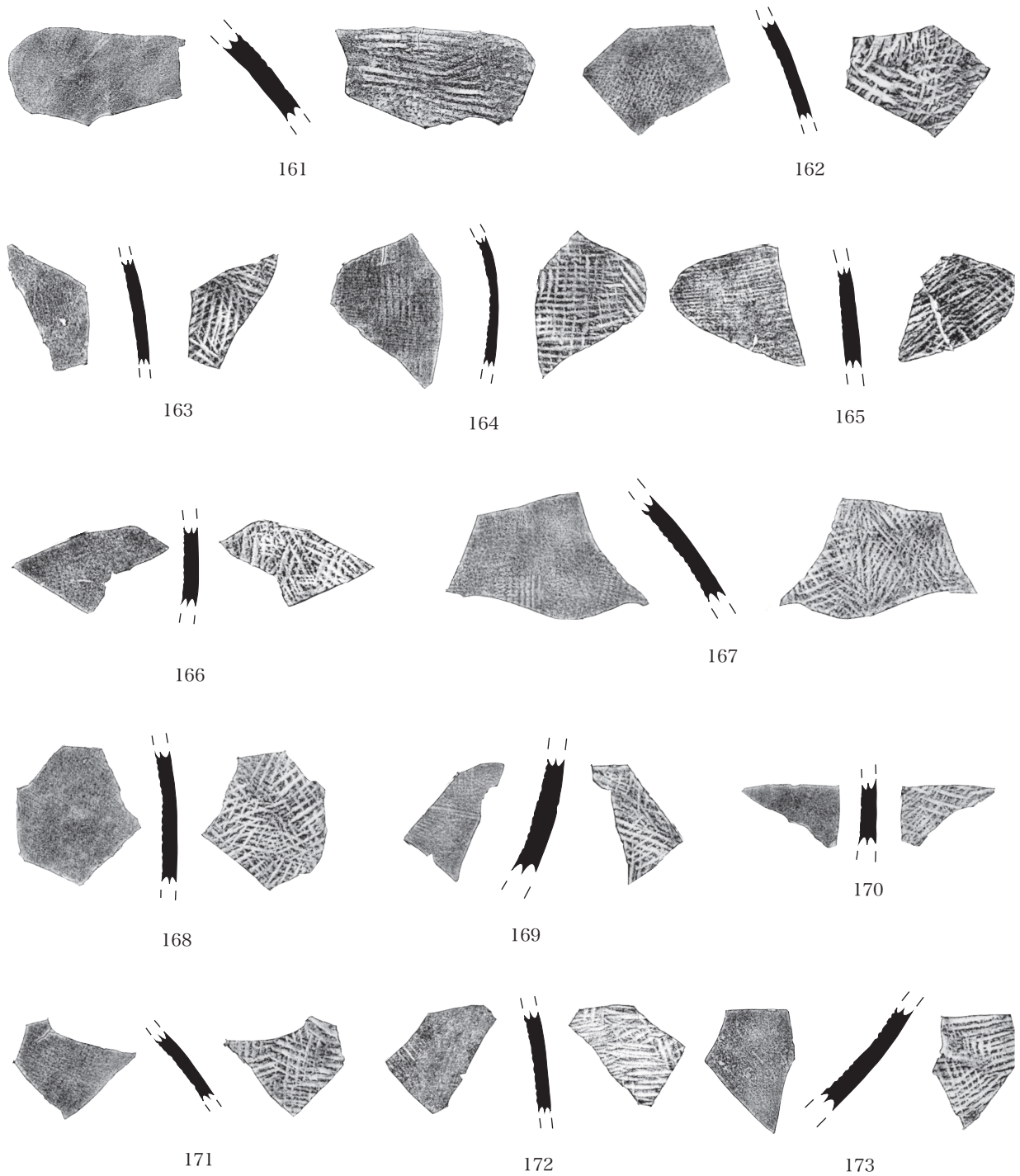
135は胴部が大きく張る壺で、頸部には一条の貼付突帯をもつ。口径16.7cm、器高31.4cm、底径4.7cmを測る。胴部最大径は29.8cmを測る。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がり、口唇部はわずかに肥厚する。内外面ともミガキ調整がみられる。

136は底部がやや丸みをおびる大型の壺で、胴部と頸部に貼り付突帯を有する。口径14.3cm、器高341.8cm、底径3.3cmを測り、底部にはわずかに平坦面がみられる。胴部には所謂幅広突帯が施されるが、無文である。胴部最大径は、幅広突帯直下にあり、36.0cmを測る。内外面ともミガキ調整がみられる。

137から160は高杯である。137は椀形の杯部をもつ高杯で、口径16.9cm、器高19.7cm、脚



第 131 圖 古墳時代出土遺物 8

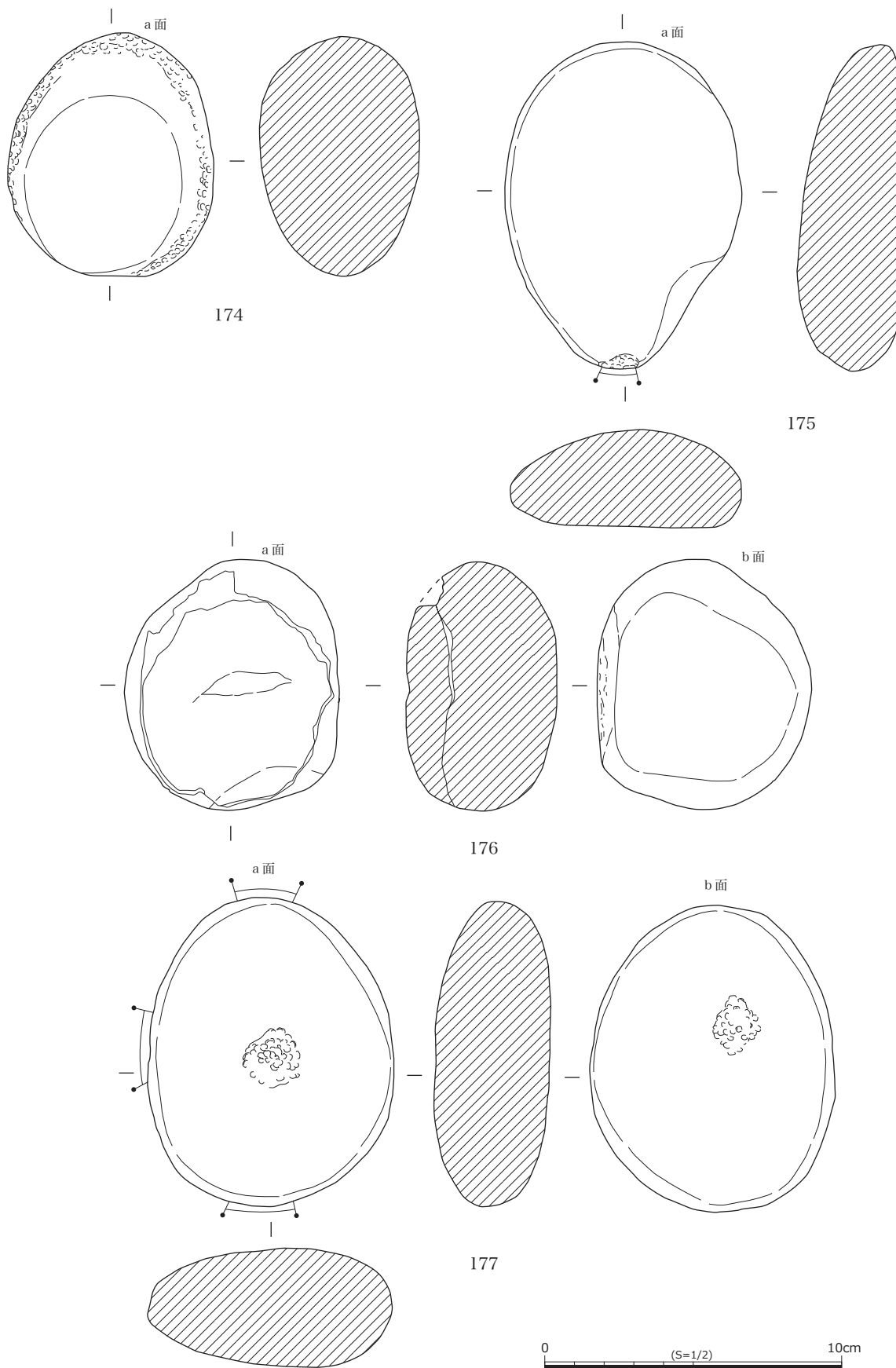


第132図 古墳時代出土遺物9

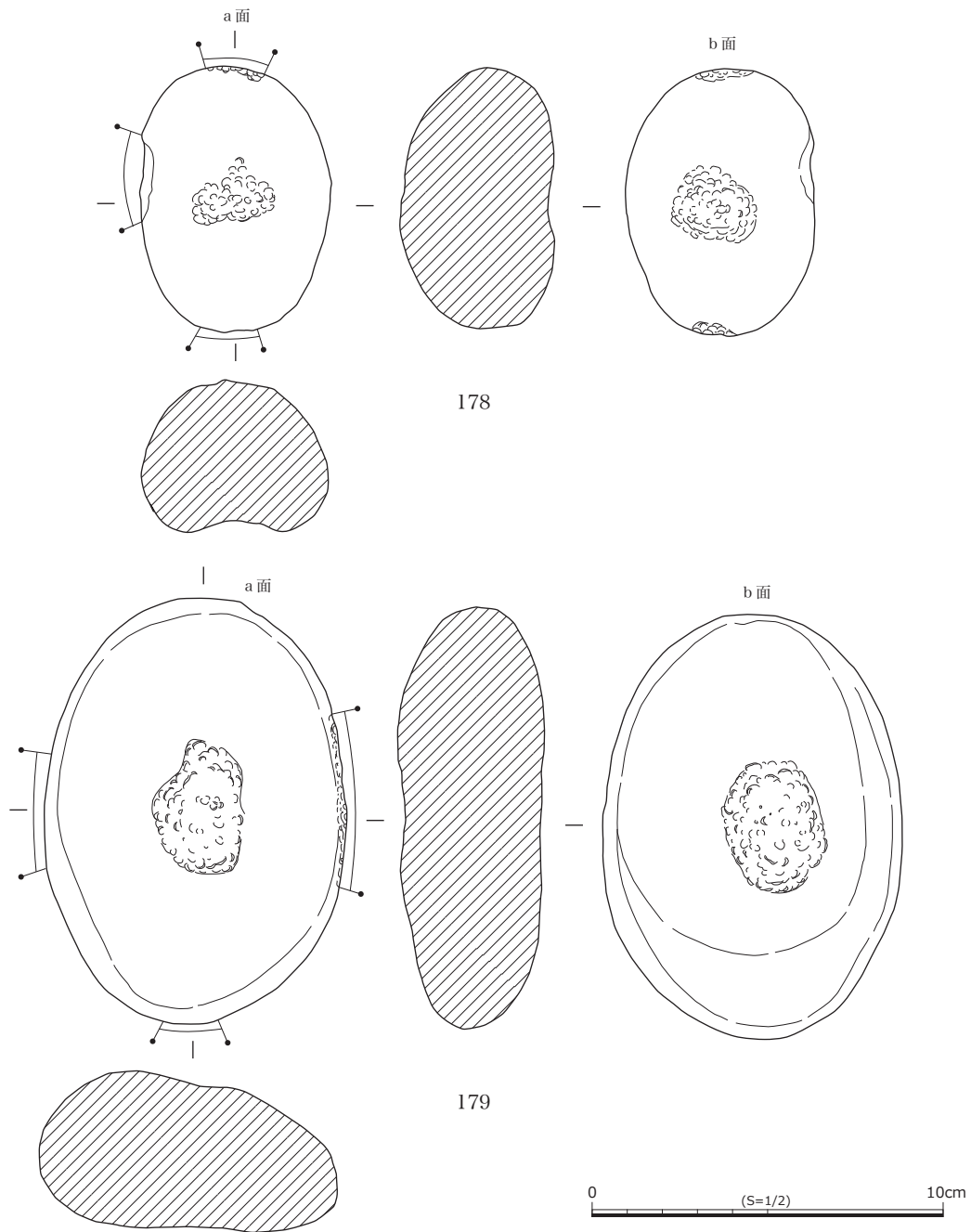
接合部径 4.8cm, 脚部径 12.0cm, 脚部高 10.8cm を測る。脚部はハの字に広がる形態である。内外面ともミガキ調整が施される。

138 は高杯の杯部で, 口径 17.6cm を測る。杯部形態は碗状を呈し, 内外面ともミガキ調整がみられる。

147 は高杯の脚部でハの字に開く。脚部径 13.5cm, 脚部高 12.3cm を測る。外面はミガキ調整



第 133 圖 古墳時代出土遺物 10



第 134 図 古墳時代出土遺物 11

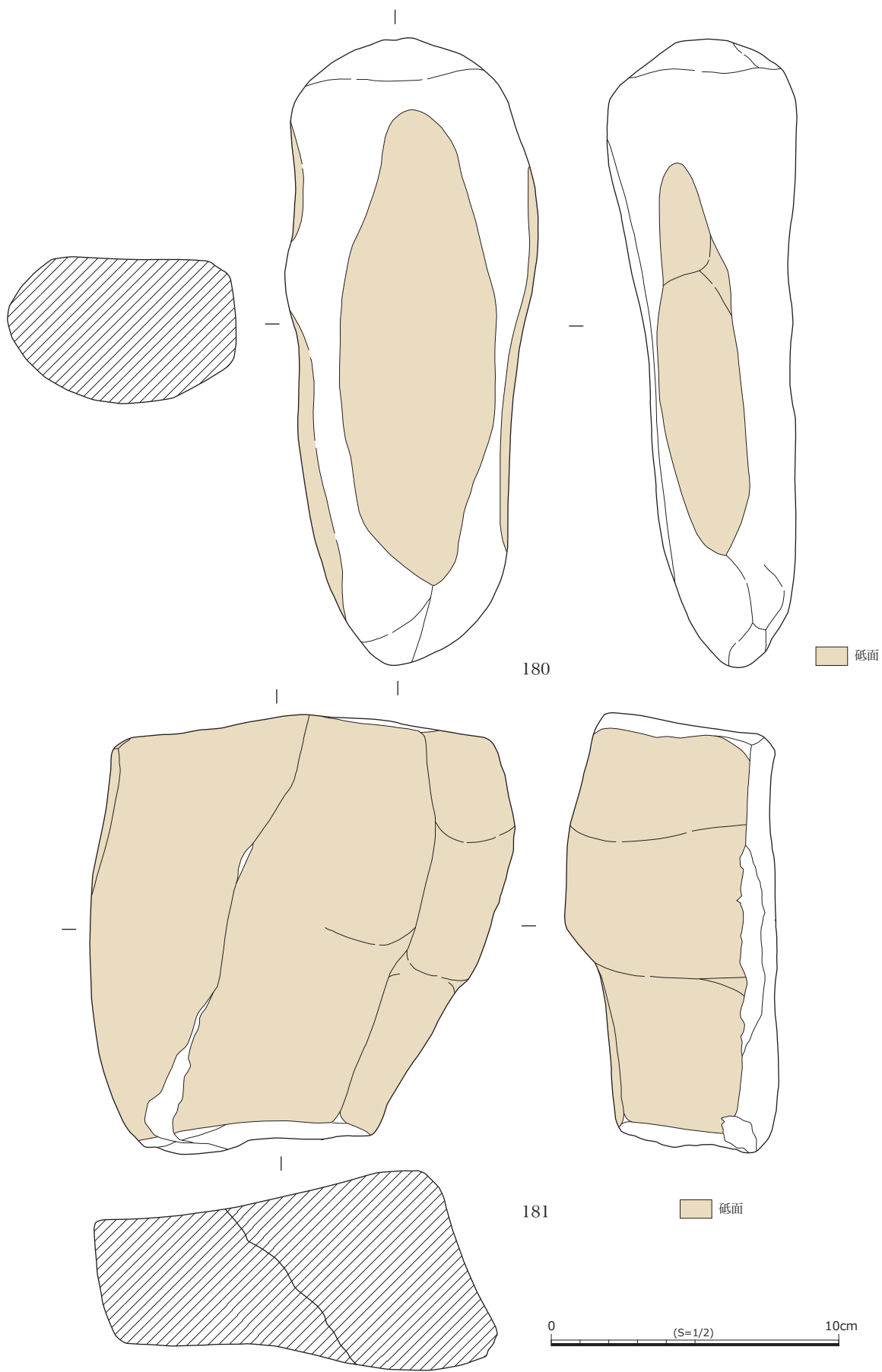
がみられる。

153 は高杯の脚部である。直線的に脚部形態を呈し、脚部径 11.5cm を測る。口唇部は丸く、接地部には面をもつ。

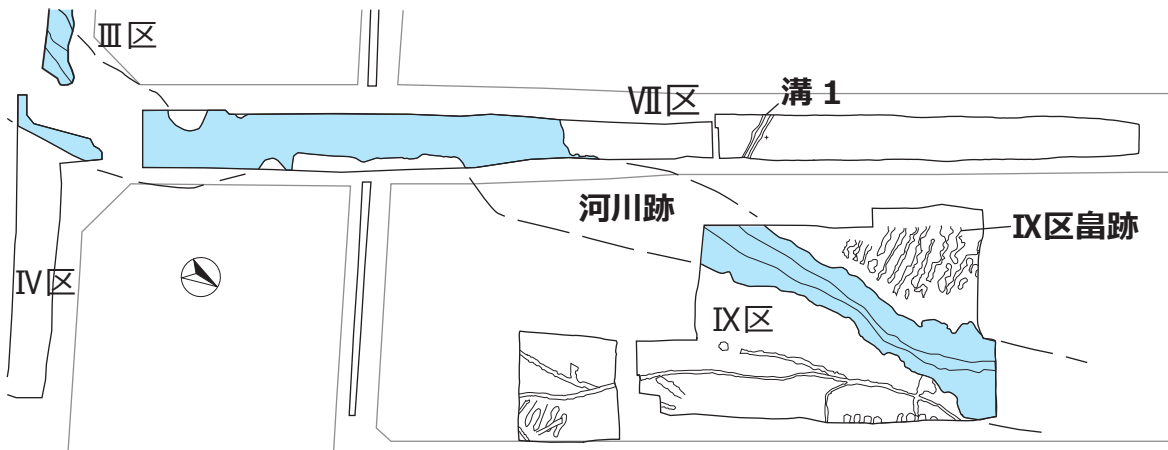
161 から 173 は須恵器胴部片である。形態が分かるものは少なく、傾きは疑問である。

174 は、安山岩製の楕円磔を用いた敲石である。a面のほぼ全周りに敲打痕が認められる。特に、a面右側面上部が顕著である。

175 は、平坦面を有する安山岩製の不整形磔を用いた敲石である。a面下端部に敲打痕が認められる。a面裏面は平坦面であり、一部に摺面が認められる。



第 135 図 古墳時代遺物 12



第136図 VII区 874年面検出遺構および周辺調査区

176は、安山岩製の楕円礫を用いた敲石である。a面上端部に敲打痕による剥離痕が認められる。また、a面下端部は平坦であり磨面として用いられていると考えられる。また、b面も他面と比較して滑らかであることから同様の使用が想定される。この石器は受熱によって一部が剥落し、2点接合となっている。接合面は赤く変色している。

177は、安山岩製の扁平な楕円礫を用いた凹石である。a面中央部に敲打による浅い凹面が認められる。また、a面上下両端と右側面に敲打痕が認められる。

178は、平坦面を有する安山岩製の楕円礫を用いた凹石である。a・b面中央部に敲打による凹面が認められる。また、a面上下両端と右側面に敲打痕が認められる。b面は平坦面であり、中央部の凹面周辺は他面と比較して滑らかであることから、磨面として用いられたと考えられる。

179は、平坦面を有する安山岩製の楕円礫を用いた凹石である。a・b面中央部に敲打による凹面が認められる。また、a面上下左右端部に敲打痕が認められる。b面は平坦面であり、中央部の凹面周辺は他面と比較して滑らかであることから、磨面として用いられたと考えられる。

180は、シルト質泥岩礫を用いた砥石である。a面中央部とd面中央部と右側面下部に砥面が認められる。a・d面中央部の砥面は使用により凹面となっており、その使用頻度の高さが窺える。また、a面上端部には敲打痕が認められる。

181は、砂岩礫を用いた台石である。a面の裏面中央部に直径1.5cm前後範囲に敲打痕が認められる。また、a面左側面下部とd面右側面には敲打による剥離痕が認められる。

この石器は、a面上部の端部が受熱により黒色に変色している。石器は2つに分割されているが、受熱によって2点に破損した可能性も考えられる。なお、その内のひとつ（a面右半分）は、さらにa面下端部が受熱し一部が黒色に変色している。

第 14 表 Ⅶ区出土遺物観察表 1

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法					色調				混和剤	取上 番号	
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面			丹
1	Q14	溝状遺構	SD1	甕	口縁部							2.5YR5/3にぶい赤褐	10R6/3にぶい赤橙	5R6/1赤灰		角閃石	
2	Q14	8		深鉢	口縁部							10YR5/1褐灰	7.5YR5/2灰褐	5Y4/2灰オリーブ		石英	387
3	S14・15	旧河川砂礫		深鉢	胴部							5YR5/3にぶい赤褐	2.5YR5/3にぶい赤褐	5YR5/3にぶい赤褐		軽石, 透明鉱物	
4	M14	8		深鉢	口縁部							5YR5/2灰褐	7.5YR6/2灰褐	5YR5/2灰褐		角閃石	
5	Q14・15	10		鉢	口縁部							2.5YR5/3にぶい赤褐	2.5YR5/3にぶい赤褐	5YR5/3にぶい赤褐		角閃石	
6	Q14	9		深鉢	口縁部							5YR5/3にぶい赤褐	5YR5/2灰褐	5YR5/3にぶい赤褐		白色粒, 金雲母	376
7	E・T	表採		深鉢	口縁部							5YR5/3にぶい赤褐	10YR5/1褐灰	7.5YR5/2灰褐		白色礫	
8	Q14	深掘トレンチ10		深鉢	口縁部							2.5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐		白色礫	
9	Q14	10		深鉢	口縁部							5YR5/3にぶい赤褐	5YR5/3にぶい赤褐	5YR5/3にぶい赤褐		石英, 金雲母	391
10	S14・15	旧河川砂礫		深鉢	口縁部							10R4/1暗赤灰	5YR4/1褐灰	2.5YR4/1褐灰		礫	
11	P15	8		深鉢	口縁部							10YR5/1褐灰	7.5YR5/2灰褐	5YR5/1褐灰		石英, 金雲母	204
12	L14	8		深鉢	口縁部							7.5YR5/2灰褐	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR7/2明褐灰		透明鉱物	10
13	S14・15	旧河川砂礫		深鉢	口縁部							5YR4/1褐灰	5YR5/2灰褐	5R4/1暗赤灰			
14	P14・15	8		浅鉢	口～頸部							5YR5/1褐灰	7.5YR5/1褐灰	5YR4/1褐灰			
15	Q14・15	8		浅鉢	口～胴部	15.3cm						10YR5/1褐灰	7.5YR5/2灰褐	10YR5/1褐灰		透明鉱物	
16	E・T	表採		浅鉢	口～胴部	16.4cm						7.5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐	10YR5/1褐灰		角閃石	
17	G・I 15	8		甕	口縁部							7.5YR6/3にぶい赤橙	5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐		角閃石, 透明鉱物	
18	M15	8		甕	口縁部							7.5YR6/4	7.5YR6/3にぶい赤橙	7.5YR5/2灰褐		透明～白色粒子	90
19	I 15	8		甕	口縁部							5YR5/3にぶい赤褐	7.5YR5/2灰褐	10YR5/1褐灰		白色鉱物	
20	S14・15	8		甕	口縁部							7.5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐	10YR5/1褐灰		石英	
21	M15	8		甕	口縁部							7.5YR7/3にぶい赤橙	10YR6/2灰黄褐	7.5YR5/1褐灰		透明鉱物	89
22	C14・15	8		甕	頸部							5YR5/3にぶい赤褐	7.5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐		金雲母	
23	Q15	8		甕	口唇部							5YR6/3にぶい赤橙	7.5YR6/3にぶい赤橙	7.5YR6/3にぶい赤橙		透明鉱物	223
24	G・I 15	8		壺	口縁部	17.2cm						5YR6/3にぶい赤橙	2.5YR5/2灰褐	7.5YR6/3にぶい赤橙		角閃石, 透明鉱物	
25	Q14	9		壺	頸部							7.5YR5/3にぶい赤褐	2.5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐		石英, 透明鉱物, 礫	
26	I 15	8		壺	頸部							7.5YR6/3にぶい赤橙	7.5YR6/3にぶい赤橙	10YR6/2灰黄褐		透明鉱物	
27	G・I 15	8		壺	胴部							7.5YR6/3にぶい赤橙	7.5YR6/3にぶい赤橙	10YR5/1褐灰		透明鉱物	
28	L14	8		壺	胴部							10YR5/1褐灰	10YR6/2灰黄褐	2.5YR6/1赤灰		角閃石, 透明鉱物	64
29	R14・15	8		壺	胴部							7.5YR6/3にぶい赤橙	7.5YR6/3にぶい赤橙	7.5YR6/3にぶい赤橙			
30	T15・S14	8		壺	口～頸部							7.5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐	7.5R5/3にぶい赤褐			249
31	M14・15	8		甕	口～頸部							7.5YR6/3にぶい赤橙	7.5YR5/2灰褐	10YR5/2灰黄褐		角閃石	
32	R14	9		甕	口～頸部	30.5cm						5YR5/3にぶい赤褐	2.5YR4/1褐灰	5YR5/3にぶい赤褐		軟質の赤色粒子	388
33	K15	8		甕	口縁部	21.4cm						7.5YR6/3にぶい赤橙	10YR6/2灰黄褐	5YR5/2灰褐		角閃石	
34	S14・15	旧河川砂礫		甕	口～突帯部							5YR5/2灰褐	2.5YR4/1褐灰	2.5YR5/2灰褐		角閃石, 透明鉱物	
35	L14・15	8		甕	口縁部	29.6cm						2.5YR6/3にぶい赤橙	2.5YR5/1褐灰	5YR5/1褐灰		角閃石	64
36	R15	8		甕	口縁部							10YR6/1褐灰	10R5/3赤褐	10R4/1暗赤灰		角閃石	319
37	K14	8		甕	口縁部							2.5YR6/3にぶい赤橙	2.5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐		角閃石	
38	Q14・15	8		甕	口縁部							10YR5/1褐灰	7.5YR5/1褐灰	2.5Y5/1黄灰		角閃石	
39	L14・15	8		甕	口縁部							7.5YR6/2灰褐	5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐		角閃石	
40	L15	8		甕	口縁部							5YR6/2灰褐	5YR5/1褐灰	7.5YR7/2明褐灰		角閃石	
41	M14・15	8		甕	口縁部							2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	10YR5/2灰黄褐			
42	P14	8		甕	口縁部							7.5YR6/2灰褐	10R5/2灰赤	5YR5/2灰褐		角閃石	336
43	M15	8		甕	口縁部							7.5YR6/2灰褐	10R5/2灰赤	5YR5/2灰褐		角閃石	126
44	L15	8		甕	完形	23.5cm	25.1cm	8.0cm	3.3cm								
45	L15	8		甕	口縁部							2.5YR6/3にぶい赤橙	5YR5/2灰褐	2.5YR5/2灰褐		角閃石, 透明鉱物	
46	L15	8		甕	口縁部							5YR6/3にぶい赤橙	5YR6/2灰褐	5YR6/3にぶい赤橙		角閃石, 透明鉱物	69
47	M15	8		甕	口縁部							7.5YR6/2灰褐	5YR5/2灰褐	5YR5/1褐灰		角閃石	141
48	P14・15	8		甕	口縁部							2.5YR6/3にぶい赤橙	2.5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐		角閃石	
49	L15	8		甕	口縁部	29.6cm						2.5YR6/3にぶい赤橙	2.5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐		角閃石	41
50	L15	8		甕	口縁部							10YR6/2灰黄褐	7.5YR6/2灰褐	10YR6/2灰黄褐		角閃石	
51	M14・15	8		甕	口縁部							N4/0灰	10R5/3赤褐	5YR5/2灰褐			
52	L15	8		甕	口縁部	21.7cm						10YR6/2灰黄褐	7.5YR5/1褐灰	7.5YR6/2灰褐			13
53	T15	8		甕	口縁部							2.5YR6/2灰褐	2.5YR6/3にぶい赤橙	5YR5/1褐灰			269

第15表 VII区出土遺物観察表2

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法					色調				混和剤	取上番号	
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面			丹
54	L15	8		鉢	口縁部							5YR6/2灰褐	5YR5/1褐灰	7.5YR5/2灰褐		角閃石	41
55	M14・15	8		甕	口縁部							7.5YR6/3にぶい、橙	2.5YR6/2灰褐	2.5YR5/2灰褐			
56	Q14	8		甕	口縁部							2.5YR5/2灰褐	10R5/2灰赤	10R5/2灰赤		角閃石	213
57	N15	8		甕	口縁部							5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐	2.5YR5/2灰褐		角閃石、透明鉱物	161
58	L15	8		甕	口縁部							5YR6/2灰褐	2.5YR5/3にぶい、赤褐	7.5YR5/2灰褐		角閃石	40
59	L14・15	8		甕	口縁部							5YR5/1褐灰	7.5YR5/1褐灰	5YR5/2灰褐		角閃石	
60	M14・15	8		甕	口縁部							10YR6/2灰黄褐	7.5YR5/1褐灰	2.5Y5/1黄灰		角閃石	
61	N14	8		甕	口縁部							5YR5/3にぶい、赤褐	5YR5/1褐灰	5YR5/1褐灰		角閃石	153
62	M14・15	8		甕	口縁部							7.5YR6/2灰褐	2.5Y5/1黄灰	7.5YR5/2灰褐		角閃石	
63	L14	8		甕	口縁部							7.5YR5/1褐灰	7.5R5/1赤灰	10YR5/1褐灰		角閃石	61
64				甕	口縁部							7.5YR6/2灰褐	7.5YR6/2灰褐	10R5/1赤灰		礫	
65	M14	8		鉢	完形	26.5cm	19.1cm	6.1cm	6.7cm	1.2cm		10YR5/1褐灰	7.5YR5/2灰褐	10YR5/1褐灰		角閃石	105
66	M14・15	6		甕	口縁部							7.5YR6/3にぶい、橙	7.5YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰			
67	R14・15	8		甕	口縁部							10YR6/3にぶい、黄橙	5YR5/3にぶい、赤褐	10YR6/2灰黄褐		透明鉱物	
68	S14	8		甕	口縁部							5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐	10R5/2灰赤		角閃石	364
69	L14・15	8		甕	口縁部							5YR5/3にぶい、赤褐	2.5YR5/3にぶい、赤褐	5YR5/2灰褐		角閃石	
70	P14・15	8		甕	口縁部							10YR6/1褐灰	5YR6/2灰褐	2.5YR5/2灰褐		角閃石、透明鉱物	
71	L15	8		鉢or甕	胴部～口縁部						復元径23.7cm	7.5YR6/2灰褐	7.5YR6/1褐灰	7.5YR6/2灰褐			48
72	L15	8		甕	脚部			4.2cm	10.2cm	3.9cm		7.5YR6/2灰褐	10YR7/2にぶい、黄橙	7.5YR6/2灰褐		角閃石、透明鉱物	41
73	M14・15	8		甕	口縁部							5YR6/3にぶい、橙	5YR6/3にぶい、橙	2.5YR6/2灰褐		角閃石	
74	S14・15	8		鉢	口縁部							7.5YR6/1褐灰	2.5YR6/2灰褐	7.5YR6/2灰褐		角閃石、透明鉱物	
75	M14・15	8		甕	口縁部						復元径26.7cm	10YR6/2灰黄褐	7.5R6/1赤灰	7.5YR6/2灰褐		角閃石	
76	L14・15	8		甕	口縁部							5YR6/2灰褐	5YR6/1褐灰	2.5YR5/2灰褐		角閃石	
77	T14	8		甕	口縁部							5YR7/1明褐灰	5YR7/1明褐灰	7.5YR6/1褐灰		角閃石	256
78	L14・15	8		甕	口縁部							2.5YR6/1赤灰	5YR6/2灰褐	7.5YR5/1褐灰		角閃石、透明鉱物	
79	N15	8		甕	突帯部							5YR6/2灰褐	2.5YR5/1褐灰	7.5YR6/2灰褐		透明鉱物	110
80	L15	8		甕	突帯部							7.5YR7/2明褐灰	7.5YR6/1褐灰	7.5YR6/2灰褐		角閃石、透明鉱物	
81	M15	8		甕	突帯部							5YR5/1褐灰	7.5YR5/1褐灰	5YR5/2灰褐			117
82	R14	8		甕	突帯部							2.5YR6/3にぶい、橙	10R5/2灰赤	10R5/2灰赤			348
83	S14	8		甕	胴部							2.5YR5/2灰褐	2.5YR5/3にぶい、赤褐	5YR5/2灰褐		透明鉱物	360
84	S14	8		甕	胴部							7.5YR5/1褐灰	5YR5/1褐灰	7.5Y4/1灰			352
85	T14・15	8		甕	胴部							5YR6/3にぶい、橙	2.5YR6/3にぶい、橙	10YR6/1褐灰		角閃石	
86	G・15	8		甕	脚部			6cm	8.7cm	3.9cm		7.5YR5/1褐灰	5YR6/2灰褐	5YR5/2灰褐		角閃石、透明鉱物	
87	L14	8		甕	脚部			5.1cm	8.4cm	4.2cm		5RP5/1紫灰青灰	2.5YR6/2灰褐	2.5YR6/2灰褐		硫を含む	11
88	L15	8		甕	脚部			5.5cm	8.2cm	3.5cm		N5/0灰灰	5YR5/2灰褐	7.5YR6/2灰褐		角閃石	77
89	M15	8		甕	脚部					7.6cm		—	7.5YR6/1褐灰	5YR5/2灰褐		角閃石、透明鉱物	109
90	Q14・15	8		甕	脚部					6.8cm		—	7.5YR5/1褐灰	2.5YR6/2灰褐			
91	L14	8		甕	脚部			5.9cm	9.3cm	4.4cm		5RP5/1紫灰青灰	5YR6/2灰褐	5YR5/1褐灰			65
92	N15	8		甕	脚部			9.1cm				—	7.5YR6/1褐灰	2.5YR6/2灰褐		角閃石、透明鉱物	181
93	M14	8		甕	脚部			5.6cm	8.0cm	3.6cm		5RP5/1紫灰青灰	5YR6/2灰褐	5YR5/1褐灰		角閃石	96
94	S15	河川内砂		甕	脚部					7.9cm	2.2cm	—	5YR5/1褐灰	10R5/2灰赤		角閃石	
95	H15			甕	脚部							—	10R6/3にぶい、赤橙	10R5/2灰赤		角閃石、透明鉱物	8
96	T14・15			甕	脚部			8cm	10.0cm	2.5cm		7.5YR5/1褐灰	7.5YR6/2灰褐	10R6/2灰赤		角閃石、透明鉱物	
97	T14・15			甕	脚部			7.3cm	11cm	3.5cm		10R5/2灰赤	5YR6/2灰褐	7.5YR6/2灰褐		角閃石	
98	T14・15			甕	脚部			6.7cm	9.2cm	3.7cm		2.5YR5/1褐灰	10R6/2灰赤	10R5/2灰赤		角閃石	
99	S14・15			甕	脚部			7.8cm	9.9cm	3.0cm		7.5R5/1赤灰	2.5YR6/2灰褐	5YR5/1褐灰		角閃石、透明鉱物	
100	M15	8		甕	脚部			6.5cm	9.9cm	2.1cm		2.5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐	2.5YR5/2灰褐		透明の細粒鉱物	125
101	M14・15	8		甕	底部			6.6cm				5YR5/2灰褐	7.5YR6/2灰褐	2.5YR6/2灰褐		角閃石、透明鉱物	
102	L14	8		鉢	脚部					5.8cm	0.7cm	N5/0灰灰	N4/0灰	7.5YR5/1褐灰		角閃石、カーボン付着	61
103	S14・15	6		甕	底部			7.3cm				5YR5/2灰褐	2.5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐		角閃石、透明鉱物	
104	L14・K14	8		甕	底部			5.0cm				7.5YR6/2灰褐	7.5YR6/1褐灰	7.5YR6/2灰褐		石英小長石	1
105	T14	8		甕	頸～胴下部							2.5YR5/3にぶい、赤褐	5YR6/2灰褐	5YR5/2灰褐		角閃石、透明鉱物	254
106	T15	8		高坏	坏底部							5YR6/2灰褐	5YR6/2灰褐	5YR6/2灰褐	10YR6/1褐灰	角閃石	267

第 16 表 Ⅶ区出土遺物観察表 3

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法					色調				混和剤	取上番号	
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面			丹
107	N15	8		甕	脚部							5YR6/1褐灰	7.5YR6/1褐灰	7.5YR6/1褐灰		角閃石	183
108	N15	8		高坏	坏部							5YR5/1褐灰	2.5YR5/1褐灰	5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐	透明鉱物、カーボン付着	166
109	M14・15	8		甕	脚部							2.5YR5/1褐灰	10YR6/1褐灰	10YR6/1褐灰		角閃石、透明鉱物	
110	M14	8		高坏	脚部							5YR5/2灰褐	5YR6/2灰褐	10R5/1赤灰	10R5/1赤灰		95
111	L14	8		甕	脚部				8.3cm			N4/0灰	5RP5/1紫灰	5YR5/2灰褐		黒色ガラス質鉱物	38
112	M14	8		壺	頸～口縁部	17.8cm						5YR6/2灰褐	5YR6/2灰褐	7.5R6/2灰赤		角閃石	103
113	L14・15	8		壺	口縁部							2.5YR6/2灰褐	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR6/2灰褐		角閃石、透明鉱物	
114	N15	8		壺	口縁部							5YR5/1褐灰	10R5/2灰赤	5YR5/1褐灰		角閃石	161
115	L14・15	8		壺	頸部							2.5YR6/3にぶい、橙	5YR6/2灰褐	5YR6/2灰褐		角閃石	
116	L15	8		壺	頸部							2.5YR7/2明赤灰	10R5/2灰赤	2.5YR6/2灰褐	5YR6/2灰褐	角閃石、透明鉱物	
117	Q14	8		壺	頸部							2.5YR5/2灰褐	5YR5/1褐灰	5YR5/2灰褐		角閃石	219
118	L14	8		壺	突帯部							2.5YR6/2灰褐	10R6/2灰赤	2.5YR6/2灰褐		角閃石	37
119	P15	8		壺	突帯部							2.5YR6/1赤灰	10R6/2灰赤	2.5YR5/2灰褐		角閃石	328
120	M15	8		壺	突帯部							5YR5/1褐灰	5YR5/1褐灰	5YR5/2灰褐		角閃石	87
121	T14・15	8		壺	頸部							7.5YR6/2灰褐	5YR5/2灰褐	5YR5/1褐灰			
122	L14・15	8		壺	底部							2.5YR6/1赤灰	7.5YR6/2灰褐	5YR6/2灰褐		角閃石、透明鉱物	
123	L14	8		壺	底部							7.5YR6/1褐灰	7.5YR6/2灰褐	7.5YR6/1褐灰		角閃石	
124	R15	8		壺	底部							10R6/2灰赤	10R6/2灰赤	5YR6/1褐灰		角閃石、礫	315
125	R14・15	8		壺	底部			4.0cm				7.5YR6/2灰褐	7.5YR5/1褐灰	10YR6/1褐灰		角閃石、透明鉱物	
126	L14	8		壺	胴部			6.1cm				10YR6/2灰黄褐	10R5/1赤灰	2.5Y6/1黄灰		礫	61
127	Q14	8		壺	底部			6.1cm				7.5YR5/1褐灰	5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐			214
128	L14	8		壺	底部			8.1cm				10YR7/2にぶい、黄橙	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい、黄橙		角閃石、礫	65
129	T14	8		壺	底部			6.7cm				N6/0灰	10YR6/1褐灰	10YR5/1褐灰		角閃石、白色礫	279
130	L14	8		壺	底部			5.6cm				7.5YR6/2灰褐	10YR6/1褐灰	2.5YR6/2灰褐		角閃石	61
131	M14・15	8		壺	底部			9.5cm				2.5YR6/2灰褐	7.5YR6/2灰褐	7.5YR6/2灰褐		角閃石、軽石	
132	N15	8		壺	底部			9.0cm				10YR6/1褐灰	10YR6/1褐灰	7.5YR5/1褐灰		角閃石	159
133	P14	8		壺	底部							5YR6/3にぶい、橙	7.5YR6/3にぶい、橙	7.5YR5/2灰褐		角閃石、透明鉱物	193
134	L14・15	8		壺	完形	15.0cm	30.7cm	6.3cm				2.5YR6/1赤灰	10YR6/2灰黄褐	7.5YR6/1褐灰		角閃石	
135	L15・M14	8		壺	口～胴～底部	16.7cm	31.4cm	4.7cm				2.5YR6/2灰褐	2.5YR6/2灰褐	7.5YR7/2明褐灰		角閃石、透明鉱物	72
136	L15	8		壺	口～胴～底部	14.3cm	41.8cm	3.3cm				10R6/2灰赤	10R6/2灰赤・2.5YR6/1赤灰	10R6/2灰赤			
137	M15	8		高坏	口～底部	16.9cm	19.7cm			筒部径:11.8cm		2.5YR6/2灰褐	10R6/3にぶい、赤橙	5YR5/2灰褐	2.5YR5/2灰赤	角閃石	
138	M14	8		高坏	口縁部	17.6cm						7.5YR6/2灰褐	10YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰	2.5YR4/1赤灰		112
139	N14	8		高坏	口縁部	16.5cm						5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐		
140	M15	8		高坏	口縁部	21.0cm						2.5YR5/3にぶい、赤褐	7.5R5/3にぶい、赤褐	5YR5/2灰褐	7.5YR4/1褐灰		146
141	M15	8		鉢	口縁部							7.5YR7/2明褐灰	7.5YR7/1明褐灰	2.5Y6/1黄灰		礫	122
142	S14・15	8		高坏	口縁部							5YR6/2灰褐	10R5/3赤褐	5YR5/1褐灰	5YR5/1褐灰		
143	M14・15	8		鉢	口縁部							7.5YR6/2灰褐	5YR6/3にぶい、橙	5YR5/2灰褐			
144	N14・15	8		高坏	口縁部							5YR6/3にぶい、橙	7.5YR5/2灰褐	2.5YR6/2灰褐	7.5YR5/2灰褐		
145	P14・15	8		高坏	口縁部							7.5YR6/2灰褐	10YR6/1褐灰	7.5YR5/1褐灰	10YR6/1褐灰		
146	M14	8		高坏								10R5/3赤褐	10R5/4赤褐	5YR5/2灰褐	5YR5/4にぶい、赤褐	礫	106
147	M14	8		高坏	脚部					筒部径:13.5cm		10YR5/2灰黄褐	7.5YR6/3にぶい、橙	10YR5/2灰黄褐	10YR5/1褐灰	角閃石	112
148	T14	8		高坏	脚部							7.5YR6/3にぶい、橙	5YR5/3にぶい、赤褐	7.5YR5/1褐灰	7.5YR5/1褐灰	透明鉱物	257
149	T14	8		高坏	脚部							5YR5/2灰褐	5YR5/1褐灰	5YR5/1褐灰	5YR5/2灰褐	礫	198
150	T14	8		高坏	脚部							2.5YR6/3にぶい、橙	5YR5/3にぶい、赤褐	7.5YR5/2灰褐	2.5Y6/1黄灰	赤色の礫	271
151	S14	8		高坏	脚端部					筒部径:11.3cm		7.5YR6/2灰褐	5YR5/3にぶい、赤褐	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	透明鉱物	357
152	L14・15	8		高坏	脚端部					筒部径:10.8cm		7.5YR6/2灰褐	2.5YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰	10YR6/2灰黄褐	粗砂粒	
153	L15	8		高坏	脚部				11.5cm			2.5YR5/2灰褐	5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐	角閃石、透明鉱物	
154	L15	8		高坏	脚部							5YR6/3にぶい、橙	2.5YR6/3にぶい、橙	10YR6/2灰黄褐	7.5YR5/2灰褐	礫	
155	L15	8		高坏	脚端部							7.5YR5/1褐灰	10R5/2灰赤	2.5Y5/1黄灰	10YR6/1褐灰		
156	M14・15	8		壺	口縁部							7.5YR6/3にぶい、橙	7.5YR6/2灰褐	5YR5/2灰褐		角閃石、透明鉱物	
157	M14・15	8		高坏	脚部				7.4cm			2.5YR5/2灰褐	2.5YR5/2灰褐	7.5YR5/1褐灰	5YR5/1褐灰	器内は黒色	
158	L15	8		高坏	脚部				10.9cm			7.5YR6/2灰褐	5YR6/2灰褐	10YR6/1褐灰	5Y6/4黄	角閃石、礫	21
159	Q14	8		高坏	脚部				11.0cm			7.5YR6/2灰褐	5YR5/2灰褐	5YR5/1褐灰	2.5Y5/1黄灰	角閃石、透明鉱物	230

第16表 VII区出土遺物観察表4

番号	区	層	遺構	器種	部位	寸法						色調				混和剤	取上番号
						口径	器高	底径	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面	丹		
160	S14・15	田河川砂礫		高坏	脚部				13.7cm			2.5YR5/2灰褐	2.5YR5/2灰褐	10R5/2灰赤	10R5/2灰赤	角閃石、透明鉱物	
161	S14・15	田河川砂礫										N6/0灰	N6/0灰	N5/0灰			
162	T14・15	8										N5/0灰	N5/0灰	N5/0灰		粗砂粒	
163	N15	8										7.5YR5/1褐灰	7.5R5/1赤灰	10YR5/1褐灰		透明～白色粒	179
164	M15	8										7.5YR5/1褐灰	N5/0灰	10YR5/1褐灰		白色粒子	138
165	N14	8										10YR5/1褐灰	10R5/1赤灰	10YR5/1褐灰		白色粒子	15
166	L14	8										2.5Y6/1黄灰	10YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰			36
167	N15	8										10YR5/1褐灰	7.5YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰		石英	165
168	N10	8										10YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰		白色粒子	168
169	N15	8										2.5Y5/1黄灰	5YR5/1褐灰	7.5YR5/1褐灰		白色粒子	169
170	N15	8										10YR6/1褐灰	7.5YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰		白色粒子	177
171	N14・15	8										10YR5/1褐灰	7.5R5/1赤灰	2.5Y5/1黄灰		白色粒子	
172	N14・15	8										10YR5/1褐灰	N5/0灰	10YR5/1褐灰		白色粒子	
173	L14・15	8										2.5Y6/1黄灰	7.5YR6/2灰褐	2.5Y5/1黄灰		白色粒子	

第17表 VII区出土遺物観察表5（石器）

番号	区	層	遺構	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上番号
174	H-15	8		蔽石	安山岩	8.1cm	7.0cm	5.5cm	390.6g	
175	T-14	8		蔽石	安山岩	11.1cm	8.0cm	3.5cm	495.9g	262
176	M-14	8		蔽石	安山岩	8.4cm	7.2cm	5.1cm	451.4g	81
177	N-15	8		凹石	安山岩	10.6cm	8.4cm	3.9cm	558.6g	175
178	L-14	8		凹石	安山岩	7.6cm	5.4cm	4.4cm	279.8g	71
179	L-15	8		凹石	安山岩	12.4cm	8.7cm	4.2cm	716.8g	75
180	P-14	10		蔽石	泥岩	21.8cm	7.2cm	5.1cm	1128.3g	340
181	M-15	8		台石	砂岩	14.8cm	8.8cm	7.0cm	2050.2g	91

第5章 分析

橋牟礼川遺跡出土の動物骨

松元 光春・西中川 駿

1. はじめに

橋牟礼川遺跡は指宿市の市街地にあり、大正5年に発見されてから平成28年に100年を迎えた遺跡で、縄文土器と弥生土器の新旧関係が層位的に実証されたり、874年の火山災害遺跡、古墳時代の拠点集落遺跡とも考えられている遺跡でもある。今回、昭和61年から62年に実施された発掘で、古墳時代の住居跡から出土した動物骨の調査を依頼されたので、その概要を報告する。

2. 動物骨の概要

動物骨は火山噴出物を含む酸性土中に埋没していたために、骨質が脆く細骨片化して保存状態が悪かったが、歯や一部の炭化した骨は比較的保存状態が良かったので、できる限り復元した後、これらの骨を哺乳類、鳥類、魚類に分類し、さらに哺乳類は種と骨の部位の同定を行った。

同定された総骨片数は71個であった。そのうち哺乳類が26個、鳥類が2個、魚類が43個であった。哺乳類はイノシシ、シカ、ネズミの2目3種で、イノシシが17個と最も多かった。住居跡別の出土骨片数を表1に、また代表的な骨の写真を図版にそれぞれ示した。

1) イノシシ (図版1-2)

下顎骨、歯など17個が同定された。下顎骨は左右が結合した状態で下顎枝上部及び歯冠を欠損するものの比較的保存が良く、犬歯の形態から雌のもので、現生種よりやや大きい。別の歯の大きさからも同じことが言える。

2) シカ (図版3-6)

角、臼歯、末節骨など8個が出土している。角は角尖で、若い個体のものと推定される。歯は上顎の臼歯3個で、現生のキュウシュウジカの雄よりやや大きい。また、末節骨は現生種の雌とほぼ同じ大きさである。

3) ネズミ (図版7)

下顎切歯1個のみで、現生種のクマネズミとほぼ同じ大きさである。

4) 鳥類 (図版8-9)

中手骨と指骨の2個が出土している。これらは同一個体で、ほぼ完全な中手骨の最大長からツルのような大型鳥類のものと推定される。

5) 魚類 (図版10-17)

いずれも種は不明だが、軟骨魚類のサメの歯や硬骨魚類の頭蓋、椎骨、鰭条棘など43個が出土している。ほとんどが炭化しているために保存状態は良好である。

3. 考察

今回の調査で、哺乳類はイノシシ、シカ、ネズミの2目3種が同定され、これに加えて鳥類及

表1 住居跡別出土骨片数

住居跡 No.	哺乳類			鳥類	魚類
	イノシシ	シカ	ネズミ		
SB-1	3	3			1
SB-4	2	2			
SB-9		1			
SB-15	1	1			
SB-23	1				4
SB-25	1			2	2
SB-27	2	1			17
SB-28	7		1		19
合計	17	8	1	2	43



図版 1-2: イノシシ, 3-6: シカ, 7: ネズミ, 8-9: 鳥類, 10-11: サメ, 12-17: 硬骨魚類
 1. 下顎骨 2. 下顎第三後臼歯 (右) 3. 角 (左) 4. 上顎第三後臼歯 (左) 5. 上顎第三後臼歯 (左) 6. 第四指末節骨 (右) 7. 下顎切歯 (右) 8. 中手骨 (左) 9. 指骨 (左)
 10-11. 歯 12-14. 椎骨 15-17. 鱗条棘

び魚類も見られた。これらの骨はいずれも住居跡内から出土し、さらに一部は炭化していることから食料に供されたものと思われる。イノシシ及びシカの骨は現生種よりやや大きい、ネズミの骨は現生種とほぼ同じ大きさであった。

橋牟礼川遺跡から出土した動物骨について、西中川は平成2～3年の発掘調査からイノシシ、シカ、タヌキ、ノウサギの3目4種の哺乳類と魚類を(1992年)、また平成4年の発掘調査からイノシシ、ウシの1目2種(1993年)を報告している。いずれも古墳及び奈良・平安時代の出土骨である。今回は古墳時代のみ出土であったが、ネズミと鳥類が新たに出土したことと魚類が多く見られたことは興味深い。一方、近隣の山川町にある成川遺跡からは、縄文及び弥生時代の地層からイノシシ、シカ、タヌキ、ウサギ、サル、の4目5種の哺乳類と魚類の出土が報告されている(西中川・松元、1983年)。南薩地方の遺跡から出土する動物骨の種類や数量に地形の違いや時代の変遷がどのように反映されるのかは、今後のデータの蓄積によってさらに明らかにされていくものと思われる。

4. まとめ

指宿市橋牟礼川遺跡から出土した動物骨を調査した。

- 1) 同定された動物骨は哺乳類、鳥類、魚類で、哺乳類はイノシシ、シカ、ネズミの2目3種であった。
- 2) 骨片数はイノシシが最も多く、ついでシカで、現生種よりやや大きいことが明らかになった。

参考文献

- 西中川駿・松元光春、1983、成川遺跡出土の自然遺物、とくに動物骨について、成川遺跡、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第24集、pp.228-235、鹿児島県教育委員会。
- 西中川駿、1992、指宿市橋牟礼川遺跡出土の動物遺体。橋牟礼川遺跡Ⅲ、指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集、pp.523-527、指宿市教育委員会。
- 西中川駿、1993、橋牟礼川遺跡出土の動物遺体。橋牟礼川遺跡Ⅳ、指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集、pp.97-99、指宿市教育委員会。

第6章 総括

第1節 竪穴住居の新旧関係

VI区において確認された竪穴住居は、第6層、第8層及び第9層、そして弥生時代に帰属する可能性がある竪穴住居26基、住居の可能性が低い遺構2基(SB9・SB28)の合計28基が、複雑に切り合って検出された。このため、遺構相互の切り合い関係に関して整理し、層位断面から得られた情報を基に、遺構群の新旧関係に関して述べる。

竪穴住居群の中で最も新しい遺構は、第7層青コラ火山灰層を掘り抜いて造営された、古代に帰属するSB1とSB7とSB31である。続いて、青コラ火山灰が降下した段階で埋没途上にあったSB3, SB4, SB6である。2基は、住居廃棄後において竪穴が埋没途上であり、竪穴が掘鉢状地形となった段階で、青コラ火山灰が降下し埋没したものである。青コラ火山灰は堆積後硬化し、旧地形をパッキン保持している。このため、窪地の形状は火山灰降下時点の形状となり、最も深いSB4が3基中最新となるとみられる。

これ以前の竪穴住居に関しては、切り合い関係や掘り込み層位に関して概略を述べる。

第8層中から掘削造営されたものとしては、溝状遺構2, SB9, SB10, SB27, SB28がある。遺構の切り合い関係は、溝状遺構2→SB9, SB10・SB28→SB27となる。

第9層中から掘削造営されたものとしては、SB12, SB13, SB16, SB17, SB24, SB25, SB29, SB30がある。遺構の切り合い関係は、SB3→SB16, SB5・SB6→SB17, SB11→SB12, SB12→13, SB16→SB15・SB18, SB24→SB23, SB25→SB24, SB30→SB29となる。

VI区で最も古いとみられるのは、溝状遺構1, SB19, SB20と考えられる。

VI区検出の遺構に関して新旧関係を示したのが第137図である。図中、遺構の切り合い関係は実線で表現し、掘り込み層位や出土遺物等によって判断した新旧関係は破線で表現した。

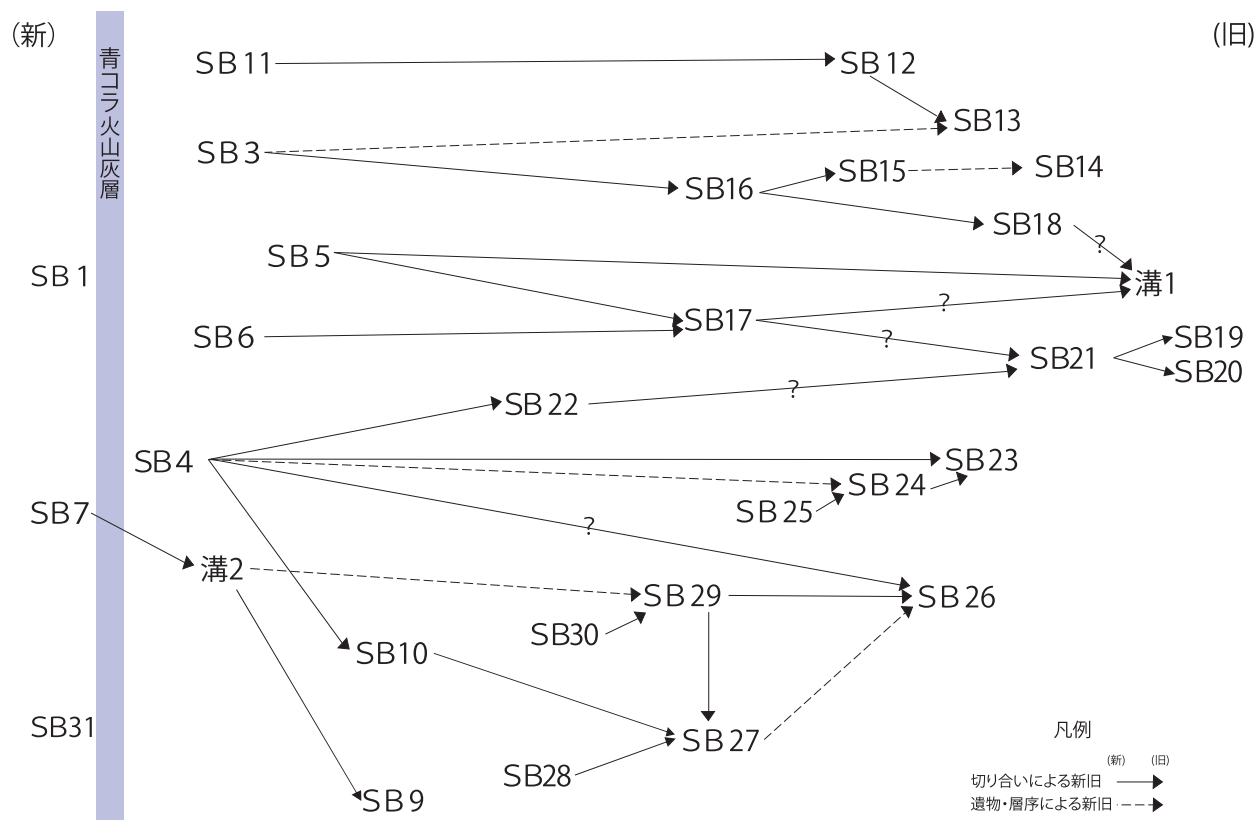
(中摩 浩太郎)

第2節 竪穴住居についての考察

VI区では竪穴住居と考えられる遺構は26基検出された。切り合いが激しく全体形を把握できない遺構が多数あるが、VI区の竪穴住居に関する全般的な傾向を西側隣接調査区であるV区等との比較を交えて述べたい。

造営時期に関しては、新しいところで7世紀後半の青コラ火山灰降下以前、古いところで弥生時代後半期と考えられる。中心となるのは、古墳時代の後半期であり、少なくとも10基が笹貫式の時期に造営された可能性がある。

竪穴の平面プランに関しては、方形プランと考えられるのが22基で84.6%、方形・円形以外が2基で7.7%、不明が2基で7.7%、「円形+方形」プランが0基で0%、円形プランが0基で0%となる。V区では、方形プラン(張り出しを持つもの含む)が44基で88%、円形プラン(張り出しを持つもの含む)は4基で8%、円形+方形プランは1基で2%、不明は1基で2%となるため、方形プランの比率はほぼ近い。ただ、VI区の方形プラン以外のものについては、古墳時代に帰属する円形プランのものがない点と「円形+方形」プランの住居がない点で異なっている。



第 137 図 VI区住居切り合い関係及び新旧関係

一方、東に隣接する南丹波遺跡で8基検出された、いわゆる「花卉型」を呈する竪穴住居や、2基検出された方形2支柱穴で柱穴に接して土坑を設けるタイプの竪穴住居の検出はない。南丹波例は、古墳時代初頭の中津野式段階に帰属する時期のものが半数となっているが、VI区ではこの時期に当たる住居がないことが原因とみられる。西隣のV区においても、同様に花卉型が検出されていない。古墳時代初頭の指宿地域の住居形態の一つが「花卉型」であるとする、渡部が指摘した「居住域が時代とともに南丹波遺跡から西側に移り、辻堂原式段階～笹貫式段階の集落が橋牟礼川遺跡に形成された可能性」についても妥当性があると考えられる（渡部徹也・鎌田洋昭 2010『南丹波遺跡II』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 48）。

ただ、VI区の北西約 100 m地点のIX区では、弥生時代中期後半の山ノ口式段階から古墳時代初頭の中津野式段階に至る土器集中廃棄所が検出されている点については注目する必要があると考える。橋牟礼川遺跡等における古墳時代の土器集中廃棄所に関しては、集落の近隣に形成されることが知られるが、弥生時代にこの行動様式があったと想定すれば、近隣に集落がある可能性を指摘した（中摩浩太郎・鎌田洋昭・恵島瑛子 2016『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 56）。VI区のSB14・SB18・SB21等については、弥生時代中期後半に帰属する可能性が棄却できないことから、橋牟礼川遺跡地内に当該期に集落が形成されていた可能性もあるところである。したがって、土器集中廃棄所を集落の近隣に形成する行動様式が弥生時代に遡ることになる蓋然性が出てくるのである。IX区の土器集中廃棄所の造営時期は、中津野式段階に及んでおり、加えて、橋牟礼川遺跡IV区においては、東原段階を含む土器捨て場が造営されている。したがって、橋牟礼川遺跡においては、住居数は多くはないが、弥生時代から古墳時代前半期にかけても、連続して住居が造営されていた可能性が強い。ただ、集落規模が拡大する時期は、VI区においては笹貫

期が中心となる。他の調査区の状況からは、辻堂原期を含めた古墳時代の後半期からとなるのである。

次に、方形プランの竪穴住居の法量に関してだが、VI区の竪穴住居で一辺長が明らかになっているものは12基であり、統計的な傾向を導き出すことはできない。ただ、SB 3・5・6・7・11・17・23・27の長軸の平均は3.4mとなり、SB 4は5.1m、SB29は6.7mと規模が大きい状況である。いずれも方形プランであるが、数的に多い小型の方形プラン住居と数的に少ない大型の方形プラン住居が共存する傾向は看取できる。ただ、橋牟礼川遺跡V区や宮之前遺跡の事例では、大型の住居が単純な方形プランとは異なる構造をとる傾向がある。例えば、V区のSB 3は一辺が6m弱であり、方形+円形プランを呈するが、VI区においてこのプランは検出されていない。

V区とVI区との住居密集度をみると、V区がほぼ隙間なく全体に住居が切り合っているのに対して、VI区においては住居が設置されない隙間がある。住居検出数と調査区面積から、100㎡当たりの住居数の概数を比較すると、V区18基強、VI区が12基強となるが、この違いに関しては、従来検討がなされていない。ここでは、大型の類型である「方形+円形」プランがVI区にみられないことと関連付けるべきと考える。すなわち、V区が集落の中心部分に当たるとみられること、また、V区の住居群は辻堂原期以降に形成されたとされているが、VI区が集落中心部分からやや外れていたため、居住域が拡大する過程で、VI区にまで拡大した時期が笹貫期であったためとみられるのである。なお、V区・VI区にまたがる住居集中域の規模については、VI区東側は海岸段丘となっていることから、東西90m程度となることが考えられる。その西側のIV区には土器集中廃棄所が置かれ、さらに西側に河川があり、集落範囲の境界となる。

(中摩 浩太郎)

第3節 第6層中出土遺物からみたVI区の評価

第6層中から公的施設との関連を示すと考えられる遺物の出土がある。墨書土器「真」2点と青銅製「丸軛」である。また、須恵器・土師器もVI区に比較的集中して出土している。

柴田博子氏によると「真」の墨書は、小ぶりで丁寧な字体であり、8世紀代に収まるものとのことである(柴田2006)。なお、「真」は「真人」との関係を考える向きもある。

青銅製「丸軛」の表面に鍍金の痕跡が残っており、「金銀装」の帯金具である可能性が高い。757年施行の養老令の第19衣服令中朝服条には、五位以上は金銀で装飾した腰帯と記されている。したがって、出土帯金具は「通貴」と呼ばれる貴族階級の人物が使用していたことになる。櫛木謙周氏は、8世紀前期から律令政府は、国家の諸費用を肩代わりして私物を献上する者に位階を与えて、民間の私富を導入する献物叙位政策を行っており、多くは郡司の地位にある者が行ったとしており(櫛木1993)、この地に郡司が滞在する地方郡家との関連を強く示す遺物であるといえる。

上記の遺物と遺構との関連であるが、いずれもVI区で検出された掘立柱建物2基の周辺での出土である。「丸軛」は1号掘立柱建物の南側で出土し、墨書土器「真」は3号掘立柱建物の東面の桁付近で出土している。掘立柱建物の配置は、方位を意識した規則的配置とはなっていないが、遺物との関連性を考えておく必要がある。

橋牟礼川遺跡第6層に関しては、橋牟礼川遺跡総括報告書で紹介したが、VI区以外のV区等の調査区において、墨書土器「厨」、転用硯、鉄製刀子、開元通宝等が出土する等、橋牟礼川遺跡の第6層中において公的施設の所在についての確実性は高い。ただ、橋牟礼川遺跡においては第6層c期から874年に至る時期に、一面畠が設けられ、建物もまばらにしか設置されていない状況が判

明している。前時期の第6層b期に公的施設が置かれた痕跡が全く見られなくなったところである。一方、敷領遺跡においては、第6層中から公的施設が存在する可能性が高くみられ、874年段階でも火山災害で埋没した建物が5基検出されている。中に、墨書土器「奉」、転用硯が伴い、かつ開聞岳の火山災害からの復旧工事の対象となった1号建物等が含まれており、注目を集めている。橋牟礼川遺跡の第6層中においてどのような政治的变化がもたらされ、このような状況へと転じたのかが、今後の研究課題となる。

〈文献〉

櫛木謙周 1993 「四 若越出身の官人たち」『福井県史』通史編1

柴田博子 2006 「鹿児島県の墨書土器」『先史・古代の鹿児島 通史編』鹿児島県教育委員会

(中摩 浩太郎)

第4節 SB7の評価

これまで指宿市内において、開聞岳を給源とする火山噴出物と出土遺物の関係から、遺構・遺物の年代的な位置づけや、災害範囲、災害後の復旧活動や人々の対応などについて、考古学・文献史学・火山学など多方面から研究が進められてきた(永山1992・2016, 成尾1992・2016, 下山1993, 渡部ほか2012, 鷹野2012, 中摩2017など)。

開聞岳テフラの中でも、874年3月25日に噴火し、指宿市内を中心に大隅半島までその堆積が認められる「紫コラ」によって被覆された遺構・遺物については、橋牟礼川遺跡や敷領遺跡において研究が進められている(下山ibid, 鷹野2014, 中摩ibid)。

その一方、7世紀後半に堆積したとされる「青コラ」については、紫コラに比べてその堆積状況や層厚が不安定なことから、災害状況や災害範囲も不明確な部分が多い。とくにその降下年代については、橋牟礼川遺跡において青コラに直接被覆される形で出土した須恵器台付長頸壺のみから年代を推定せざるを得ない状況である(下山1992)。今後、資料の増加を待ちながら、青コラの降下年代については、さらなる検討が必要である。

今回報告したVI区においては、第7層青コラ火山灰層を上位層から掘り込む3基の竪穴住居跡(SB1, SB7, SB31)が確認されている。これまで、青コラ火山灰層を掘り込む住居跡は、橋牟礼川遺跡において4基確認されており(下山ほか1996)、本報告を合わせて、少なくとも7基の竪穴住居跡が、7世紀後半から874年の間に構築されたことがわかった。

その中でも、SB1とSB31については調査から30年以上経っていることもあり、当時の出土状況や出土遺物を判定することが困難であった。一方、SB7については、調査時の記録と出土遺物等が明確であったことから、本節ではSB7の出土遺物について概観する。

SB7は報告文にある通り、主軸を南北にとり、長軸3.7m、短軸3.6mの方形プランを呈する竪穴住居跡である。住居中央には、土器利用炉(今塩屋2004)が設置されており、成川式の甕が埋設されていた。九州南部の土器利用炉についてまとめた今塩屋毅行によると、薩摩半島の土器利用炉は日置市辻堂原遺跡、鹿児島市鹿児島大学校内遺跡、枕崎市奥木場遺跡が知られており、いずれも高杯の杯部が住居中央に据え置かれていた。またこのような形態の炉は、埋設された土器の内部で火を焚いた「土器床炉」に分類されている(今塩屋ibid)。

SB7の埋設土器を観察してみると、内面には帯状のコゲが付着しており、ススとは異なる(図版19-1)。そのため、土器の内部で火を焚いたとは考えにくく、検出時の写真を見ても、住居床面

から口縁部がわずかに突出する程度である。そのため、SB7の埋設土器は今塩屋分類の「土器床炉」ではなく、埋設土器を煮沸土器の支脚として利用した「土器埋設炉」と位置づけることができる。ただし、薩摩半島ではこの時期に丸底甕は普及しておらず、支脚を有する笹貫式甕が主体であることから、実際に埋設土器が支脚として利用されたかについてはさらなる検討が必要である。

SB7の埋設土器は、脚部が欠損しており、口縁部から胴下半部にかけてもひび割れがみられる。口縁部には焼成後穿孔が2孔認められ、おそらくこのひび割れを補修するために穿たれた補修孔であると判断できる。口縁部下には一条の不接合突帯を持ち、不接合部を正面にした場合、左側が上方へのびる形態を呈する。内外面とも細かなミガキ調整が見られ、笹貫式新段階に位置付けられる(中村2009)。その他の成川式土器も土器埋設炉に設置された土器と同様にミガキ調整が主体であることから、笹貫式新段階に位置付けられる。

さらに、SB7からは装飾高杯(第50図139)と考えられる土器片も出土している。この高杯は、外面に二条の刻目突帯を有し、内外面とも丁寧なミガキ調整がみられる。内面には欠損しているが把手状の装飾が施される。成川式土器様式において装飾高杯は、指宿市宮之前遺跡第5地点、垂水市後ヶ迫A遺跡土器溜まりなどで確認されており、笹貫式新段階に位置づけられる資料と共伴することが推察される。これらの資料に施される装飾は、杯部外面に施された突帯・突起や、杯部内面に把手状の突起を有することが特徴としてあげられる。そのため、SB7出土の装飾高杯についても笹貫式新段階に位置づけることが可能である。

また、共伴する須恵器については、杯A(第50図140, 141)と杯B(第50図142)が出土している。いずれも小型の須恵器で、佐藤隆による陶邑編年(佐藤2003)の陶邑V中段階に位置づけられ、おおよそ7世紀後葉から8世紀前葉と考えられる。笹貫式新段階の帰属年代を考える上で重要な資料と言える。

以上の点から、SB7は青コラが降下した7世紀後半以降、8世紀前半までの間に構築されたと考えられる。今後も青コラ前後における集落の様相と火山災害状況を整理する必要がある。

〈文献〉

- 今塩屋毅行 2004 「南部九州古墳時代の火処-「土器利用炉」に着目して」『福岡大学考古学論集』517-546頁
- 下山覚 1992 「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第8号 65-79頁
- 下山覚 1993 「橋牟礼川遺跡の「被災」期日をめぐる編年の考察-「日本三代実録」貞観16年7月29日条についての考古学的アプローチ」『古文化談叢』第30集(下) 1179-1193頁
- 中摩浩太郎 2017 「貞観16年開聞岳噴火と火山災害の実態」『一般社団法人日本考古学協会2017年度宮崎大会研究発表資料集』53-62頁
- 中村直子 2009 「7・8世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考-新東晃一還暦記念論文集-』中巻 南九州縄文研究会 119-128頁
- 永山修一 1992 「『日本三代実録』に見える開聞岳噴火記事について」『橋牟礼川遺跡Ⅲ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 永山修一 2016 「文献・出土文字資料から見る薩摩国揖宿郡と開聞岳噴火～橋牟礼川遺跡を理解するために～」『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(60) 181-185頁
- 成尾英仁 1992 「橋牟礼川遺跡の地質」『橋牟礼川遺跡Ⅲ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)511-522頁
- 成尾英仁 2016 「橋牟礼川遺跡における開聞岳噴出物について」『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(60) 186-191頁

渡部徹也・鎌田洋昭・鷹野光行・新田栄治 2012「遺跡にみる貞観16年の開聞岳噴火災害について」『条里制・古代都市研究』第28号 1-10頁

(松崎 大嗣)

第5節 出土石器について

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡のVI区において、古墳時代の遺物包含層と竪穴住居跡の埋土から出土した石器について概観する。

器種構成の内、剥片石器は両面加工石器、楔形石器、削器、二次加工剥片である。特に、第96図の両面加工石器378や二次加工剥片380に認められる大きな剥離面（b面上部）は、磨面としても利用されている。第9層からは狩猟具である磨製石器は出土していない。

礫核石器は、砥石、敲石、凹石、台石である。

砥石は、形態的に2種類が認められた。ひとつは断面形状が隅丸三角形または隅丸四角形を呈する棒状のものと、厚みのある断面隅丸四角形のものである。両者とも平坦面は砥面として利用されているため、三面または四面に細かな線状痕が認められる。

第97図の砥石383の上下両端には敲打痕が認められることから、多用途の石器として使われていることが判ると同時に、砥石を使う作業工程において、「砥ぐ」、「敲く」の作業が一連として行われていた可能性が窺える。また、第98図の砥石386の砥面に残されている深く明瞭な線状痕から、硬く鋭利ものを研いでいたものと考えられる。

凹石は安山岩礫を用いており、その厚みによって、凹面が表裏面以外の側面にも及ぶものがある。よって、敲打によって窪んだ凹面が一面、または表裏二面、側面を含め三面以上のものが認められる。

また、第98図の凹石388と第99図の凹石393は、凹面の右下縁部に線状痕が認められ、何かを削った作業が行われていることが窺える。同じような位置にあることから、決められた作業による痕跡と考えられる。これは、第101図の凹石397の両面においても言えることである。凹石397のa面とb面の中央には凹面があり、その左下部には敲打痕が、右上部には幅約2mmの棒状のものによって削られた痕跡が同じような位置関係で認められる。

軽石を素材とした加工品は、両面を削るまたは磨ることによって扁平に成形したもの（400）や、磨面を伴うもの（403・404）などが認められる。後者2点の磨面は、403はa面に、404はa面左側面とd面上下両面の広く平坦な面に認められる。縦断面の形状が隅丸の二等辺三角形を呈していることから、推測の域を出ないものの、三角形の頂点部分を手のひらに収まる形で持ち、磨面を対象物に当てていたものと推測できる。

なお、軽石製加工品404は、磨面を用いる以前は、棒状工具によって穿孔が施された祭祀用の道具であったことが窺える。軽石を用いて「磨く」行為が祭祀に伴うものかは不明であり、祭祀用の道具の転用とも考えられる。

VI区内で検出された竪穴住居跡の埋土層から土器と共に石器も出土している。

狩猟具である磨製石鏃は、唯一SB9で出土している。磨製石鏃156は、頁岩製で丁寧に研磨を施しているがやや形状は不均等である。先端部の欠損後再整形を施している完形品である。SB9の埋土層からは砥石は出土していないものの、同型式の土器を伴う住居や第9層から出土している砥石などを用いて研磨されたものと考えられる。

食料加工具とされる石皿は、SB4で2点、SB27で1点それぞれ出土している。SB4の石皿76

と77は、いずれも一部が欠損しており、その欠損面の剥離状況から、使用時の加撃によって欠損されたものと推測できる。また、埋土中に接合できる同一個体の資料が出土していない。

敲石は、SB 4・5・6・29で出土している。敲石とセットで用いると考えられている凹石や台石、石皿などと一緒に出土している事例は、SB 4・6・29である。

特記すべき点として、SB 5から出土した第37図敲石98のf面上部には、何かを削り取るような作業によって残された線状痕が認められることである。作業は幅5.7cmの範囲で位置をずらしながら行われたようで、一部のみが深くなってはいない。線状痕は幅約3mm、長さ約1cm前後、深さ約1mmのもので、観察から比較的硬いものによって残されたものと推測できる。VI区の出土石器の観察で、敲石にこのような痕跡が認められるものは他にSB4埋土層出土の資料を含め2点だけである。敲石に残されている敲打痕や磨面から「敲く」、「磨く」の用途が推測されているが、今後、敲石の用途を考察する上で希少な事例として注視していく必要があるだろう。

凹石は、安山岩の楕円礫、不整形礫が用いられ、厚みはさまざまであり、先述したとおり側面の厚みのある場合は凹面が三面で確認されるものがある。

台石は、SB 6のみで出土している。意図的か否かは不明だが、a面右側面は大きく欠損しており、その後数枚の剥離によって再整形していることから、欠損後の引き続き使用されていることが窺える。敲打痕以外に線上痕も認められる。

竪穴住居跡の埋土層から出土している軽石製加工品は、SB 4から出土したものを4点実測した。加工の施し方や形態から祭祀用と考えられるものは、第33図の軽石製加工品79・81である。特に、軽石製加工品79は、a面両側面と同面下部に鋭利な工具による抉入から人形を意識して整形されたものと判断した。

また、軽石製加工品81は、両面を鋭利な工具で平坦に削られており、その痕跡が溝状の痕跡として残されている。a面右側面と左側面には、それぞれ二条と三条の工具による刻みが認められる。意図性については不明である。

VI区から出土した石器の石材は、頁岩、砂岩、安山岩、凝灰岩等である。

砥石については、微細粒の砂岩礫が用いられている。現在までに指宿市内において砂岩・頁岩の原産地は確認されておらず、これまでの踏査によって最も近距離の砂岩・頁岩の円礫、楕円礫が入手できる原産地は鹿児島喜入の樋高川河口付近である。

また、敲石や凹石は、安産岩礫を用いているものが多い。

安山岩については、指宿市内で火山噴出物によって安山岩質溶岩が流出しており、円礫または楕円礫として河川や海岸で転礫として認められるのは、山川福元の竹山周辺である。

(鎌田 洋昭)

